Global 30

グローバル 30 総括シンポジウム

「国際化で大学は変わったか」

報告書

Internationalizing Japanese Universities:
The Global 30 Experience
February 14, 2014
Fukuoka, Japan

目　次

1．概要 …… 1

2．開会あいさつ …… 7

3．基調講演

（1）二宮　皓 …… 11

（2）ジェレミー・ブレーデン …… 17

4．課題別セッション

（A）海外展開で得たもの：広報活動・海外拠点 …… 23

筑波大学 …… 26

東京大学 …… 29

九州大学 …… 34

明治大学 …… 38

パネルディスカッション（A） …… 44

（B）英語による教育：アドミッション・カリキュラム・教授法 …… 55

名古屋大学 …… 56

大阪大学 …… 60

慶應義塾大学 …… 64

上智大学 …… 69

立命館大学 …… 72

パネルディスカッション（B） …… 75

（C）国際化に対応した環境のつくり方：サポート体制・宿舎 …… 85

東北大学 …… 86

京都大学 …… 90

早稲田大学 …… 93

同志社大学 …… 96

パネルディスカッション（C） …… 105

（D）学生が見る国際化：Voice of Students …… 116

Academics …… 120

Facilities …… 130

Information …… 138

Campus Life …… 148

General Discussion …… 157

5．全体会合

（1）課題別セッション報告、ディスカッション …… 170

（2）文部科学省プレゼンテーション …… 187

6．閉会あいさつ …… 194

7．参考資料

アンケート集計結果 …… 198

1．グローバル30総括シンポジウム「国際化で大学は変わったか」　概要

日　時：2014年２月14日（金）13:00－18:40
会　場：ホテル日航福岡
主　催：グローバル30採択大学
東北大学／筑波大学／東京大学／名古屋大学／京都大学／大阪大学／九州大学／慶應義塾大学／上智大学／明治大学／早稲田大学／同志社大学／立命館大学
共　催：文部科学省
運　営：九州大学
参加者：約410名

概　要：

・総合司会　キャロライン・オークリー（九州大学人文科学府修士１年）

1．開会式　13:00－14:00

・開会あいさつ　藤木 九州大学理事・副学長

G30は、2009年に13の拠点大学によって開始された後、英語だけで学位取得が可能な国際コースが一挙に増え、我が国の留学生の増加を支える本柱となってきた。九州大学では、この５年間で留学生が1.4倍に増え2,000人を超えるまでに至る。他の拠点大学でも留学生増加とともに、体制整備も進んだ。

本日のシンポジウムには大学教職員や学生から民間企業の方まで500人以上の参加登録をいただき、幅広い人たちがこの事業の成果に関心を寄せていることを示している。大学国際化に寄与する熱い議論を期待する。

・基調講演　二宮 比治山大学・比治山大学短期大学部学長

G30事業は日本の大学のブランド化と優秀な学生の獲得において、大きな役割を果たし、その成果は大きい。採択校が事業を進める上で、全学的な協力体制の構築における困難な課題も浮かび上がった。今後も、この事業を日本人学生への刺激・波及効果をとおし、いかにグローバル人材育成につなげるか、また、スーパーグローバル大学創成支援事業との相乗効果をどう高めるかといった挑戦を続けていただきたい。

・基調講演　ジェレミー・ブレーデン モナシュ大学教員

日本の大学では「国際化」を進めるにあたり、業務の英語化や教職員の伝統的な役割の再構築といった問題がある。海外の高等教育機関との対比というよりも、より多くの個人が自分の能力を発揮して、世界の学生が魅力を感じるグローバルな大学をつくっていけるような、内発的なアプローチによる視点を提唱する。

〈開会あいさつ〉　〈二宮、ブレーデン両氏による基調講演〉

〈参加者の様子〉

2．ポスターセッション　14:00-14:30、16:15-16:45

・各G30採択大学による取組をポスター展示により来場者に紹介するとともに、教育関連企業によるブース展示を併設した。

〈ポスターセッション〉　〈企業ブース展示〉

3．課題別セッション　14:30－16:15

・４つの会場において、それぞれのトピックを設け、G30採択大学がそのトピックに応じたユニークな取組や今後の課題などを発表した。

【セッションA：海外展開で得たもの：広報活動・海外拠点】

＜筑　波　大　学＞海外大学共同利用チュニス事務所（BUTUJ）の成果（13回にわたる日本留学説明会の開催、大学間学術連携ネットワークの構築、北アフリカにおける筑波大学のプレゼンスの向上、志願者数の増加、日本－アフリカ大学連携ネットワークの構築他）、BUTUJ の課題と展望

＜東　京　大　学＞インド事務所の開設・整備（他大学との連携、現地スタッフの採用、会計事務所の起用、立地の問題等）、インド事務所の取組と成果（インド人留学生の受入れ動向、成功要因分析他）、インド事務所の課題と展望

＜九　州　大　学＞エジプト・カイロ海外大学共同利用事務所（含：日本説明会及び危機管理）、受入重点国を中心としたリクルート戦略（高校の開拓、各種日本留学フェアの活用）、九州・山口地

域ブランディングプロジェクト、海外展開で得た教訓

＜明　治　大　学＞海外拠点の成果・課題・展望（中国拠点・アセアンセンター）、海外広報の成果・課題・展望（パリ日本留学フェア、入試広報活動）、グローバル30で得たもの（待ちから攻めへの転換、学内の変化、他大学との協働）

〈大学による発表〉

〈パネルディスカッション〉

〈質疑応答〉

【セッションB：英語による教育：アドミッション・カリキュラム・教授法】

＜名 古 屋 大 学＞基礎科目開講に関する全学的な協働、開講科目の豊富さ、日本人学生向けの模擬講義の取組（G30 for Everyone）

＜大　阪　大　学＞英国の大学で評価基準を揃えるために広く行われている「モデレーション」の採用および Teaching Quality Handbook の作成をはじめとする教育水準を上げるための各種取組の紹介

＜慶應義塾大学＞英語だけで学位取得可能な学部のプログラム（GIGA プログラム）を企画するために行った準備や取組の中でも特にアドミッションに照準を合わせて発表。GIGA プログラム受験者の特徴、入試広報、入試選考、書類選考の変遷及びそのメリット・デメリット、GIGA 入試のまとめと今後の展望

＜上　智　大　学＞既存（国際教養学部）及び新設（地球環境学研究科国際環境コースならびに理工学部グリーンサイエンス／グリーンエンジニアリングコース）の英語学位プログラムについて、カリキュラム構築、アドミッション（入学時期、選抜方法、リクルート方法等）などの運営体制の特長の紹介、各大学と共通すると思われる課題の共有および今後の展望

＜立 命 館 大 学＞2011年度に開設された学士課程の英語コース（国際関係学部グローバル・スタディーズ専攻）のカリキュラムデザイン（含：初期のカリキュラム編成－鏡政策、柔軟性、クロス履修、早期卒業制度、カリキュラム改編に関する課題－語学科目の扱い、多様な学生のニーズ）、外国人教員のインテグレーションの現状と課題（周辺化、疎外、雇用パターンの課題）

〈大学による発表〉

〈パネルディスカッション〉

〈質疑応答〉

【セッションC：国際化に対応した環境の作り方：サポート体制・宿舎】

<東　北　大　学>支援体制の整備に関わること（例：寮や短期プログラムの概略）についての概観後、（1）日本人学生と留学生の共修プログラム及び（2）東北地方太平洋沖地震に関わるサポートのふたつの取組について照準を合わせて紹介

<京　都　大　学>国際化推進に必要なインフラの充実に向けての取組みを軸に、（1）学内での宿舎建設（UR との連携）、（2）地方自治体との連携（企業との連携）について紹介

<早 稲 田 大 学>国際化に対応した環境構築について大別して３つのカテゴリーに即して紹介：（1）外国人研究者・研究者へのワンストップ・サービス (ISS=International Scholar Services)、（2）学生が創り・育てる異文化交流コミュニティ (ICC=International Community Center)、（3）外国人学生へのワンストップ・サービス（IAO=International Admissions Office、生活支援）

<同 志 社 大 学>「グローバル・キャンパス化」に向けての以下を含む取組紹介。（1）FD・SDの取組（含：英文化ワーキンググループ、（2）ラーニング・コモンズにおける留学生への学修支援及び国際交流活動の活性化

〈大学による発表〉

〈パネルディスカッション〉

〈質疑応答〉

【セッションD：学生が見る国際化：Voice of Student】

前日のワークショップで議論された内容をまとめたものを、選出された８名の学生が発表した。フロアからも多くの質問やコメントが出され、壇上の学生のみならず、フロア前方に着席した、その他のワークショップ参加学生が回答する形で、さらに活発な議論が行われた。

〈代表者による発表〉

〈パネルディスカッション〉

〈質疑応答〉

４．全体会合及び閉会式　16:45－18:30

・まず、勝 明治大学副学長が司会を務める中、各課題別セッションで議論されたことについての発表を受け、開会式基調講演者お二人からのコメントをいただいた後、登壇者によるパネルディスカッションを行った。

・つづいて、フロアからの質疑応答では、G30採択大学からのコメントやその他大学関係者などによる質問が出された。

・プレゼンテーション「グローバル30～これまで、そしてこれから～」　有賀 文部科学省高等教育局高等教育企画課国際企画室長

G30がスタートした背景には、世界の大学間で国際競争が激化する中、日本の大学は競争に伍していくだけの国際化が不十分だという認識があった。文部科学省としてもG30のような取組は初めてであり、行政事業仕分けの対象となりながら、コース開設数や外国人留学生・教員数、またG30ウェブサイトへの訪問者数などに大きな成果が表れている。シンポジウムのテーマに即していえば、この５年間で13大学は大きく変わった。一方、ますます加速する世界のグローバル化に向けさらに変わり続ける体制が必要だと思う。

・閉会あいさつ　羽田 東京大学副学長

基調講演では取組の評価とともに、今後の方向性について貴重な提言をいただいた。また、課題別セッションでの多彩な意見交換は13大学以外の大学や産業界にとっても有益であったろう。

本日、印象深かったことは、まず、学生による活発なディスカッション。このような学生がG30により日本で学んでいることが分かったのは大きな収穫であった。また、13大学が数々の苦難を乗り越えて５年間連携・協力してきたこと、そして、G30が日本の大学教育を見直すいい機会になったということを認識できた。来年度以降もこのネットワークを基盤に、より多くの大学とともに、大学国際化に向けて行動していきたい。

〈課題別セッションまとめ及びパネルディスカッション〉

〈有賀室長による発表〉

〈閉会あいさつ〉

〈会場の様子〉

〈フロアからのコメント〉

5．懇親会　18:45－19:45

・緒方 九州大学総長特別補佐による司会のもと、東島 大阪大学理事・副学長の乾杯で始まった懇親会は、312人もの参加者を迎えての盛り上がりを見せた。

〈乾杯のあいさつ〉

〈懇親会の様子〉

〈締めのあいさつ〉

2．開会あいさつ

九州大学理事・副学長
藤木　幸夫

皆様、こんにちは。ただいまご紹介いただきました九州大学の藤木でございます。

正直に申しまして、昨夜から、どうなることかと心配してあまり眠れずにいました。福岡もまちなかは雪が結構降っておりましたが、積雪はございませんでした。しかし、山間部はごらんのとおり真っ白でございます。ましてや、東のほうへその雪が行くということで、羽田が大変だろうなと思っていましたら、案の定、今日の午後、羽田はクローズするんじゃないかということです。午前中にご出立いただいた先生方には何とか来ていただけました。名古屋地区などは新幹線が１時間おくれました。いろいろなニュースが次々に飛び込んできまして、正直、ほんとうに心配しておりましたが、ごらんいただきますように、約500人以上収容の部屋のほとんど椅子が埋まっているような状況です。皆様に最大のご努力をいただき、ご出席くださいましたことに、まず初めに心より厚く御礼申し上げたいと思います。ほんとうにありがとうございます。

本日はお忙しい中、こういった形でお集まりいただきましたことは、お世話を申し上げました九州大学としては非常に光栄なことであり、うれしい限りでございます。特にグローバル30拠点の大学関係者の皆様、それから本日ご出席の文部科学省の有賀国際企画室長様はじめ、全体会合並びに各セッションでご講演やプレゼンテーションを賜ります先生方には、本日の開催に向け、あるいは各13拠点大学のこういった趣旨にご賛同いただきましたことに、心から深く感謝しております。

ちなみに本日は、文科省の西川副大臣も、ぜひ参加していろいろな交流をしたいということで、予定を立てておいででしたけれども、急遽、国会対応をしなければいけないということでキャンセルされました。非常に残念だとおっしゃって、皆様に呉々もよろしくというメッセージをいただきましたことをお伝え申し上げます。

加えまして、この後、基調講演をいただきます二宮先生におかれましては、このグローバル30事業の立ち上げから中間評価、あるいはフォロー・アップと、これまで一貫して数々のご支援、ご助言をいただいております。深く感謝申し上げますとともに、本日、講演をいただくということで、ほんとうにありがたく存じます。

さらには、基調講演の２番目、ドクター・ジェレミー・ブレーデン先生には、本シンポジウムのために、わざわざオーストラリアからお越しいただいております。モナシュ大学は、ご存じのとおりメルボルンにありまして、そこからおいでいただきました。私は先週、まさにモナシュ大学に行っておりました。

（英語で挨拶）I was really actually at Monash University last week. I really for the first time experienced the 45 degree Celsius but without any humidity, so it was not so much tough. But anyway, I very much appreciate your efforts towards flying and spending almost 14 hours including a transit at Singapore. That's what I heard. Thank you very much.

本日は、グローバル30の統括シンポジウムとなっておりますので、貴重な時間をいただき、多少の経緯等をお話しさせていただきたいと思います。

2008年（平成20年）に、日本を世界に向けより開かれた国とし、アジア、世界の間の人・モノ・カネ・

情報の流れを拡大するという、いわゆるグローバル戦略を展開する一環として、2020年を目指して計30万人の留学生を受け入れようという留学生30万人計画が日本政府より打ち出されました。その計画の目標達成のためのいわゆる起爆剤と申しましょうか、2009年（平成21年）に、本日ご出席の13の拠点大学が採択されました。いわゆる国際化拠点整備事業、グローバル30がスタートしたわけでございます。

これが前政権の折に、事業仕分けという困難に直面しました。しかし、13拠点の大学の先生方をはじめ、多くの方々のいろいろなご努力の結果、幸い、このプログラムは続けられることになりました。ただし、こちらにございますように現在の名称「大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業」という形になり、そのような事業のやり方で５年間プロジェクトが鋭意推進されたということでございます。

この事業によって、一言で申せば、英語だけで学位が取得可能な学部あるいは大学院の国際コースが一気に増えました。この事業は、我が国の外国人留学生の数の増加を支えてきた本柱と申し上げることができるかと思います。加えまして、世界各都市に各大学が共同で利用できる海外事務所がたくさん設置されたことも、大きな成果の一つでございます。

ちなみに、九州大学におきましては、この５年間に留学生が1.4倍に増加し、2,000名を超えております。国際コースは、学士コースすなわち学部で農学、工学の２学部の５コースを設けております。大学院では、17学府と申しておりますが、いわゆる大学院の課程が17で、58コース設けております。国際コースに籍を置く留学生が、九州大学のキャンパスの全留学生の４分の１に達するまでに大きく発展させることができました。ほかの12大学におきましても、それぞれの留学生の数を非常に勢いを持って増やすことができたことを見ていただけるかと思います。

また、数が増えたことと同時に、体制整備についても、並行して図られてきたということが言えるかと思います。グローバル30は、13大学がそれぞれ教育国際化を進めると同時に、事業の推進事務局を東京大学で引受けていただくことになりまして、東京大学を介して、互いに連携・協力しプロジェクトを進めて参ったことが大事なことの一つと言えると思います。

すなわち、来日いたしました多くの留学生は、それぞれの大学で日本人とともに過ごし、我が国の大学の国際化に大きな力になってくれたと言えるか思います。ネットワーク形成という意味におきましては、こちらにございますように、大きく言えば四つのミッションを持っていた、それで推進してきたということが言えると思います。

グローバル30は、国立や私立の違いを超え、すなわち国公私立という形で、実質的には国立大学と私立大学という形でしょうが、地域や全国規模のネットワークとして広がりました。そのようにして教育の国際化の成果や課題の共有が進められましたことは、このグローバル30の大きな成果です。それは、皆様がこれまでそれぞれご経験なさってきたでしょうし、今後より一層大きく展開されると思います。

さらには、各大学におかれましては、それぞれの地域でこの事業で得られた知見を共有すべく、４番目に記してございますけれども、さまざまなシンポジウム、ワークショップあるいはセミナー、さらには勉強会が開催されてきました。例えば、私ども九州大学では、九州・山口地区において、ほぼ毎年、計５回のワークショップを開きました。いわゆる地域ブランディングの強化に取り組んできたということで、毎回、非常に多くの方々の参加を得、議論を交わしていただきました。

さらには、３番目に産業界との連携というミッションがございますが、グローバル30の成果の一つとして、例えば大きなものとしては、毎年、東京の経団連会館において産学連携フォーラムが開催され、いわゆる大学と財界あるいは経済界との連携が大きく進んだことも挙げておくべきでしょう。

本日のシンポジウムは、統括シンポジウムと称しております。遠路、関東からあるいは関西から、この悪天候の中、福岡にご参集いただきましたことは、最初に申し上げましたように、我々、大変ありがたく感じるところでございますが、今申し上げましたような５年間の総括として、このシンポジウムが開催されるということに、皆様ご賛同いただいているかと思います。

本日の参加数は、最初に申しましたように500数十名となっておりまして、大学から教職員の方々あるい

は学生の参加もございます。それから次のセッションでは、学生の英語での討論もございます。その他、各教育機関や民間企業からも多数のご参加をいただいております。これは、幅広く多くの方々にグローバル30の活動あるいはその成果に大変な関心を持っていただいているからであろうと思います。現政権の安倍首相、下村文科大臣がおっしゃっていますとおり、大学は、グローバル化あるいはグローバル人材の育成に多くの悩みや課題を抱えていまして、グローバル化がこれから大学改革の本柱としてうたわれています。私達は、グローバル化の取り組みに強い使命と熱い思いを持って取り組んで行かなければならないと考えております。

そういった５年間の経験をベースに、今後ますます、タフなグローバルな人材育成に大きく貢献できるよう、皆様でグローバル30の成果をここに持ち合って議論したいと思います。さらには、将来的にどう取り組めばよいかというお話にもなるかと思います。非常に貴重なこの６時間という午後の時間でございますが、先生方、ご参加の皆様におかれましては、討論のみならず、いろいろな交流をしていただきたいと考えております。

今日は２月14日です。私どもの大学の国際部では、すばらしいバレンタイン、熱いバレンタインデーになるのではないかと申しております。展示ブースなどにチョコレートが飾ってあるかもしれません。それを皆さんご賞味いただきながら、ぜひこのグローバル30総括シンポジウムを盛り上げていただきたいと存じます。

少し長くなりましたが、九州大学を代表しまして、心から厚く御礼の言葉を申し上げさせていただきました。本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

3．基調講演

基調講演１「国際化で大学は変わったか」

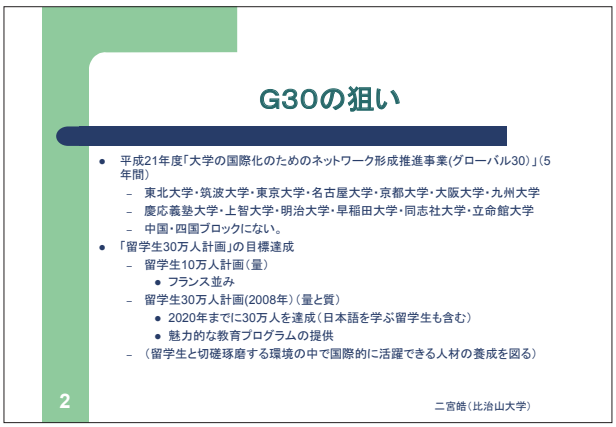
比治山大学・短期大学部学長
二宮　皓

今日は、こういう席にお招きいただき大変恐縮しております。私は、広島大学を定年退職したのが、まさにG30が始まった年でございまして、その後、放送大学で働かせていただいて、現在は広島の大学で働いているところでございます。私の定年後の人生は、まさにG30の展開とともにあったんだろうと思っております。

誰でもそうでしょうが、第一線を離れると何となく寂しいです。国際化という問題、グローバル化という問題にかかわるとき、一線を離れてしまうと、感覚がだめになりますね。私は十分年をとっておりまして、昔話をすることをお許しいただけるんじゃないか思っておりますが、何を目指し、開発し、挑戦すればいいかは、まさに最前線で絶えずグローバルモビリティの中に身を置いている人、あるいは研究で切磋琢磨して闘っている人、あるいは働いている人でないと、なかなか出てこないと思います。ですから、今日は新しいことを期待されても何もありません。半分はお眠りいただいても構わないくらいの昔話になってしまうと思うんですね。ただ、総括シンポジウムでございますので、G30とは一体何だったのか、何をしていただけたんだろうかという観点から一言お話をすれば、私の役割を十分に果たすことになるんじゃないかなと思っております。

先ほど藤木先生からご紹介がありましたように、ネットワーク形成事業ということで、G30は13大学で挑戦されたわけでございますが、残念なことに中国・四国地方のブロックには１校もありませんでした。やはり全国的な展開の中で、どこの地域でもくぼむことがないような、格差が生まれないような取り組みであってしかるべきなので、中四国の大学はもっと頑張らないといけないと感じたところでございます。

この留学生30万人計画については、中教審の特別委員会で木村先生の隣に座らせていただいて、30万人のためには何をしたらいいのかご一緒に議論させていただきました。10万人計画だとフランス並みということですが、じゃあなぜ30万人なのか。諸説いろいろあるかもわかりませんけれども、少なくとも2020年までに30万人、世界の留学生のモビリティの５％ぐらいは引き受けたらいいんじゃないかといった観点から、この「30」という数字が出たのだと聞いております。日本語を学ぶ留学生も入れて30万人ということでございます。それを実現するためには、どうすれば魅力的なプログラム、教育を提供し、世界から日本で学びたいと思ってくださる若い人たちを引きつけることができるか、その１点に尽きたわけでございます。



基1-2

その具体策として、留学生の宿舎の問題とか、日本語、あるいは留学フェアなど、さまざまなことを考えられたんだろうと思いますが、日本の大学に来て学び

たい、また学べるためにはということで国際化を牽引していただく大学という政策ができ上がってきたんではないかと思います。そのメーンの業務は、先ほどありましたように、メディアを英語にするということでした。インストラクション・メディアを英語でやってはどうか、そうすれば、世界のどんな国の人でも英語であれば学ぶことができるんではないかということでございます。

この英語で教育をするということは、何もG30から始まったわけではありません。国費留学生の政策を思い出していただきますと、そこには留学生特別コースというものがありました。あるいはもっと前のプログラムを思い出していただきますと、東京大学の工学部が初めて英語で欧米からの青年を引きつけて教育していくといったようなプログラムがありました。もちろん、関西外大などもあります。そのようなプログラムを先達の人たちは開発してこらたわけです。その延長線上に国費留学生の英語による特別プログラムと、特別配置があったかと思います。これで私たちは経験をたくさん積むことができました。

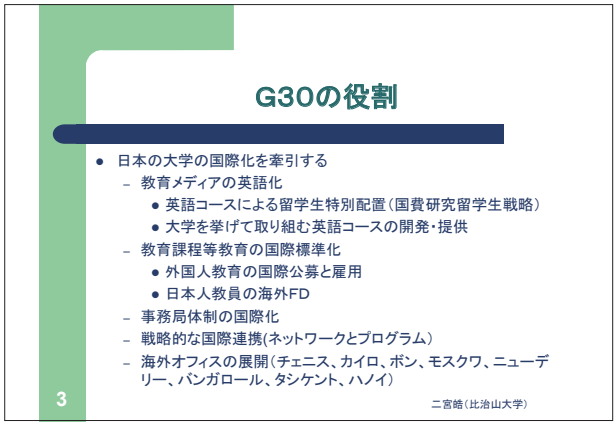
もう一つはご記憶があると思いますが、日米のインバランスといいますか、アメリカはたくさんの留学生を日本から引き受けているけれども、アメリカの学生を日本は1,000人ぐらいしか引き受けていないのではないかと。モンデール大使が日本に来られたころからの話だと思いますけれども、もっとアメリカの学生が日本で学べるように日本政府は少し工夫したらどうかということで、ではどうするんだとなりました。留学生別科というわけにはいかないということでした。それから日本のリーディング大学がもっとドアを開くべきだと。そういう中で英語による短期留学といいますか、アメリカの学生のために我々も英語でプログラムを提供していこうということになりました。

当時、九州大学では、河野先生や西村先生が中心になってなさっていたんだろうと思います。そういう先生方が中心になってなさっていた時代でございます。そのとき、ある大学に来ていたアメリカの学生が国に帰って、日本の英語による授業はとんでもないというゴシップ的な記事を出してしまいました。今は、インターネットの世界、ツイッターあるいはSNSの世界で、私たちの教育が悪ければ、あっという間にネットに流れてしまうんですけれども、当時はまだ新聞で紹介される程度だったかもわかりませんが、そういうのが出てきたわけです。

そこで、私たちは何が悪かったんだろうかといろいろな先生方が振り返ってみたときに、コンテンツもさることながら、教授方法とスピードだったんだそうです。授業のスピードが、私たちは、「わかりますか」とか丁寧にゆっくりと教える訓練を受けて、それになれ親しんでいたんですけれども、アメリカの学生から見ると、スピードが遅いということは、損をしたかどうかは別にいたしましても、よくないんだそうです。理解を深めないというか。そういうことで批判やコメントをいただいたんです。それだけではありませんで、ホーム・アサインメントがないとか、さまざまな批判はいただいているわけですが。そういうさまざまな批判、クリティシズムに日本の大学は耐えてきたわけです。

そして、経験を積み、我々自身を振り返る力ができ上がってきました。それを土壌にしながら、G30の前の、国際戦略本部事業を経験しました。これは、事務局体制、大学の学長のリーダーシップ体制というもの、国際戦略を大学がつくるというものでした。これも、5年のプロジェクトだったと思いますけれども。そのようにして経験を積んで、初めて日本の大学も国際戦略というものもつくってやっていこうという形になったと思います。戦略ですから少しびっくりされる言葉が当時あったと思いますけれども、そういう背景や土壌の中で、大学を挙げて取り組む英語コースを提供していただけるというG30につながってきたわけです。

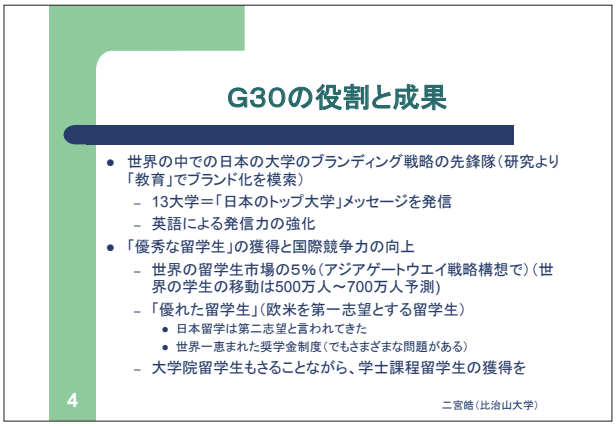
当然、英語で授業を行うということになります。極めて特殊な日本的なスタイルでは、英語による授業はなかなか通用しないので、国際標準化に取り組みまし



基1-3

た。また、イギリスで教えられていた先生が東大の建築に帰ってこられ、イギリスで教えていたとおりの授業をしているのをかいま見ることができたんですけれども、ほんとうにこれが日本の教室かと思うぐらいの授業が行われるようになりましたが、そのようなことが各大学でも行われるようになったんです。上智大学は昔からなさっていたんだろうと思うんですけれども。

そのようにして、世界に通用する教室が、私たちのキャンパスにも出現したのは大変うれしいことです。もちろん、外国の先生にも協力していただきました。外国の先生がキャンパスに来てくださって、日本の先生の FD までしていただけるおかげで、私たちの授業が、教育が、国際標準化していきました。



基1-4

そして、日本の大学の国際化を支えてくれるのは何といっても事務局です。職員の人たちの力は無視できません。もし事務局の人たちが国際化に無関心であったなら、私たち教員は国際化に挑戦することができなかったんではないかと思います。G30は職員にターゲットを与えて、文書も英語化しますけれども、職員が英語で対応できることに大変力点を置いたという点も特色でした。あと、ネットワークとか海外オフィスです。海外オフィスは何もこれは新しいわけではありません。ソウル、北京、タイのバンコクなど、あちこちに日本の大学は海外オフィスを設けていたんですけれども、海外オフィスを９大学ぐらいに積極的につくっていただき、多くの日本の大学が共同利用できるようにしてほしいとお願いしたんだろうと思います。

G30はどんな役割を果たしたんだろうか、どういう成果があったんだろうかというと、幾つでも挙げることができますが、私は特にこの２点だと思います。

まず、日本の教育という側面で、日本に優れた大学があることを世界に発信できたことです。ブランディング戦略としては、ほんとうに成功したと思います。国際戦略本部はブランディング戦略でも何でもありません、研究の競争はいつでもやっているわけですから。個人ベース、研究室のレベルで世界と戦っているわけで、ブランディングという感覚ではありません。このブランディング戦略とは、教育です。世界の留学生市場をどれだけブランドネームで私たちのところに引きつけることができるかという点においては、この13大学に私たちは感謝をすべきだと思っています。日本のトップ大学という、ほんとうにトップかどうかは別にいたしましても、少なくとも日本のトップ大学という目に見える形で世界に売り込んでいただけたし、もちろん、この13大学はみずからも自分たちが日本のトップ大学であるという誇りを持って世界に打って出られました。その点について、非日本的ではありますけれども、大変感謝すべきではないかと思います。

そして、英語による発信力です。英語だけではありませんけれども、英語による発信力が目覚ましくこれで拡大、強化することができたと思います。これがなければ、キャンパスアジアもなかなかうまくいっていなかったんではないか、ASEAN 対象プログラムの世界展開力強化事業もそんなにうまくいかなかったんではないでしょうか。この G30でトップを走ってくれたこの大学はほんとうに大きな役割を果たしていると思います。

それからもう一つ。優秀な留学生というのは、留学生30万人計画の中の一つの柱でございますけれども、私はもともと第１次安倍内閣のときにアジア・ゲートウェイ戦略構想にお招きいただきました。何か変なことを言ったんですが、内閣府の資料がそのまま残っているんですけれど。私がそのときに考えたのは、ODA 的な部分もありますけれども、「アジア・ゲートウェイ戦略構想」という響きから、学ぶ人たちは国境を越えていけばいいではないかということでした。アジアの人は、日本からまた世界につながっていったらいいとかですね。ゲートウェイですので、そういうイメージを持ちながら、じゃあ世界を移動する学生のうちの何%を日本はシェアとして持つべきだろうか、目標としたらいいんだろうかということで、ちょっと ODA 的で

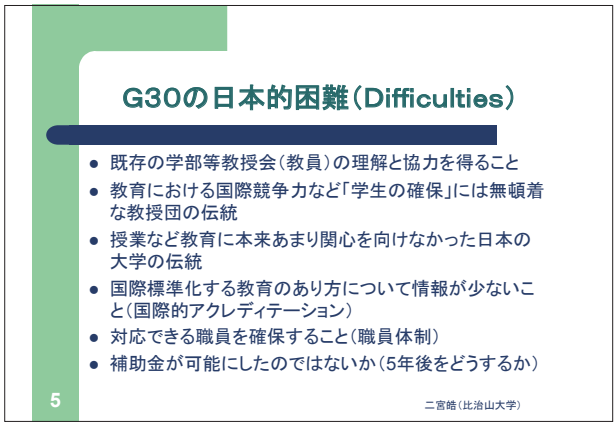
はありますけれども５％という数値をはじき出して根本補佐官に申し上げました。５％とは、極めてクリティカルな数値で、九州大学であれば２割から３割ぐらいでもいいのかもしれません。全市場の中の５％ぐらいは日本が引き受けて優秀な留学生をということを考えたわけです。

ここで、優れた留学生とは誰なのかということを思い出してみたいと思います。私は教育学ですが、留学生研究をされた方は学生のとき必ず最初に学ぶのは、日本留学は第２志望であるということでしょう。どこから見ても、日本は最も留学したい国ではありません。必ず第２位、第３位です。今、国費留学生の奨学金が世界一で、この魅力にはかなわないということで日本に来た方もいらっしゃいます。そのおかげで世界で活躍できるようになられた方もいらっしゃいますけれども、絶えず第２志望です。ここで言う優れた留学生とは、学士課程の学生ですけれども、日本が第１志望の意欲がある学生です。日本語ができなくても日本に来たいという学生です。

最初の年、九州大学に、インドネシアからリクルートされた若い学生が来ました。九州大学にお邪魔したときにお会いしましたが。彼はほんとうは、イギリスかアメリカに行きたかったんだそうです。九州大学の先生の説明でもそうでした。ところが、先生とインタビューし、このプログラムの魅力を聞いて、これなら九州大学に行こうと思ったそうです。そのように先生も紹介されましたし、学生ご本人もそうだと言っていました。多分満足しているんだろうと思います。

これなんですね。日本語はできない、ほんとうはイギリスに行きたいと思ったかもしれないけれど、このプログラムの中身を見て、ああこんなに魅力的なプログラムなら行きたいと思うという。もちろん奨学金がまた一つ要因としてあると思いますけれども。そういったことで、第２志望ではなく、ほんとうに日本に来たいという優秀な留学生を獲得するということでございます。

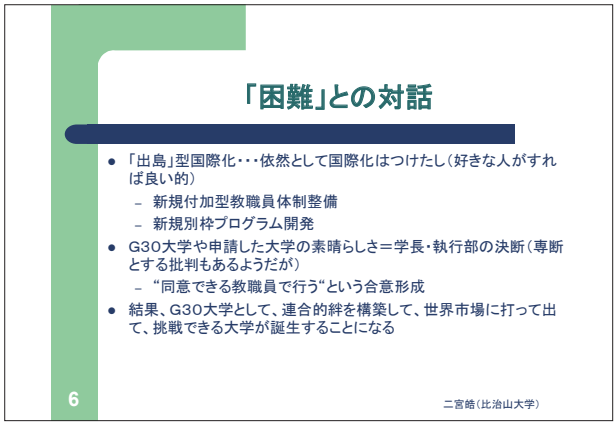
G30においてどの大学でも国際化において必ず直面してきたディフィカルティーといいますか、難しさというものがあったと思います。全ての先生からの理解を得るなんてことは至難のわざであります。我々教員が世界と競って学生を確保するなんて、ただでさえ定員の確保にも無関心な教員が、世界から学生を確保しなければいけないなんていう発想を持つはずがない、何でそんなことをしなければいけないのかと考えるのが、ファカルティの常です。



基1-5

それから、これはもう30年、40年と言われ続けてきたことですが、日本の大学の先生は教育に熱心ではありません。これは留学生のアンケートに必ずあります。研究には熱心だけれども、教育には無関心な日本の教授団。アメリカと比べたらコースワークさえないというわけでございます。

もう一つの難しさは、やはり国際的に通用する大学づくりという観点で、ほとんど情報を持たなかったことです。ICU などはみずから持たれて頑張られたのかもわかりませんが、多くの大学は、少なくとも国立の大学は、世界標準化された授業とは一体何かということさえ考えることがなかったと思います。そして、職員が非常に重要な役割を果たすことにあります。このG30の補助金は、そういうことを可能にしたと思います。



基1-6

私たちは、そのような困難にずっとぶち当たってきたんですけれど、どんな対話の仕方をしてきたかとい

うと、出島論ですね。好きな人がやればいいというわけです。新しい人を雇う、これが補助金です。今いらっしゃる先生ではなかなか難しいから、といったやり方でやってきました。ところが、グローバル30に挑戦した大学、これは採択された大学という意味ではなく挑戦された大学ということですが、私はこれらの大学はとてもすばらしいと思います。なぜすばらしいかというと、学長がみずから、国際的に通用する大学が本来の大学である、我が大学はそういう大学たらんと、国際化あるいは国際的であることを大学の本質といいますか、性質の第一に置かれたからです。そして、国際戦略を明確なメッセージに挙げられたということでG30にアプライされたわけです。大変なエネルギーを投入しなくてはいけないプログラムにアプライされたということは、とてもすばらしいことだと思います。

学長の決定が専断であると、教授会が反発したといったような話も聞きましたが、同意できる先生たち、職員と一緒にやればいいんだということでやっていったんです。みんなが賛成しなければ何もできない日本の大学が、やりたい人たち、同意できる人たちでやればいいんだということのもと、インターナショナルカレッジ、グローバルカレッジ、英語によるプログラムを走らせることができたことは、日本の大学をはっきりと変えました。

それからもう一つはきずなですね。13大学が連合して一丸となって世界に打って出たということは、今までの日本にはないことです。

グローバル化の中のG30の挑戦ということでございますが、優秀な留学生を確保いたしましたけれども、その波及効果は日本の学生にどう恩恵が及ぼされているのでしょうか。

また、教員の国際公募はほんとうに国際公募になっているのでしょうか。そろそろ、これだけの経験をしたなら、本物の国際公募にすべきではないでしょうか、英語で教えたっていいのではないでしょうか。

それから、職員の専門職性を向上させることも必要です。職員のあり方、位置づけ方、あるいはそのキャリアをしっかりとする時代が来たのではないでしょうか。

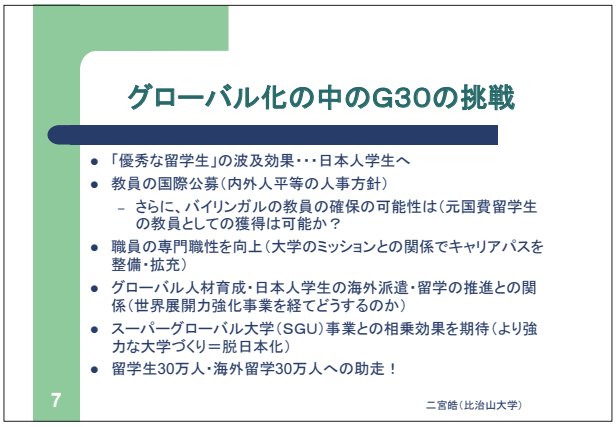
また、グローバル人材育成とか、その他、海外派遣とグローバル30とはどう連携していけば、どう発展型を示していけばいいのでしょうか。

そして、皆さんご関心があるにもかかわらず誰も情報を持っていないようでございますけれども、スーパーグローバル大学という事業と、このG30とはどうつながっていって、何を新たに提案するつもりなのでしょうか。

グローバル・コンピテンシィなど、いろいろな言葉を挙げていますけれども、私自身は昔から、クロスカルチュラル・コンピテンスに非常に関心がありました。

グローバル企業のトップの方々に最も大切なものを挙げていただくと、トップ10はここに挙げてあるものでございました。それから、人事課長にお願いして、最も活躍している人はどなたか教えていただき、その人に、成功した理由はどんな力によりますかと尋ねた結果が、黄色でハイライトをしてあるところです。社長も社員も答えは同じなんですね、好奇心です。この事実は、とても興味を引きます。

しかし、私たち大学は、これからは、社長の声を聞くグローバル人材論ではなく、社員の声を聞くグロー



基1-7

参考：グローバル人材の資質・能力：Cross-cultural Competence調査(二宮・2003年)「好奇心」の大切さ

順位	グローバル企業トップリーダーの意見(回答率25%)（平均54歳）	グローバルに活躍する社員の意見(回答率14%)（平均37歳）
1	問題解決能力	好奇心
2	決断力	環境適応力
3	発想力	寛容な姿勢
4	目標達成志向	協調性
5	積極性	意欲
6	説明能力	目標達成志向
7	挑戦する態度	顧客ニーズ優先
8	好奇心	発想力
9	コミュニケーション能力	積極性
10	広い視野	主体性

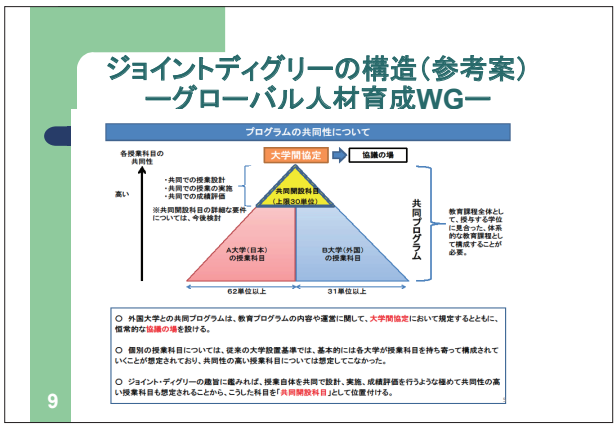
8
二宮皓@比治山大学

基1-8

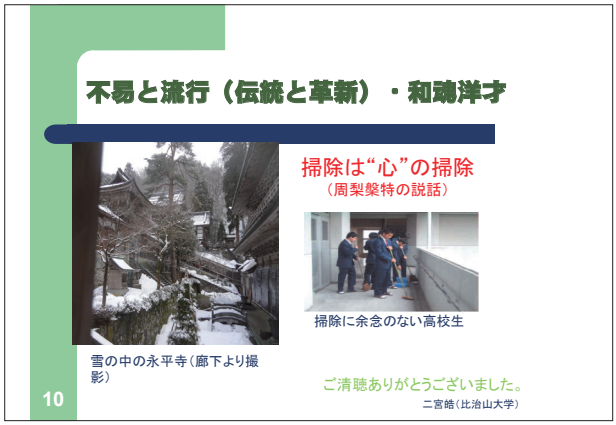
バル人材論、右側に挙げている好奇心、適応力、寛容な姿勢など、現場の中で彼らが感じてきたこの部分にもう一度耳を傾けましょう。政府が、社会人基礎力とかグローバル人材といって提案したものとは別に、キャンパスの中でみずからの伸ばすべきコンピテンスを研究開発する時代が来たんではないかと思います。つまり、世界にほんとうに通用する人材とは一体何なのだということがカリキュラム・ポリシーの中にあるのだと思います。

次は、ジョイント・ディグリーについて。これを説明する必要は私はありません。これができるように文科省はしてくださいました。これで、ほぼ世界から人を引きつける手段（ツール、ツールボックス）は整いました。あとは、先生方がこれを使われて頑張っていただくということです。

私の、広島大学教育学部の最初の研究は、恩師と学校掃除の比較研究です。世界で子供が掃除しているのは日本だけであるというものです。私は、日本文化というもの、日本のアイデンティティーというものを比較教育学研究の基本に据えて今日まできました。やはりグローバル化する、国際化する日本の大学も、やはり日本のアイデンティティーをきちんと置いて、進んでいくことが大切ではないかと申し上げ、勝手ながら、永平寺の写真と、掃除に余念のない高校生たちの姿の写真とをお示しして、私の話を終わります。どうもありがとうございました。



基1-9



基1-10

基調講演２

University internationalisation from the ‘inside out:’ individual needs, organisational change, global engagement

モナシュ大学　人文社会学部／日本研究センター 講師
ジェレミー・ブレーデン

こんにちは。

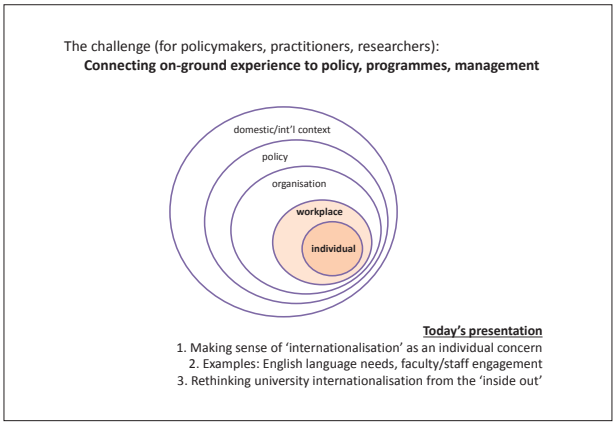
（英語で挨拶）Good afternoon. I will be speaking in Japanese, but I thought I would just say a few words in English to start with. Firstly, thank you – thank you very much to Kyushu University for arranging this symposium and for arranging for my presence here today. Also, thank you to the G30 Secretariat, and thanks to all of you for coming along and supporting this very important event. Also just one apology. I apologize to the non-Japanese speaking members of the audience for my choice of language. It was made just based on the majority language of the audience. I hope not to exclude you. I hope you can follow what I say through the interpreter, and my slides are all in English, and I also encourage you to ask questions in English afterwards, which I will also be happy to answer in English.

オーストラリアなまりの英語から、大分なまりの日本語に切りかえましょう。皆さんにとっては、ちょっとお聞き苦しい20分間になると思いますし、私も途中で苦しくなるかもしれませんが、力を合わせて頑張りましょう。（笑）

改めまして、このシンポジウムに参加させていただいて、ほんとうにありがとうございます。新しい出会いを、懐かしい再会を、ともにとても楽しみにして来ました。今日の私の話が、皆さんにとってどれぐらい参考になるかわかりませんが、この後のセッションの話題提供となれたなら、うれしいです。

私は、ここ15年、何らかの形で日本の大学の国際化にかかわってきました。まずは、大学職員として、それからフリーランスの日英翻訳者として、最近では研究者としてです。その間、かなり速いペースで日本の大学は国際化が進んできたという実感があります。皆さんにもその実感がおありかと思います。今日の資料の各13大学の動きに関するデータ、報告などを見ると、その成果は明白だと思います。これからは、もっと大きな飛躍、もっと大胆な動きも期待されていると思います。皆さん、日々頑張っておられると思います。無責任な言い方ですが、私も応援したいと思います。

ただ、日本の大学国際化の動きを見ていると、これは日本に限定した話ではないかもしれませんが、大きな次元での話、例えば数、留学生数の増加、新しいプログラムの立ち上げなどが、国際化のいろいろな現場での小さな話とよくつながっていないように感じます。小さな話とは、日常、直面している課題、トラブル、いわゆる苦労話ですね。あるいは達成感を味わったり、満足してもらったりしたときの成功話です。また、このような G30のワークショップなど、セミナーなどで皆さんがよく共有し合っている小さな話。例えば、留学生の支援やサービスへの満足度、外国籍教員の受け入れ上のトラブルとか。あとは、もっと突っ込んだ疑問もたくさんあると思います。自分の大学の教職員が一丸となり、みんな同じ方向に向かって国際化に取り組んでくれているのか、一般の国内の学生が



基 -2-2

キャンパスの国際化をどのように受けとめ、自分の経験と将来とをつなげていっているのか、そういった疑問もあると思います。そのような小さな経験、現実に基づいた話が、政策あるいは大学運営システムの構築、または、大学国際化の研究に関する大きな話とは、別の土俵で行われているように感じます。

このシンポジウムの意義は、政策としての国際化、研究対象としての国際化、それから実務としての国際化を同じ土俵で議論し合い、考えていくことにあると私は思います。

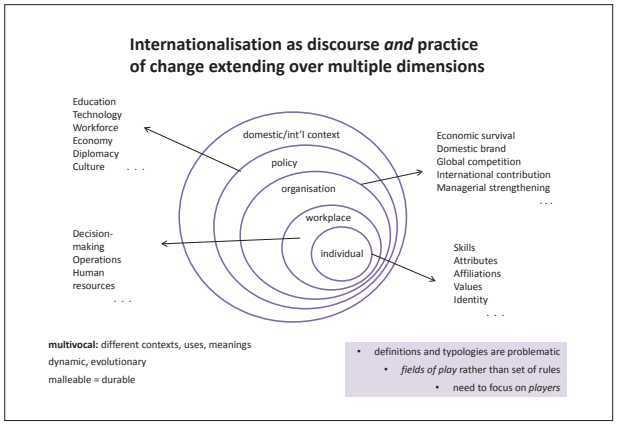
さて、国際化の土俵と言いましたが、その土俵をどのように設計するか、一つのアプローチを今から説明したいと思います。

まず基本的なことですが、「国際化」、あるいは「グローバル化」でも言葉は何でもいいんです、今から説明しますように言葉自体にこだわる必要はないと思いますが、国際化とは、理論でもあり、実践でもあり、目的でもあり、結果でもあり、さまざまなレベル、さまざまな次元で行われていることです。国のレベルで考えると、教育改革の一環としての国際化もあるでしょう。また、科学技術の競争力、あるいは労働市場の変化など、さまざまな側面があると思います。同じように、個別の大学の次元では、大学の国内での知名度の向上、競争的資金の獲得、あるいは入学者確保、生き残り、いろいろな目的、いろいろな側面があるのは確かです。

今申し上げた政策環境とか組織のアジェンダが国際化の実践としてあらわれるのは、現場、個人のレベル、つまり、もっと小さな丸のところです。大学あるいは国が、国際化の目標・活動形態として打ち出したものを自分の能力や価値観などに当てはめて取り組みます。私は、この個人あるいは現場のレベルが非常に重要だと考えています。

今話したように国際化が多元的・多義的であるとすれば、定義可能な概念や一定のプロセスとして扱うよりも、実際の使い方を問題にする必要があるのではないかと思います。そのために、まず個人の国際化をめぐる行動をきちんと捉えていく必要があるというのが私の研究の基本的な視点です。

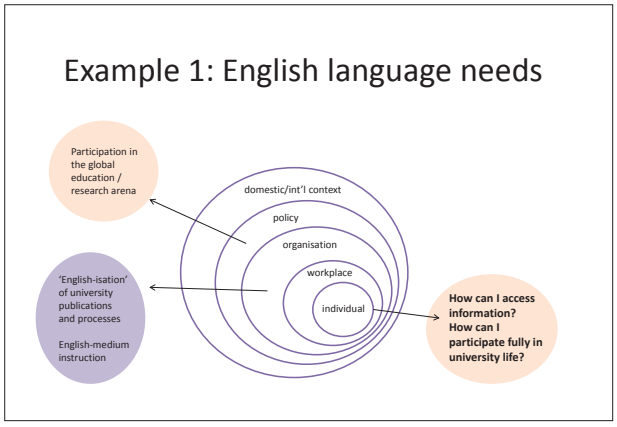
国際化を土俵あるいは舞台に見立てて、その舞台にまず誰がどのように上がって演じているのか、取り組んでいるのかを考えるというアプローチです。そこからその取り組みのルールとか、観客とかスタジアム全体を考えていこうというものです。私はインサイド・アウトの分析と呼んでいますが、そのような分析をぜひ皆さんにお勧めしたいと思います。これは研究者や政策担当者が考えることではなく、むしろ国際化の現場にいる教職員や学生の皆さんが中心になります。皆さんの日常的な経験や悩みを大学国際化のほかの次元、レベルに組み上げていく方法でもあると思います。



基2-3

今から二つの事例というか、ケース・スタディーを紹介しながら、ちょっと詳しく説明します。時間が限られているので、詳しくといっても限度があると思いますが、考える材料だけ提供します。

一つ目はキャンパスの英語環境の整備、英語化です。皆さんのところでも、かなり進められていると思います。その良し悪しは別として、国際教育・研究の共通語が英語であるがために、ある程度の英語化は避けて通れない課題だと思います。それは大きな次元で、しかるべき目標だと思います。また、小さな次元



基2-4

で考えると、英語環境の整備は、日本語が不自由な教職員や留学生の個人のニーズに応える動きでもあります。国際化の大きな目標を達成するために必要な、多様な学生や教職員をキャンパスに迎える活動の一つです。そういう意味では、大きな次元と小さな次元をつなげていく活動でもあります。

問題は、活動としての英語化、英語環境の整備、英語の資料の準備が進められていくうちに、いつの間にか、ほかの次元でのニーズが見えなくなってしまう、英語化だけが独立して先走りすることだと思います。そのような傾向があるのではないでしょうか。英語化だけを先に進めてしまうと、このような危険性が出てくると思います。

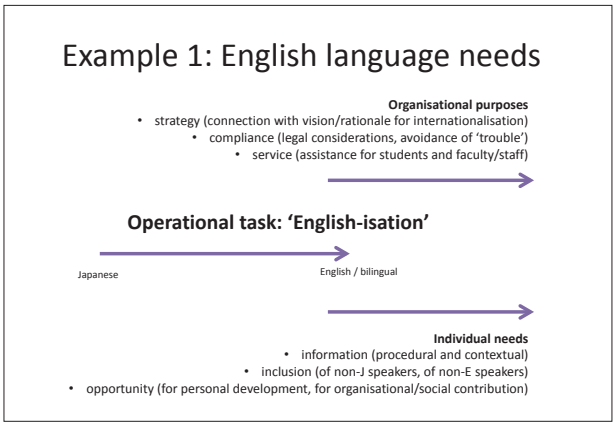
大学の英語化を100%頑張ったとしても、利用者である留学生や教職員にとっては、それはスターティング・ラインにすぎません。日本語ができなくてもいいと言われてキャンパスにやって来た留学生、教員などからすれば、100%英語が通じる環境は当たり前だからです。彼らはその先にある中身を問題にしていると思います。大学に入学するために何をすればいいのか、カリキュラムがどうなっているのか、また、教職員だったら、どのように大学づくりに本格的に参加できて、満足を得られる仕事はできるのかなど、そのような中身の話がスタートだと思います。

英語化だけに没頭すると、このような個人のニーズが意識されなくなってしまい、もっと上にある組織としての目標も見えなくなってしまいます。手段である英語化が、目的としての英語化にすりかえられてしまう危険性があると思います。

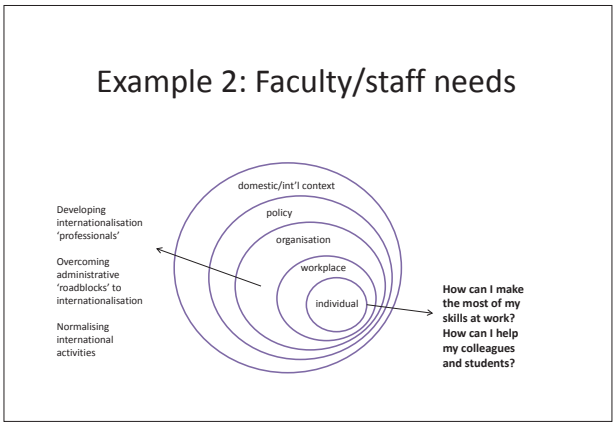
例えば、とても細かい話ですが、留学生向けの入学関連の資料が典型的なパターンです。日本語の入試要項をまず用意し、それをそっくり英語に翻訳するというケースが多いと思います。果たして数十ページに及ぶ細かい入試要項を完璧な英語に仕上げても、それが出願を考えている海外の高校生や親御さんにとって何の役に立っているのか、考える必要があると思います。

また、そのような資料を用意することが、組織としての国際化の目的・目標を達成する上でほんとうに必要なのか、ほかに個人のニーズと組織の目標をつなげるための英文資料の用意の仕方があるのではないか、検討する必要があると思います。その検討の結果、やはり組織のコンプライアンス上、日本語の資料をそっくりそのまま英文にする必要があるということになれば、それはそれでいいと思いますが、今度は、その目的、コンプライアンスを逆に個人のニーズへどうつなげるか考える必要があるでしょう。英語化のステイクホルダーは、組織でもあり個人でもあるのですから、どうその二つをつなげるかが問題だと思います。

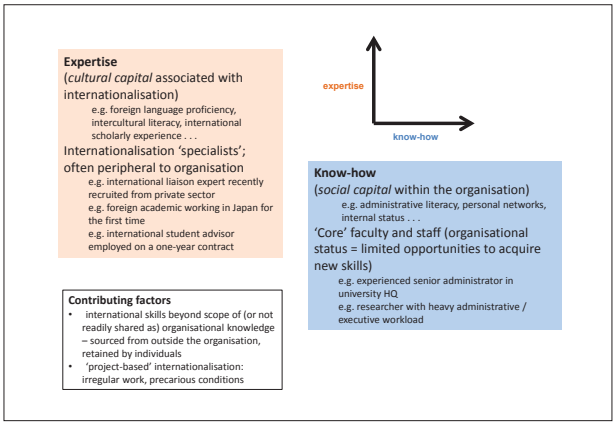
もう一つは、国際化のための教職員の育成・活用の問題です。ここでは、国際化を進める上で欠かせない個人の能力の開発、業務、意思決定システムの構築を、



基2-5



基2-6



基2-7

個人個人の働き方、アイデンティティー、ニーズとどのようにつなげるかが問題になると思いますが、これについても一番小さな次元、個人の次元から改めて考える必要があると私は思います。

個々の教職員が国際化の土俵に上がって取り組むのにどのようなものが必要なのでしょうか。さまざまだと思いますけれど、とても簡単に考えて、大きく分けて二つの要素があると思います。

一つはスキル、言ってみれば取り組むためのわざですね。国際化の土俵でよく使われているわざは、例えば言語能力、専門的な業務経験、学外あるいは海外でのネットワーク構築力などです。これは国際化に関連する個人の文化資本と言ってもいいでしょう。

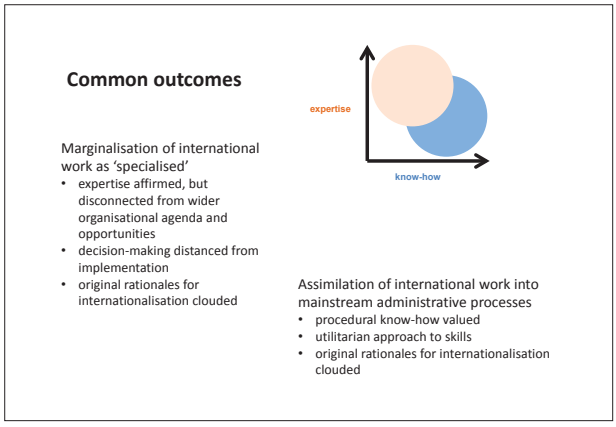
もう一つは力です。わざはあっても力がないとうまくいきません。国際展開に伴って発生する業務は多くの場合非定型で、広い範囲にまたがる作業を必要とします。組織にとって経験な領域が多いです。マニュアルなし、ケース・バイ・ケース、イレギュラーなことばかりです。それをうまくこなすには組織内にノウハウが必要です。ノウハウとは、大学の各機能、サービスとつながるための経験や人脈などです。また、弊害なくコミュニケーションがとれるとか、ある程度の地位があるとか、そういう要素も含まれると思います。このようなノウハウといいますか、力といいますか、社会資本と考えてもいいかもしれませんが、力を持つためには、大学組織に長くかかわっていたり、大学が置かれている社会環境に適応していないといけません。

問題は、高度なわざ、高度なスキルを持っている人こそ、力がない傾向があることだと思います。わざを持つ人は組織の中核ではなく周辺にある場合が多いです。日本では、国際化がプロジェクト的に進められている傾向が非常に強いので、学内で特殊な国際化に関するスキルを育てるのがとても難しく、学外から期間限定的に人材を採用してくるケースが多いです。実務経験者や外国出身の教職員もそうです。あるいは大学の世界を知っているけれど、今勤めている組織固有のことをよく知らない教職員。こうした人たちは組織内の経験、ネットワーク力に非常に乏しいです。または、地位がない、雇用形態が不安定であり、組織内の社会資本の面でさまざまな不利をこうむっていると思います。逆に、組織内でのネットワークばかり身につけてきたけれど、国際化に関するスキルを高める機会がない人もたくさんいると思います。学外に出る機会が限られている、または会議に出す提案文書を書くとか、教授会をうまくまとめるといった組織の内部の特殊な能力、そういうスキル、そういう力ばかり持っている人もたくさんいます。その二つの間に非常に大きなギャップを感じます。

資料で青く示している部分ですがノウハウあり・スキルなしの人、このような人たちが多ければ、国際関連の仕事が現在ある大学のシステムに乗せられて進められる傾向があると思います。組織が変わらずに、国際業務への取り組み方自体が組織の既存のシステムにフィットする形に変えられてしまいます。逆にスキルあり・組織内のノウハウがあまりない人、このような人が多いと、国際化が永遠に専門的な領域として扱われ、専門的なだけに孤立する傾向が強くなります。大学運営の本流の社会資本からますます離れていきます。

この二つの傾向が同時並行的に動いていることが多いと思います。つまり、スキルとしての国際化の土俵、ノウハウとしての国際化の土俵、個人個人が自分が持っている能力を発揮できるそれぞれの土俵に上がって取り組んでいるように見えます。いずれにしても、国際化が普通の土俵で取り組まれていると、うまくいかなくなります。そして学内の国際化に対する温度差があるとか、何かが邪魔している、システムが悪いという話だけになってしまいます。

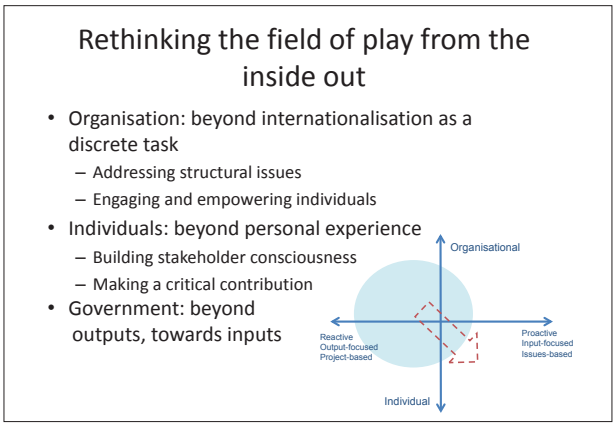
解決策として、まず個人を力づける必要があると思います。スキルを持っている人がノウハウを、ノウハウを持っている人がスキルをといったようにして、自分にないものを身につけるチャンスを与えられるような制度を考える必要があると思います。ちょっと時間が押しているので、具体例をここでは言いませんが、



基2-8

後で質疑応答の時間にでも話しましょう。

今、二つ問題提起をしました。どのように国際化をインサイド・アウトで、個人、現場のレベルでどう取り組んでいくかをごく簡単に短くご紹介しました。共通点として、個人の状況からボトムアップして考えるための取り組みは、一般的に国際化と言われる領域を超越し、大学の高度化全体の課題でもあります。教育を受けている学生、教育者、研究者、あるいは事務職員が意欲的に取り組める、努力が報われることを第一に考えるのが、基本的なアプローチだと思います。



基2-9

まとめは省いて、一つだけ最後につけ加えたいことがあります。スライドの一番下のところですが、インサイド・アウトの国際化を推進するための公的支援のあり方についてです。現在、公共事業としての国際化では、どうしても大きなアウトプットが意識されていると思いますが、これからむしろ個人あるいは現場・職場を意識した能力開発、雇用形態、機会均等、ダイバーシティー（多様性）、組織内のコミュニケーションなど、そのような課題を真正面から取り組めるようなプロジェクト・ベースではなく、課題ベースの支援政策を期待したいと思います。

そんな実務レベルの話は各大学が個別に取り組むべきだという考え方もあるでしょうが、それは違うと思います。大学はどうしても目の前にある数字をこなす、プログラムを立ち上げる、運営するという大きな外向けの課題を意識しないといけませんので、一息して、個人の満足度、職場内の力関係といった内側の課題を改めて考える余裕があまりないです。にもかかわらず、スモールな課題設定を促進し、後押しするような公的支援のあり方がないのではないでしょうか。そのようなことを検討する必要があると思います。

コンクルージョンにはなりませんが、要は、ちょっとだけ国際化をインサイド・アウトで考えましょうというご提案です。国際化の土俵の設計を一緒に考えましょうということです。どう設計すれば、より多くの個人が能力を発揮し合って、世界の学生、研究者が魅力を感じて、グローバル時代にふさわしい日本の高等教育をつくれるか、ぜひ一緒に考えましょう。

ここで後の議論に任せて、私の話を終わりにしたいと思います。ありがとうございます。

4．課題別セッション

（A）課題別セッション
海外展開で得たもの：広報活動・海外拠点

発表大学：
筑波大学　北脇信彦（海外大学共同利用チュニス事務所長）
東京大学　吉野　宏（インド事務所長）
九州大学　緒方一夫（総長特別補佐）
明治大学　安藤章二（国際連携部国際教育事務室）
ファシリテーター：
大西好宣（大阪大学　インターナショナルカレッジ副カレッジ長・教授）

○大西　「課題別セッション A. 海外展開で得たもの：広報活動・海外拠点」というタイトルで、セッションを始めたいと思います。

本日は、年度末のお忙しい中、また、あいにくの天気の中、福岡までお越しいただき、ありがとうございます。私は、このセッションのファシリテーターを務める大阪大学の大西と申します。どうぞよろしくお願いします。

セッションの開始に当たって、少し私からお話をさせていただきたいと思います。昨年末、アメリカのハーバード大学の教育学の大学院に行く機会がございました。休み時間に図書館でいろいろ雑誌を見ていましたら、こういうものがありました。『ジャーナル・オブ・スクール・パブリック・リレイションズ』。まさに学校の広報をするための雑誌です。こういうものが研究領域として、あるいは皆さんの関心の一つとしてあるということ自体にとても驚いて、これは大変な国と私たちは競争しているんだなと改めて感じた次第です。

その雑誌の冒頭に、編集長の方が書いておられた文章が非常に印象に残りました。これが広報なんだなということで、ちょっと皆さんにご紹介したいと思った次第です。原文はそこに書いてあるとおりですが、要するに広報とは、自分たちの内外の関係者といい関係を結ぶ、さらにはそれを育て上げていくことができるかどうかということなんだと。

ですから、このセッションは、私たちが G30という事業を通して、果たしてそういう新しい関係、よい関係を結び、また、それを育て上げることができたのかが問われているのかなと私自身は理解しました。

では早速、セッションに入りたいと思います。

このセッションは２部構成になっております。最初に G30採択大学４校から、このセッションのテーマに関連したユニークな取り組みの発表があります。１大学当たり９分ということでお願いをしております。さらにこの９分を最初の１分と８分とに分けます。４大学おのおの最初に１分を使って、それぞれどういうことをプレゼンテーションされるのかをキーワードを使ってご説明いただいた後に、各大学のフルスケールのプレゼンテーションを８分お願いするというスタイルをとっています。それから第２部は、パネルディスカッションでございまして、こちらは60分を予定しております。

なお、各大学の発表後、皆さんから質問を受け付ける時間は特に設けておりません。皆さんからのご質問

は、後ほどのパネルディスカッションの60分のところで受け付けたいと思いますので、ご協力をよろしくお願いいたします。

それでは、最初に明治大学のキーワードの発表からお願いしたいと思います。

○安藤　明治大学の安藤と申します。よろしくお願いします。

本学からは、このセッションのテーマである海外拠点、海外広報とかかわっての成果、課題、展望として六つの事例を紹介させていただきます。本学は、海外大学共同利用事務所の補助金もいただいておりませんし、英語のコースもまだまだ少ない状況ですので、他３大学とはちょっと違う内容の紹介になろうかと思います。

全体を通してのキーワードとしましては、「学外連携」「外部活用による海外展開の推進」となろうかと思います。やはり海外展開を行うに当たって、全部自前で行うのはどの大学も厳しいと思いますので、今後も学外連携、外部活用が重要なファクターになるのではと思います。本日は、これらとかかわって本学が新しく取り組んだこと、チャレンジしたことを紹介させていただきます。よろしくお願いします。（拍手）

○大西　それでは、九州大学お願いします。

○緒方　九州大学の緒方でございます。

九州大学のプレゼンのキーワードは、「海外拠点」「海外プロモーション」「ブランディング」です。この三つをキーワードにお話を進めさせていただきたいと思います。

講演内容は、九州大学の事例紹介というよりも、もちろん事例紹介をしますけれども、そこで何を学んだのかをポイントを整理してお話ししたいと思います。以上です。よろしくお願いします。（拍手）

○大西　東京大学お願いします。

○吉野　皆さんこんにちは。東京大学のインド事務所から参りました吉野でございます。

今日のキーワードは「日印交流拡大」です。昨年12月、天皇陛下が歴史上初めて、陛下としてインドにお越しになり、今年１月、安倍総理がインド共和国記念日のチーフゲストとして、歴代首相として初めてインドにお越しになりました。天皇陛下、総理と連続インドに行かれまして、日印交流、特にインドにおいては、非常に日本に関心が高まっております。

そういう中、日本の大学はほとんど知られておりません。この２年半、私どもの大学と立命館大学、研究所では京都大学、東洋大学、そして職員は慶應大学が派遣され、留学生では東京外大、大阪大学のヒンドゥー語科、交換留学で創価大学、立命館、うちも１名ぐらい、そしてサマースクールにおいては、神戸女学院大、千葉大学と、それぞれの立場でインドに取り組んでおります。しかし、何せ12億人の大国です。日本の９倍、EU と同じぐらいの大国でございますので、それぞれがポイントで攻めても攻め切れません。やはり、大学連携、オールジャパンでやらなければなりません。首相みずからインドにお越しになって「どうか日本に来てください」とインドの学生に頭をお下げになりました。私がやっていることを首相みずからやってくださったわけです。これが今のインドの状況でございます。ここにお越しの皆さん方、ぜひインドに関心を持たれている方は連携して取り組みたいと思いますので、どうぞ何なりと質問その他、私にお寄せいただければ非常にありがたいです。キーワードは「オールジャパン」でございます。後でご説明します。（拍手）

○大西　それでは、最後に筑波大学よろしくお願いします。

○北脇　筑波大学の北脇と申します。

筑波大学は、北アフリカのチュニジアの首都チュニスに事務所を開きました。北アフリカの地域で筑波大学という名前は、国際交流協定校の関係者には知られていましたが、一般の高校生、大学生に全く知られていないという状況でしたので、まずは日本の大学、筑波大学を知ってもらうことを最初の課題としてやりました。

日本の大学を知ってもらうためには、まず筑波大学のグローバル30事業をスタートさせる、実績をつくることが第一だと思いました。いま PPT- ２の年表が写されていますけれども、同スライドにあるように、2009年７月に G30の採択通知があったわけなんですが、その年の11月に初の学士課程入学試験をやりま

した。同じ月にチュニジアのチュニスの事務所の開所式をやっています。新規開設した英語コースでは、翌年2010年８月に新入生を迎えたんですけれども、そのときの新入学生が今４年次に在籍していて、そのうちの成績優秀者は来月の３月に卒業を迎えます。同時にチュニスの事務所のほうも、大学を知ってもらうことを念頭に、いろいろなイベントを開催してまいりました。内容については、後で報告させていただきます。以上です。（拍手）

○大西　ありがとうございました。さてここで、海外大学共同利用事務所ということにつきまして、主催者から説明をしろと仰せつかっておりますので、短くご説明申し上げたいと思います。

この海外大学共同利用事務所というのは、グローバル30の取り組みの一環として、現在７カ国８都市に設置されております。皆様がお持ちのパンフレットの最後の背表紙にその場所と大学名が書いてございますので、ご参考までにごらんいただければと思います。具体的には、日本の大学全体の情報の提供、入学説明会の開催、あるいは入学審査など、現地での活動を支援するというサービスをおのおの提供されていると聞いております。実際に、私ども大阪大学も、京都大学がハノイに設置されている事務所で毎年入試の面接をさせていただいております。ですから、この事務所に関しては、「共同」というところが一つのキーワードなのかなと思っております。

では、北脇さん、続けて筑波大学のプレゼンテーションを８分お願いいたします。

【筑波大学】

筑波大学　海外大学共同利用チュニス事務所長
北脇　信彦

今、申し上げましたように、筑波大学はチュニジアのチュニスに事務所を開いたわけですけれども、チュニジアだけではなくエジプト、リビア、アルジェリア、モロッコ、モーリタニアと、地中海沿岸の６カ国を主な対象としてまいりました。

まず筑波大学を知ってもらうことを第一の課題として、いろいろなイベントを開催してまいりました。**資料 A1-3**にありますように、マグレブ３カ国のチュニジア、アルジェリア、モロッコを重点国と考えました。最初に何をやったかといいますと、それぞれの国の日本では文部科学省に相当する高等教育省と包括的な交流協定を結びました。それによって、それぞれの国を挙げて支援していただき、それぞれの国の在日大使館とも連携を密にとることができました。そういうことを通じて、それぞれの国の駐在日本大使館ともいろいろな連携をとって進めることができました。

幾つか例をご紹介したいと思います。**資料 A1-4**に載っている写真、これが2009年11月に開所したチュニジアの事務所です。カルタゴ大学の傘下にあるINAT 研究所の一角を借りて開所しております。北アフリカでの経験が豊富な現地駐在員と、もともとこの研究所の所長であり学長だった方にアドバイザーをお願いしました。これらが現地と連携をとるのに非常に有効だったと考えております。

日本留学説明会は５年間で計13回やりましたが、毎年、毎回違う場所で行いました。特定のホテルとかいったことではなく、交流協定校の大学を借りて、その大学と共同開催のような形で、連携をとって開催しました。そのため、それぞれの大学とも非常に密接な関係を築くこともできましたし、それぞれの大学の学生さんたちの関心も高めることができたと思います。

日本留学説明会開催経費のことですが、**資料 A1-4**にありますように、旅費を除いて１回当たり平均20万円ぐらいです。主にパンフレット等の郵送費と、こ

A1-2

A1-3

A1-4

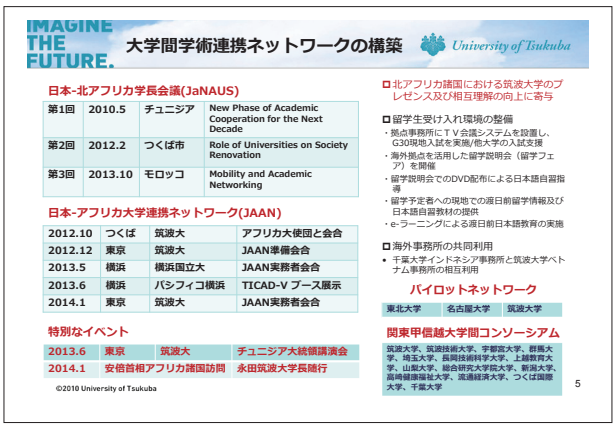
こは公共交通機関が初めてですとちょっと難しいので、運転手つきのレンタカーを使ったというのが、費用のほとんどになっています。

そのほかのイベントとしては、北アフリカから13大学を招いて国内でセミナーを開催しております。それから、これは教育事業ではないんですけれども、学術シンポジウム、文化・科学・技術会議というのを５年の間にチュニジアでは毎年、アルジェリアでは２回、モロッコでは１回開催しております。

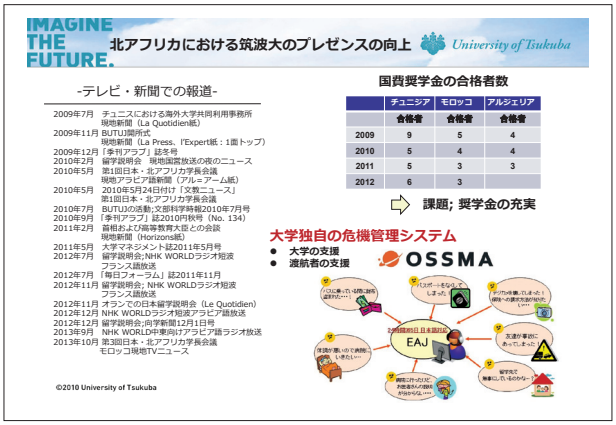
学長クラスから現場の実務者クラスまで、いろいろなレベルでの交流を深めたいということで、**資料A1-5**にありますように日本・北アフリカ学長会議を３回行っています。第１回はチュニジアで、それから２回目はつくばで、３回目の昨年はモロッコで行いました。参加していただいた大学には、ここで感謝を申し上げたいと思います。

アフリカ地域から留学生を受け入れるということを最初の狙いとして今までやってきました。これから日本人学生をアフリカ地域に送り出すことを考えたときに、どこに学生が行きたいと言うかわかりません。いろいろなところで学生支援の活動をしていきたいと思いますが、全アフリカを考えると１大学だけではとても難しいです。ですから、アフリカに関心のある大学と連携していきたいと考えまして、2012年の終わりごろからそういう活動をしています。今のところ、日本・アフリカ大学連携ネットワーク（JAAN）の準備会合という段階ですけれども、今年の秋ぐらいまでには、もう少し形のあるものにしていきたいと考えています。

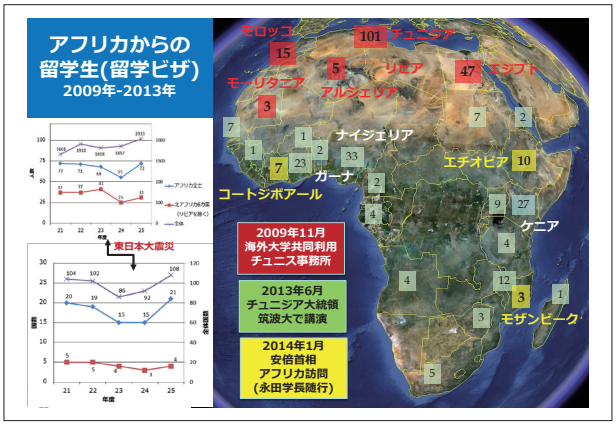
特別なイベントとしては、昨年６月の第５回アフリカ開発会議（TICAD・Ⅴ）でブース展示を行いました。その際、チュニジア大統領の技術講演会を筑波大学東京キャンパスで開催しております。先月、安倍首相がアフリカ訪問されたときに、筑波大学の学長も経済ミッションの一員として参加しました。



A1-5



A1-6



A1-7

筑波大の北アフリカにおけるこのような活動が、**資料A1-6**にありますように現地のテレビや新聞などでたくさん報道されていまして、日本及び筑波大学の認知度は非常に高まってきたのではないかと考えています。

資料A1-6の表は国費奨学生の数ですけれども、大学院はいろいろ手はあるんですが、学部の学生の奨学金というのが非常に問題です。国費奨学生は、応募者が今年当たり３カ国それぞれの国で150人ぐらい応募しているんですけれど、合格者はこんな程度なので、これは非常に問題です。

資料A1-7は、アフリカ大陸から筑波大に来ている学生の数です。入学者のグラフをごらんください。平均すると毎年70人ぐらいの学生が来ています。

それから、**資料A1-8**にありますように、国際交流協定もエジプトからモーリタニアまで二十数大学と交

流協定を結びました。

資料 A1-9は、日本・アフリカ大学連携ネットワーク（JAAN）で、これまで準備会合に参加していただいた大学の名前を記載させていただきました。

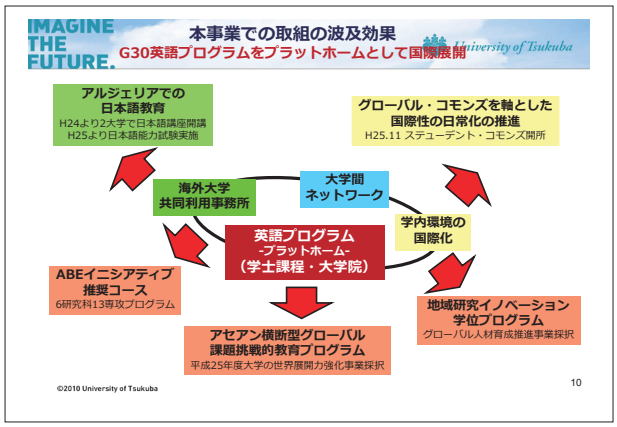
資料 A1-10にありますように、G30の英語プログラムをプラットフォームといたしまして、さまざまな海外展開あるいは安倍イニシアチブ、これは TICAD・Ⅴで提唱されたものですけれども、こういうものにさらに展開していきたいと考えています。

今まで説明したことをまとめて文書にしたものがこの**資料 A1-11**です。

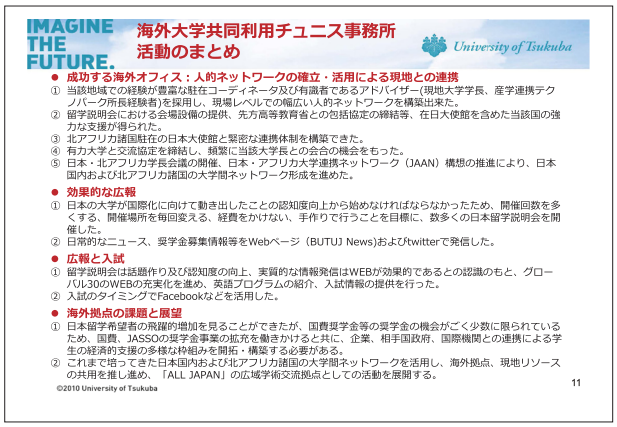
以上で終わります。（拍手）

A1-8

A1-9



A1-10



A1-11

【東京大学】

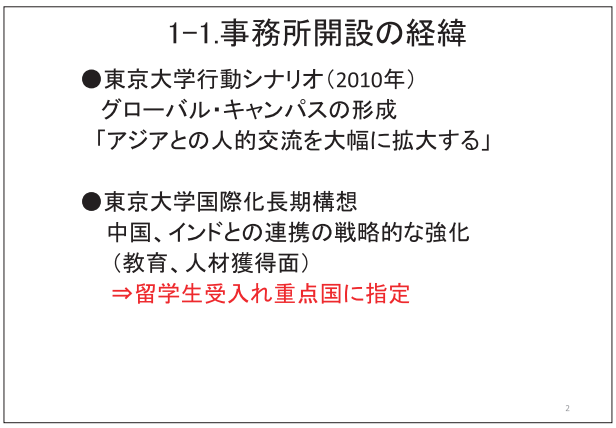
東京大学　インド事務所長
吉野　宏

吉野でございます。東京大学のインドにおける取り組みをご説明させていただきます。

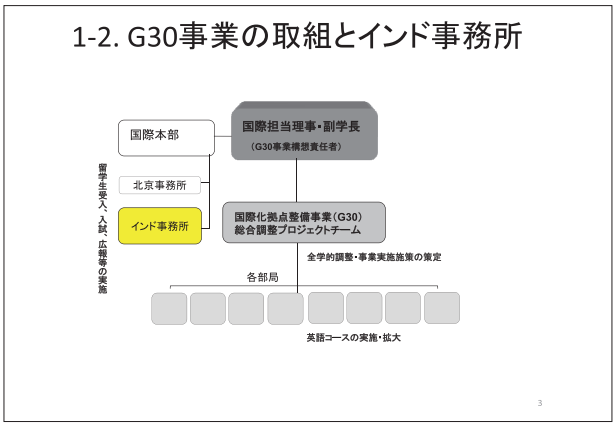
私が事務所長を拝命して２年半、事務所を設立して２年、この２年半と２年の成果と失敗、概略をご説明いたします。皆様の今後のインドへの進出に役に立てばという一念でございます。

なぜインドか。これは、私どもの大学のいわば基本精神、行動シナリオの中に「アジアとの連携」があるからです。基本的には、グローバル・キャンパスの形成ということで、「アジアとの人的交流を大幅に拡大する」ということからでした。アジアの二大国である中国、インドとの連携が戦略的に決められています。それで、まず中国にオフィスを構え、次がインドです。なぜインドか。私が理解するに、話は簡単です。他国と違い、インドは天才が出ている国だからです。かつ、現代においては、IT が盛んで、マイクロソフトの３代目社長に47歳のインド人技師がなりました。このように昔から、インドはゼロを発見するなど数学に強く、天才が出ています。かつ現代においては IT で世界をリードしています。その国から来ている留学生はたった600人足らず。アメリカには10万人以上行っているけれど、全然、日本に目が向いていません。「吉野、何とかインドに事務所を構えて、天才を探してこい」と、理学部の物理学の先生が私に言いました。それを胸にインドに行って、やっております。

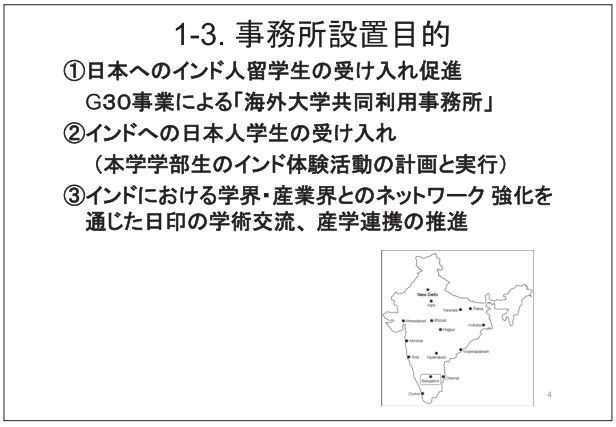
事務所の使命は３つです。１番目は優秀なインド人留学生をもっと受け入れることです。２番目はインドへの日本人学生の受け入れです。大学の機関決定として、昨年からインド学習体験を始めまして、学部生のインド体験学習プログラムをやっております。なぜか。いきなり留学に行けと言っても、なかなか留学に行けるものではないからです。まずは国際体験をさせようということです。学生は海外旅行に行きますけれども、地道に国際体験をさせるために、きちっとした



A2-2



A2-3



A2-4

問題意識を持った、テーマを与えた学習体験をさせるということをインドで私が企画提案し、昨年度から始めました。これが学生に大きな人気を得まして、来年度はもっとプログラムを増やし、学生を増やせと、そのような状況です。

この１番目と２番目を達成するために、当然、点では攻められませんので、ネットワークを構築し、日本とインド全体の学術交流、産学連携に努めていくという組織化を同時にやっているのが実情でございます。

事務所は先ほどご説明したとおり、まだ生まれてたった２年でございます。私の右腕は、シバニさんという、米国パーデユー大卒業後早稲田で修士を取得、日本語２級の立派な女性スタッフです。そして運転手兼庶務係り。この３人の小所帯で今やっております。

開所式は宣伝効果を狙って行いました。その前日には、我々の味方になってくれる人たちということで、我々の卒業生で組織するインド赤門会を発足させました。これが宣伝及び機動力のまず出発点でございます。

これから皆さんがインドに来るに際して、一応ポイントになることを挙げておきましたので、ここでは説明いたしません。質問がある方は、後で言ってきてください。

そして、２年の成果は何であったか。11月１日現在のインドからの留学生数が青で、５月１日付が黄色でございます。何が違うかというと、５月１日は基本的には国費留学生の動向が左右し、11月１日はG30の英語プログラムに入ってくる留学生の動向が大きなポイントになるということです。昨年度に比べ50人に増えまして、ほぼ倍増です。これが私の２年半の一大成果だと皆さん方に申し上げることができると思います。50人になったところで、ようやく100人ぐらいの規模が視野に入ってきました。なぜかといえば、インドは親日国だからです。かつ、日本の製品があふれております。日系企業は1,000社を超えております。にもかかわらず、インドでは、日本の大学の存在は東大ですら知られておりません。したがって何が欠けているか。まさに広報活動でございます。それを徹底的に今やっているところです。

JSSSO がやっている昨年の５月１日の集計は、３月に出るということなので、オールジャパンでどうなったかは今ちょっと話はできませんが、東大は増えたということを念頭に置いてご説明いたします。

2. 東京大学インド事務所概要

住所：#408, 4th Floor, Prestige Meridian -1, No.29 M.G.Road Bangalore 560001,India
電話：+91-80-4150-8509
職員：代表者1名： 所長 吉野 宏（77年理学部化学科卒）
スタッフ1名： シバニ・ゴパールクリシュナ（Ms）
米国留学後、2008年早稲田大学院アジア大洋州研究科国際関係修士
設立：2012年1月16日（事務所登録日）
HP: http://www.indiaoffice.dir.u-tokyo.ac.jp/
E-mail: indiaoffice@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

5

A2-5

●開所式：2012年2月27日(月)
インド側主賓：インフォシス（株）ナラヤナ・ムルティー会長
（東大総長諮問委員）
日本側主賓：文部科学省 藤木文部科学審議官（当時）
ホスト：東京大学 田中 前副学長（4月1日付JICA理事長）
備考：日印外交樹立60周年記念行事の一つとして開催。

●付属組織：インド赤門会（2012年2月26日発足）
インド事務所の機動力を支える上で極めて重要な存在

6

A2-6

3. 大国インドに拠点を持つことに関心がある大学へのアドバイス

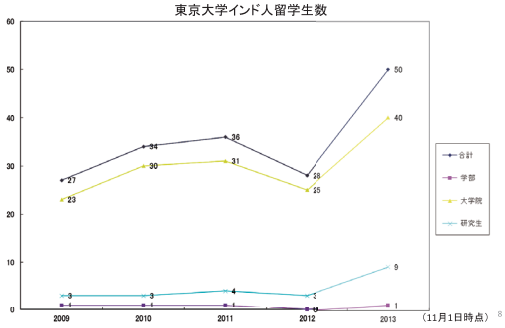
3．1 事務所の開設のポイント
●インド中央銀行事務所開設許可取得が出発点
●目的に合ったステータスの選択（例：駐在事務所、共同研究所他）
●立地 （都市、ビル、大学内等）
●会計事務所（主に開設許可取得関連業務）

3．2 活動のポイント
●心構え： 点ではなくて連携による多面的なアプローチ志向
例：日本留学フェアー開催の継続

3．3 運営のポイント
●優秀インド人スタッフ及び信頼出来る運転手の確保（モチベーション、日本語）
●会計事務所（一般会計業務及びインド政府への各種報告関連業務）
●インドでの取引銀行（銀行により使い勝手がかなり違う）
●インターネット接続メンテナンスの確保
●安定電源供給の確保
●その他（駐在員の予防接種、ビザ取得、外国人登録）

A2-7

4. 成功例：インド人留学生の受入増加



8

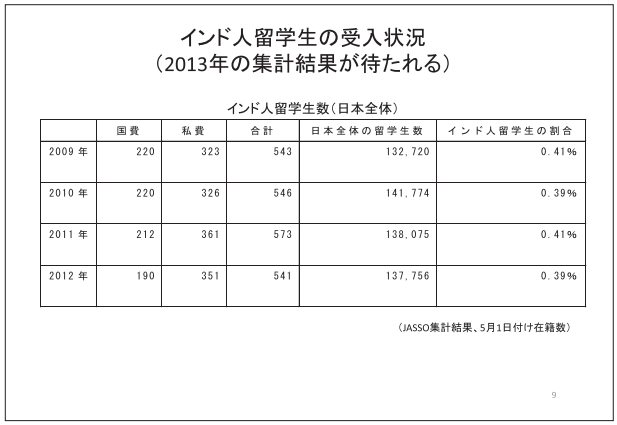
A2-8

成功要因は何であったか。第１は、日本留学フェアの開催です。なぜならば、我々の活動の中心は広報にありますので、何を中心に考えるかというと、日本留学フェアをいつ、どこで、どういった形でやるかでした。これが、この２年間の最大のテーマで、それを中心にプログラムを組んでやっておりました。**資料A2-10**にあるのは、東京大学主催のバンガロールにおける日本留学フェアでございます。初年度300人、２年目が600人、最初はホテル、次は提携した高校でやりました。経費は本年度は前年に比べ半分で、参加学生は倍増したということでございます。日本留学フェアは、この３年度、どういう形でやられたかといいますと、先ほど言ったようにG30の13大学の留学フェアをベースにしたものを中心に、その前後にインド事務所とパートナーである立命館大のインド事務所との連携でやり、かつ我々の大学の先生が来たときの学校訪問という形で進めております。これが基本でございます。

次に、先ほど申し上げましたインド赤門会の設立についてです。これは、まさに私どもの味方でございます。現在、100人余りの会員がおりまして、八木大使が名誉会長、インフォシス社ムルティ会長が名誉会員、そして会長には国父ガンジーのひ孫のクルカルニさん、このビッグ３を頭に置きまして、この方々を私は宣伝してやっております。

インド赤門会に一番お世話になったのは、インド体験学習です。私どもの学部学生にインドに来てもらい、諸先輩にいろいろ話を聞くというものですが、その受け入れ母体がまさにここでございます。あるいは、例えばインフォシス社は大学訪問は受けていません。このインド赤門会の名誉会員になっておりますので、私が他大学生の要望を受け、インフォシス社にお願いし、インフォシスの訪問を受けてもらったりという、そんなこともやっております。

そして、一にも二にも、ネットワークの構築と広報活動が重要なポイントとなります。どこに狙いを定めてやっているかですが、まずインドの有力高校の理事長、校長を日本に招待し、日本のよさを第一に、第二に日本の大学のよさをこの先生方に理解していただきました。その結果、一番役に立ちましたのは、地元の



インド人留学生の受入状況
（2013年の集計結果が待たれる）

インド人留学生数（日本全体）

	国費	私費	合計	日本全体の留学生数	インド人留学生の割合
2009年	220	323	543	132,720	0.41%
2010年	220	326	546	141,774	0.39%
2011年	212	361	573	138,075	0.41%
2012年	190	351	541	137,756	0.39%

（JASSO集計結果、5月1日付け在籍数）

9

A2-9

成功要因①　日本留学フェアの開催

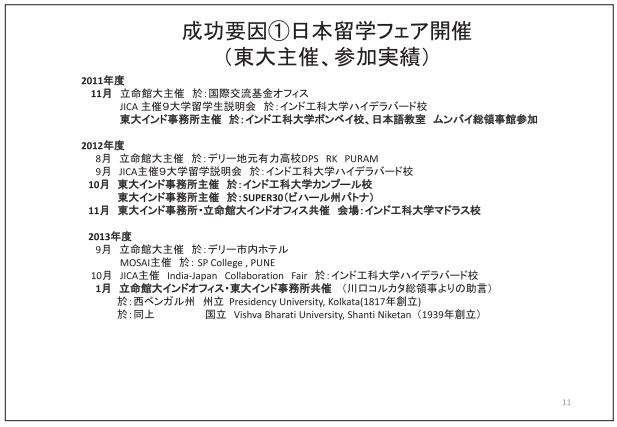
日本留学フェア（バンガロール）開催実績

2012年9月1日
会場：Vivanta by Taj MG Road（市内ホテル）
主賓：国立生物科学研究所長 Prof.K.VijayRaghavan, F.R.S.
G30採択大学から9大学が参加
約300名の高校生・大学生が来場
フェア前後にデリー2校、バンガロール7校を高校訪問

2013年9月7日
会場：Bishop Cotton Boys' School（地元有力高校）
主賓：ジャワハルラルネル一先端科学研究所名誉所長、科学担当首相補佐官
CNR　RAO教授
G30採択大学から9大学が参加
約600名の高校生・大学生が来場
フェア前後にデリー2校、ビハール州パトナ2校を高校訪問

10

A2-10



成功要因①日本留学フェア開催
（東大主催、参加実績）

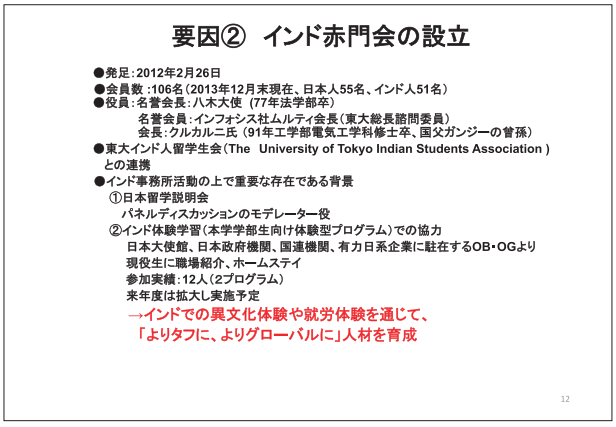
2011年度
11月　立命館大主催　於：国際交流基金オフィス
JICA 主催9大学留学生説明会　於：インド工科大学ハイデラバード校
東大インド事務所主催　於：インド工科大学ボンベイ校、日本語教室　ムンバイ総領事館参加

2012年度
8月　立命館大主催　於：デリー地元有力高校DPS　RK　PURAM
9月　JICA主催9大学留学説明会　於：インド工科大学ハイデラバード校
10月　東大インド事務所主催　於：インド工科大学カンプール校
東大インド事務所主催　於：SUPER30（ビハール州パトナ）
11月　東大インド事務所・立命館大インドオフィス共催　会場：インド工科大学マドラス校

2013年度
9月　立命館大主催　於：デリー市内ホテル
MOSAI主催　於：SP College , PUNE
10月　JICA主催　India-Japan　Collaboration　Fair　於：インド工科大学ハイデラバード校
1月　立命館大インドオフィス・東大インド事務所共催　（川口コルカタ総領事よりの助言）
於：西ベンガル州　州立　Presidency University, Kolkata(1817年創立)
於：同上　　国立　Vishva Bharati University, Shanti Niketan（1939年創立）

11

A2-11



要因②　インド赤門会の設立

●発足：2012年2月26日
●会員数：106名（2013年12月末現在、日本人55名、インド人51名）
●役員：名誉会長：八木大使（77年法学部卒）
名誉会員：インフォシス社ムルティ会長（東大総長諮問委員）
会長：クルカルニ氏（91年工学部電気工学科修士卒、国父ガンジーの曾孫）
●東大インド人留学生会（The　University of Tokyo Indian Students Association ）との連携
●インド事務所活動の上で重要な存在である背景
①日本留学説明会
パネルディスカッションのモデレーター役
②インド体験学習（本学学部生向け体験型プログラム）での協力
日本大使館、日本政府機関、国連機関、有力日系企業に駐在するOB・OGより
現役生に職場紹介、ホームステイ
参加実績：12人（2プログラム）
来年度は拡大し実施予定
→インドでの異文化体験や就労体験を通じて、
「よりタフに、よりグローバルに」人材を育成

12

A2-12

高校の校長先生が、じゃあ自分のところで留学フェアをやってあげるから、ぜひいらっしゃいという関係が広がったことです。

インドは26歳以下の人口は、12億人の半分の６億人です。半分以上は貧乏人です。したがって、有名私立高校ばかりとつき合っていると、メッセージが狂います。「優秀な学生は日本に来てください」と貧乏な学生にもメッセージを送らなければいけません。そこで選んだのが SUPER30ということで、ここの校長先生です。この方は教育イノベーターとして非常に有名な学校の先生です。インド最高学府 IIT に、毎年30人の生徒のうち、合格率は９割を超えている学校の先生でございます。

○司会（大西） すみません、そろそろお時間でございますので、大変心苦しいんですが、まとめていただけますか。

○吉野 では、まとめます。失敗は、欧米の名門校と競争してしまいまして、我々東大の合格発表時期が非常に後手にまわってしまっていることです。それと、入試のやり方が必ずしも留学生に優しくないということがございます。

今後の課題を**資料 A2-17**に列挙しましたけれど、今後一番重要なのは、日本留学フェア開催を継続しなければいけないということです。東大１大学ではできないので、皆さんの協力を仰ぎたいということでございます。

以上でございます。（拍手）

要因③ ネットワークの構築と広報活動

●有力校の理事長・校長合計6人の日本招待
国立 学校：Kendriya Vidyalaya 理事長（学校数1094校、学生112万人）
ランク上位私立校：
Vasant Valley (New Delhli) 校長
Bishop Cotton Boys' School校長（地元）
Mallya Aditi International School校長（地元）
National Public School校長（地元）
有名予備校：SUPER30, Ramanujan School of Mathematics校長 (ビハール州パトナ)

効果①
Bishop Cotton Boys' School ：2013年日本留学フェア（バンガロール）開催
→経費の半減、参加学生の倍増
効果②
SUPER30：貧しい学生のみ対象にして校長の自宅で30人を特訓。インド工科大学への合格率90%を誇る教育イノベーターとして世界的に有名校。
→インド全国ニュースとして取り上げ

13

A2-13

要因③ ネットワークの構築と広報活動

●有力大学との連携
協定先との連携
①全学協定先：インド工科大学5校
（カラグプール校、カンプール校、デリー校、マドラス校、ハイデラバード校）
東大-IIT奨学金 （大和証券、森精機）

②部局協定先：インド理科大学院（バンガロール）、国立海洋研究所（ゴア）

●地元有力国立研究所との連携
日本留学フェア主賓
①ジャワハルラルネルー先端科学研究所
(Jawaharlal Nehru Center for Advanced Scientific Research)
CNR RAO名誉所長（科学担当首相補佐官）
②国立生物科学センター（National Center for Biological Science)
VijayRaghavan 前所長（現科学技術省バイオテクノロジー局長官）

14

A2-14

要因③ ネットワークの構築と広報活動

●2国間政府プロジェクトへの参加
JICAが進めるインド工科大学ハイデラバード校支援プロジェクトに参加
①キャンパス建設の基本設計
②学術交流2分野（ナノテクサイエンスと都市工学）
③JICA奨学金を活用した人材育成プログラム（9大学の一つとして参加）

●産官学連携
①鉄道分野での人材育成を取り上げて推進中。
2013年10月 デリーメトロ公社より派遣留学生1名を工学系社会基盤学専攻修士に迎えた。
現在、鉄道省と派遣留学生について協議中。
②2013年6月 インドの鉄道研究者5人（インド工科大学カラグプール校鉄道研究所関係教授4人とインド国立経営大学院アーメダバード校教授1人）をJETRO、JICAと共に招聘。

●日本語教育関係者との連携
国際交流基金日本語教育専門家、国際協力機構青年海外協力隊日本語教師、日系企業

●広報活動
①メディアとの連携
インドの留学生雑誌 CAREERS360 に年2回投稿。 4月～5月大使館推薦国費留学情報、9月～11月G30関連情報。
②インド事務所のHP立ち上げ

15

A2-15

5. 失敗例

失敗から学んだ教訓

①欧米名門校との併願状況の中で本学入学試験の判定時期が後手に回っている。

②応募者の本学への留学意欲を十分に確認出来ていない。

③入試のやり方が留学応募者に親しくない。

16

A2-16

6. 今後の課題と展望

●課題
①留学生に向いた入試
渡日を必要としない英語コースが基本
②日本留学フェア開催の継続
③ネットワークの拡大と深化
④インドとの交流拡大によるメリットの啓蒙

●展望
①学事暦見直しによる交流の拡大
②政府主導による日印関係の深化で両国の交流が拡大し留学希望者の増加が期待出来る。

17

A2-17

インド人留学生の声

- Excellent Professors
- Interesting Culture
- Excellent Research Facility
- Excellent Railway Technology

18

A2-18

おわりに

●日印関係

昨年、天皇皇后両陛下、そして今年、安倍総理の歴史的なインドご訪問もあって、両国関係は深化している。 今年1月25日付け共同声明「日印戦略的グローバル・パートナーシップの強化」 ポイント39で大学間の協力を支援して日印間の留学生を倍増させることが謳われた。

http://www.mofa.go.jp/mofaj/kaidan/page3_000632.html

総理は科学セミナーでのスピーチの中で、自らインド人大学生、研究生、科学者に対して「是非、日本に来て下さい。」と呼びかけた。

http://www.mofa.go.jp/mofaj/kaidan/page3_000635.html

●インド高等教育事情

JASSOウェブマガジン留学交流2月号「アジアにおける国際展開」（2月10日公開予定）に、「東京大学インド事務所の取り組み」と題して投稿。ご参照。

http://www.jasso.go.jp/about/kouryu.html

A2-19

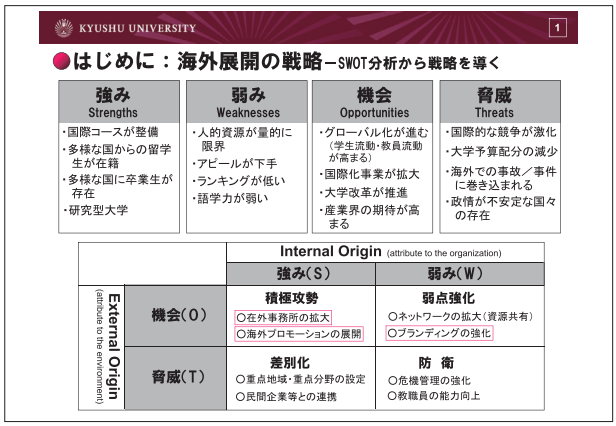
【九州大学】

九州大学　総長特別補佐
緒方　一夫

九州大学での緒方でございます。私は、「戦略・現実・未来」というタイトルでお話ししていきたいと思います。最初に、このセッションのテーマである海外展開について、大学の強み、弱み、機会、脅威、いわゆる SWOT 分析とそこから導かれる四つの戦略から考えてみたいと思います。四つのうちの一つは、強みと機会を生かして積極的に海外に出ていくことであります。この戦略は、在外事務所の拡大とか、海外プロモーションの積極的展開というやり方になると思います。二つ目は弱みを克服して機会を利用していくという戦略です。「弱点強化」の戦略といえますが、知名度の欠点を国際化の流れで新た補うブランディングはその一つではないかと思います。三つ目は強みを生かし脅威を避けていくという「差別化」。四つ目は弱みと脅威の両方に対する「防衛」で危機管理が含まれます。このように海外展開にはいろいろなやり方がありますが、今日、ご紹介するのは、「在外事務所の拡大」と、「海外プロモーションの展開」と、「ブランディング強化」です。

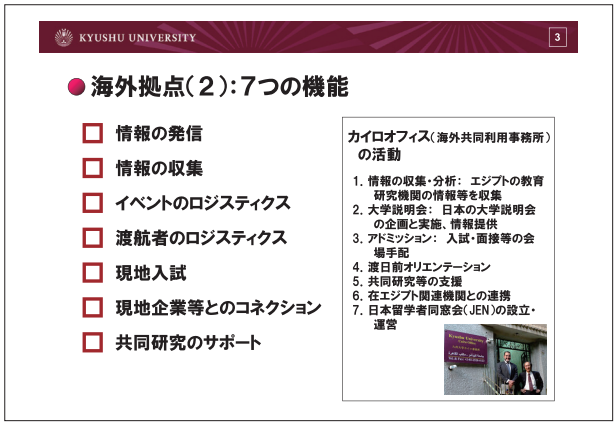
まず海外拠点について考えてみましょう。九州大学の場合は、海外拠点は全部で12カ所です。そのうち４カ所がG30の期間中に設置したものです。九大はカイロオフィスを海外共同利用で開設しています。事務所の形態は、借り上げ型の独自オフィスはカリフォルニアと北京、カイロ、ハノイですが、そのほか個人に委託するような、駐在員程度のさまざまなオフィスがあります。

カイロオフィスは現地の情報の収集・分析をはじめ、主に七つの活動をやってまいりました。特に一番重要なのは日本留学者同窓会（JEN）を設立して運営していることです。また、現地で留学フェアを開いたときには非常に活躍してくれました。一般に、共同利用事務所の場合、七つの機能が考えられますが、例えば先進国に設置するのか、留学生を呼び込むためにや



A3-2

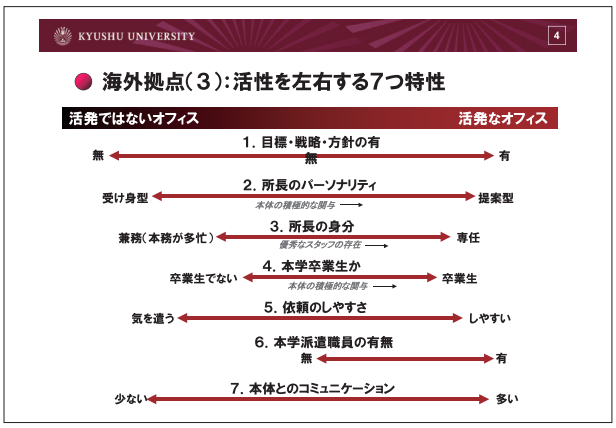
A3-3



A3-4

るのかで、それぞれの活動内容は違ってくると思います。

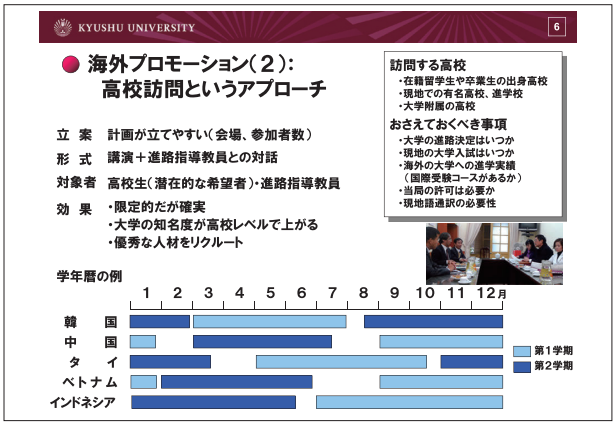
海外拠点の活性はどのような要素で左右されるのでしょうか。九大の海外事務所を担当していました国際部課長補佐の松川耕三氏が経験から編み出した活性を左右する七つの特性を紹介します。ちなみに私は「松川理論」と呼んでいます。まず、一つは目標・戦略・方針の明確さ。二つ目に所長のパーソナリティ。所長が積極的にやっているところはやはり活発なオフィスです。三つ目は、所長の身分ですが、兼務でやられているところは、どうしても活発でなくなってしまいますが、専任だと非常にいいです。四つ目は所長が本学の卒業生かどうか。五つ目は所長への依頼のしやすさというのがあります。（笑）気を使う所長と、気安い所長とおられます。六つ目は九大から派遣した派遣職員がいるかどうかです。七つ目は本体とのコミュニケーションが多いか少ないかということです。これらの要素で、活発なオフィスとそうでないオフィスが分けられるというのが松川理論です。本学の関与の仕方によって、活性化することはできるでしょう。皆様方で海外オフィスを設置をお考えになっている方のご参考になれば幸いです。



A3-5

A3-6

次に、海外プロモーションについての話題です。九大の実績としては、カイロでの活動にありましたように、エジプトセミナーや日本留学フェアを開催しております。それぞれの参加者数は、**資料 A3-6**に示すとおりです。エジプトセミナーとは、エジプト側から教育関係者を日本に招いてエジプトの教育事情や留学先である日本の大学をお互いに紹介するという企画でした。現地での留学フェアは、毎年実施する予定でしたが、「アラブの春」による現地情勢の悪化の関係で、現実は１回しか行えませんでした。しかし、その１回だけの開催にも関わらず、その時の来場者はこちらの予想をはるかに超えるものでした。実際、カイロで1,400名、アレキサンドリアで約500名と、全部で2,000名近くが来場し、関心は非常に高いことがわかりました。**資料 A3-6**の写真はそのときの様子です。北脇先生がどこかにおられると思います。（笑）



A3-7

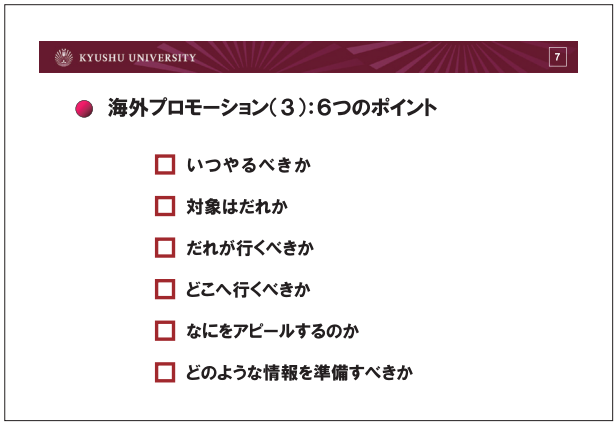
エジプトでの日本留学フェアは、主催する側でしたが、その他のフェアやセミナーにも参加させていただき毎年10カ国以上の地域に、50名の職員・教員を派遣しております。

さて、海外プロモーションの形態として、高校訪問というアプローチをお話したいと思います。今、吉野先生からもお話がありましたが、我々も特に高校訪問に力を入れて、学部国際コースを大いに宣伝してまいりました。高校訪問というアプローチは、ちょっとおもしろいやり方と思います。まずオープンに開催する留学フェアと違って、企画する立場からは会場の心配をしなくてよいとか参加者数を把握しやすいという利点があります。プロモーションの形式は、ブースを設置するのではなく、講演と進路指導の先生との対話と

なります。対象は高校生ですが、フェアへの来訪者はすでに日本留学に対してある程度の興味がある方が多いのですけれども、こちらから高校に行く場合、必ずしもまだ進路が決まっていない潜在的な希望者が相手と考えた方がよいでしょう。それから進路指導の先生が重要な対象者であることを忘れてはいけません。進路を決めるアドバイザーとして、高校生本人よりもっと重要かもしれません。プロモーションの効果は、訪問した高校限りという意味では限定的ですけれども、進路指導の先生との対話は多くの進学者に影響を与える立場にあるという意味で、確実であります。また、海外の高校を直接訪問することにより、知名度が高校のレベルで上がります。しかも、訪問する高校が著名な進学校であるならば、優秀な人材をより直接に、アクティブにリクルートすることができます。

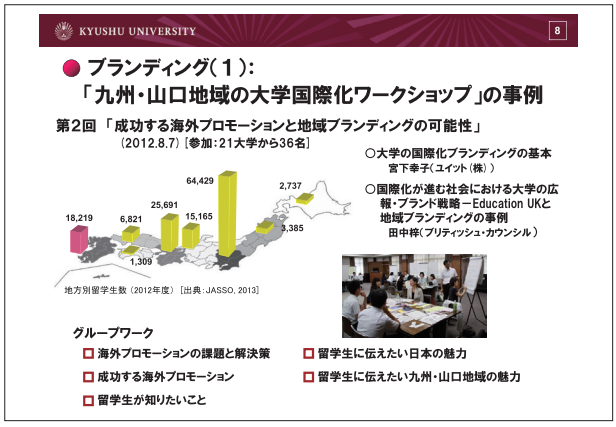
では、どういう高校を訪問するのか。例えば、今まで皆さんの大学の留学生としていた方々の母校、現地での有名校、進学校、大学の附属の高校などが考えられるでしょう。それぞれの高校に特色があり、目的に合わせて訪問することができると思います。九州大学の場合、農学部と工学部の二つが学部国際コースを持っています。実は、最初はどちらのコースも同じ高校にプロモーションに行っていたんですけれども、これはだめでした。農学部に行きたい人が多くいる、工学部に行きたい人が多くいる、という状況が高校によってどうも違うということが分かってきました。また、いつ訪問するかも、重要です。例えば学年歴や全国統一試験がいつあるかといった情報を把握しておくと、進路決定がいつなされるかということが予想がつくでしょうし、プロモーションの効果に関係します。

ということで、海外プロモーションの六つのポイントを挙げますまず、いつやるかです。必ずしも「今でしょう」とは言えません。（笑）二つ目として対象は誰か。高校生ばかりでなく進路指導の先生を頭に入れておかないといけません。三つ目は誰が行くべきか。必ずしも大学の先生が行く必要はないと思います。自分の大学をよく把握した人が行くべきでしょうか。四つ目はどこに行くのか。国・地域、留学フェア、高校といった選択肢があります。五つ目は何をアピールするのかです。高校生にとってその大学には何人の先生がいるかという話よりも、そこで何が学べるのかを知りたいと思います。国、地域、高校によって人気のある学問分野は異なるという前提で何をアピールするのかというところをよく考えていくべきでしょう。最後にどのようなものを準備するか。ブローシャーであったり、ロゴが入ったちょっとしたものであったということです。



A3-8

３番目の話題は、ブランディングについてです。今日、皆さんのお手元にあるプログラムは、ブランディング・カンパニーのユイット（Yuit）さんに頼みました。ユイットさんは会場にお見えでしょうか。大学のプロモーションはいろいろと我々自身でも考えたんですが、やはりプロの意見、餅は餅屋に聞くべきだという結論に達しました。G30の一環として実施した「九州・山口地区の大学国際化ワークショップ」では、「成功する海外プロモーションと地域ブランディング」というタイトルで勉強会を開いたことがあります。そのときに、ユイットさんからは大学の国際化ブランディングの基本というお話をいただきました。またブリティッシュ・カウンシルさんからは、「Education UK」という留学キャンペーンで英国の大学ブランディングをいかにやったかというお話を聞きました。その後

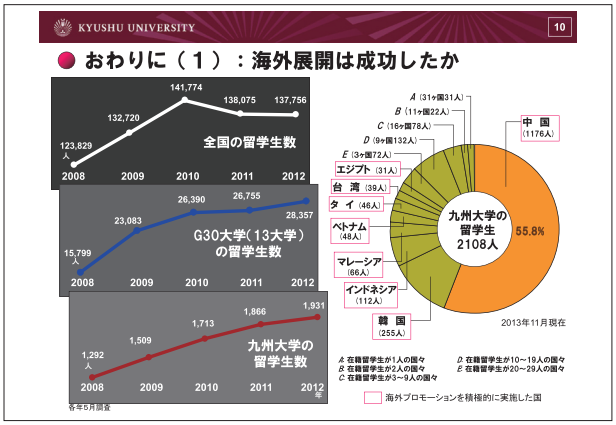


A3-9

で、じゃあ九州・山口地区でブランディングをやろうじゃないかということで、ワークショップを開き、**資料A3-9**に挙げている五つの課題でグループワークをやってみたんです。その結果が、西南日本としてアピールした「Southwest Japan」という形で出したブックレットです。この冊子はポスターセッションのところに置いてありますしホームページで出しておりますのでご覧下さい。そこでアピールしたのは、うちの大学はこうですよということではなく、九州地方は人情味がある、食べ物がおいしいとか。（笑）まず地域ブランディングから入っていこうというスタイルです。

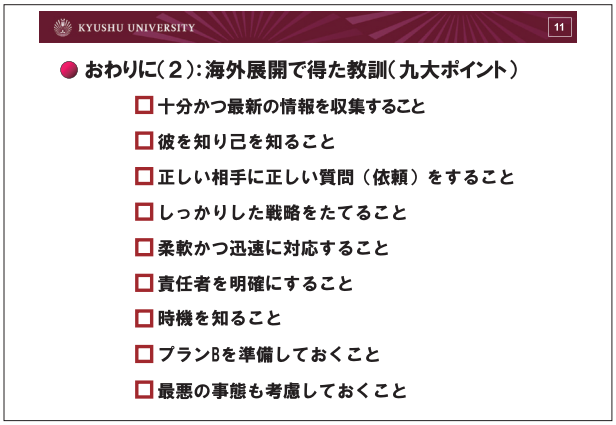
A3-10

さて、結局、海外展開は成功したのかということですが、留学生数で見てみましょう。**資料A3-11**の右上に示すグラフは全国の留学生数ですけれども、2010年をピークにして、東日本大震災以降は減って横ばいになっています。ところが、G30の13大学ではPPT 11の右中のグラフのように減っていません。13大学では様々な形の海外展開を皆さんで非常に積極的にやってこられたわけで、その成果ではないでしょうか。九州大学の例でも留学生数は着実に伸びています。特に海外プロモーションを積極的に実施した国からの留学生は全体の3/４以上を占めています。ただ、これらの海外展開に幾らかかって、どういう学生が来たのかは、もう少し検証が必要かと思います。この5年間でかなりデータが得られていると思いますので、今後、そこを参考にすればいいと思います。



A3-11

最後に、海外展開で得た教訓を９つ抜き出してみました。もう時間がなくて全ては説明できませんけれども、「十分かつ最新の情報」、「彼を知りおのれを知る」、「正しい相手に正しい質問をする」「しっかりした戦略を立てる」「柔軟かつ迅速」、「時期を知ること」、などは基本といえるでしょう。エジプトでは「アラブの春」の影響で予測がたてづらく企画の段階でものすごく苦労しました。また東日本大震災に対する英語による対処などの経験から、危機に対する備えも学びました。これらより「責任者を明確にすること」、「プランBを準備すること」、「最悪の事態も考慮しておく」などが教訓です。ということで九大ポイントとなります。（笑）



A3-12

ここでお話を終わらせていただきたいと思います。

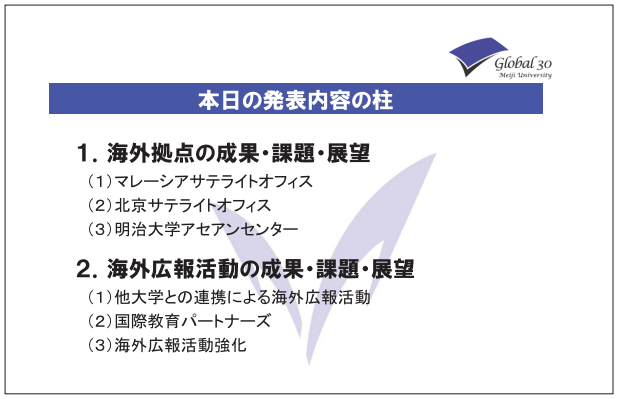
どうもありがとうございました。（拍手）

【明治大学】

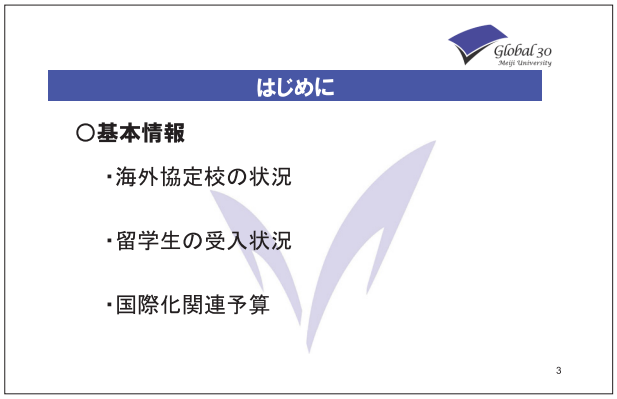
明治大学　国際連携部国際教育事務室
安藤　章二

明治大学の安藤でございます。よろしくお願いします。

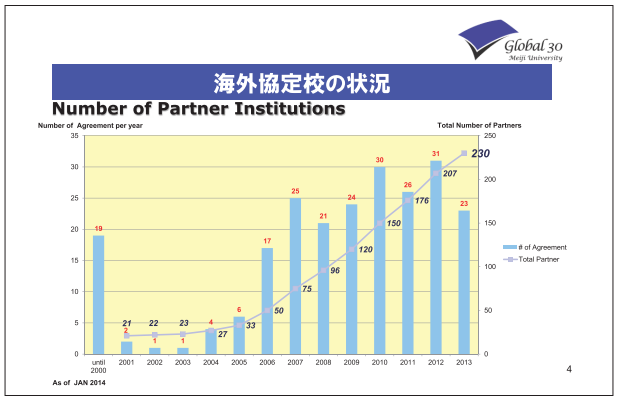
私のほうからは、先ほども紹介させていただきましたように、海外拠点の成果・課題・展望と、海外広報活動の成果・課題・展望としまして六つの事例を紹介させていただきます。



A4-2

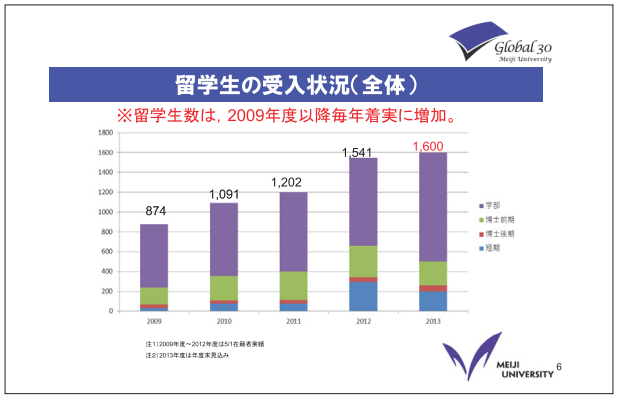


A4-3

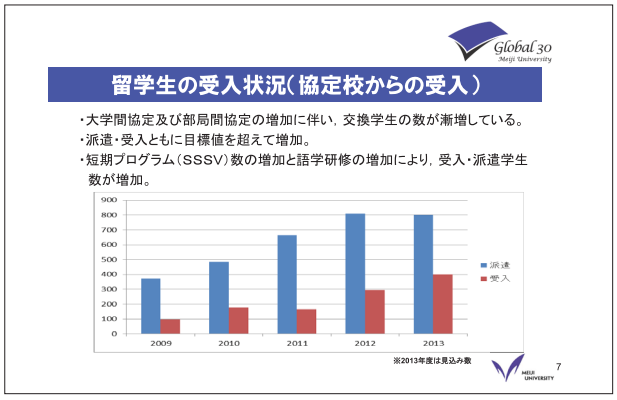


A4-4

A4-5



A4-6

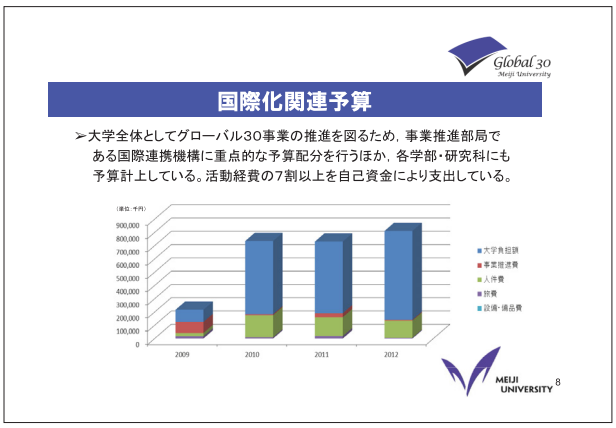


A4-7

まず初めに基本情報としまして、海外協定校がこのG30でどれぐらい増えたかと留学生の受け入れ状況、あと予算の状況が資料でありますので、それは見ておいていただくということで、早速、海外拠点の紹介に入らせていただきます。

まず初めに、私どもには三つの拠点があります。マレーシアと北京とタイのアセアンセンターです。

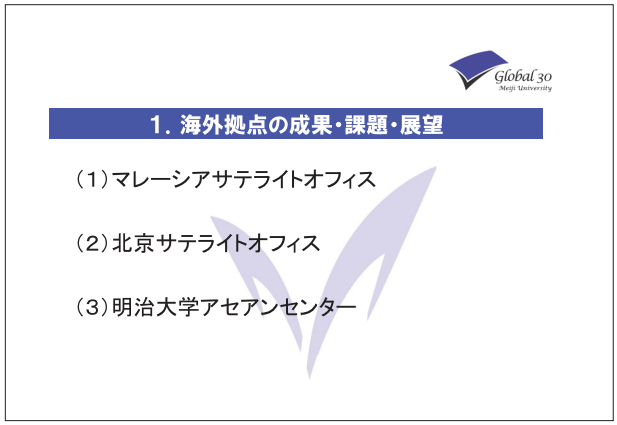
マレーシアにつきましては、マレーシア工科大学との協定で、お互いに設置しようということになりました。私どもの東京の駿河台キャンパスにマレーシア工科大学の事務所があって、向こうには私どもの事務所があるということです。初めは研究連携でしたので、今、国際部門ではなく、研究部門が管理しております。そこに派生して出てきたのが、G30関連でいいますと、経営学研究科とマレーシア工科大学とのダブルマスター・プログラムというのを英語でやっているということでございます。



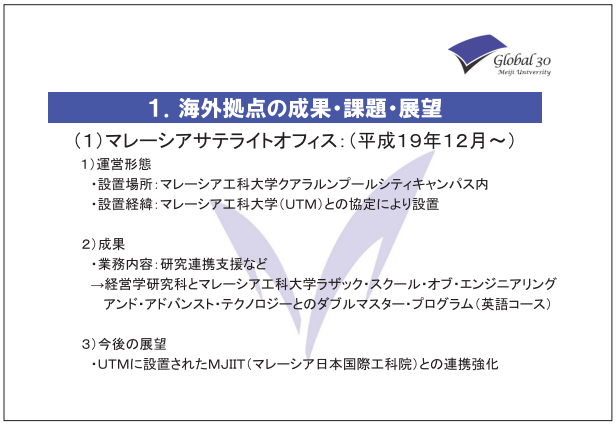
A4-8

今後は、MJIIT がマレーシア工科大学の中にできましたので、MJIIT との連携を強化していきたいと考えています。これが最初につくったマレーシアのサテライト・オフィスでございます。

続きまして北京サテライトオフィスです。これは、今の JTB の海外共同利用事務所を利用させていただております。JTB とは、後ほどちょっと紹介させていただくんですけれども、国際教育パートナーズを組ませていただいています。その関連で、その事務所を使用するのと同時に、運営も JTB に委託しています。業務内容としましては、中国国内での広報活動、中・高等教育機関との連携強化です。入試の関連でいいますと、中国では EJU が受けられませんのでなかなか直接獲得することが難しく、広報展開で終わってしまっている

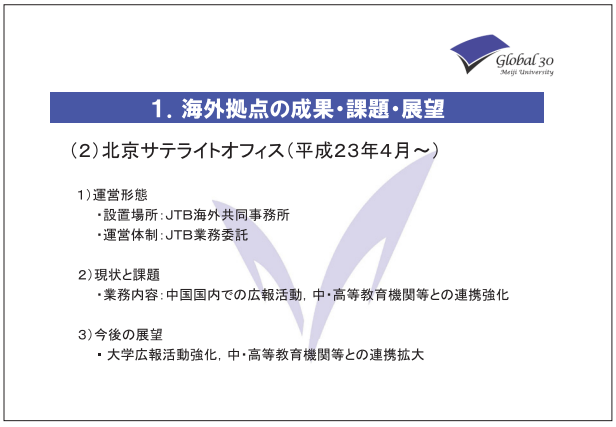


A4-9



A4-10

A4-11



A4-12

という状況ではないかと思います。今後はこれを拡大していきたいと考えております。

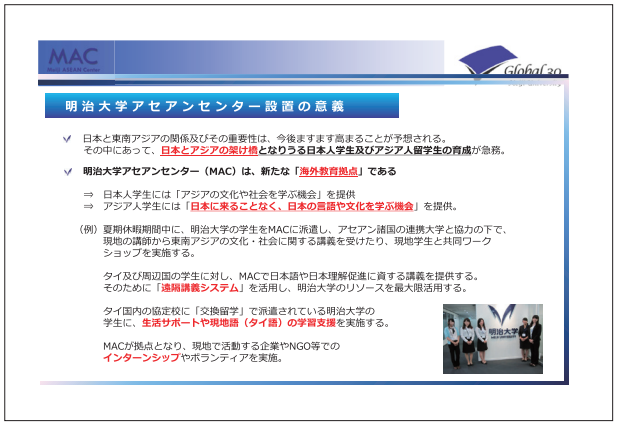
実は中国は、このほかに大連と上海に、先ほどの九大のお話にもありましたように、個人委託みたいな感じでリエゾンオフィスを持っていたんですけれども、先ほどの「松川理論」でいきますと、ちょっと弱いほうのオフィスだったのかと。（笑）中身がなかなかついてこないので厳しくて、今その機能は、北京に集約しているという状況でございます。

やはり中身がないと厳しいということもありまして、三つ目につくったのがタイのバンコクにありますアセアンセンターです。ここは、**資料 A4-15**の上から二つ目に書いてありますけれども、本学では初めての海外教育拠点であるということで、アジアと日本のかけ橋になる人材、グローバル人材育成をしていく拠点にしていこうということで立ち上げました。要するに中身がないと・・・ということで、特に私立大学の場合、今いる学生にどれだけ役に立つかというものがないと、海外拠点を持ち続けるのは難しいと思いますので、アセアンセンターはちょっとそういうことも意識してつくりました。

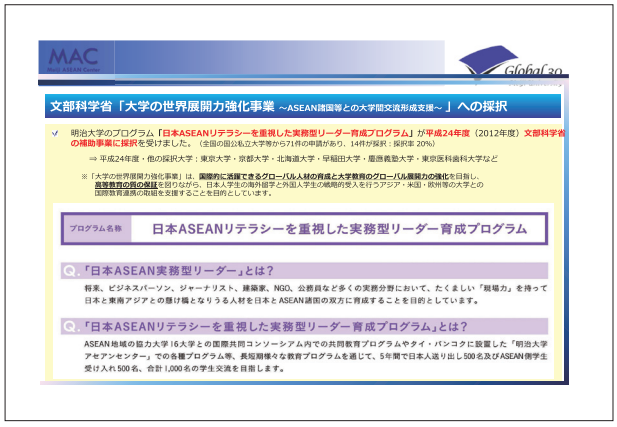
当初、2011年ぐらいに準備を始めたんですけれども、洪水がありまして資材が来なくて、内装の工事ができずに立ち往生していました。それがうまくいくようになったのと、それと同時並行して、大学の世界展開力強化事業の ASEAN の事業が取れましたので、中身が入ったということで一気に加速し、今動き始めたところでございます。ここでは、ASEAN 地域の16大学だったのが、今年１つ増えて17大学となりましたが、それらの大学とコンソーシアムを組んで、連携の

A4-13

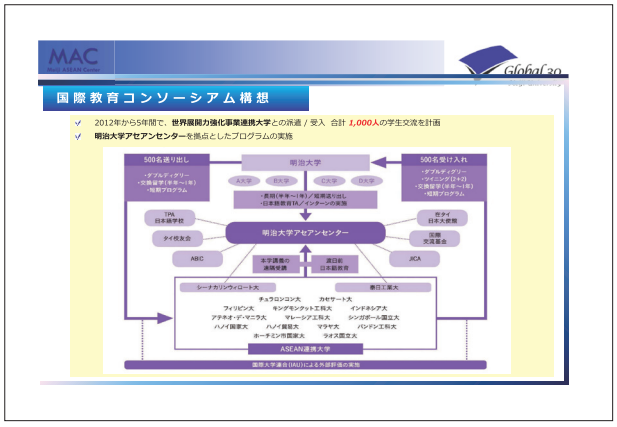
A4-14



A4-15



A4-16



A4-17

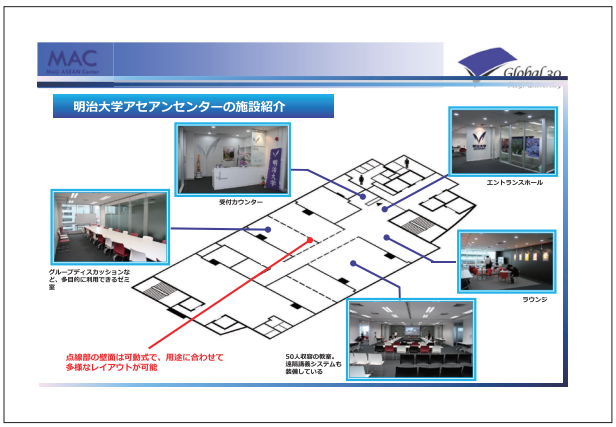
プログラムを進めていこうということで動いております。中身が入ったこともあって、だんだん取り組みがいろいろと行われてきたというのが、この例でございます。

今の課題としましては、これを当初、設立するときもそうだったんですが、キャンパスという位置づけにしていいのか、称していいのかという制度整備の問題があります。文科省では今、これができるようにという方向で検討いただいていると思うんですけれども、これがどうなっていくかによって今後の展開が変わってくるということでございます。ただ、今後の展開としましては、今の17大学との連携を強化しながら、将来的には学位プログラムをここでできないかということで、今、「アセアンセンター」と言っていますけれども、将来的には「アセアンキャンパス」に持っていけないかということです。実は当初、新聞記事でアセアンキャンパスと出てしまって、それを見ていろいろなところから反応があって、そうは言えないんじゃないかとか、いろいろなことがありまして、センターとなってるという状況でございます。

これが三つの海外拠点の成果・課題・展望でございます。

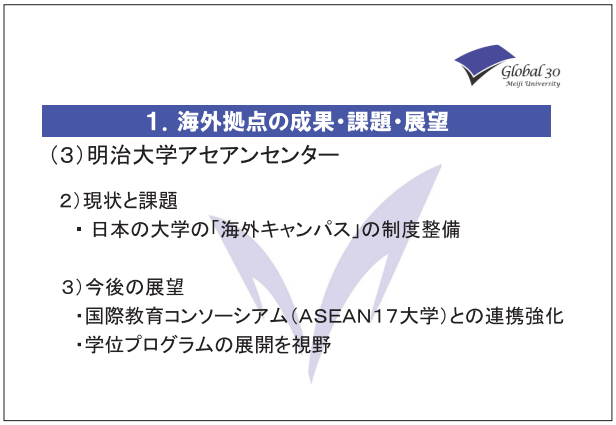
続きまして、海外広報活動の成果・課題・展望のほうに入らせていただきます。

最初の他大学との連携による海外広報活動といいますのは、先ほどから何度もご紹介がありました海外共同利用事務所でいろいろ行われています日本留学フェアです。私ども海外大学共同利用事務所を持っておりませんので、どちらかというとずっと乗っかるばかりだったんですけれども、ようやく今年、パリのほうで、私ども主催で日本留学フェアをさせていただきまし

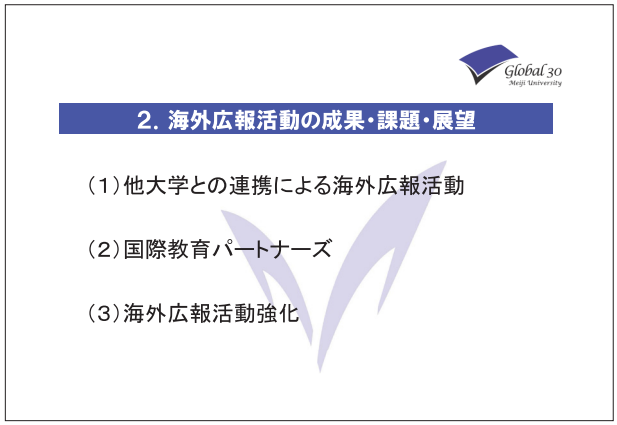


A4-18

A4-19



A4-20



A4-21

A4-22

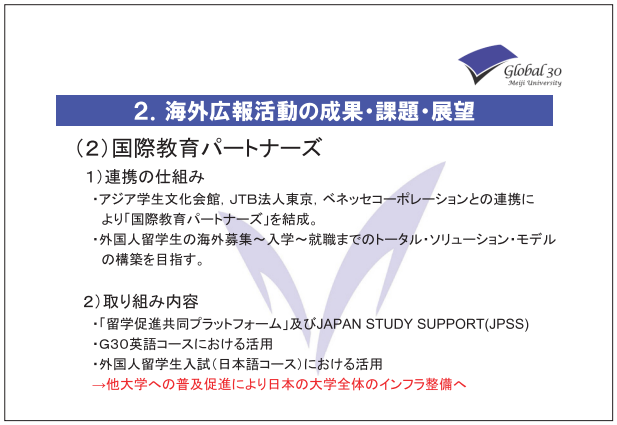
A4-23

A4-24

た。資料の写真はその様子でございます。このフェアについては、おかげさまで700人ぐらいの参加者がありました。しかも、午後だけですので実質的には半日でしたが、セミナーも会場がいっぱいで、おかげさまで大盛況だったということです。次の日に、アカデミック・ミーティングスという日本の大学とフランスの大学のマッチングの機会も設けさせていただきました。

これの開催経緯といたしましては、もともと日仏共同博士課程の日本側のコンソーシアムの議長校をやらせていただいていたことと、フランス政府留学局（キャンパス・フランス）と強い連携ができまして、何か新しいことをやりたいねとなり、日本留学フェアがいいんじゃないかということになったということです。ただ、G30の大学だけではなく、日仏共同博士課程のコンソーシアム大学にも声をかけ、資料参加を含む17大学に参加をいただいたということになっています。

A4-25



A4-26

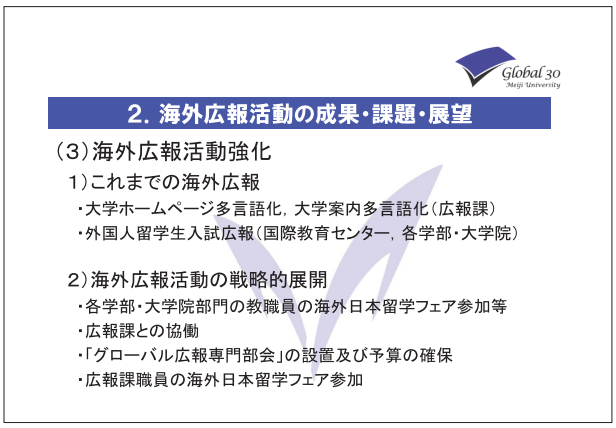
パリで初めての本格的な日本留学フェアと**資料A4-25**に書いているんですけれども、例えばNAFSA、AIEAなど今までいろいろな連携の会合に皆さん出ておられるんで、結構ネットワークはもうできているのかなと思っていたのですが、フェアをやるのと同時に、17大学も日本の有力大学がパリに来るんだったら、ぜひフランスの大学とのマッチングをやりたいとキャンパス・フランス側から強く要請されまして、それはとても意外でした。それが先ほどのアカデミック・ミーティングスなんです。私どもはレセプションでいいんじゃないとか最初は思っていたんですけれども、そのような強い要請があったので、それをさせていただくようになって、38大学に参加していただいて日本の大学とのマッチングができました。

今後の課題と展望です。やはりパリには本学の拠点がありませんので、今年はかなり事務局的にも大変な思いをしたんですが、今年経験をしましたので、来年以降もしやる場合は、かなり運営もうまくいけるんじゃないかと感じております。どうしても予算がかかりますので、その辺は来年以後どうするかということもありますが、本学としましては、日本の大学とフランスの大学との連携強化による日本の大学への留学生の拡大に貢献していきたいと考えているのが今の状況です。

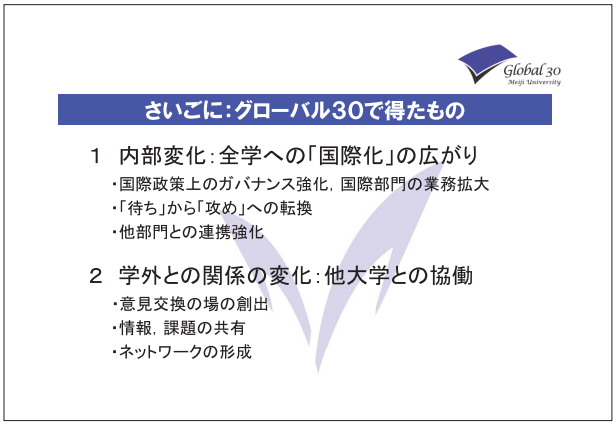
もう一つは、G30の最初の申請のときに中心になった仕組みで、国際教育パートナーズといいます。先ほども申し上げました JTB と、あと ABK、ベネッセとの連携による、外国人留学生の海外募集から入学から就職までのトータル・ソリューション・モデルをつくろうというものでございます。

ここでは、留学促進共同プラットフォーム、これは英語出願システムなんですけれども、これとポータルサイトである JAPAN STUDY SUPPORT、こちらのほうも他大学でも使われ始めましたので、そういう意味では日本の大学全体のインフラ整備に貢献できているのではないかと思います。私どものほうでは G30の英語コースに使っております。やはりそうはいっても英語コースの学生は少ないので、私どもの大学としては、やはり外国人留学生入試、日本語の入試のほうですね、こちらも実はこのパートナーズの仕組みを使って、ABK に協力いただいて、韓国ですね、こうしたところを回ったりという活動をしております。

それと、簡単にですが学内のことに触れたいと思います。どこも最初はそうだと思うんですけれども、広報部門、教学部門、国際部門で、どこがどう役割を担うかということになりました。それぞれ役割分担がありますが、最初はつながりが弱かったんですけれども、G30になって必然的につながらないといけなくなってきました。海外日本留学フェア、JASSO とか G30関連もそうなんですけれども、私ども国際部門だけではなく、各学部、大学院の事務局であったり、先生にも行ってもらうようにし始めました。あと、広報課の職員にも行っていただいて、効果的な広報というか、海外広報はどういったものかを考えてもらうことも始めました。



A4-27



A4-28

また、**資料 A4-27**にある「グローバル広報専門部会」というのは、法人部門にある広報委員会の中に、グローバル広報を考える場所を設けていただいて、私ども役職者が入って予算を確保して新しく展開していこうというもので、今始まったところでございます。

それで済みません、**資料 A4-28**の「さいごに」のところは、後でディスカッションの中で議論になる話かなと思いますので、そこで紹介させていただこうと思います。

以上です。（拍手）

【パネルディスカッション】

〇大西　それでは、第２部のパネルディスカッションを始めたいと思います。このパネルディスカッションは、先ほどのプレゼンテーションのところで言い忘れたこと、それから他の大学のプレゼンテーションを聞いて、ほかのパネリストの方々がどう思われたかを中心にお話しいただこうと思います。

具体的に次の５つの項目で話を進めたいと思います。１番目は、海外事務所のマネジメントですね。マネジメントという観点から海外事務所のあり方みたいなものを語っていただこうと思います。２番目は、海外の教育機関へのアウトリーチです。これは特にG30の場合は高校というところが新しく入ってきたんですけれども、これについてお話しいただこうと思います。３番目は、海外留学フェアです。いわゆる留学フェアの課題を取り上げたいと思います。４番目は、人材育成です。広報というのは、非営利の機関の場合は人も集まらないしお金も集まらないんですけれども、お金が集まらないのはしようがないとして、人材育成のところはどうするのかという課題があると思いますので、４番目の課題として設定いたしました。最後に５番目、入試ですね。入試は、セッションＢでしたか、ほかのセッションが取り上げているんですけれども、やはり入試と広報というのは一体不可分で触れないわけにいきませんので、事務局のご了解をいただき、このセッションＡでも取り上げさせていただく予定でおります。

それから最後に、その５つの課題を全部クリアした後に、「国際化で大学が変わったか」ということを最後にお聞きします。この議題はシンポジウムの全体のテーマでもございますから、最後にお聞きしてこのセッションを終わりたいと思います。

皆さんの敬称は「さん」で統一させていただきたいんですけれども、よろしいでしょうか。

では、最初のトピックとして、海外事務所のマネジメントを取り上げたいと思います。マネジメントに関しては、現役の所長である北脇さん、吉野さん、何か言いたいことがあるのではないかと思うんですけれども、いかがでしょうか。ご苦労されたこと、それから課題みたいなものをお話しいただければと思います。

〇北脇　先ほどの私の説明は、チュニジアにある事務所がやってきたことを中心にお話しさせていただきました。海外事務所のマネジメントとしましては、PPT-３に挙げましたように、私どもでは国際地域戦略というものを立てまして、それぞれの地域によって取り組み方の戦略を立てて進めてきております。

その中で、チュニジアの事務所については、本学のレバレッジを活用する地域という位置づけで、PPT-４にありますように所長、副所長、現地駐在のコーディネータとアドバイザー、国内の事務を担当する職員という構成で、全体を５人で運営してきています。心がけたのは、できるだけ現地の大学あるいは高校に足を運んで、日ごろからコミュニケーションをとっていくということです。現地で経験豊富な方をこのG30が始まったときにG30経費で雇用しました。もう一つは、事務所をカルタゴ大学の傘下にある研究所の一角を無償で借りて、非常に協力的に使わせてもらいました。特に、そこの元学長にアドバイザーになっていただきまして、その方は有識者で、またチュニジアの国内だけではなくて、マグレブの中でもいろいろなことで発言権のある方ですので、そういう方を得たことが、非常に運営がうまくいったことではないかと思っています。

先ほど、それぞれの現地の中に入って活動するということを申し上げましたが、留学フェアをやるときも相手校の講堂を無償で提供してもらうのはもちろんですけれども、相手校からの人的サポート、あるいは看板づくりなど、いろいろなことを向こうの大学にやってもらうことができました。共同作業をやる中で、それぞれの気心も知れてきますし、マネジメントとしてかなりいろいろな仕事ができた一因ではないかと思っております。

以上です。

○吉野　インドについて申し上げます。インドの事務所のマネジメントでポイントは二つあります。一つはインフラが整っておりませんので、いろいろなことが起きますから、そういうことを日々克服しながら、きちんとコミュニケーションを保ち、ネットワークを広げておくことです。停電は当たり前、水も出たり出なかったりです。疫病もあります。そういう日本では当たり前でないことがインドでは当たり前なので、それをいかに日々克服していくか。そのためにはある程度経験がないとできませんし、インドが嫌いな人は、来るのはやめたほうがいいです。（笑）

ちなみに私は、インドでもう16年やっています。アカデミア以外のネットワークは、基本的に首相以下、政財界は持っております。その上で、母校が進出するということで、私も手を挙げて、入学試験２回目を受けて、それで頼むと言われてやっております。モチベーションは何か。要するに「母校に恥をかかせたくない。」という、その１点です。恥をかいたらもう二度と会ってくれません。そのために、ある程度の準備期間をとり、ある程度の覚悟を持って、きちんとやっていかなければいけないと思います。インド人は非常にプライドが高いので、そういう人たちにきちっとしたプロとしての対応をしていかなきゃいけないというところがインドの難しさでございます。

それと、点で攻めてはいけないので、線で攻めます。日本政府がここまできてやっているわけですから、その波に乗ってやっていくということが一番重要かと思います。以上です。

○大西　ありがとうございました。

一つ質問させていただきたいんですけれども、先ほど、海外共同事務所の説明のときに、「共同」が一つのキーワードかなと申し上げたと思うんですが、皆さんのプレゼンテーションで、東大の吉野さんのところは東大のためにいろいろな活動をされていて、北脇さんのところも筑波大学のために活動されているということはよくわかったんですけれども、「共同」のところで何か成功事例や失敗事例があればお話しいただけますでしょうか。

○吉野　「共同」という意味では非常に簡単でございます。私どもの学部のプログラムは、PEAK という教養学部のプログラムしかございません。インドの留学希望の大半は、理工系で、特に工学部でございます。したがって、学校訪問やその他での質問は、８割方、工学部と理学部の説明でして、私のところに日々メールその他で来ます。高校生からの問い合わせに対しては、私どもは、13大学の英語プログラムを徹底的に紹介しておりまして、この分では他大学に非常に協力申し上げていると自負をしております。大学院になりますと、それぞれの強み、弱みがありますので、その辺のところは皆さんにと言わずに、第一には「うちの大学に来てください」とは言いますけれども。（笑）学部は全然そういうことではありません。高校への訪問につきましては、できるだけ各大学の強みと一緒になっていかないと、逆に今度は相手にされないということを日々感じておる次第でございます。

○北脇　留学説明会のようなイベントは筑波大独自でやっているわけではなく、筑波大が事務局というか、事務処理等はやりますけれども、全国の大学に呼びかけて、できるだけ多くの大学に参加していただいています。第１回の日本・北アフリカ学長会議は、日本からも、17大学だったと思いますけれども、学長クラスの方に参加いただきましたし、それぞれの留学説明会でも、10大学内外の参加をいただいています。そういうイベントに参加していただくだけではなく、チュニジアにある事務所で入学試験のインタビューですとか、学生を呼んで試験をやる大学については、いつもオープンに使っていただいています。

それから、教育面だけではなく、北アフリカ地域ではいろいろなフィールド調査、研究面で訪れる方も結構いるんですけれども、全国の大学からチュニジアを訪問される方には、先ほど申し上げたチュニジアの事務所の経験のあるスタッフがいろいろなお手伝いをさせていただいているという状況です。

ですから、筑波大だけのためにやっているわけではなくて、全国共同利用という側面でもいろいろ支援させていただいていると思っています。以上です。

○大西　ありがとうございました。

それでは少し時間があるので、フロアからの質問を受け付けたいと思います。海外共同事務所、海外事務

所のマネジメントというテーマに絞ってご質問いただければと思います。どなたかご発言いただけますでしょうか。

○フロア１　私もインドで博士号をやって、その後、国際交流等のことをやっておりましたので、大変おもしろいんですけれども、今見ていると、複数の大学が１つの国にいろいろな事務所を持っている状況であります。そこが共同というか、お互いに何をし合っているのか、協力し合っているのかというお話を事例とともにお聞かせ願えればと思います。

○大西　どなたでも結構です。

○吉野　インドでは、立命館大がニューデリー、私どもがバンガロールでございます。ついこの間、コルカタの総領事から地元の有名大学で留学フェアをやっていただきたいがどうかというお話がありました。立命館大と相談して、「立命館でいろいろ細かいことをやってください。私どもも参加いたします」ということで、立命館大が細かいことを全部仕立てて、私どもが一緒に行って日本留学フェアを大学でやりました。

インドは非常に、北と南、国が広いので、私どもとしては、どこかやるにも一緒に何とかできないかと思っています。何せスタッフが、向こうも２人でこちらも２人でございまして、何かやるにも、１大学ではそう簡単にはできません。全校生徒が集まったら間違いなく１大学行けば300人ぐらい来るわけですから、１大学で、その方々に資料を持っていろいろな東大以外のことを説明するなんて基本的には難しいことです。したがって、ここはオールジャパンということで、それぞれ持ち場を決めて、どちらかが中心になって、それにジョイントしてできるだけのことをやって、日本の宣伝をしましょうということです。

なぜならば、留学は最初国で選ぶからです。僕の今までの感じでは、大学じゃございません。だから、まず日本に目を向けていただかなければいけない。立命館大は京都のよさをおっしゃるわけです。私どもは東京のよさを言います。向こうは私立大学のよさを言って、こちらは国立大学のよさを言うんです。それぞれ持ち場がありますので。例えば立命館大の一番有名な方は、日清のカップヌードルをやられた初代の社長です。イノベーション。文系のイノベーションは日清のカップヌードル、立命館が今インドで説明されております。私どもはどちらかといえば理科系の偉い先生の名前を出して宣伝しております。例えばそういうことでございます。

○緒方　マネジメントのことと関連するんですけれども、一つの大学の海外オフィスだったらトップダウンであろうが自立型であろうがいいと思うんですよ。だけど、共同利用のためには、トップダウンではやはりまずいです。その事務所の裁量権をもって、自立的にやっていただけるようなところがいいと思うんです。他大学が利用しようとしたときに、九州大学じゃなくてカイロ事務所のほうに直に言ってきますから。そのためには所長に、そういうものですと認識していただいておかないといけないというところはあります。

エジプトではなくて、ベトナムの例ですけれども、ベトナムの場合は京都大学が共同利用事務所を置いています。だけど我々も持っています。ただ、我々が日本の動きみたいなものを知ろうとすると、京都大学の事務所に電話を入れて、これこれこういう日程でフェアを組んでいます、どうのこうのというのを得ています。そういう意味では利用させていただいています。

それから、北脇先生も言われましたけれども、留学フェアを現地で開催するときのロジとしては、これは非常に強力に利用できます。今、吉野先生が言われたみたいに、物をそこに送ったり、会場を手配したり、非常に強力なロジの役目があるのではと思います。

以上です。

○大西　ありがとうございました。それでは、次のトピックに移りたいと思います。

海外の教育機関へのアウトリーチという点です。最初に、高校訪問について触れられたのは、九州大学の緒方さんのプレゼンテーションだったと思いますが、緒方さんは実際に行かれたわけですね。

○緒方　行きました、特に初期のころは。ベトナム、インドネシア、タイに行きましたけれども、高校の場合は、国によって事情がかなり違っていることがわかりました。例えば、ベトナムだったら、教育省の許可が要ります。勝手に行けないです。高等学校のほうも、直接生徒に話してくださいと言われるところもあれ

ば、それはちょっと待ってくれというところもあります。まずこちらと話をしたいということで、大学よりももっと統制が厳しいという状況があります。

○大西　高校訪問で苦労されたという方、どなたかいらっしゃいますでしょうか。安藤さん、いかがでしょうか。

○安藤　これは、今日の発表とはちょっと違うんですが、別の動きで留学生確保ということで、私も高校訪問をさせていただいたんですけれども、やはり１大学で行くと厳しいのは、全部に対応できる分野が全然ないということです。私も英語のコースの宣伝に行きました。それはアセアンセンターができる前だったんですが、高校のレベルも調べて、上から５番目ぐらいの英語能力の高い高校に行くんですけれども、結局、私どもの大学には１学部しか英語のコースがないので、その説明をして帰ってくるだけになってしまいました。そうなると相手のニーズにもなかなか応えられないし、何しに来たんだみたいに思われるので、やはり先ほどおっしゃられたように、一緒に行くというのは、ほんとうに手だなと思います。そちらのほうを今後どうやっていくかです。G30は予算的には終わるわけなので、例えば私どもがインドを利用したいというか、こちらからのアプローチを今後どうやって組み立てていくかというのが、ちょっと課題かなと思います。

○大西　明治大学は重点高校を決めておられると小耳に挟んだんですけれども、指定校とか。

○安藤　私どもは学部によって全然、入試が違っています。学部それぞれに定められて、韓国と中国は指定校を指定して、そこから送っていただいているというケースはあります。それは二つぐらいの学部ですかね。それはどちらかというと、英語コースというよりも日本語のコースのほうになります。多分、他大学さんも結構やられているんじゃないかと思います。やっとそういうことに、このG30で手をつけ始めたということです。

○大西　わかりました。ありがとうございました。

それから引き続いて、先ほどフランスの大学とのマッチングという話があったんですけれども、今、どのような状況でしょうか。マッチングというのは、要するに姉妹校提携を結ぶという話ですか。

○安藤　いえいえ、そういう場を設けたということです。あのときは、キャンパス・フランスと国立大学学長会議が結構積極的で、ほんとうにこんな機会は初めてだからぜひ活用しないわけにはいかないと言われました。でも実は、参加された日本の大学には実はかなり迷惑をかけてしまったんです。事前に、ウェブ上でマッチングをやった上で行くということで、ほんとうは私どもは日本側がホストなので、全部間に入ってガイドをしようと思ったんですけれど、そのシステム自体を私も見るのが初めてということで、直接やってもらったんです。ちょっと混乱もありました。やはり時間が限られていますので、必ずしも全部がマッチングできたわけではないんですけれども、初めての取り組みとしてはよかったんじゃないかなと思います。あとは、それぞれの大学がどう生かしていくかということになりますので、そういう機会を創出できたのかなと今回の例では思います。

以上です。

○大西　ありがとうございました。それでは、この項目につきまして、皆さんからの質問をお受けしたいと思います。アウトリーチに関して、ご質問いただければと思います。はい、どうぞ。

○フロア２　筑波大学さんにコメントです。実は私、純粋応用物理国際連盟という物理学会の国際連合みたいなもののメンバーをやっているんですが、南アフリカが非常に計算科学の教育を熱心にやっていて、いつも国際会議に出てきます。アフリカの優秀な若者たちは、非常に優秀だけれども実験とかのインフラがありませんが、計算科学は、最近はもう計算機もラップトップですごい計算ができますので。そういう人たちを集めて、何週間か、何カ月か教えるようなことをやっています。アフリカの優秀な人たちを彼らはいつも集めているので、多分、そういうところとコンタクトされるとよろしいんじゃないかというコメントです。実は私、知っていますので、紹介します。

○北脇　どうもありがとうございます。私どもは、最初のスタートはチュニジアを中心とした地中海沿岸の北アフリカだったんですけれども、そこでいろいろ活動している中で、北アフリカではなくて、ナイジェリ

アとかサブサハラ地域からの留学生が非常に増えてまいりました。そういうこともあって、サブサハラのほうにも活動を広げていきたいとは思っているんですけれども、１大学でアフリカ大陸全体をカバーするなんて絶対にできません。いろいろな大学が、それぞれの大学の特色に応じて、交流をしている地域があるんですね。そういうところとオールジャパンで、日本の大学のネットワークをつくって、いろいろな交流を進めていきたいと思って、日本・アフリカ大学連携ネットワーク（JAAN）といったものをつくりましょうと今呼びかけているところです。ですから、そういう中で考えさせていただきたいと思います。今言われたような分野で、私どもの筑波大にも、もちろんそういう学科もあるんですけれども、実は英語だけで学位が取得できるプログラムができていないとか、濃淡がまだいっぱいあります。そういう場合には、筑波にはないけれどもといって、ほかの大学に紹介するという活動も、できる範囲でやっているんですが、そういうことをもう少し広げていきたいと思っています。

もう一つは、アフリカに国家レベルで進出してきているところもあります。アフリカ諸国は、必ずしもそういう国を尊敬しているわけではないと思います。そういう面でいうと、日本は今まであまりアフリカ諸国になじみがなかったんだけれども、資源もないのに何であんなに発展しているんだろうかというところから始まって、日本に対する関心も非常に高いし、リスペクトの念もあるように思います。昨年には安倍首相が高等教育面で貢献するということをおっしゃっていますので、大学の果たすべき役割は、これからもっと強くなってくると思っています。

本題からちょっと違ってしまったかもしれませんけれど。

○大西　ありがとうございました。安倍首相がおっしゃったのは、アフリカから1,000人の留学生を引き受けるというお話でしたね。

○北脇　ええ。３万人の技術者養成に貢献する中で、大学の留学生は1,000人受け入れるということでした。今、JICA のほうから募集があるのは900人ぐらいですね。

○大西　ありがとうございました。

それでは、次の項目に移りまして、海外留学フェアに関してでございます。これについては、皆さん、おっしゃりたいことがいっぱいあるのではないかなと思います。先ほどのプレゼンテーションの中で、海外留学フェアはぜひ継続すべきだとおっしゃられた吉野さん、トップで、いかがでしょうか。

○吉野　ぜひ継続したいので、皆さんのご協力を得たいと思っています。一番おもしろいんですけれど、インドで受けるパターンをご紹介します。

今、東大でやっているんですけれど、学部の PEAK のコースの先生で、オックスフォード大学でドクターを取られた先生が准教授でいらっしゃるんです。やはりオックスフォードという名前にインド人はものすごく引かれるので、そうやって欧米の大学で Ph.D を取った先生が自分の大学で教えているというと何か、オックスフォードで教わって、かつ日本のそういう大学で教わって、両方エンジョイできるというマインドがインド人には出てくるんですね。特に学部の高校訪問に当たっては、必ずしも日本語の先生ではなくて、外国人の先生がいたら、ぜひ有効活用したらよろしいんじゃないかと思います。これを１点アドバイスとして皆さんにお伝え申し上げます。

○大西　ほかにどなたかいかがでしょうか。

○緒方　既に JASSO のほうでも、留学フェアをやっているじゃないですか。それと、これと、どう違っていくのか、同じようにしていくのかという問題はあると思います。そもそも G30でつくった海外共同利用事務所というのは、JASSO のブランチがないところにつくっているはずです。JASSO の延長として、日本として留学フェアをやるのであれば、それはぜひやるべきだとは思います。ですが、特に我々の経験から言うと、JASSO でやるときは現場の情報もなく、いきなり参加しませんかって来るわけです。そうすると、どういう情報を準備していっていいのか、それから、その留学フェアはどういうもので何人ぐらい来るのかが全くわからない状況です。だから我々がやってきた留学フェアを利用して、もう少し細かな留学フェアを継続して開くのはいいんですけれども、ここだったらこういうところがポイントですよといった、もう少しきめ

の細かい情報を開催する側としては準備したらどうかと思います。

○大西　ありがとうございました。ちょっとここで解説しますと、JASSO のやっている留学フェアと G30 がやっている留学フェアと、どこが違うかというと、端的に言うと来場者の質です。JASSO は、広く皆さん来てくださいとやっているわけですけれど、G30の場合、高校も大学も現地のトップ校にしか声をかけていません。声をかける役割は現地の大使館が担っていらっしゃるんですけれども、非常に粒ぞろいの方が毎回G30の留学フェアにはいらしていただいているなというのが、私自身の印象でもあります。

ただ、この留学フェアは金がかかるわけです。私は文科省の回し者ではないんですけれど、文科省から、ぜひこれを聞いてくれというリクエストが一つございます。この留学フェアのコストパフォーマンス、費用対効果をどう皆さんは見ていらっしゃるのかというところです。皆さん、答えにくいと思いますけれども、いかがでしょうか。

○吉野　では、インドの場合をお答えします。平成24年度にホテルでやりました。そのときかかった経費は500万円です。昨年度、高校で実施いたしました。このときは300万円です。来年度、経費を詰めてやるとすれば、高校は、先ほど先生から説明があったとおり、対象も学校も限られておりまして、粒ぞろいですので、そこに例えば５大学か６大学か、自分の学部学科が重なり合わないところが連合して行って、それぞれ自分の英語のプログラムをプレゼンテーションして帰ってくるというのはどうでしょうか。私が各高校を訪問して、ここの高校生は文系か理系か、理系であったら工学系のどこに行きたいのが強いんだというようなことが大体わかりますから、僕が提案してそれに手を挙げていただくという。そういうことで５校か６校か集まって行けば、かなり効率的に高校訪問は回れると思います。１週間インドに出張に来ていただければと思います。インドは高校の場合は、ランキングがはっきりしていますので、その情報もはっきりしています。はっきりしていないのは、どういう生徒がどこに関心があるかということです。アピールする相手側がわかっていないと、マッチングできないので。そこのところだけです。

私どもは既に高校、大学のランキング、その他のネットワークの相手先のメールアドレス、しょっちゅうウちの大学の情報だとか、グローバル30に送っていますから、皆さん方から質問いただければと思います。この間、京都大学から、自分の資料を送りたいんだけれども、高校の宛て先を教えてくれと言われまして、喜んで、「じゃあここに送ってください」とお伝えしました。ご存じのように京都大学は、Civil Engineering、私どもは、PEAK で全然かち合いませんし、大いに宣伝してもらって日本のステータスを上げてもらえばという一念でございます。

○緒方　費用対効果をどうやってはかるのかっていうのが一番大きいと思います。特に何人来場しましたっていうのはカウントできます。イベントとしては成功だということです。だけど、最終的な目標は優秀な人材を獲得することだから、その結果、そこで受けた人が志願者に何人いて、合格者が何人かというと、そこまで出していないです。

○吉野　ちなみに、うちのデータを申し上げます。学部の PEAK のプログラム、２年前は応募者２人、採用ゼロ。去年は応募者２人、合格者２人。今年、何と27人の応募者が来て、今７人面接をして結果何人出るかというところです。高校の場合は、このようにてきめんに変わります。

○北脇　効果を何ではかるかということがあります。留学説明会の会場に足を運んだ学生が何人入学したかということではないと思います。私は、留学説明会というのは、日本の大学の認知度を上げることに重点を置いてきました。実質的な情報はウェブでとってもらおうと思っています。具体的なことはウェブを見てくれというようなことでやりました。日本の認知度を上げるために、留学説明会を数多くやったんです。私の PPT- ４の留学説明会の右に「直接経費」と書いてあります。会場は全て大学の講堂を借りていまして、全部無料です。ホテルでやったのは１回、９回目のチュニジアのホテルイベロスターです。このときの会場費用はチュニジアの高等教育省に出してもらいました。ですから、13回でかかった直接経費を割ると１回当たり23万4,000円です。ほとんどお金はかかっていません。アフリカにパンフレット等を送ると郵送料が高いのでその郵送料と、現地は公共交通機関が非常に不便で、言葉も通じませんで、日本から来ていただいた出

張者の方をそこに放り出すことはとてもできないため、運転手つきのレンタカーを借りたという費用がほとんどです。私は経費はあまりかけないでやってきました。

筑波大学の学士課程の志願者数は、第１回目は2010年にやったんですけれども、このときは倍率が1.2倍で、2013年入試が3.9倍、2014年入試は5.2倍だったかな。このうち文系入試は8.5倍ですので、相当知名度は上がっています。留学説明会に来ていた学生が入学したかどうかは置いておいて、そういう意味での効果は十分上がっていると認識しています。

○大西　ありがとうございました。うちの大阪大の事例をちょっと申し上げますと、毎年この学部英語コースに応募している学生さんのアプリケーションフォームに、あなたはどうしてこの英語コースのことを知りましたかという質問を設けております。そのカウントをとっているわけですけれども、ざっくり申し上げて３分の１がウェブです。あと３分の１が高校訪問、あるいは留学フェアのフェイス・トゥ・フェイスのイベントで知りましたという感じです。残る３分の１は、親戚、両親、友達、学校の先生に聞きましたという人づて口コミ情報です。３分の１、３分の１、３分の１ですけれども、人づてに聞いたというのは、例えばこのお父さん、お母さんはじゃあどこから情報を知ったのかというと、そこはちょっとよくわかりません。ざっくり言って、ホームページ、いわゆるウェブをちゃんとするというのはせいぜい数十万の話だと思うんですが、私たちが海外に行って、高校訪問、留学フェアに出ようとすると、多分、数百万円かかっているわけですね。実際に日本で仕事ができなくなるという機会費用も含めれば、もっとかかっているかもしれないです。ですから、後者の方が明らかに費用対効果は低いのですが、それでもやめるわけにはいかないんです。だって、留学フェアや高校訪問はお金がかかるからと言ってやめてしまえば、先ほど申し上げた受験生の３分の１はそっくり飛んでしまうわけですよね。それでいいんですかという話です。私はこれはもう答えはないんじゃないかという気がしているんですけれども、皆さんいかがでしょうか。ということを投げかけて、いきなりもう次のトピックに移りたいと思うんですが。（笑）時間がないので、次の四つ目の人材育成の話と、入試に関する話題を一緒にして扱いたいと思います。まず人材育成について、どなたか発言したいという方いらっしゃいますか。

○吉野　一つだけあります。今の取り組みで産学連携の観点から人材育成をやって、できるだけ経費を少なくして効果を大きくしようということで、インドでは新幹線の売り込みが首相のトップダウンでやられておりますので、主に日印間の鉄道交流にかかわる人材育成を取り上げて、それでやっております。ちなみに昨年10月にデリー地下鉄公社から修士に１人お迎えいたしました。現在は、鉄道省からお迎えすべくやっております。その延長で話が出てきたのは、共同研究を新幹線でやりたいということでした。インド工科大学カラグプルからそのような提案がありました。ということで、一つの分野における人材育成を産学連携の観点から取り上げているということを一つご紹介申し上げたいと思います。

○大西　ありがとうございました。

先ほど明治大学のプレゼンテーションの中で入試課・国際課・広報課の職員が一体となってというお話があったと思うんですが。

○安藤　入試にかかわるところで言いますと、私どもの国際部門の役割は、学部の入試の広報や受け付けをするところなわけです。その後は学部のほうに行ってしまうんで、その後のことはわからないですね。情報も来ないし、入試という非常にデリケートな内容なので、こちらにも伝わってきません。多分ほかのG30の英語コースの場合もそうだと思うんですけれども、やはり先生方が回られますよね。そういう意味では、職員と先生の役割分担をどうするかです。あとは、各学部に特任の先生で、先生だと研究者ですけれど、AO担当みたいな先生がおられて、１年でもいいので、例えば輪番といいますか、それで回っていただけるとかなり実は広報効果が上がるんじゃないかと個人的にはずっと思っているんですけれど、なかなかそうはなりません。ですから、こちらのほうでできるだけ情報を各学部から得て、受験生というか、例えばフェアでブースに来られた方に伝えられるようにはしていますが、入試は微妙なところがありますので。情報を得て伝えるというのはやろうと思ったら、役割分担さえすれば職員でもできるかなと思います。いろいろなところで

もっと職員が、そういうアドミッションみたいなことをという話もありますので、できないわけではないと思います。ただ、学内の入試の役割の切り分けがありますので、やはり学部側で先生ということになるのかなとまだ考えております。

○大西　なるほど。先ほどこのセッションの冒頭で私がお示しした例の雑誌の巻頭言で、原文ではアドミニストレーターの役割だということが書いてあったんですが、アメリカの大学ではアドミニストレーター、つまり事務職員が実際に広報の役割を担っているんですけれども、日本の大学の場合は、教員も一緒になってやっているのが実態だと思うんです。何かそういう教職員の広報のためにトレーニングプログラムをお持ちだという大学はどこかにありますか。少なくとも私はあまり聞いたことがないんですが。

○会場　・・・・・・・・・・・・・・・

○大西　お答えがないということは、やはりないんですね。

それでは、入試ということについてちょっとお話いただきたんですけれども、先ほど吉野さんのプレゼンテーションの中で、時期が悪い、欧米の大学はもっと早いぞというお話があったと思うんですけれども、何か言いたいこと、おっしゃりたいことはありますでしょうか。

○吉野　どこの大学も同じだと僕は思っているんですけれども、部局によって入試の時期も違いますし、やり方も異なっています。インドの場合は12月１日が有名大学のいわゆる就職解禁日でして、12月から１月にかけて、生徒は就職するか、あるいは大学院に進むかというのを決めますので、１月から２月ぐらいまでに合格判定を出すと獲得しやすいと思います。しかるに、私どもの１部局は、８月に日本に私費で来ていただいて試験をやって、８月に合格判定を出しています。よほど好きでないと、そこまで待てないということです。しかし、感激することに２人、インド工科大学の人がおりまして、１人は見事合格しました。１人は残念ながら不合格でございました。もっとフレンドリーにやっていただければよかったんじゃないかなと私は個人的には思うんですけれども、なかなか部局には部局の方針がございまして、国際部もそこまで立ち入れないんじゃないかなと思います。検討課題の一つとして、私は今、各部局にお願いをしている次第でございます。

○大西　ありがとうございました。最後に質問があれば一つ、二つお受けしたいです。

○フロア３　私は、マスコミのジャーナリストをやっておりまして、英語ができる人間ですので、たまたまちょっと引き抜かれて、今、一橋大学の国際化推進室におります。それで、海外広報みたいなことをやらなくてはいけなくなったんですけれども、縦割り行政ってこういうことなのかというものをまず思い知ったのと、あと大変申しわけないんですが、まずスタッフの方が海外に目が全く向いていらっしゃらないと思いました。それで結局、教員が全部やるんだけれども、教員は雑務だと思って、何となくやりたくないみたいな。どういうガバナンスなんだろうと思って、びっくりしているというのが現状です。それでもう２年たちそうになっているんですが。（笑）そういった状況が、G30という大きな予算がついた場合は、おそらく最初は同じような状況だったと思うんですけれども、徐々に変えられるものなのでしょうか。それとも、今、登壇されている４人の方々は皆さん、お話を伺っていて、明らかにすばらしいリーダーシップをお持ちだと思ったのですが、やはり個人の努力、個人の力にかなりかかっていて、個人の力で引っ張っていかないと厳しいものなのでしょうか。それとも、だんだん雰囲気が変わってきたのでしょうか。その辺のコツなり何なりを教えていただけると大変ありがたいんですけれども。

○北脇　おっしゃること、よくわかります。私のところでも、G30がスタートした当初は確かにそのとおりでした。つまり筑波大のホームページでも、日本人向けの日本語で書いてある日本のページだったんです。英語版はあるんですけれども、英語版は日本語版を英語にしただけなんですよ。外国の人が知りたい情報、いわゆる何を求めているのかという観点からつくっていませんでした。

最初そういう状況でしたので、G30ページはG30関係者で作ろうということで、G30のページを独自につくりました。そのG30のページはG30経費で雇用したイギリス人の先生がつくりました。そういうことに興味がある先生だったということで、非常に助かったんですけれども、その人に全部設計してもらいまし

た。特に言いたいのは、日本語で書いてある筑波大のトップページに、G30英語コースの所在が英語だけでわかるようにつくってもらって、外国からの関心がある人はそこに飛んでいくというふうにして、この4、5年やってきました。G30によって何が変わったかという話にも通じることですけれども、最近になってこれではいかんということに大学の広報なども気がついたようです。そういうことで、最近特別委員会をつくって、外国からの視点でどうやって web ページを変えたらいいかということを今、一生懸命考えているところです。まだ具体的にはなっていないと思うんですけれど、ちょっと大学の中も変わってきたかなということの一つだと思います。

〇大西　それでは、最後になりますが、各セッション共通の最後の質問ですけれども、皆さんの目から見て、果たして「国際化で大学は変わったか」ということを１人ずつ１分ぐらいでまとめてお話しいただければと思います。

〇安藤　先ほどのプレゼンの**資料 A4-28**の最後のページに、「さいごに」としまして「G30で得たもの」ということで書かせていただいたんですけれども、内部の変化と外部との関係性の変化というのが考えられると思います。これはどちらかというと見えるものもあるんですけれども、見えない効果といいますか、そういうところになろうかなと思います。まずこれをやるのに、当然、国際政策上のガバナンスを強化しないといけないということで、そういう体制を立ち上げたということと、同時に G30に採択されたということで、国際部門の業務は格段に広がったということでございます。ただ、それにつられて、先ほどの広報の話もそうなんですが、いろいろなことがやはり待ちだったというか、やっていなかったことがあったのですが、それが攻めというか、やる方向に動かざるを得なくなって、待ちから攻めに変わった部分が結構あるんではないかと考えています。

それと、全学への国際化の波及なんですが、例えば先ほどのアセアンセンターを整備するのに、向こうで内装工事するのにうちの施設課の人に行ってもらったりしています。施設課の人は、普通、あまり国際とかに関係ない人たちですけれども、そういった効果といいますか、そういうところにも波及効果があったということが言えるのかなと思います。当然、国際部門で国際化をやっているんですけれども、うちのほうでは学部でもそれぞれやっていて、そういった、それぞれやっていた点が線としてつながり始めたというか、つながったのかなというのが一つですね。それと、見えない効果としましては、やはりかかわった人たちの成長といいますか、私が言うのもちょっとおこがましいんですけれども、職員はもちろん、先生方もやはり経験することによって次のステップに進めると思いますので、そういう意味では、学内的には次の、線の展開から面の展開にいく基盤ができたというふうには感じております。

もう一つは、学外との連携です。特に G30のほうで副学長会合とかいろいろな会合がありまして、こういった場もそうですけれど、いろいろな大学と課題の共有とか情報交換とか、課題を共有する場がかなり増えてきて、一緒に何かやろうという雰囲気が出てきたと思います。そういう意味では、それぞれの大学がやっていたものが点だったのが線になって、今後、これが基盤になって面になっていくのかなという気がしております。

以上です。

〇緒方　一言で言うと、大学が持っている世界観が大きく変わったと思います。自分たちが世界の中でどういう立場にあるのかが、海外に行く機会が増えたということもありまして、大きく変わっています。その結果、今言われたようなことが起こっているのではないかと思います。

それと、大学が変わったかということではないんですが、例えば今日の企画になるんですけれども、G30は毎年、副学長クラス会合というものがあって、そこで執行部あたりが横のつながりがありました。それをベースにして今度は職員の横のつながりができてきているんです。ここに来られている G30関係の方々、初めてではない方がたくさんいらっしゃいます。そうすると、制度上の波及・普及みたいなものが自然と起こってきます。もちろん先生方には、もともと学者の世界があるんですけれども、学者の世界の壁を超えたつながりができたと思います。大学、教育、国際化というので、先生方のつながりが密になりました。

もう一つセッションBがありますね。今、学生のほうも今度は横に広がろうとしていっているということで、そういった構造的な変化が単独の大学ではなく、この事業で行われています。それが13大学だけじゃなく、もう少し広がっていけばと思っています。

○吉野　インドの窓から見ていますと、何が変わったか。優秀な学生が10月、コンピューターの頭脳研究で修士に入りました。先生からお礼のメールをいただきました。さすがにインド人は頭がいいと。初めて受け入れて、教室が活発化して、議論は深まり、今まで日本の学生と中国の学生とASEANばっかりだったけれど、やはりインド人は違うと。こういうグローバルクラスを今後も目指したいので、もっと大いに優秀人材を探してくれということでした。これは率直にメールをいただきました。現場がそのように変わることが、私にとっては非常に一番うれしいことです。間違いなく、これが１点。

それと、いわゆるインド体験学習で、インドに初めて来ましたという学生がいます。特に学部生は３年の12月に就職を控えて、いろいろ進路を決めなければいけません。海外に出た駐在の人たちの苦労、あるいは外交官として最前線で闘っている人たちはどうなのか、こんな話を聞く機会は簡単には学生みずからでは手配できません。しかし、幸いなことにOBがいますので、私が大学の事務所としてOBに頼んで、１週間なりでそういったプログラムを組んでみました。そこに現役学生を連れて行って、どうか先輩、現役学生に話してやってくださいということを、きちんと１週間の密度の濃いプログラムでできたこと、これは学生にとっては非常に大きなプラスであったと評価されております。

生徒もグローバル化のためには何が必要なのかを現場で理解し、優秀な生徒を送ることによってクラスも変わりました。間違いなく、このグローバル30で留学生も増えているわけで、インド人もようやく増えました。そのように、現場がよいほうへ変わっていると思います。かつ職員も、インドという未知な世界から私が山のように英語と日本語で連絡します。日本語だけではなかなか追いつきませんから。そうすると、職員も英語である程度対応してもらわないと動かないようなことになって、ますます職員もある意味でインドに鍛えられているというところがあるんじゃないかと私は理解しています。グローバル・キャンパスによる、先生もそうだし、生徒もそうだし、職員もそうで、非常にいい効果があらわれているんじゃないかと私は感じております。

以上です。

○北脇　今までG30以前の国際化というのは一部の人がやっていたんですよね。何が変わったかというのを一言で言うと、国際に関心がある、あるいはそういう思考ができる人がやっていた国際化が、このグローバル30を５年間やることによって、まだ過渡期ではあると思うんですけれども、何か考えるときに、一応全員が、国際から見たらどうかということがどこか頭の片隅にでもあるようになってきたということが一番に挙げられるかなと思うんです。全員がそういうことに対応できているかというと、とてもそこまではいきません。

先ほど留学説明会のお話がありましたが、例えば、G30スタートのころ外国に留学フェアなどで出張したときにレンタカーを借りると、その支払いの日付の両替表を持ってこいとか言うんですよね。そんなことを言われたって、発展途上国ではとんでもないというようなことをいくら言ってもわからなかったのが、やっと最近、「そうかな」となってきました。（笑）そのように学内の雰囲気が非常に大きく変わってきたというのが一番大きいと思います。

それから、私のところはこれでもう４年生もいますから、G30学士課程の学生は全部埋まりました。その経験で言いますと、１～２年次のG30の学生の満足度はものすごく高かったんです。英語授業も全然問題ないし、完璧だというようなことだったんです。３～４年次と進んで、日本人学生とともに学ぶ授業の機会が増え、ゼミ・研究室指導を受けるようになると、必ずしもでそうでもないケースがでてきました。それはなぜかというと、日本人学生にもっとG30の授業をとらせる指導をして、G30のクラスに日本人学生がたくさん入ってきたんです。そうすると日本人学生の英語力に合わせる場面も出てくる。（笑）G30学生は「あの先生は日本語で質問に答えている、秘密で何か話をしているんじゃないか」と、そういう反応が出てきた

りして、次のステップでは見直さなければいけないかなと感じています。

ほかの方が言われましたけれど、今まで私も筑波大の中だけでやってきたので、ほかの大学でどんなことをやっているかというようなことを知らなかったんですけれど、こういうG30の集まりでいろいろなことを聞いていると、なるほど、そうかということが非常にたくさんあって、そういう意味でも日本の大学のレベルアップに非常に貢献したんではないかと思います。

以上です。

○大西　ありがとうございました。

ちょっと超過しましたが、ほぼ時間どおりに終わりました。ありがとうございました。最後に皆さん、壇上の４人の方々への拍手をもって終わりたいと思います。ありがとうございました。（拍手）

（B）課題別セッション
英語による教育：アドミッション・カリキュラム・教授法

発表大学：

名古屋大学　渡辺芳人（理事・副総長）
大阪大学　山本ベバリーアン（大学院人間科学研究科教授）
慶應義塾大学　萩野達也（環境情報学部教授）
上智大学　ユー・アンジェラ（学術交流担当副学長）
立命館大学　ライカイ・ジョンボル・ティボル（国際関係学部准教授）

ファシリテーター：

廣瀬武志（九州大学　教育国際化推進室　特任准教授）

○廣瀬　それでは、「課題別セッションＢ：アドミッション・カリキュラム・教授法」を始めます。本日は年度末のお忙しい中、また、あいにくのお天気の中、かなり遠方からお越しいただきました方もいらっしゃいまして、まことにありがとうございます。セッションＢの司会を務めさせていただきます九州大学の廣瀬と申します。よろしくお願いいたします。

この課題別セッションＢは、冊子の４～５ページ目に載っておりますプログラムをごらんいただければおわかりのように２部構成になっております。第１部は、G30の採択校４校ないし５校から、このセッションのテーマに関連したユニークな取り組みについてご発表いただきます。１大学当たりマックス８分程度を予定しております。第２部は、パネルディスカッションとなっております。こちらのほうは計60分ぐらいを予定しております。

なお、各大学のプレゼンテーションの後、特に質疑応答の時間は設けておりませんが、会場からのご質問ないしコメントは、第２部のパネルディスカッションの際に受け付けたいと考えております。

それでは早速、G30の採択大学の発表に移りたいと思います。発表者のプロフィールには、今日の配布資料の中の冊子の８ページにございますので、そちらをご覧いただければと思います。

【名古屋大学】

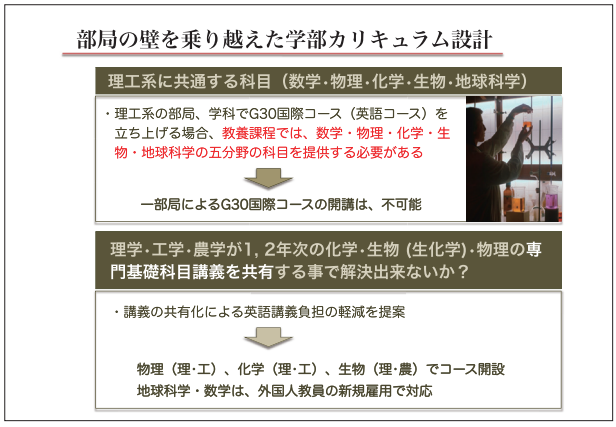
名古屋大学　理事・副総長
渡辺　芳人

今日は大勢いろいろな先生方がいろいろな大学の取り組みをおしゃべりになりますので、私どもは、この英語コースをどうやって立ち上げることができたか。かなりのカバレッジで広くコースを立ち上げましたので、そのときの話を少ししようと思います。廣瀬さんともそれがいいということになりましたので。

この中にも、いろいろな英語のコースを立ち上げたG30関係者もいますけれど、多分、これからやろうというとき、英語コースを立ち上げるときにどれだけの授業を立ち上げる必要があるかを考えなければなりません。

私どもが最初、５年前にこのコースを考えるときに一番困ったのが、設置審は通したくないということでした。多分、大学関係者の皆さんですからご存じと思いますけれど、新しいコースをつくると必ず設置審にかかりますし、教員の数だとかカリキュラムがありますので、少なくとも、今、日本語で話しているコースと同じものを英語でやりますということで通したいということで初めから考えていました。当時、私どもが学部レベルで外に開いている英語の授業というコースはなかったですが、自動車工学コースでサマープログラムというのをやっていました。これは６週間にわたって、６月から８月まで、自動車工学のプログラムで、1,800ドルの授業料を取ってやるコースです。ほとんどがアメリカのUCLAとミシガンから学生が来ます。G30のリクワイアメントは、学部で少なくとも一つは国際コース、英語コースをやれということだったので、初めはこれを立ち上げようかということを議論したんですけれども、実は、自動車工学の授業だけ英語でやっても学部生は卒業できないんですね。基礎・教養から、あらゆるものがありますので、これは無理だというので、実は暗礁に乗り上げかけたんですが、一つ考えたのがあるんです。

それは何かというと、特に理学部系の授業、例えば物理とか化学とか生物です。これは例えば工学部の物理系にいようが、理学部の化学にいようが物理にいようが、あるいはマテリアルにいようが、多分、教養部の１、２年生では必ず物理、化学、生物のどれかはとらなくてはいけない。だから、その三つを提供している部局を巻き込んでしまえば、理系の共通科目は、全部まとめてやれば多分授業ができるだろうと思いました。そこで、まずは理学部の先生方に、物理と化学と生物で同時に立ち上げられませんかという話をしました。そのときに、「いや、それでは人が足りない」というので、化学と物理は工学部にもあるし、生物は農学部にもあるので、そこにも声をかけて、その分野の専攻で全部一斉に立ち上げて、授業は少なくとも１年次、２年次の基礎を理系でシェアしたら、教育デューティーは減るでしょうと考えたんです。まずはそこから考えて、皆さんの説得に当たりました。２カ月ほど議論して、皆さんが「自分のデューティーが少なければやってもいいよ」という話になって、最初にまずは理系の基礎的な数学、物理、化学が必修になるような部局の国際コースをやりましょうとなりました。ただし、理系ですから数学はマストですので、数学の先生にはコースは開かないんですけれども授業をお願いし

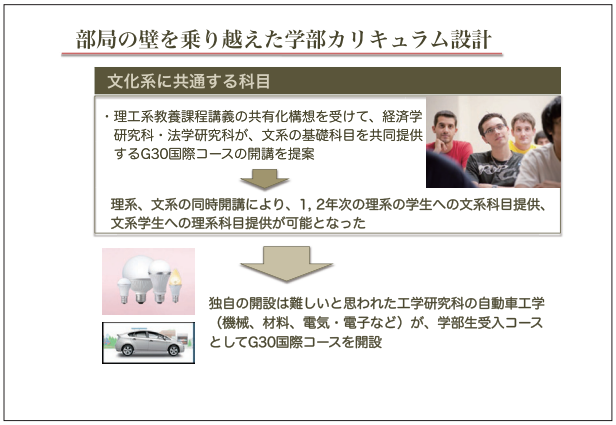


B-1-2

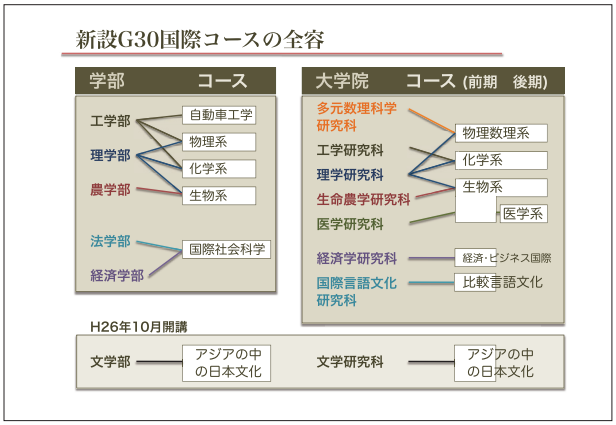
ました。それから数学、物理、化学以外に、時々、地球科学をとる学生がいるというので、地球科学もコースは開かなくても授業だけお願いするということで、まずはスタートの議論が始まって、何となくできるかなということになりました。

もともと、地球科学と数学は、それを担当する学科がうちは開かないとおっしゃっていましたので、これは外国人の専門の方を採用するしかないなというので、一応一段落したんですけれども、ここで問題になってきたのが、「いや、文系の基礎科目はどうするんだ」「教養課程の基礎科目があるじゃないか」ということでした。文系の先生方とお話ししまして、「理系は実は、工学、理学、農学の３研究科、３学部が、基礎の１年次、２年次の共通科目は共通でやっていますよ」「そうすると先生方の労度というか、ティーチングデューティーは少ないですよ」という話を持っていきましたところ、法学と経済が、ふだんはそんなにがっちり手を組むことはないんですけれども「じゃあ、ちょっと検討させてください」ということで、経済系、法学系、あと皆さんもそうですけれど、法学は政治がありますので政治、その辺が提供できるかどうかという議論をされました。理系の化学も基礎化学あるいは基礎物理、基礎の理系のプログラムを文系の学生に提供していただけるなら、まあ何とかやってみましょうかという話になりました。実は最初は理系の三つぐらい開ければいいと思っていたんですけれども、おかげで工学、理学、農学、経済、法律という、うちのメジャーな部局がコースを開くことになりました。

最初にお話をした自動車工学は、もともと６週間のプログラムをやっていました。声をかけたら、無理だと言っていましたけれど、それだけの科目が１年次、２年次に開けるとすると、自動車工学の方は学部３年、４年の専門だけを教えれば別に問題はないので、自動車コースの材料とか、工学系、電気・電子も「じゃあやりましょう」ということで、結果的にはかなりの数の部局が開きました。例えば、物理をとるG30の学生は、入試のときに理学系の物理をとるか、工学系の物理をとるか、選択できます。日本の入試ですと、工学部の物理と理学の物理なんて国立大学だと選択できませんけれど、これは第１志望、第２志望もオーケーです。日本人の高校生は、高校のときに工学部のイメージ、理学部のイメージがありますけれど、海外の子供たちは将来、工学系の物理と理学系の物理が違うということがわからないですから。ということで、このように分けて、かなりたくさんのコースを開くことができました。これに伴って理学を中心にどうせ学部を開くなら大学院も開こうというので、修士前期・後期も開くことになりました。ここでおもしろいのは、言語系の部局に修士を開いていただきましたので、ここが学部のいわゆる基礎科目の語学系、いわゆる日本語ではないそういう教養科目も開いてくれるというので、オーバーオールでは、基本的には日本人学



B-1-3

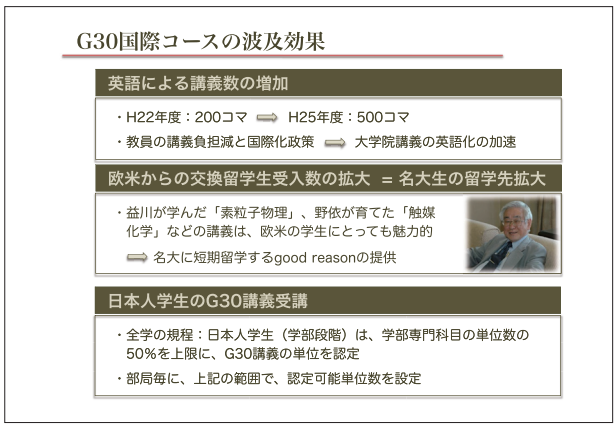


B-1-4

B-1-5

生が取るべき単位、プログラムとほとんど同数のプログラムを提供できました。ということで、うちは何とかしのいだということです。

実はこのプログラムでは、最初の１年次、２年次は、20名の新規に採用した外国人教員が授業をやっています。なぜ名大の先生は日本人が出てこないんだという意見もあるんですけれど、うちの学生のほとんどがネイティブイングリッシュをしゃべるわけではありません。先生方もそうです。そういう意味では、彼らも英語力はあるけれどネイティブのイングリッシュスピーカーではないので、やはり１年次、２年次はきれいな英語をしゃべる先生ということで考えました。今は最初の学生が３年次になっていますので、かなり日本の先生が出てきます。一番強調したいんですけれど、このおかげで開講前は大学院も含めて200こましかなかった英語の授業が、今何と500こまになりました。学部も220こまの授業が全部開いていますので、今後、短期入学も含めて非常に競争力ができたなと思っています。



B-1-6

意外と８分って短いですね。

○廣瀬　そうですね、申しわけありません。あと一、二分は続けていただいて結構です。

○渡辺　そうですか。

実はここでおもしろいことがあります。皆さんの大学もほとんどそうだと思いますが、留学生のほとんどは半分以上中国人です。参考資料見てください。これは合格者ではなく応募者の数ですけれども、中国からというのは圧倒的に少なくて、かなり今までにないダイバーシティがあります。だからもう世界中に広がっ

B-1-7

	Country/Region	Number 2011
1	China	936
2	Korea	163
3	Indonesia	59
4	Vietnam	55
5	Malaysia	53
6	Taiwan	49
7	Cambodia	46
8	Uzbekistan	36
9	Bangladesh	26
10	Thailand	23
-	Others	303
Total	Enrolment	1,749

Country/Region	Number 2012
China	929
Korea	172
Indonesia	64
Malaysia	52
Taiwan	49
Vietnam	47
Cambodia	45
Uzbekistan	35
Bangladesh	32
Philippines	28
Others	346
	1,799

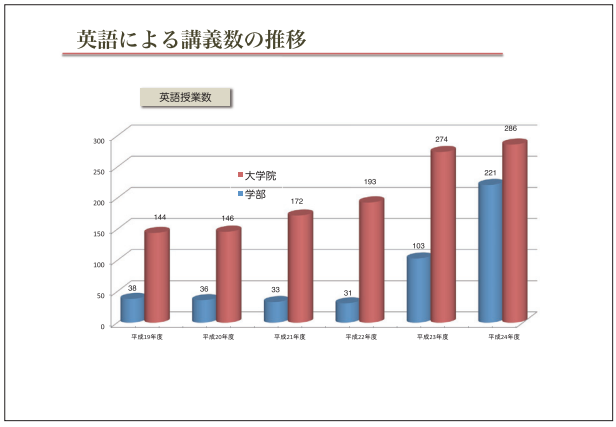
B-1-8

	Country/Region	Number 2011
1	Japan	37
2	Korea	25
3	Malaysia	14
4	Thailand	9
5	China	9
6	USA	8
7	Uzbekistan	7
8	Singapore	5
9	Mongolia	5
10	Mexico	5
11	Pakistan	4
12	India	4
13	Taiwan	3
14	Vietnam	3
15	Canada	3
16	Hong Kong	2
17	Australia, Iran, Indonesia, UK, Spain, Zambia, Sweden, Ghana, Kyrgyz, Nigeria, Nepal, Bangladesh, Poland	1

Country/Region	Number 2012
Japan	50
Indonesia	25
USA	15
Korea	15
China	13
Uzbekistan	11
India	7
Taiwan	6
Malaysia	6
Singapore	5
Thailand	4
Nepal	3
Vietnam	3
Canada	3
Hong Kong	2
Australia	2
New Zealand, Pakistan, Turkey, Spain,Bangladesh, Mongolia, Israel, France, Uganda, Poland, Nigeria, etc	1

Country/Region	Number 2013
Japan	70
Korea	24
Indonesia	17
Malaysia	17
USA	15
India	15
China	10
Taiwan	10
Uzbekistan	10
Vietnam	9
Thailand	7
Singapore	5
Pakistan	4
Napal, Turkey, New Zealand, Sri Lanka, Napal, Philipines	3
Mongolia	2
Rong Kong, Bangladesh, Myanmar, Russia, Kyrgyzstan, Canada, Colombia, Argentina, Italy, Czech, Hungary, Latvia, Lithuania, Cameroon, Zambia, Mozambique, Kenya, Egypt	1

B-1-9



B-1-10

て、受験生が来ています。結構アメリカが多いというのが意外で、一遍採用すると、そこの高校からやはり応募者は来るということで、リプテーションが重要なんだろうとは思います。

あとは後でやります。ちょっと時間オーバーしました。済みません。（拍手）

【大阪大学】

大阪大学　大学院人間科学研究科教授
山本　ベバリーアン

どうぞよろしくお願いいたします。今日はカリキュラム開発について発表することを依頼されましたので、それを中心にして進めたいと思います。

大阪大学は、学部レベルで二つのコースをG30の枠内で開発しました。一つは化学・生物学の複合メジャーと、もう一つは人間科学コースです。私は人間科学コースの副コース長をずっと勤めておりますので、その現場での経験に基づいて今日は発表させていただきたいと思います。

最初、少し個人的な話から入りたいと思います。G30で人科コースの開発担当になったとき、私の娘はちょうど高１でした。折しも大学進学を考え始めたころです。娘は普通の高校ではなく、インターナショナルスクールの国際バカロレア課程で学び、最終的にDPで、ディプロマを取得して卒業しました。そのことが私にとって大きな影響を与えました。なぜなら、一つは責任です。自分の娘にも推薦できるようなプログラムをつくらなければいかないと私は思っていました。娘に自信を持って勧められないプログラムは、十分ではないというのがスターティングポイントでした。

もう一つは、最近、国際バカロレア（IB）がかなり注目されていることです。ほかのプログラムより優れているとは言えませんが、特別な学習成果があるので、私が人間科学コースを考え始めたときにIBディプロマを修了した学生でも満足できるようなプログラムを作らないといけないと思いました。今までインターナショナルスクールで優れている学生はほとんど国立大学に行くルートがなかったので、IBの修了者はG30にとって大きなマーケットになると思っていました。やはり、対話的な授業を用い、学習成果が透明であるIBディプロマから大阪大学に来てくれると、やはりいろいろなことを考えないといけないんじゃないかと思います。

８分という短い時間ですが、その中で４つの課題についてお話したいと思います。スライド自体は、英語で作りましたが、頑張って日本語で話します。

一つは、要するに国際的なレベルの質の高いプログラムじゃないと、私の娘に勧められません。だから、どうしても質の高さにこだわることが必要です。もう一つは、IBのようなカリキュラムの卒業生を想定し、学習成果が明らかで、透明であるもの、そして、成績評価が統一されているプログラムをつくらないといけません。そして三つ目は、これを満たすために、私たち側だけの力だったら絶対に足りないと思っていたので、やはりキー・ステイクホルダー（利害関係者）は教員で、そして事務職員と学生が話しながらつくりました。まだ問題がないわけではありませんが、この５年間でかなり進歩したと自負しています。そして、今日は詳しく話をする時間はありませんが、いろいろな話し合いがすごく大事なポイントだろうと思います。

B-2-2

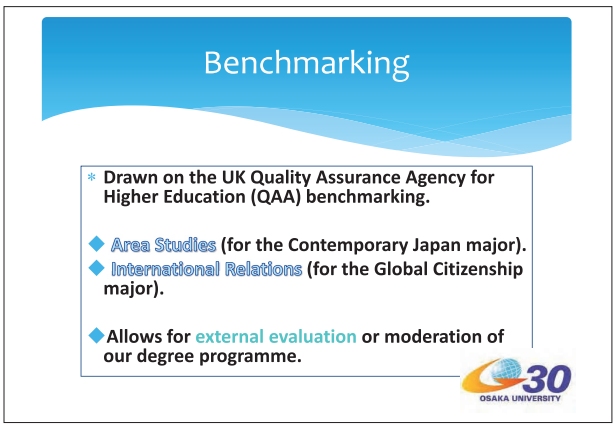
そして、直面している課題の一つは、学習成果、つまりLearning Outcomesです。これをいろいろなレベルで設定することが、一番最初の大事な課題です。特

に、卒業時の学習成果、このプログラムのレベルの学習成果と、各学年の学習成果を設定が欠かせません。二つ目は、授業とかシラバスをつくったりといった経験がない教員のために何かしなければいけないと思っていましたので、後で話をしますが、英語と日本語の Teaching Quality Handbook を作成しました。ここには、最近の高等教育の教育方法に関するノウハウが入っています。そして三つ目は、FD の機会を多く設けること。実際、１年、２年目はかなり疲れました。もう一つは、日本ではちょっと珍しいことですが、キー教員に対して、イギリスで広く行われている成績を統一するための Moderation Meeting を行うことです。

まずベンチマーキングについて。多分みなさんご存じだと思いますが、国際的な水準、基準に基づいてプログラムを開発することです。そして私の母国イギリスでは、それがかなり進んでいるので、それに基づいて、私たちは二つのメジャー、Contemporary Japan と Global Citizenship をつくりました。Contemporary Japan のほうは明らかにエリア・スタディーズの枠に入るので、イギリスのエリア・スタディーズ・ベンチマーキングを参考にしながら、プログラムの開発をしました。Global Citizenship については、何を基準にしたらよいか必ずしもクリアではありませんでしたが、最終的には International Relations のベンチマーキングを使いながら、プログラムをつくりました。

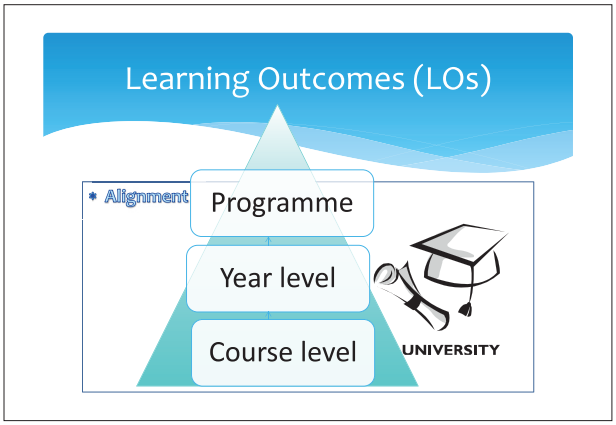
ベンチマーキングはかなりドライでして、絶対、学生たちは読んでも喜びません。ですから、学生たち、さらには一般の人たちが理解できる学習成果も考えつつ、ベンチマークに基づいて Graduate Attributes を考えました。これは、このプログラムの修了者が持つ Attributes、Skills を、五つのカテゴリーにおいて示したものです。時間の関係で詳しく説明できませんが、最近の教育論の中で、特にグローバル人材という言説の中でよく出てくるものです。一つは、私たちはどうやってそれらを満たし、そのような学生をつくるのかで、これはすごく大きな課題でした。もう一つは、学生たちがこのプログラムを修了するとどのような人間になっているか想像しやすいし、就職のときにかなり役立つだろうと思っていました。アメリカではかなり普通のことになっています。

修了するときの学習成果を決めても、各学年でそれを満たさないと何もなりません。４年後に失敗したと

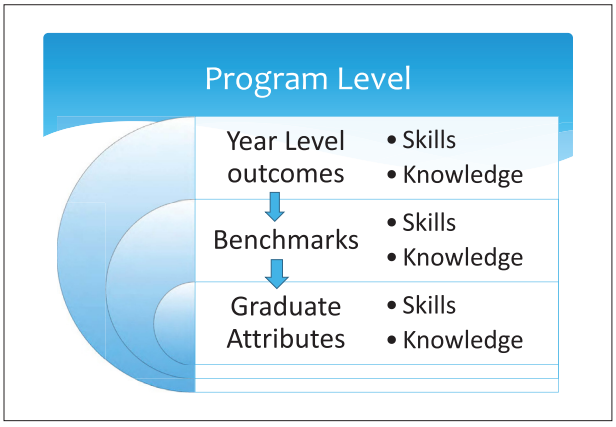


B-2-3

B-2-4



B-2-5



B-2-6

悟っても遅いので、１年生、２年生、３年生、４年生の各学年の学習成果、つまり Learning Outcomes を考えないといけません。それが一番苦労したところです。すごく時間がかかりました。プログラムやコース、授業科目は、やはり１年生だったら１年生の Learning Outcomes に反映しないといけません。２年次以降も同様の努力を重ね、そして各学年の学習成果と最終的な評価に整合性があることを確認しながらやっていきました。Learning Outcomes は Skills と Knowledge でずっと分けていきました。

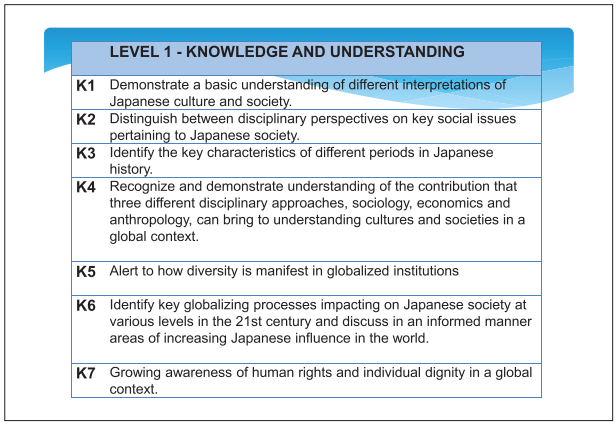
〇司会（廣瀬） 山本先生、すみません、あと２分ぐらいでお願いします。

〇山本 もうちょっと早くいきましょう。

それでずっと構成して、透明なものにしていきました。それらを全て１年生のシラバスは反映する必要はないが、ある程度、反映しないといけないことと、最後にマッピングをして、１年間で全部の Skills、Knowledge がそれでカバーされているかどうかということで、やっていきました。

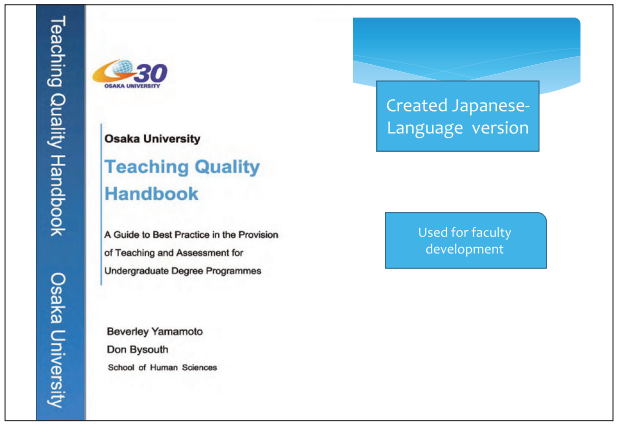
先を急ぎます。Teaching Quality Handbook は FD で使いました。FD はかなり人気でした。英語で授業を担当する教員が直面するであろう課題をピックアップしました。

Moderation Meeting は、各学期の終わりに先生たちが自分のリポートとか、各人各様に評価のものを持ってきて、それをみんなで「それはほんとうに S ですか」「それはほんとうに A ですか」と議論しました。ボーダーラインの場合はどうすればいいのか、何を基準にすれば確実に採点ができるのか、それらについて最初

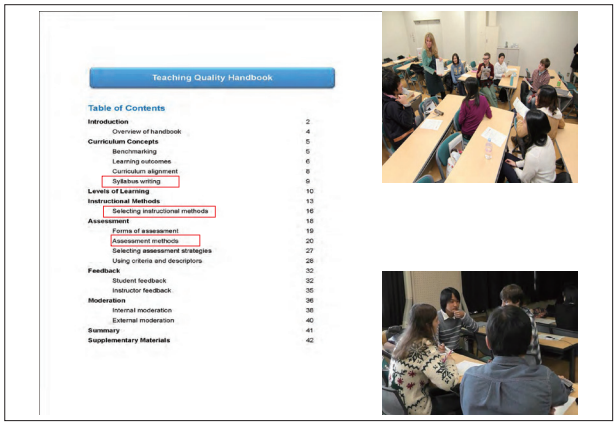


LEVEL 1 - KNOWLEDGE AND UNDERSTANDING	
K1	Demonstrate a basic understanding of different interpretations of Japanese culture and society.
K2	Distinguish between disciplinary perspectives on key social issues pertaining to Japanese society.
K3	Identify the key characteristics of different periods in Japanese history.
K4	Recognize and demonstrate understanding of the contribution that three different disciplinary approaches, sociology, economics and anthropology, can bring to understanding cultures and societies in a global context.
K5	Alert to how diversity is manifest in globalized institutions
K6	Identify key globalizing processes impacting on Japanese society at various levels in the 21st century and discuss in an informed manner areas of increasing Japanese influence in the world.
K7	Growing awareness of human rights and individual dignity in a global context.

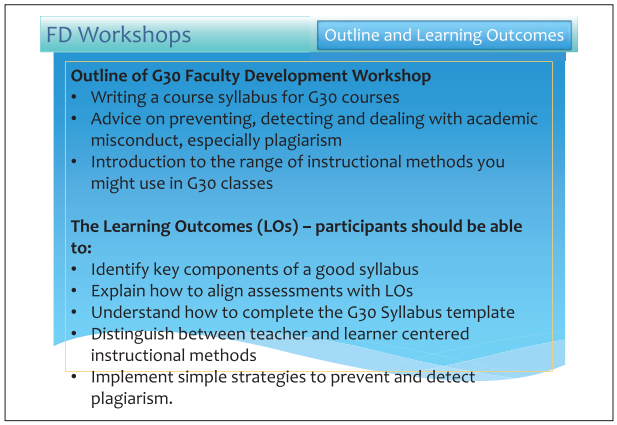
B-2-7



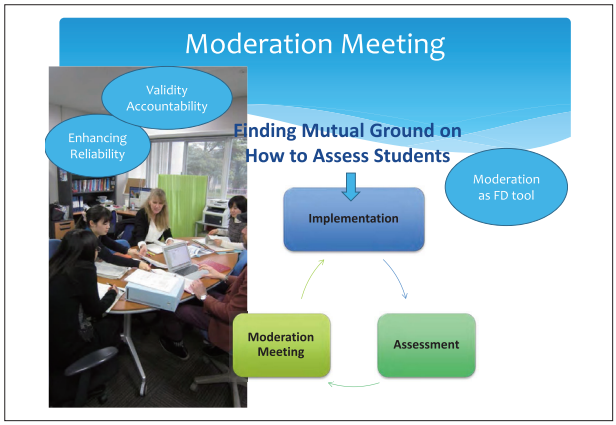
B-2-8



B-2-9

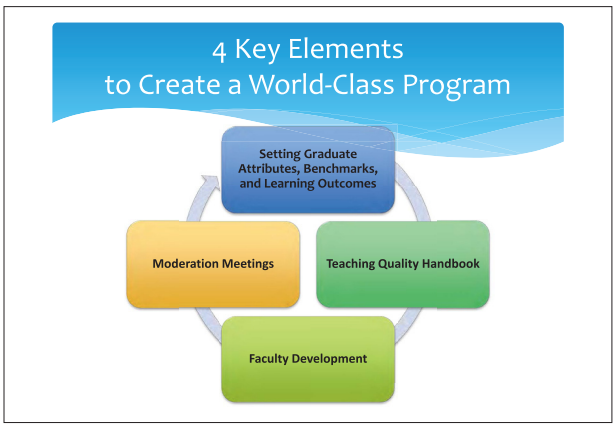


B-2-10



B-2-11

は教員の間にすごく抵抗がありました。私がみんなチェックしているような感じでしたが、今はもう大丈夫です。すごくなれてきました。対話を重ねながら基準をセッティングできます。すごくパワーがあるやり方だと思います。採点、成績評価のValidity Accountabilityとか、説明責任も果たせます。将来はそのプロセスによる外部評価を取り入れることも考えています。



B-2-12

私は、こういう4key Elementsで、チームで考えて進めてきました。それはサイクルで、1回して終わりということはないので、ずっとそれらを考えながらやっています。そして学生と話し合う、事務職員と話し合う、みんながそれでうまくいっているかどうかを確認しながら、足りないところを考えています。

最終的に、私個人のベンチマークは私の娘と息子です。このプログラムに行かせるかどうかが、私の個人的ベンチマーク。去年の終わりまではまだ疑問、大きな疑問を持っていたんですけれど、今年はやっと、いいものができました、満たしました。（笑）私の子供も、自信を持ってこのプログラムに行かせることができます。だから、強いベンチマークではないかと思います。

それでは、終わります。（拍手）

【慶應義塾大学】

慶應義塾大学　環境情報学部教授
萩野　達也

○萩野　ありがとうございます。慶應大学の萩野です。よろしくお願いいたします。

私はこの GIGA プログラムという学部での英語のプログラムの担当をさせていただきました。今日はその紹介と、特にアドミッション、入試に関することについてちょっとまとめさせていただきましたので、それを紹介させていただきたいと思います。

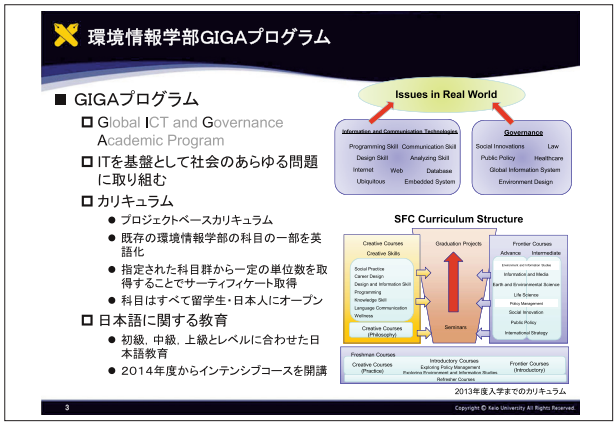
まず、慶應全体の話から入っておきます。慶應全体としても G30として全塾的な国際化とか、交換留学のショートプログラムを提供するとか、いろいろな活動もやっております。それから大学院としては経済学研究科、システムデザイン・マネジメント研究科、結構新しい研究科ですね、そちらの二つの新しいプログラム、それから学部としては環境情報学のほうに GIGA プログラムというのを作らせていただいています。それらの活動が G30ということになります。

私はその GIGA プログラムの担当です。GIGA プログラムという名前があれですけれども、もともと文科省に言ったのは、GICTG とかもうちょっと少し難しい名前でしたが、GIGA というと、ギガ、メガ、テラとか、わかりやすいだろうということで変更しました。IT 系だということもかけて GIGA、Global ICT And Governance Academic Program です。これ自身、説明するといつも長くなりますが、IT を利用していろいろな社会が成り立っていますので、それを利用していろいろな問題を解いていただこうというプログラムになっています。

このセッションはカリキュラムですが、我々のカリキュラムはプロジェクトベースカリキュラムといいまして、個々の学生が別々にカリキュラムを組みたてます。非常に必修科目が少ない。GIGA だけではなく、もともと環境情報学が少なくて、イントロダクションは結構必修ですけれど、その後はもう自分がやりたいことに従って、科目を集めていただくというコースになっていて、それと同じ形で、特に IT 系及びガバナンス、社会のことをわかっていただき、単に IT エンジニアをつくるわけではないという形でカリキュラムを自分たちで作っていただくことを考えております。

それから日本語に関しましても、最初はあまり考えていなく、日本語がなくても卒業できるようなプログラムをつくれということだから、日本語のリクワイアメントはなくても良いだろうと思って、ありませんでした。しかし、実際にやってみるとやはり日本語ができないと困るし、最終的にはやはり日本語ができない

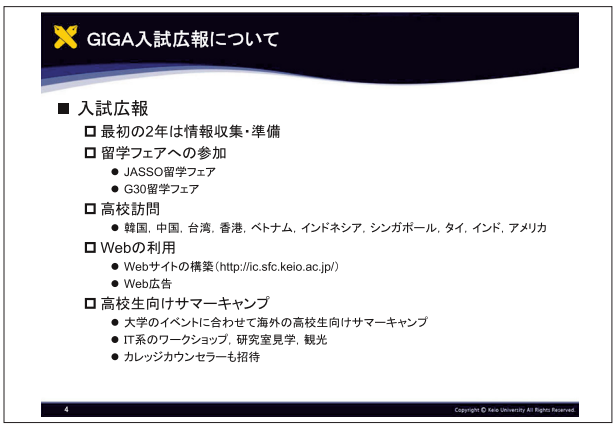
B-3-2



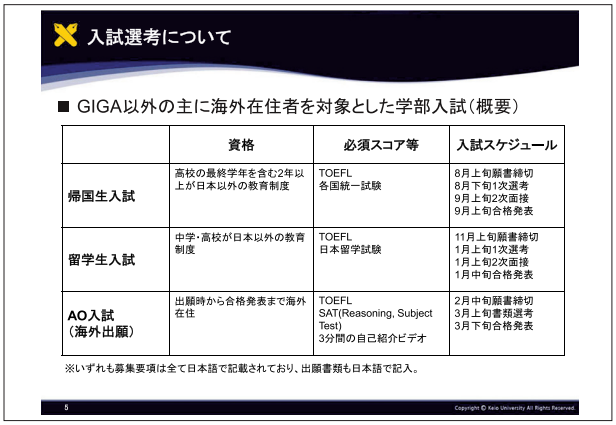
B-3-3

と就職も難しいということで、2014年からは最大８単位まで、その中に英語などほかの言語が混ざっても構いませんけれど、必修になる予定になっております。

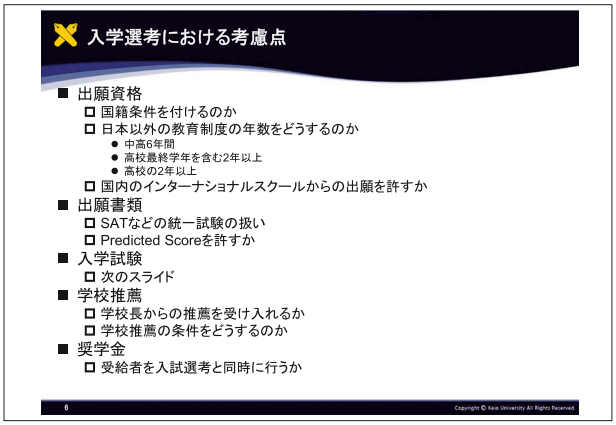
入試関係については、アドミッションもありますが、それ以外に入試広報があります。我々５年間のプロジェクトで、最初の２年間は情報収集をいろいろさせていただきました。そしていろいろな留学フェアに参加する、それから慶應としては初めてですが、海外の高校を訪問して説明を行いました。これまでは待っていれば来てくれるということだったのですが、初めて、我々のほうから売りに行くことを経験させていただいて、非常に楽しかったと思います。大学院を始めるのだと、大学としてのコラボレーションということで入っていくことができるかもしれないのですが、高校生をリクルートするということになると、海外の大学に一緒にお願いしますと言っても、競争相手になってしまうのですよね。そういった意味では我々自身でやる必要があるということで、いろいろ訪問しました。ウェブサイトの利用とかウェブ広告とか、いろいろなこともしました。それからサマーキャンプという形で、学生だけではなくカレッジカウンセラーの人に実際に大学を見ていただくということが重要だと考え、そういった活動もやりました。



B-3-4



B-3-5

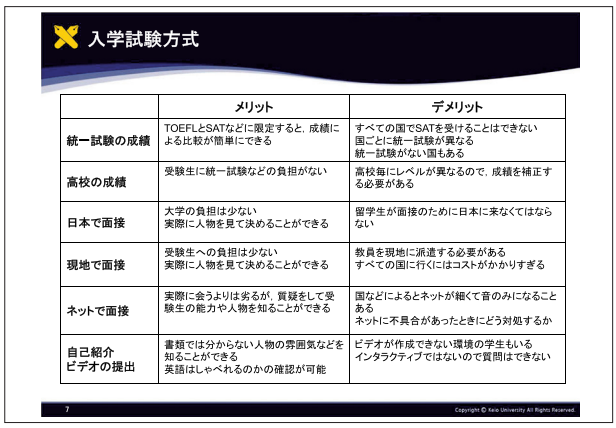


B-3-6

さて、入試をどのようにやるかということで、いろいろな議論になったのですが、GIGA 以前にもいろいろな入試をやっていました。海外の方向けの入試としては、帰国生入試。高校の最終学年を２年以上含む日本以外の教育制度の方で、そして提出していただくのは TOEFL と各国統一試験です。それから留学生入試ということでは、中・高が日本以外の教育制度ということで、６年間海外にいる必要があります。出していただくのは、TOEFL と日本留学試験です。それから AO 入試の海外出願。AO 入試というのは、自己推薦入試ということで、SFC が初めてやったものです。それの海外出願がありまして、これは出願時から合格発表日まで海外に在住、日本にいてはいけないということでした。いずれも日本語ができないと受験できないといったものだったのです。

これらのいろいろな入試方法の特徴を踏まえて、GIGA としてどのようにすればいいかということなのですが、考慮点としては、まず、出願資格をどうするかです。国籍条件は付けるのか。日本人はだめとしてしまうのも一つなのですけれど、そういうふうにはしたくない。二重国籍の場合にどうするのかということもあるでしょう。それから日本以外の教育制度の年数をどのようにするかです。中高６年間海外であるとすると、完全に海外の人となってしまいます。帰国子女だとこの条件、海外 AO だとこの条件というように、いろいろな条件の選択肢があります。それからインターナショナルスクールに対して入試を認めるのかどうかということも考慮する必要があるでしょう。

次に、出願書類です。どのような書類を出していただくということでは、統一試験とか日本留学生試験とかいろいろなものがありますので、どのようなリクワイアメントを出すか。それから、それらの試験がいつ終わるかによっては、プレディクテッド・スコアですね、予測のスコアを出していただいて、それを認めるか。これまで慶應としては認めたことなかったのですが、そうでもしないと、スコアの時期にあわせて入試を何度もやらないといけないということが発生するだろうというようなことがありました。それから実際の選考をどのように行うのか。これはちょっと次のスライドで説明したいと思います。それから学校推薦ですね。高校に推薦をお願いして送っていただくのを同時に考えるのかとか、奨学金を選考と同時に出すのかといった、いろいろなことを入試選考では考えないといけないと思います。特に入試試験方法なのですが、一番単純なのは統一試験、各国でやられているでしょうからこれを出していただく。慶應はこれまでずっとそういった形でやってきたのですが、TOEFL とか SAT に限定すると、受験生を並べて、この子はいい、この子は悪いというのがあっという間にわかるんですが、問題は、全ての国で SAT をやっているわけではないということです。国ごとに統一試験は異なるので、それを全部調べないといけません。統一試験がないような国、例えばパキスタンですと、「これらの大学の間ではこういう試験を受ければいいのですが、これで出願できますか」というような受験生からの質問に対して、どう扱うのか答えないといけません。では、高校の成績を見て選考すれば良いのではないかという考えもあります。こうしますと統一試験を受けていただく必要はない。通常の AO 入試がこの形で、高校の成績を見て選考しているので、そういった意味で日本人の選考と同じになります。ただ、高校ごとにレベルが違うので、それを我々が知って、成績を補正する必要があるかもしれません。



入学試験方式

	メリット	デメリット
統一試験の成績	TOEFLとSATなどに限定すると，成績による比較が簡単にできる	すべての国でSATを受けることはできない 国ごとに統一試験が異なる 統一試験がない国もある
高校の成績	受験生に統一試験などの負担がない	高校毎にレベルが異なるので，成績を補正する必要がある
日本で面接	大学の負担は少ない 実際に人物を見て決めることができる	留学生が面接のために日本に来なくてはならない
現地で面接	受験生への負担は少ない 実際に人物を見て決めることができる	教員を現地に派遣する必要がある すべての国に行くにはコストがかかりすぎる
ネットで面接	実際に会うよりは劣るが，質疑をして受験生の能力や人物を知ることができる	国などによるとネットが細くて音のみになることある ネットに不具合があったときにどう対処するか
自己紹介ビデオの提出	書類では分からない人物の雰囲気などを知ることができる 英語はしゃべれるのかの確認が可能	ビデオが作成できない環境の学生もいる インタラクティブではないので質問はできない

7 Copyright © Keio University All Rights Reserved.

B-3-7

それから、実際の試験として、日本で面接を行うのか、現地で面接するのか、ネットで面接するのかということがあります。我々の選択肢は、自己紹介ビデオを提出するというものです。日本で面接するために来ていただく、先ほどの帰国生入試と留学生試験については、日本に来て面接を行っていますが、日本に来て面接してもらうには、受験生に非常に負担をかけるということがあります。でも実際に見ることができるという非常に良いメリットがあります。現地で面接すると相手に負担はないですが、逆に我々が行かないといけない。ある大学では受験生がいる全ての国に行っていると聞きましたけれど、それはすごく大変だと思います。全ての国に行くのはもともとからできないと思いました。それから G30の補助金がなくなるときにどうするのかという問題もあり、これはないということになりました。ではネットで面接はどうかですが、これが非常に良いのじゃないかと思っていたのですが、国によってはネットの回線があまり太くなかったり普及してないとか、あるいは試験をやりましょうと言った途端にネットが切れた、途中で切れたときに再試験をどうするのかとか、いろいろな問題もあるだろうということで、ちょっとこれも悩むところです。IT 時代なのだからこれが良いのじゃないかと思ったのですが、最終的に我々が選択したのは、自己紹介ビデオを自分で作成して提出していただく方法です。書類だけだとちょっとわかりにくい、文書だけだとわからないことも、ビデオを見ると、ちょっと実態感があります。それにビデオだからといって選考に時間がかかるわけではなく、ビデオを見ながら書類を読んで選考すれば良いので、そんなに時間がとられるわけでもありません。非常に良いのではないかと思っています。ただ、レベルとしてはインタラクティブではないので、こちらが質問したいと思っても質問できません。単純に用意した文書を読んでいる受験生もありますし、創意工夫されたビデオもあります。創意工夫されたほうが楽しめて良いですが、環境でちょっと差が出てくるかなとも感じもしています。こちらが何か特定のものをつくれと指定しているわけではなく、自己紹介、どんなことを大学に入ってやりたいのかを聞いているだけですが、いろいろなものがあります。

実際の我々がやっている入試選考ですが、最初の年は、中高６年間を海外の人ということで、ほんとうに留学生のみに限定してしまったのですが、少し問題点も出てきました。中学・高校の間で１年間ぐらい日本に来て、日本を好きになり、だから受けたいですといった人に、いや６年間いないからだめですと断ってしまったので、ちょっとこれはきつすぎるだろうということになり、現在は、高校３年間のうち２年間を日本以外の教育制度ということに変えています。

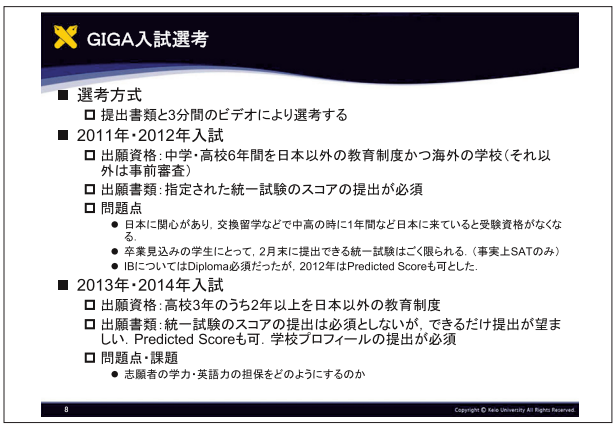
それから、統一スコアに関しても、最初は統一試験のスコアの提出を必須にしたのですが、こうするとやはり受けられないとか、間に合わないとか、いろいろなことが出たので、現在は、提出はできるだけ望ましいが必須ではないという形になっています。それからプレディクテッド・スコアでも構わないとしています。そのかわりに、学校のレベルを見ようということで、その学校からどのような海外の大学に何人進学しているかという、学校のプロフィールの提出を必須としています。問題点としましては、これで志願者の学力をほんとうにはかれるのかということがあります。それは今後、考えていきたいと思っています。

このようにで改善した結果、最初の年は志願者数が24、その次が21だったのですが、去年は55になりました。Web エントリーというのは最初に Web で志願の意思を書いていただくものですが、最初が51、次が46で、去年が75ですが、今年は100を超えていて、改善したことで大きく増えていると思います。

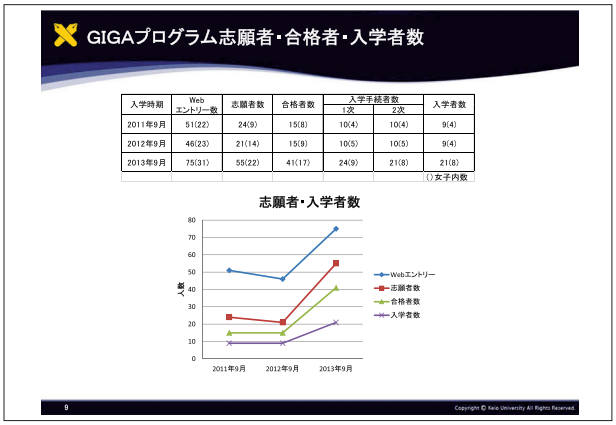
国別に見ると、ダイバーシティも大きくなってきているかと思います。志願者の国籍ですが、受験生が Web エントリーをするときに、書いたものに比べ、住んでいる国にするともう少し分散も良い形で、日本人ばかりが増えているのでないことが分かります。日本国籍であっても、海外の高校から来るというのはかなりあると思います。合格者数とは若干違いますが、このような形になっています。

GIGA 入試について、どのようになっているかについて説明させていただきました。今後は、海外の AO 入試とは、日本語と英語だけの違いですので、これを統一すること。国内は推薦入試と AO がありますが、これから国内の IB も増えてきますので、そういったものと統一をどうするかといったようなことが課題になってくると考えています。

以上です。（拍手）



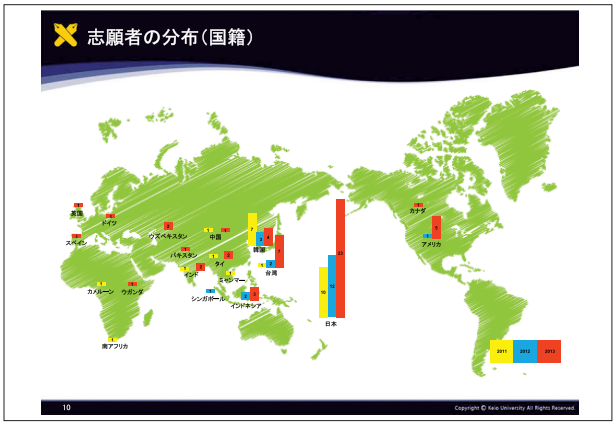
B-3-8



入学時期	Web エントリー数	志願者数	合格者数	入学手続者数 1次	入学手続者数 2次	入学者数
2011年9月	51(22)	24(9)	15(8)	10(4)	10(4)	9(4)
2012年9月	46(23)	21(14)	15(9)	10(5)	10(5)	9(4)
2013年9月	75(31)	55(22)	41(17)	24(9)	21(8)	21(8)

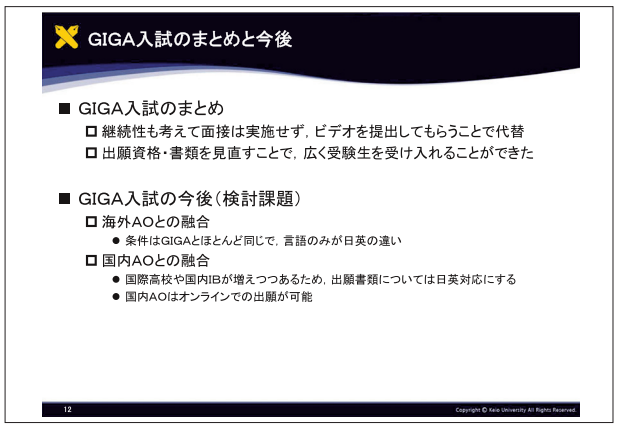
（）女子内数

B-3-9



B-3-10

B-3-11


GIGA入試のまとめと今後
■ GIGA入試のまとめ
□ 継続性も考えて面接は実施せず，ビデオを提出してもらうことで代替
□ 出願資格・書類を見直すことで，広く受験生を受け入れることができた
■ GIGA入試の今後（検討課題）
□ 海外AOとの融合
● 条件はGIGAとほとんど同じで，言語のみが日英の違い
□ 国内AOとの融合
● 国際高校や国内IBが増えつつあるため，出願書類については日英対応にする
● 国内AOはオンラインでの出願が可能
12
Copyright © Keio University All Rights Reserved.

B-3-12

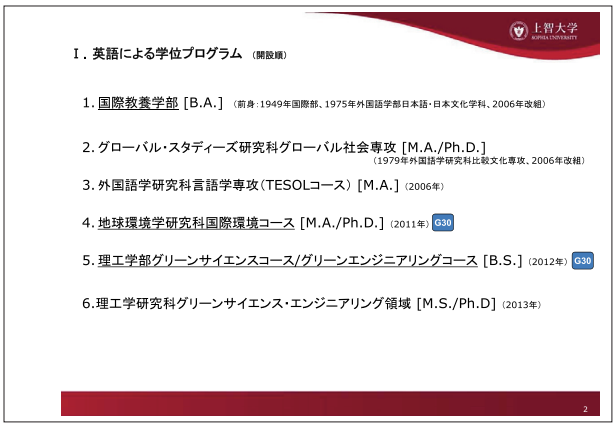
【上智大学】

上智大学　学術交流担当副学長
ユー・アンジェラ

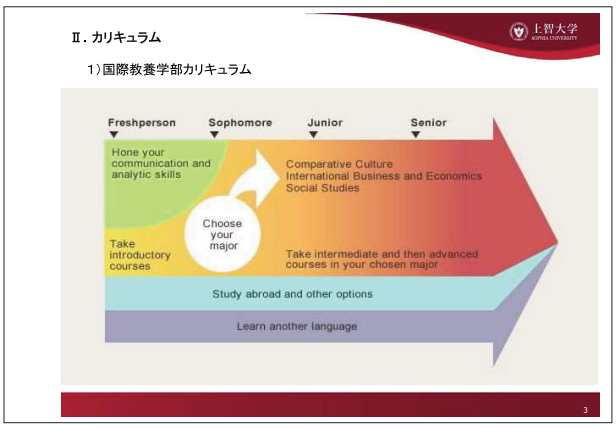
今日は、上智大学の英語プログラムのカリキュラムとアドミッションの一例を少しだけ紹介したいと思います。主に三つのプログラムがあります。まず国際教養学部は、いわゆる上智の老舗の英語プログラムでして、既に50年近く実施してきたものです。それを最初に簡単に紹介して、その後、グローバル30を機に開設した理工学部と地球環境学研究科の英語コースも紹介したいと思います。

資料にリストアップされた１から６までは、大学が完全に自前で開発したものです。その中でG30のマークがついている４と５は、G30の補助金を活用して開発されたものです。１と２は先ほど申し上げたように既に長く実施してきたもので、それに基づいてG30のプログラムを開発しました。６はG30のマークは入っていないんですけれども、５の開発によって学部の英語コースを開発によって、さらにM.A.もPh.D.も開発できるようになりました。グローバル30の波及効果による開発といえます。

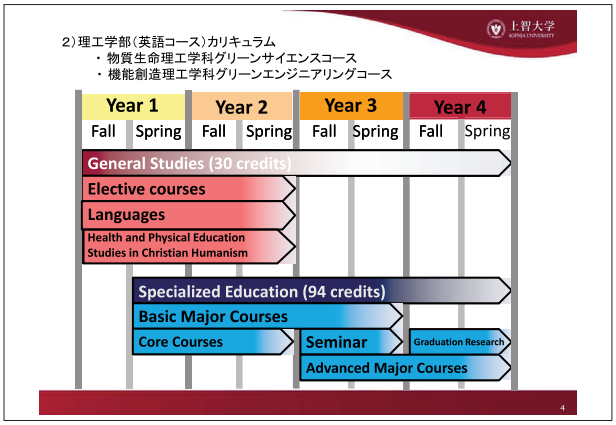
それでまず、国際教養のカリキュラムについてお話しします。私たちのフィロソフィーは、なるべくシンプルに、ということで、日本人ではなくても理解できるような簡単なカリキュラムを編成するということでした。最初の１年、３セメスター、いわゆる３学期間は、実は専攻を選ばなくていいのです。みんな入学してからリベラル・アーツの精神で、広く深くいろいろ読んで、クリティカル・シンキングを養います。それで、スキルを養ってからさまざまなイントロの入門のコースを履修し、それで２年生の半ばにメジャーを決めます。メジャーは三つありまして、Comparative Culture（比較文化）、International Business and Economics（国際経営ビジネス）、あとSocial Studiesです。この三つの中から一つ選びます。ただ、一つを選んでいても、ほかのメジャーの授業も選択科目としては履修できます。要するに、偏ったグローバル人材



B-4-2



B-4-3



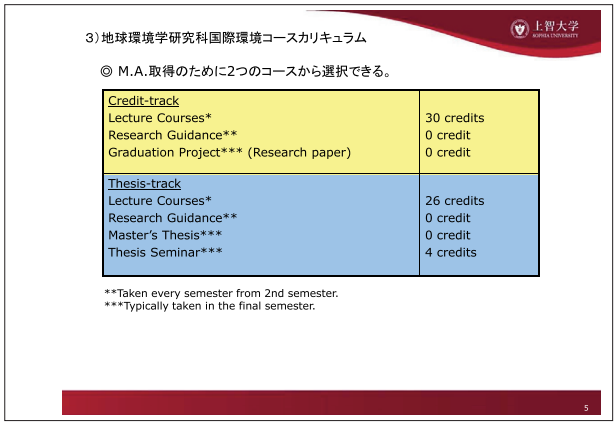
B-4-4

ではなく、なるべく文学の専門の学生も、ある程度、ビジネスでも、エコノミクスでも、履修したい場合は履修できるという単位編成です。Study abroad、つまり海外留学を半年、１年は強く薦めています。あくまでオプションではありますが、なるべく海外に行ってもらいたいと思っています。学生のほとんどは英語と日本語がかなりできるので、第２外国ごとしてもう一つの言語の学習も推奨するという構成となります。

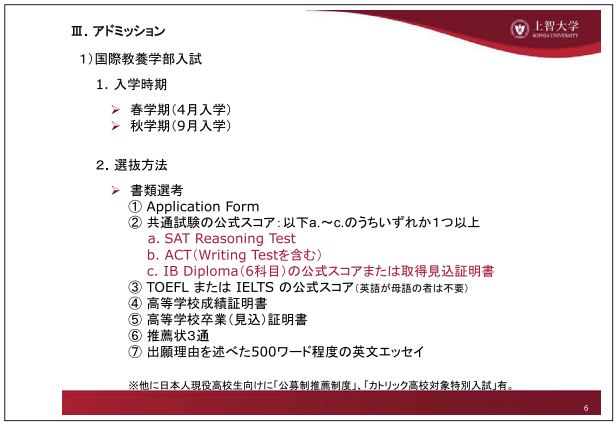
この国際教養学部のカリキュラムを参考にして、G30のもと構築された理工学部の英語コースは二つあります。グリーンサイエンスの方は物質生命理工学科、グリーンエンジニアリングの方は機能創造理工学科に属します。最初からどのコースに入るか決めるのですが、国際教養学部とはある程度は同じ概念で、最初の１年、３セメスターぐらいは全学共通科目として、様々な語学とか入門的な科目、保健体育、Christian Humanism などを履修します。同時に、１年生の段階で基礎科目、つまり自分のグリーンサイエンスやグリーンエンジニアリングに必要となる基礎科目を履修し始めて、それで年次が進むにつれて今度はゼミも履修し、３年生、４年生専用のメジャーに関わるより高度な専門性のあるコースも履修し、４年生になったらグラデュエーション・リサーチの研究、いわゆる卒業研究を履修します。英語コースは、海外から来た学生はなるべく日本語を履修するように薦めており、なるべく外国ごを１つ、さらに理工系のトピックスを扱った短期留学も薦めています。

次に、大学院のトラックについてお話します。資料に示しているのは、地球環境学研究科の国際環境コースのカリキュラムです。これは M.A. と Ph.D. 両方のコースがあり、M.A. には二つのトラックがあります。まず Credit-track というのは、卒論より Graduation Project という、わりと長めのリサーチペーパーですね。もう一つの Thesis-track の方はもっと長い Master's Thesis、修士号の論文を書かせます。単位数を合わせたら全く同じ30単位ですけれども、ただ、それぞれの学生の関心とニーズに合わせて、この二つのトラックを提供しています。簡単に言いますと、Thesis-track の学生は大抵、修了後は博士課程に進学します。Credit-track の学生は勉強しながらインターンシップなども行い、その後、就職するというパターンがあります。とはいえ、全く分かれたトラックでもありません。この二つのトラックは、やはり日本語で実施している同じカリキュラムとの間で相互に履修することができます。

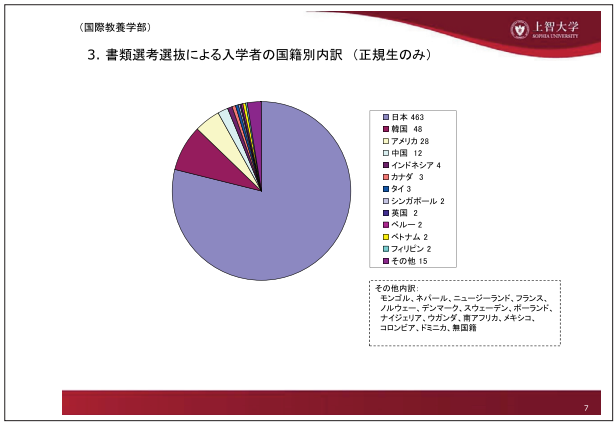
次は、アドミッションについてです。英語コースのアドミッションでは、私たちは全く面接を行わないのです。50年間やってきていますが、全て書類選考です。資料で示しているのは国際教養学部のものでで、４月入学と９月入学があります。②に書いてあるこの三つは、SAT、ACT、IB、です。IB の最終スコアが出ていない場合は、プレディクテッド・スコアを提出させます。入学後のいわゆるミスマッチング（学生の希



B-4-5



B-4-6



B-4-7

望と実際が違うこと）は、多分どのプログラムでも多少はあるとは思いますが、今まで特に大きな問題はありません。

この選抜方法に従って入学する学生は、最近の数字を見ると、国際教養学部の場合は、実は日本人が一番多いです。

少し先を急ぎます。

理工学部英語コースの方は、国際教養学部のアドミッション・ポリシーにならい、やはり全て書類選考で行います。②のＤについては、アジアからの留学生中心に募集しているので、日本の留学試験３科目も取り入れているということです。

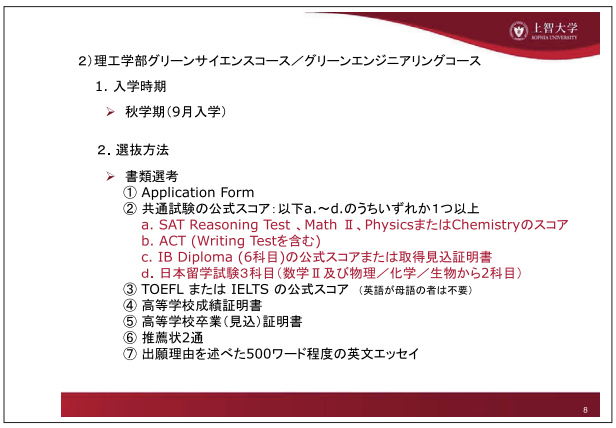
次の資料の円グラフは、理工学部のグリーンサイエンス、グリーンエンジニアリングコースの学生の国籍別内訳です。

次の資料、地球環境の方のアドミッションの内容です。こちらも同じく書類選考です。方法はシンプルで、推薦状などが必要となります。資料には国籍別の情報も記載しています。

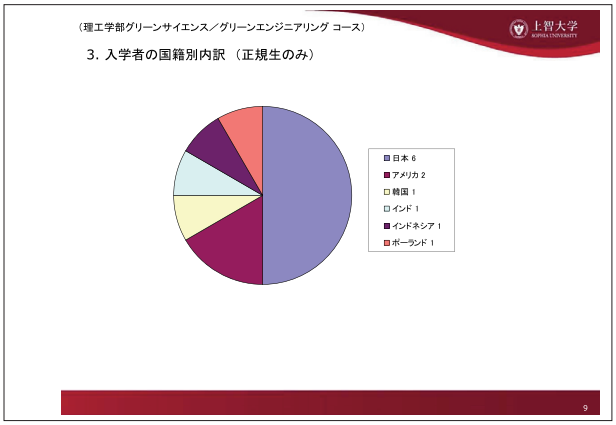
最後に、アドミッションの課題についてですが、これはたくさんありますけれども、もう時間がないので後ほどお話しします。プレディクテッド・スコアの問題は先ほど既に慶應大学からお話がありました。あと、奨学金の確保は大きな課題です。リクルートに足してはやはり資金が足りません。特にG30が終わったら、現地でのリクルートなども非常に大きな課題となります。

とりあえず、ここまでとさせていただき、後ほど補足します。

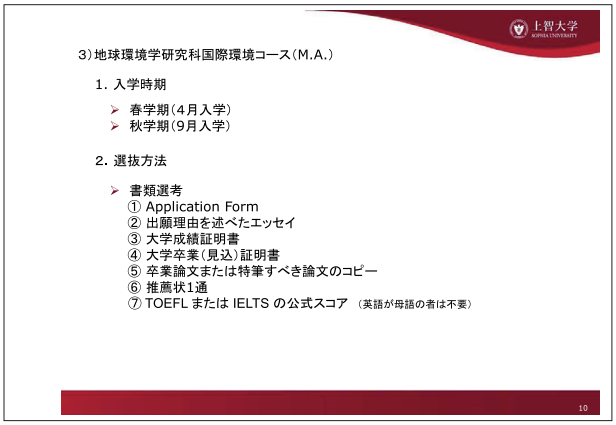
ありがとうございます。（拍手）



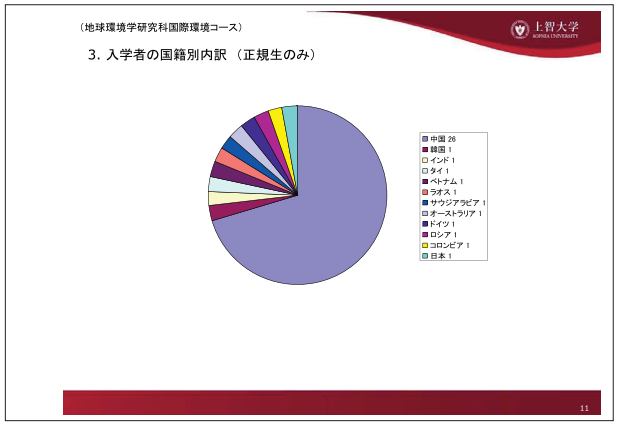
B-4-8



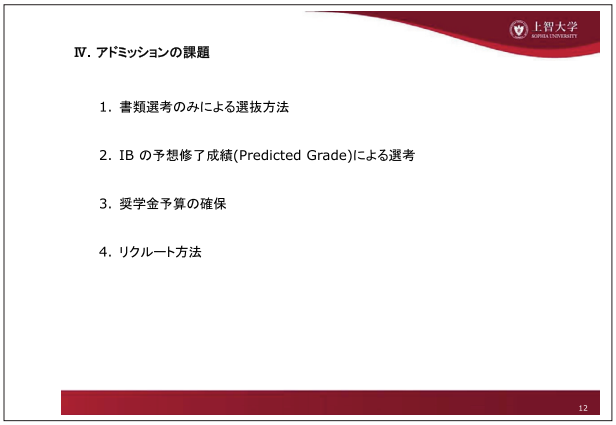
B-4-9



B-4-10

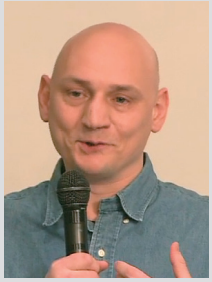


B-4-11



B-4-12

【立命館大学】

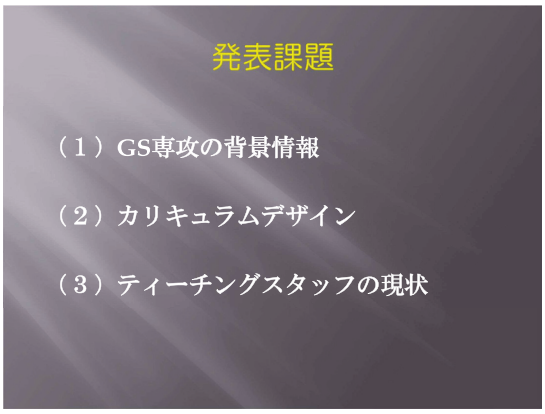


立命館大学　国際関係学部准教授
ライカイ・ジョンボル・ティボル

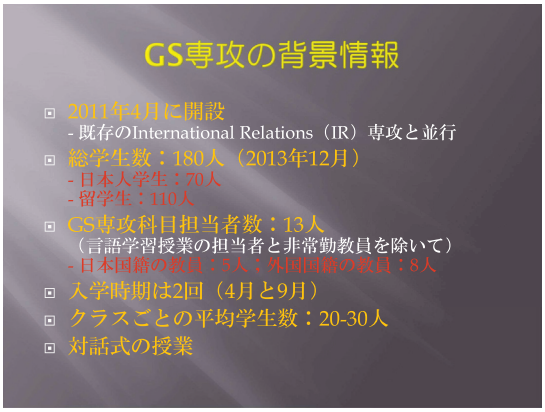
８分はほんとうに短いですから、念のために発表テキストをつくりました。読ませていただきます。早速、本題に入ります。

本日の発表資料は、グローバル・スタディーズ専攻、つまりGS専攻の背景情報、カリキュラム・デザイン、そしてティーチング・スタッフの現状の３点から成っていますが、時間の関係で背景情報についての説明を飛ばして、直接カリキュラム・デザインの課題に入らせていただきます。背景情報については、お手元にある資料を参考にしていただければと思います。

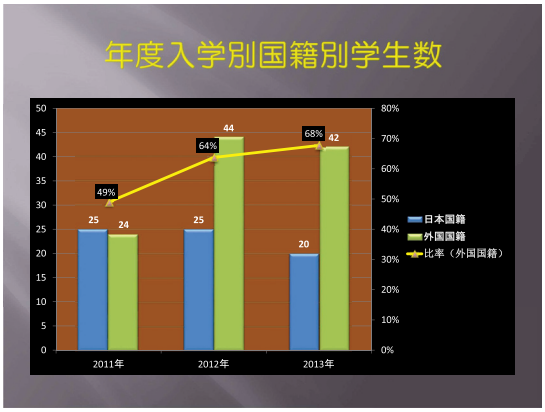
では、立命館大学の国際関係学部の初期のカリキュ



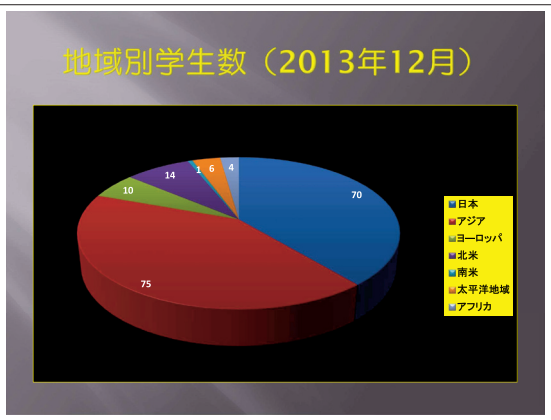
B-5-2



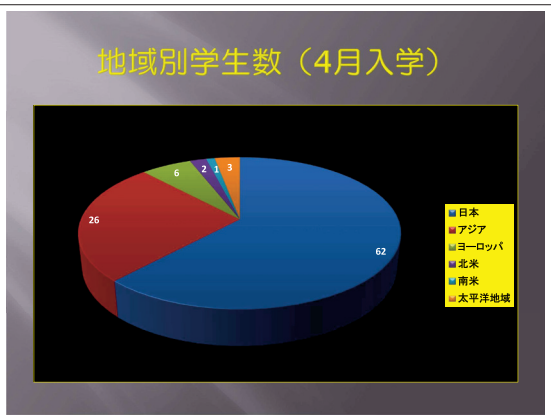
B-5-3



B-5-4



B-5-5



B-5-6

ラム・デザインの基本特徴について、まず説明させていただきます。

一つ目の特徴は、IR専攻とGS専攻が並列関係（parallel relationship）にあることを意味する、いわゆる鏡政策です。具体的には、GS専攻が2011年４月に開設されたときから、国際関係学部で日本語をもとにする既存の国際関係学専攻、つまりIR専攻と、英語をもとにするGS専攻が並行しています。ここに書いてある「言語×理論×地域」というスローガンにも反映されているように、IR専攻とGS専攻の違いは、カリキュラムよりも授業で使用される言語の違いになります。このような初期の概念の背景には、GS専攻の学生の中で、留学生の数が日本人学生を上回らないだろうという初期の予想もありました。

二つ目の特徴は、いわゆるカリキュラムの柔軟性です。これは学生自身が学びをデザインするという意味で、学生それぞれ、開講されている授業の全てから自分の興味に合わせて、勉強したいと思った授業を完全に自由ではないですが、ほぼ自由にとることができるという意味です。

そして三つ目の特徴は、クロス履修制度です。これは日本人の学生と留学生との接触可能性の増加を目指して、IR専攻とGS専攻の学生らが、自由にお互いの授業をとることができるために考えた制度です。

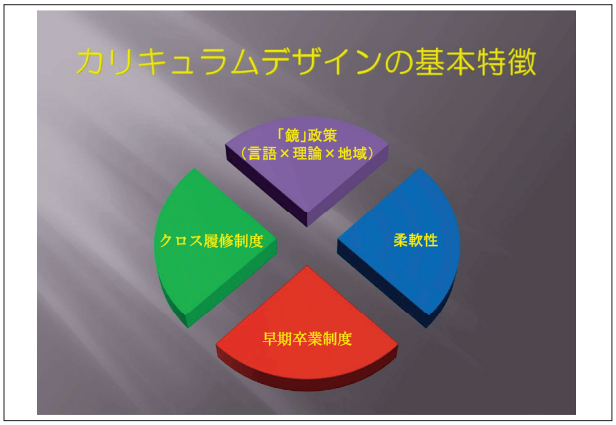
最後、四つ目の特徴は、早期卒業制度、つまり３年で卒業できるという制度です。学生の中で比較的人気がある制度だといえます。本年度2013年度において、この制度を利用して卒業した学生も既にいます。

ところが、初期の予想と異なり、日本人の学生よりも留学生の数が増える傾向にあります。留学生の望みと要求などは、日本人の学生と大変異なっているため、先ほど述べた「言語×理論×地域」というスローガンを背景にした初期の鏡政策を再考する必要があります。去年行われた学生アンケート調査によりますと、科目の多様化、例えばエリア・スタディーズ、とりわけ日本に関する科目の増加が大変望まれています。それと逆に、留学生のニーズに合わせた言語学習科目の授業、つまりアカデミックイングリッシュ、日本語、第３外国語学習の機会、そしてコンピューター・リテラシーの授業の再編成が強く要求されています。実際、今とても問題になっています。

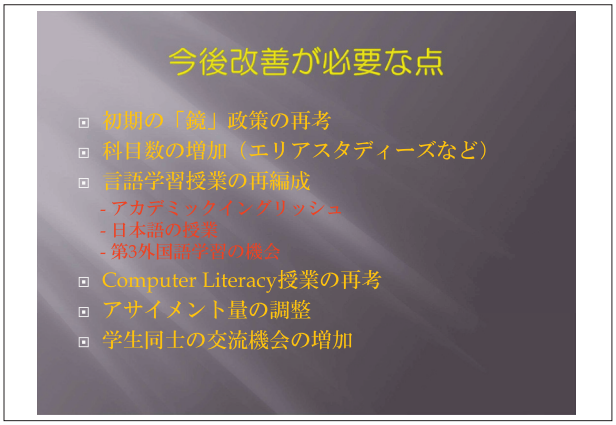
また、クラス履修制度があるにもかかわらず、IR専攻とGS専攻の学生が交流できる機会がまだ不十分で

B-5-7

B-5-8



B-5-9



B-5-10

あり、カリキュラムの改善が必要です。そして GS 専攻の授業で毎週出されている宿題の分量などについてですが、英語文化圏の出身の学生にとってはそれほど大変な分量ではなさそうですが、それ以外の学生からは多過ぎるという苦情がよく出ています。ネイティブスピーカーの学生と、そうではない学生と、とてもばらつきが激しいです。これらの問題について、学部のカリキュラム改革委員会で活発な議論が行われています。

次は、ティーチング・スタッフの現状の課題に入ります。

次のグラフは、GS 専攻の授業担当者の背景を示すものです。

B-5-11

B-5-12

GS 専攻の13人の教員の中に、任期なしの教員は５人、任期ありの教員は８人います。いずれにしても日本国籍と外国籍の教員がほぼ同程度います。つまり、雇用パターンが国籍で決まるわけではないということです。日本国籍の教員は、英語能力が非常に高く、国際的活動、仕事の経験が豊富にあります。

このように GS 専攻のティーチング・スタッフは極めて国際化しています。去年のアンケート調査によりますと、GS 専攻の学生たちもこのような国際化した環境を非常に歓迎しています。任期なしの教員の場合、国籍を問わず、学部運営上の担当業務には区別がありません。2012年度には、日本語でフォローできない外国人教員のために、教授会で英語・日本語の同時通訳の制度が導入されました。

次に、任期ありの教員の場合ですが、彼らの場合、契約が更新不可であり、学部の運営上の担当業務にもかなり制限がありますが、彼らのために毎月、いわゆる GS Luncheon Meeting を行っています。このミーティングにおいて、教授会に出席できない任期ありの教員に、教授会で議論されたことが簡潔に紹介されています。

次は、GS 科目の担当者や学部全体のインテグレーションの問題に関してですが、そのあり方は雇用パターンによって大変異なっています。任期なしの教員は、積極的に学部の運営にかかわっているので、学部への所属意識も強いといえますが、任期ありの教員は、担当業務に制限があり、契約が更新不可のため、現在、周辺化、疎外感やモチベーションの減少などがあらわれています。要するに本学部へのインテグレーションは、日本国籍か外国籍かという問題ではなく、雇用パターンに関連する問題なのです。この問題を改善するために、例えば、Tenure-track employment パターンという制度の導入が必要ではないかと思います。現時点では、本学部の人事構想委員会において、雇用パターンの諸問題に関して活発な議論が行われています。

ご清聴ありがとうございました。（拍手）

【パネルディスカッション】

○廣瀬　今日のパネルディスカッションは、セッションＢのテーマに関連する四つのサブトピックについて、それぞれ10分程度、パネリストの先生方、それからフロアを巻き込む形で議論を深めていきたいと考えております。

ご発表の中で、いろいろな論点が扱われておりましたが、中でも個人的に非常に重要で、かつこうした機会で扱うべきではないかと思われたのが、次の４つです。（１）カリキュラムの問題、（２）アドミッションの問題、（３）教授法の問題（これはFDも含みますけれども）、そして（４）G30予算で採用された、特に外国人教員の先生方の言ってみればインテグレーションやガバナンスの問題です。こういった問題が、ご発表で、非常に大きな意味を持って語られていたのではないかなと思います。

このパネルディスカッションでは、これら四つのサブトピックに焦点を当て、それぞれ10分程度時間をかけて議論をしていきたいと考えています。最後にパネルディスカッションの締めくくりとして、今回のシンポジウムのメインテーマである「国際化で大学は変わったか」に関して、パネリストの先生方からお一人ずつコメントをいただきます。

それでは、カリキュラムの問題から始めたいと思います。今日の発表で、カリキュラムを特に重点的に取り上げていらしたのが名古屋大学と立命館大学ではないかと思います。大阪大学の発表でもカリキュラム・デザインの土台となる幾つかの概念（Learning Outcomes 等）を取り上げておられました。

それでは、まず、私から質問させてください。専門教育と教養教育のバランスは、非常に難しい問題だと思います。渡辺先生のプレゼンでも、まず全学的に基礎教育のところを教える体制ができ上がって初めてG30の国際コースの開講が現実的になったというお話がありました。おそらく、いろいろな学部、それから専攻の間で、国際化に対する温度差みたいなものがあると思うんです。どちらかというと概して理系のほうが文系よりも国際化に対しては積極的かなという印象がありますが、そういった背景を踏まえますと全学的にG30事業を進めるのは簡単ではないと思います。渡辺先生、名古屋大学はそのあたりについてどう突破されたかについてお願いできますか。

○渡辺　先ほどちょっとしゃべりましたけれど、まずは理工系の授業がシェアできる分野の専攻を全部集めました。ほとんどの大学がそうだと思うんですけれど、先生方が例えば１年に１こまやってくれというぐらいだったら何とかなるんですが、三つも四つもお願いするとなると大変なんですね。特に日本語と英語とパラレルに走るということは、先生方の労度が倍になります。初め、５年前に議論したときには、日本語での授業を例えば年間５こま持っている先生は、英語で５こまをやるのかと、オーバーオール10だというような、まずは拒絶感からあったので、とにかくシェアしましょうと言いました。工学と理学と違う科目があっても基本的に同じでちょっと色が違うなら、それは上手にインターナショナル・スタンダードのテキストを使えばいいんじゃないですかということで始めました。

あと意外と文系は難しいかなと思ったんですけれど、経済と法律に聞きますと、大学院生の約半分ぐらいが留学生だそうで、ゼミとかいろいろなものを英語でやっているので、実は英語はそんなに苦ではないということがわかってきました。それでいいのならという感じのノリでした。だから、最初はほんとうにオール・オア・ナッシングで、ちょっと難しいかな、でも不戦敗はいやだなということだったんですけれど、何かばたばたっとできました。一番やらなくてもいいと言っていた文学部が、今年から開くんですけれども、やはりみんながやり始めると、何かやらなくちゃというので、今は何かいい方向に進んでいます。

○廣瀬　そうした波及効果があったわけですね。ありがとうございます。

日本語の授業に関してもお話がありましたが、実際のところ、G30の英語コースあるいは英語のみで学位

が取れるプログラムで、そもそもどのぐらい日本語に単位数を割けばいいのか。それについては、どうお考えになりますか。どなたでも結構ですが。はい、ユー先生。

○ユー　先ほど時間が足りなくて話せませんでしたが、実は私たちはG30のデザインの一部として、従来の日本語教育と英語以外の外国語教育のための言語教育研究センターを立ち上げました。これはとても意義のあるものでした。

日本語教育は、日本人にとっても外国人にとっても非常に大切な教育なので、それは生活上の最低限度のレベルの習得というだけではなく、せっかく日本に留学したのだから、日本の事情を学ぶにあたって言語の学習から始めないと物足りないので、そこに力を入れようと考えました。

一番の問題は、個々の学生のレベルの差が非常に大きいことです。たくさんのコースを提供しないと個々の学生の希望を満たせないという問題がありました。そのカリキュラムの調整、あとプレイスメントなど、ほんとうに毎学期大変苦労して学生たちを適切なクラスに振り分けていました。文科省はよく、グローバル教育の中に日本人のアイデンティティとかを強調しますけれど、私たちは、国籍と人種などにこだわらず、日本で国際教育を受ける場合は、日本人でも日本人でなくても、日本語をベースとするということで、一定レベルの取得と理解を得ることの重要性を非常に強調しています。

○廣瀬　なるほど。上智大学もG30で新設されたコースは基本的に理系だと思うんですけれども、九州大学でも、学士課程で新設された国際コースは、農学部と工学部で、ともに理系です。それで、日本語の授業をどのぐらい入れるかについては、カリキュラムデザインに携わる教員の間で侃々諤々ありました。開講当初は、そもそも英語のみで学位が取れるという前提だったわけですから、日本語は全く要らないという話だったんです。ですから、カリキュラムにほとんど入れていなかったのですが、日本に残って就職したいという学生がいたり、ユー先生のお話にもありましたけれど、日本で学ぶ以上、日本に興味を持ってほしいし、日本をもっとよく知ってほしいということもあります。そのためには日本語を学ぶことが必須だということになりました。それで結局、農学部は、**126単位の卒業単位のうち16単位まで増やし、工学部は７単位**まで増やしました。

○ユー　一つ補足すると、私たちは、日本語の教育は必修ではないのです。強く推奨するという姿勢です。

○廣瀬　立命館大学はどうですか、ライカイ先生。

○ライカイ　立命館大学は、現在、最初のセメスターにおいては、オプションではなくて義務になっています。毎週６こまです。その後はオプションです。実際は、国際関係学部のGS専攻の学生の背景はとても多様です。なぜ日本に来るのか、日本のために日本に来るのか、それとも別の理由で来るのかによって、目的は大分違っています。日本語の勉強が全く必要だと思っていない学生もいる一方で、とても日本で就職したい学生もいます。ですから、現在は義務になっていますが、将来もしかすると上智大学と同じように、強く勧めるような形でオプションにするかもしれません。現時点では、カリキュラム改革委員会で、この問題もよく議論されています。

○廣瀬　萩野先生はいかがですか。

○萩野　GIGAのほうでは、最初、理想を考え、日本語は要らないだろうということでした。それから、環境情報学部は現在のところ、外国の科目はゼロ単位で構わないということになっています。そんなこともあり、そう始まったんですけれど、来年からやはり言語も重要だろうということで８単位になりました。それは日本語に限らず、英語でも構わないです。英語の上のレベルですね。日本人で英語がよくできる子が混ざった形でもとっていただくということで合計８単位です。それから、日本語の教員も新しく雇用されました。インテンシブという週４こまの日本語ですね、そういったものもあります。というのは、入ってくる子のレベルがいろいろなので、画一的にこの日本語を受けなさいと言ってしまってもおもしろくなかったりするからです。全部、日本語の先生に面接をしていただいて、レベルを決めていただくという形をとっております。

○司会（廣瀬）　なるほど。ありがとうございます。では、山本先生。

○山本　大阪大学では、最初から両方の学部プログラムは、12単位を必修科目として決めていて、それは変わっていません。一つ問題になったのが、日本国籍の子で、日本なり海外のインターナショナルスクールで、大分日本語能力が高い学生をどうするかです。必修させるとつまらないので。それが最初の１年目にすごく議論されました。やはり、普通の留学生と同じプログラムだと日本語教育プログラムが入るので、600レベル、いわゆる１級のちょっと下ぐらいまでにして、それを超えると、ほかの言語か、日本語による共通教育の科目で読み換えることにしました。今、それでうまくいっています。

○廣瀬　ありがとうございました。最後に、渡辺先生。

○渡辺　うちは最初から日本ができない留学生には日本語をきちんと教えることにしています。普通、日本人は英語と第２外国語ですけれど、その分が、例えば理系なら12単位、文系なら18単位、全部日本語です。そのために、全く日本語に興味がなかった人にも教えるという０次の日本語教育ができる先生を２人新規に雇用しました。

あと、うちは国費留学でほかの大学に来る学生の日本語教育、いわゆるトレーニングコースを開いていますので、そういう意味ではゼロ次からビジネス日本語まで、毎日開講していますので、そこにレベルごとにアサインするということになっています。

○廣瀬　なるほど、わかりました。ありがとうございます。

ほとんどのパネリストの方が、やはり最低限の日本語の授業は必要であろうというご意見だと思います。それ以外にも、オプションとして日本語の授業はある程度担保していかなければいけないということに異論はないかと思います。そこで次に選択科目について伺いたいのですが、どのような選択科目をどの程度用意しなければならないのでしょうか。ご参考までに、九州大学の場合、工学部のプログラム、カリキュラムも、農学部のプログラムも選択科目はほぼありません。基本的には、必修科目だけで成り立っています。それに関して、一部の学生から不満があがっていると聞いています。ライカイ先生のお話にもありましたけれども、学生にとって魅力的なカリキュラムをつくるために、どの程度の選択科目を学生に提供すべきでしょうか。どなたかご回答いただければと思います。それでは、山本先生。

○山本　これもすごく大きな課題になりました。今、３セメスターまでの共通教育の中で、各セメスターで一つの選択科目しか入っていなかったので、かなり文句が学生からあって、ちょっとリアレンジして必修科目を減らし、今二つになりました。それでみんなちょっと落ちついているような感じです。そして４セメスターからどんどん増えてくるので、問題は選択科目を提供すると、全体的な科目数がすごく増えるし、そして各クラスで人数がすごく少なくなって、開講しても１人もその授業を受けない場合もかなりあることでした。ですから今、必修科目は、原則として、私たちの言葉でノンG30の学生にも開講しています。ノンG30とは交換留学生、一般の日本人学生、一般の留学生のことです。彼らでも、英語能力があれば必修科目をとっていいということで、それでうまくいっています。今、課題になっているのは、履修する学生の人数が相当多いのでどうするかです。G30の学生が例えば１つのクラスに２人で、残りの40人、50人がノンG30だということですね。昨日の会議でも、もうちょっと減らさないといけないのではないかと議論されました。大阪大はG30の人数が少ないので、開講するんだけれども、大人数にならないことが今問題です。

○廣瀬　渡辺先生、どうぞ。

○渡辺　うちはラッキーなことに、非常に広い範囲で開きましたので、理系の学生でも、例えば物理の学生が、化学も生物も地球科学もとれるという意味では、多分選択肢は非常に多いです。最終的に文学部が開いてくれたので、文系科目が法律、経済、政治、文学、それから言語という教養教育があります。そういう意味では220になったというのは、非常にG30のおかげで、うちの大学はこのG30のおかげで非常に基礎体力をつけたと思っています。国際的な競争力が非常に強くなりました。皆さんも、できれば、広い分野で開いたほうが、最終的には先生方も楽だと思います。

○廣瀬　なるほどですね。ありがとうございます。

それでは、カリキュラムの問題に限定はさせていただきますが、フロアから質問、コメントを受け付けた

いと思います。何かございましたら。どうぞ。

○フロア１　既に10年ほど前に退官しているんですが、たまたまマレーシア、ここは英語圏ですけれども、マレーシアと日本の政府で共同で工科系の大学をつくりました。その観点から、前半は山本先生に、後半は萩野先生と渡辺先生にお聞きしたいと思います。

カリキュラムのコンセプトとして、今おっしゃったイギリスのQAA、あるいはワシントン・アコードをベースにした国際標準のカリキュラムがあると思うんですけれども、このときに非常に問題になるのは、あるいは私が問題点だと考えているのは、学生にどうモチベーションを与えるかということです。あるいは、高等教育の場合、当然、その教育の内容には、ニュー・ファインディング、R＆Dの能力をつけることが要求されておりますので、そういうホワイベースのカリキュラム、あるいはハウツーベースのカリキュラムをどうしておられるか、山本先生にお聞きしたいです。

日本の先生方、特に工学の先生方にはこの逆です。北欧にプロジェクト・ベースド・ラーニングというのがありますよね。これは、プロジェクトを前提にして、その課題を学生に認識させて基礎教育をするというものです。あるいは、専門教育でも、課題を前提にして専門教育をやるというやり方です。基本的にはこれは非常にいい方法ですけれど、時間的に足りないということで、その中庸をいっているのが私は日本で言う卒業論文をベースにするような、例えば講座あるいは今はグループ制の中での教育だと思っています。これは私の経験からすると、非常にモチベーションを与えやすいです。ただ、デメリットは、ワシントンコードとか、あるいは国際標準化に問われているようなことです。標準化というのは極めて難しいというのが私の経験談です。その標準化をどういうふうにしてクリアしておられるかということをお聞きしたいと思います。

○廣瀬　では、まず山本先生。

○山本　かなり幅広いことです。モチベーションのことは、やはり教育方法です。ずっとskillsとknowledge、つまり知識が焦点になっているので、やはりスキルを考えると、90分一方的に教授が話して、学生が眠たくなる方法はあり得ません。だから対話的な授業とか、プロブレム・ベース・ラーニングとかを随分入れます。問題は、知識が基準になるために、かなり授業外の課題、特に参考文献を読むことがすごく大事になることです。授業の中でそう知識的な幅広いところまでカバーできないので、宿題となります。それでG30の学生はよく、ほかの学生よりも図書館にいる時間が長く、課題をでは長い論文、小論文とか多いと言います。私はワシントンはそんなに詳しくないんだけれど、イギリスのモデルは、コンタクト・タイムは少なく、自分の勉強の時間、いわゆる自習、インディペンデント・スタディーが多いです。それをある程度日本でまねすると、問題は、各科目は２単位で、すごく学生のワークロードが多いことです。それは、私もほんとうに希望として２単位で提供するんじゃなく、もうちょっとまとめて、もうちょっと好きにやればプロブレム・ベースド・ラーニングとか、実習、自分で課題を出してすることはすごく楽になります。今の制度は、90分のレクチャー・スキルに基づいて、もっとクリエイティブに授業をすることが課題です。そしてknowledgeの部分を満たさないといけないので、授業以外の時間の勉強の時間を多分授業よりも二、三倍しないと、満たせません。

○廣瀬　萩野先生、プロジェクト・ベースド・ラーニングがモチベーションを学生に与えやすいかわりに標準化がしにくいという、このご質問に関してはいかがですか。

○山本　どうしてしにくいのでしょうか。要するに内容をカバーすることが授業の90分でできないので、基準は、私が見た基準、ベンチマーキングはskillsとknowledgeで、knowledgeはそんなに細かくじゃないけれど、それを90分で、対話的な授業のみで満たすことができないということです。

○廣瀬　先ほどのご質問の中で、プロジェクト・ラーニングに関して、一般的に言われていることとしては、モチベーションを与えやすいけれども標準化がしにくいということがあったと思うんですよね。それに関して、また……。

○山本　それにお答えたしたと思ったんですけれど。プロジェクト・ベース・ラーニングは、そういう参加

型の授業はもちろん、すごいモチベーションが高くなって、楽しいです。

○フロア１　山本先生がおっしゃる意味は非常によくわかりました。要するに、教育法を工夫して、それが直接、公正に成績に反映するようにということに理解すればいいと思うんですけれど、今、課題解決型というのはなかなか評価が難しいといった理由は、日本での私の経験では、先生方は今どうしておられるのか知りませんけれど、卒業論文とかは比較的そういうサブジェクトから離れた形で、ハウツーもの、あるいはホワイベースの教育をするんですね。例えば、セミナーであったり、多分、今もそうだと思うんですけれども。そういう卒業論文とかの評価は、最後は発表会とかその過程での知識を質問しながら、評価できるんですけれども、そこには普通、山本先生がおっしゃるようなプロジェクト・ベースド・サブジェクトのようには、なかなか公正にはできにくいなという。

○山本　ああ、そういうことですか。最終的な基準ではなく、その科目のですか。

○フロア１　いえいえ、私が言っているのは、今の私の日本の卒業論文についてです。

○廣瀬　すみません、時間が押しておりますので……

○山本　ちょっと一ついいですか。

○廣瀬　じゃあ、一つだけ。

○山本　例えば、そのプロジェクトだったら、発表でも、その基準の前にルールブックをつくります。今、３年生がインディペンデント・プロジェクトを終わったばかりですが、私がしたのではないですけれど、Bysouth 先生がすごい時間をかけて基準をつくります。そして採点するときに、それで採点するし、学生に最初に、この基準でこの課題を評価するよと示します。ということで、基準はつくります。

○廣瀬　萩野先生、よろしければコメントをお願いします。

○萩野　我々のところについてちょっと話させていただきますと、分野がいろいろとあります。環境情報学部、それから実は、SFC にはもう一つ総合政策学部とありまして、入ってしまうと全く区別がない形で一体となってやっています。新しい学部ですので、何とか学科とかついているわけではないので、非常に多様です。各先生がセミナーを開いていまして、それらを我々のキャンパスでは１年生のときからとれるようになっています。通常だと３年生あるいは４年生ぐらいでとって、卒論を受けるだけなんですけれど、そうじゃなくて、もう１年生の段階から先生と密接に連携をとりながら、どういった科目をとるといったようなことで進めるという形をとっています。

○廣瀬　ありがとうございます。

　それでは、アドミッションの問題に移ります。G30事業で立ち上がった全ての英語コースが秋入学を採用しているわけではないですよね。例えば慶應義塾大学の GIGA は４月入学ですか。

○萩野　いえ、秋入学です。

○廣瀬　失礼しました。上智大学は国際教養学部とそれから大学院は春と秋の両方やっていらして、G30で今回立ち上がったグリーンサイエンスに関しては、基本的には９月ですよね。留学生の都合等を考えると、９月入学のほうが学事暦的に優れている気もするのですが。パネリストの皆さんに、秋入学についてご意見を伺えればと思いますが、ユー先生いかがですか。

○ユー　秋入学は、対象となる学生は入りやすい時期ということもあります。歴史が長い国際教養学部は、先ほど見せた国籍別の表のとおり、実は日本人学生の方がよほど多いんです。ですから、４月入学と秋入学の両方あれば選択肢が増えます。逆に、新しくできたグリーンサイエンス、グリーンエンジニアリングは秋入学のみですが、実際、立ち上げてから２年しかたっていないので、定員はまだ満たせていません。秋にはもちろん、中国とかちょうどタイミングよくすぐ入れる学生はいますけれど、アジアを見ると、実はみんなちょうどタイミングよく秋入学できる国は多くありません。ですから、秋入学１本ですと、そのタイミングにちょうどマッチングできる国だといいですけれども、ある程度、柔軟性があった方がいいんじゃないかと思います。

○廣瀬　４月と９月の両方で入学を認めると、少なくとも基礎的な授業に関しては、両学期ともオファーし

なくてはならず、教員の負担もかなり増えるのではないかなと思いますが・・・。

○ユー　国際教養のほうも、ずっと前からセメスター制なので。新しいコースたちもなるべくセメスター制でということです。確かに二重オファーするという課題があります。

○廣瀬　なるほど。ありがとうございます。

　そのほかに何かコメントがあれば、先生方お願いします。はい、渡辺先生。

○渡辺　受験生というか、来る高校生の側から見れば、マジョリティーは秋入学なので、やはり秋入学というのはいいんだと思います。今のところちょっとペンディングになっていますけれど東大が秋入学を言われています。先ほどから言っているようにうちは非常に増えましたので、学部に関しては日本人に卒業要件の50% を G30の授業で取ってもいいという全学ルールをつくっています。ただし、部局によっては20% と縛りがあるんです。そうすると、半年ずれているというのは非常につらいことで、やはり特に理工系の物理、化学、生物、あの辺、工学部もそうですけれど、順番に積み上げていきますので、半年のずれはなかなか取れないです。実は、私は個人的には、東大の理由とは別で、日本人も秋入学をしてくれると、ほんとうにシームレスに、どっちをとってもいいという本来の姿になれるような気はしているんです。

○廣瀬　なるほど。ありがとうございます。はい、ライカイ先生。

○ライカイ　立命館大学の国際学部でも、４月と９月の２回入学時期があります。先ほどの発表のときに言いましたように、この２年間で、日本人の学生よりも留学生のほうが圧倒的に増えました。４月入学は日本人の学生のほうが圧倒的に多くて、９月の場合は外国からの受験生が多くて、もしこの２年間のトレンドがこれからも続きますと、おそらく４月入学よりも９月の入学のほうがより重要になると思います。教員としては、別に私はそれで負担だとは全く感じていません。ただ、もちろん入学試験自体は、２回も３回も毎年やらないといけないですが、負担だとまでは思っていません。あと、教育実践の教室でも、授業でも、別にこれだけで負担は私は感じていません。

○廣瀬　わかりました。ありがとうございます。それでは、フロアのほうからアドミッションに関するご質問をいただければと思います。はい、どうぞ。

○フロア２　先ほど萩野先生とユー先生どちらからも、出願資格という話が出たと思います。出願書類を受け取ったときに、その学生の出身学校について、その学校が日本の高等学校と同じレベルであるか、あるいは当該国において正規の学校であるか、認可を受けているかといったことについて、確認をされていらっしゃいますか。

○萩野　それはもちろんやります。当該国においてちゃんと大学に進学ができるレベルにあるのかということも確認しております。それから怪しい場合には、アメリカの大学で受け入れているかどうかとかいうことも調べて、まだそれがあまり受け入れられないようだと、ちょっと今回は見送っていただくといったようなケースもございます。

○ユー　上智も同じですね。ただ、それに関連する一つの課題としては、国によって飛び級とか12年未満での入学、そういうこともたまにあるんです。それはやはりケース・バイ・ケースで検討しなくてはいけません。

○廣瀬　ほかに何かご質問はございますか。

○フロア３　済みません、名古屋大学です。先ほど IB のプレディクテッド・スコアを活用されているとおっしゃっておられたんですが、35点ぐらい課していて、ほんとうに受けたら実は30点を切っていたというケースが出てくると思うんですが、その場合、内々にある程度プレディクテッドも何点、受けた結果が何点だったら入れるとか、要するにコンディシャル・オファーを出しているのかどうか、そこら辺はどういうふうに活用されていますか。お答えいただける範囲内でお願いしたいと思います。

○ユー　簡単に。私たちは、IB での入学は近年始まったことなので、それは最大の課題です。プレディクテッド・スコアと修了のスコアとで、たまに非常に大きなギャップがあります。（笑）ギャップがあるのは予想していたんですけれども、範囲内のギャップですと、推薦状もほかのスコアもあるので大体入学させるん

ですが、あまり大きなギャップですと非常に困る場合もあります。方針としてはなるべく入学させるんです。ただ、とんでもないギャップの場合は、やはり検討しなくてはいけないです。

○萩野　慶應の GIGA のほうでも、プレディクテッド・スコアを認めているんですけれど、コンディショナル・オファーというのは出していません。合格を出してしまったので、ディプロマをもらえればいいということになっています。ですから、もし今後、ギャップがあるということが積み重なってくると、我々も考える必要があるのかなと思います。まだそれほどの差は出ていないという現状でございます。

○廣瀬　山本先生どうぞ。

○山本　私たちもそこはよく議論しました。今、人間科学コースのほうはプレディクテッド・スコアを見て、コンディショナル・オファーを出して、そのコンディショナル・オファーの中に何点以上と書いています。そして何点以上にならないと不合格にします。その理由は、一つは、その学生に最後まで頑張ってほしいからです。アメリカ風だったらディプロマだけでいいということですが、自分の娘もディプロマして、よく聞いたことですが、オファーがあれば、もうその後はどうでもいい、遊び放題です。それがちょっと残念だと思います。教育者としては最後まで頑張ってほしいです。だからちょっと基準をつけてとなります。だから面倒は面倒です。一つは、条件つきじゃないところに行ってしまう可能性もあります。もう一つは、今までは一括合格にしているので、７月半ばごろまで、オファーじゃないんだけれどサーティフィケーション・オブ・インテントというか。（笑）すごくごまかさないといけなかったです。それがちょっと大変ですけれど、それしかないのではないかと思います。

質保証という面もあります。やはり大きく下がると、ついていけないと思います。そうなると、かわいそうだということもあります。

もう一つは、今年は GCE-A レベルを取っている学生もかなり増えてきて、A レベルは８月半ばごろにスコアが出るので、それは今の課題です。でも、A レベルは、IBDP と違って、１年前の要するに高２の終わりに AS レベルをするのです。５科目です。だから今私たちは、この A レベルのプレディクテッド・スコアを見ながら、AS レベルのほんとうのスコアを見て、アンコンディショナル・オファーは多分出すんじゃないかと思います。でも、まだちょっと議論中です。

○廣瀬　ありがとうございます。萩野先生のプレゼンテーションの７ページに、入学試験方式とタイトルされたスライドがありますが、非常によくまとまっていて参考になります。九州大学は G30予算をいただいている間、原則として、現地入試を行っていました。本学に入学を希望する受験生に来日してもらうのではなく、九州大学のほうから、受験生が住む地域に出向いて、現地で筆記試験、面接を行っておりました。G30予算が切れることもありまして、今後どういった形で入試を行うのか、非常に大きな問題です。

慶應義塾大学はビデオを採用されているという話を伺いました。また、ネットでの面接のメリットとデメリットにも言及されております。確かに九州大学での経験にも合致します。今後、現地に面接に行けない、スカイプもディペンダブルではない。そうしたら受験生にビデオを提出してもらうというは、オルターナティブとして非常にいいんじゃないかと思うんですけれど、ビデオはなぜ３分なんでしょうか。（笑）

○萩野　３分が目安です。３分ぐらいならちょうど我々が見ることができるという。もともと教員で全員見ていますので、あまり長いと、何十件もあると、相当な時間になってしまいます。書類だと、斜め読みというわけではないですけれど、ぱっと見てわかるという感じですけれど、ビデオは流し飛び見はちょっとできないので、３分ぐらいが適度だということです。今のところ３分で結構。でも、３分以上に延びていても受け取っています。５分ぐらいの人もいます。３分は目安です。

○廣瀬　３分でその受験生の人柄とか能力といったことについてわかるものでしょうか。

○萩野　最初、我々は単にカメラの前でしゃべっているだけのビデオが来るのではないかと思ったんですけれど、そんなことはありませんでした。クリエイティブです。学校を紹介したり、自分で描いた絵を出してきて、それでアニメーションをつくったり、あらゆるおもしろいことをやってくれて、かなり楽しめます。（笑）

○廣瀬　それでは、現地面接とかスカイプ面接の代替物に十分なり得るとお感じですか。

○萩野　もちろん、そこまではいかないと思います。やはり、奨学金を与えるときには面接をしたほうがいいんじゃないかということが、最近はちょっと出つつあります。やはりもう少し聞いてみたいというところは答えてくれませんので。そういった課題も出てきつつあります。

○廣瀬　ありがとうございます。それでは、時間も押しておりますので、教授法に進みたいと思います。山本先生から、Teaching Quality Handbookのご紹介をまずいただければと思うんですけれど、よろしいでしょうか。

○山本　ハンドブックの内容ですか。

○廣瀬　はい。先ほどのご発表の中で扱い切れなかった点について、お話いただければと思います。

○山本　これは日本語と英語では、翻訳の問題で英語のほうがちょっと分厚いです。教育方法とLearning Outcomesの一貫性と評価方法とか全部ピックアップしています。要するに今の高等教育に関する教育学的なものを全部絞られて入っています。大体一般の先生方はG30学生を教えると、やはり対話的なプロブレム・ソルビングとか、もっとクリエイティブな授業をしないといけないと考えます。やはり自分の言語じゃないと90分自分が一方的に話すことは大変です。だから一般の教授たちがG30授業を担当するモチベーションは、やはりこういう方法を身につけることです。Teaching Quality Handbookが分厚い理由は、去年いろいろな事例を入れたからです。そしてそれを見ながらする対話的な授業は、単なるディスカッションではありません。「それはどう思いますか」「つまらないです」と学生はすごく文句を言います。もっと考えて、例えばプロブレム・ソルビングだったら、情報を少しずつ流すとか、違う情報だとどうか、最初この情報だとどう思かとか、違う情報を入れるとそれが変わってくるとか。そして問題を出すときには、グループで解決させるとか。私は講義が好きですので、講義の中で問題を出します。そしてグループで解決させます。そしてそのことについて発表させて、そして私がまた講義をするという。その方法を先生たちはものすごく自分も身につけたいと。モチベーションが高く、寝ることが減ります。もうちょっとやわらかく書いてもいいんじゃないか思うんです、自分の限界、キャパシティーの問題もあるんですけれど。大阪大の先生たちは、そうした会話は初めてだといいます。今まで、そういう場では、どうやって教えるのか、どうやってモチベーションを高くするのかといったことは今までタブーでしたので、これを利用しながら、やはりG30学生は違うという前提から、総合的に教える方法を考えさせるということです。

○廣瀬　私も印刷されたものを拝見させていただいたのですが、他大学にとっても非常に参考になると思います。ネット上でも公開されているんですか、Teaching Quality Handbookは。

○山本　私はそう言っていたんですけれど、研究科長がちょっと反対で。「せっかくの私の大事なものだから」って。だから本にして売ろうかと思っています。（笑）

○廣瀬　なるほど。（笑）

○山本　役に立てば、そうですね。

○廣瀬　必ずや役に立つと思います。おそらく、どの大学ででも、研究者としては著名だが、英語で授業を持ったことがない教員、研究者の方たちがたくさんいらっしゃると思うんです。そしてそうした方たちに、いかにG30の英語コースに係ってもらうか、いかに動員するのかなど、知恵を絞っていると思うんです。今回は、時間の関係上、ほとんどカットされておりましたが、渡辺先生のプレゼン・スライドの中に、必ずしも英語での授業経験がない教員が経験を積む場としても期待されているG30 for Everyoneに関する言及があります。そちらについて簡単にお話しいただいてもいいですか。

○渡辺　基本的に、今のところ、大学としてはG30の授業を卒業単位として認めるとは言っていますけれど、実際に学生はやはり半年ずれていますので、なかなか英語の授業を聞くチャンスがないというのがあります。ですから、例えば火曜日、水曜日、木曜日と三つパラレルにイブニングに、G30の先生方を中心に、日本人でも英語で授業をやっている先生に、オムニバスで90分の英語の授業をやってくださいとお願いします。それを学部の例えば２年生、３年生に自由に聞いてもらって、今後、日本人に対しても英語の授業がマストになってきたときに授業を聞くことができるようにトレーニングするというプログラムをやっていま

す。これはG30の先生は皆さんボランティアなんですけれども、かなりの方にやっていただいています。特に理工系の学部の３年生は学生実験が５時半に終わらなくて、大体６時過ぎまでやっているということなので、６時半から８時まで、火・水・木にしています。例えば火曜日にとっている学生は、ずっと火曜日のイブニングを聞くし、水曜日の学生は水曜日。ただし、自分の都合が悪ければ別の日にその先生の授業を聞いてもいいし、大勢の先生がシェアすることで、１人で３回、例えば同じテーマを火・水・木と違うオーディエンスにすれば、二つのテーマで例えば４つ、５つ教えても、大して厳しいデューティーという感じにならない。あとこれは、実はうちは附属高校がありますので、附属高校の生徒、職員も、ブラッシュアップしたい人には自由にとっていただくということになっています。

○廣瀬　ありがとうございます。

　それでは、外国人教員のインテグレーション、ガバナンスの問題について、少しだけ触れたいと思います。ライカイ先生のプレゼンの中で、有期教員が置かれている境遇について、いろいろお話がありました。一番の問題は雇用パターンです。これは外国人教員に特有の問題ではなく、日本人教員や日本人職員も同じです。プロジェクトを担ってきたにもかかわらず、有期で採用されている教職員の多くは、プロジェクト終了後の再任用がありません。ですから、プロジェクトが終わりに近づくに従ってモチベーションも下がりますし、転職活動を始めなければいけないしと、いろいろな問題が出てきます。

　名古屋大学は採用時から、外国人教員の方を（ひどい言い方ですが）いわばティーチング・マシンとして採るんではなく、研究者としても採っていらっしゃるということですよね。

○渡辺　実は４年前から雇用を始めていますけれど、当時、５年を超すと、なかなか解雇できないというようなことがあったんです。うちの場合には、３年ごとにエバリュエーションしますけれど、一応、最大10年までは雇用すると初めから労働契約に書きました。基本的には部局の先生方には、彼らは普通のテニュアトラック、テニュアの先生のポジションに変わるように、一緒に研究活動もやってくださいと話しています。G30の授業をやりますんで、全学の組織に採用はしているんですけれど、それぞれ研究領域の近い専攻に、ダブル・アポイントメントという形で、一番研究の近い先生の研究室で、授業以外のときには十分研究をしていただくというふうにアサインをしています。科研費等も出せるようにしています。例えば、物理の先生なら物理の部局から科研費が出せるようにというようなことで、研究活動も十分できるようにしています。「自分はもうシニアだし、教育だけしたい」「あと３カ月休みたい」という方もいますので、その皆さんには10カ月雇用という別な形態をつくりまして、夏休みに１カ月、それから春休みに１カ月、大学としてはオフをつくっています。それに有休を加えると、夏休みなら１カ月半ぐらいは帰れるというので、10カ月教員というのもあえてつくって、本人にチョイスをしていただいています。

○廣瀬　ありがとうございます。

　ほかのセッション会場はもう既に全て終了しているということなので、申し訳ありませんが１、２問だけ、フロアから質問を受け付けたいと思います。

○フロア４　先ほどの、一番最後のインテグレーションの問題ですが、廣瀬先生の話にもありましたように、あるところでは外国人教員がティーチング・マシンとして使われていることもあるし、先ほど名古屋大学からも発表がありましたように、雇用形態をちょっと変えて、いろいろ対処されていると思いますが、分野によっては、研究したい先生もいらっしゃるし、定年近くになったら、研究はしなくて教育だけで十分ですという先生もいらっしゃると思います。ただし、ある特定の先生と一緒に研究しても、分野によっては自分の研究室と自分の実験室が欲しいということもあり得ると思います。ただ、５年契約の先生が、その後どうするかですね。自分の実験とかそういうハードウェアの問題です。今、G30の一番の問題はハードウェアですね。ソフトの面では、例えば学生がどんどん入ってきているんですけれど、ハード面での、研究室の学生の教育のためのもの、例えば学生の机と椅子がない。パソコンがない。それは非常に大きな問題だと思います。それは学生だけではなく、先生のことも含めてですね。そういうインテグレーションは非常に重要ではないかと思います。その辺、ほかの大学ではどう対応されているか、ちょっとお聞きしたいんです。

○廣瀬　それではどなたかコメントをお願いします。

○渡辺　うちの場合は、研究室にやっていて、卒研生がその先生につくというようなこともやっていますので、なるだけ教育・研究活動を一体的にできるようにしています。私たちの場合に10年ありますので、若い先生はとにかく早く普通のファカルティ・メンバーになってもらうように頑張っていただくという位置づけで本人にもお話ししています。

○廣瀬　ありがとうございました。それでは最後に、パネリストの先生方お一人ずつ、「国際化で大学が変わったか」について、30秒程度でコメントをいただければと思います。渡辺先生からお願いできますか。

○渡辺　難しい質問です。これに目覚めて、早く自分の授業を英語化して、学生にも世界で活躍してほしいと思う先生と、拒否的な反応する先生と、２種類に分かれたかなと思います。ちょっと発展途上だと思います。

○廣瀬　ありがとうございます。

○山本　こういうミーティングがあることこそ、国際化が進んでいる証左だと思うんですけれど、私はちょっと違うイメージです。赤ちゃんがハイハイの時期は越えたんですけれど、自立的に歩くのはまだ将来じゃないかなという。まだいろいろな課題があります。今まだ、G30の予算があるので、かなりうまくいっていますけれど、５年後にどうなっているか、それで判断すると思います。

○廣瀬　なるほど。ありがとうございます。

○萩野　「国際化で大学は変わったか」ですから、変わらないといけないんだということがわかったということが、変わったのかなと思っております。（笑）それから、説明させていただきましたように、日本の中だけであぐらをかいて、「日本の大学だ」と思っているんじゃなくて、「世界の中の大学だ」という意識が私自身には芽生えたかなという感じがしております。事務部門なんかも全て日英で対応しないといけないということがだんだん進んできたと思います。ただ、英語でやったら日本人がうまくいかないじゃないかということで、揺り戻し的に逆に減ってきたとか、相違するものもあるので、それらはどうすればいいかと思っております。

○廣瀬　ありがとうございます。それでは、ユー先生。

○ユー　私たち国際教養学部は既に50年の歴史があるので、先ほど山本先生の赤ちゃんのメタファーを借りると、ゼロ歳から５歳までではなく、17歳から22歳ぐらい、あまり成長の具合がすぐに見えないところもあります。ただ唯一、今までの一つの学部の国際化だけではなく、全学的に浸透性のある国際化が必要ですし、あと多様性も必要だと思います。欧米中心ではなくアジアも学生がたくさん来ました。当たり前のように、国際化は１学部だけがやることではなく、前提としてみんなの国際化が必要ということですね。

○廣瀬　ありがとうございます。最後に、ライカイ先生。

○ライカイ　ほんとうに難しい質問です。（笑）国際関係学部自体はもちろん国際化していますが、私の印象だけですけれども、立命館大学では、国際関係学部を見本にしてほかの学部でも同じようにしましょうという意識はまだ強くなっていないです。そして全学の宣伝でも、国際関係学部はまだ弱い存在ですし、「国際化」という言葉もまだそれほど重要なキーワードになっていないという問題もあるでしょう。一方で、９月入学ができるようになってから、様々な方面で既存のシステムの改革が必要になりました。例えば、大学の保健センターは年に１回ではなく、２回健康診断を行わないといけないことや、英語でも対応できないといけないという問題に直面しました。また、９月入学の関係で学生らのコース登録に関する大学の既存のコンピューター・プログラムをも更新しないといけませんでした。それとともに、特にインフラにおいて目に見える変化があったと思います。例えば、G30以前の時代には、建物の名前も、食事の名前も含めて全部日本語でしたが、今は英語でも出ています。ほんとうに変わりました。けれども、もうちょっと問題があります。学生のクラブです。日本人の学生がつくったクラブに留学生は入りにくいです、実際は、こういう点でも、国際化は不十分だと思います。まだまだという感じです。

○廣瀬　どうもありがとうございます。パネリストの先生方、それから課題別セッションＢにおいでいただきました来場者の皆様、どうもありがとうございました。これにて終了いたします。（拍手）

（C）課題別セッション
国際化に対応した環境のつくり方：サポート体制・宿舎

発表大学：

東 北 大 学　山口昌弘（総長特別補佐）

京 都 大 学　森　純一（国際交流推進機構長）

早稲田大学　内田勝一（副総長・国際担当常任理事）

同志社大学　中原伸夫（国際連携推進機構国際センター留学生課長）

ファシリテーター：

堀江未来（立命館大学　国際部副部長・国際教育推進機構准教授）

○堀江　こちらの会場はセッションＣということで、「国際化に対応した環境のつくり方、サポート体制・宿舎」というタイトルのセッションになっております。

私はこのセッションの進行を務めさせていただきます、立命館大学国際教育推進機構、それから国際部副部長の堀江と申します。どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

このセッションは今から約１時間45分あります。長いようですが、このセッションは実は非常に多方面にわたったトピックを扱っておりまして、多分時間が足りなくなると予想しております。流れとしましては、前半で４大学の皆様にプレゼンテーションをお願いしております。東北大学、京都大学、早稲田大学、同志社大学の４大学の事例について、まずお話を伺います。

このセッションは、国際化に対応した環境のつくり方ということで、留学生が入学してきて、その後の授業以外、教学面以外の全てのサポートを扱ってまいります。ですから、宿舎のことが出てきたり、共修環境の整備のことが出てきたり、危機管理のことが出てきたりと、多方面にわたる内容のお話をしていきたいと思います。

どれも非常におもしろい事例ですので、皆さん、たくさん具体的な質問をされたいかと思いますが、後半の議論のところでそういった質問もいただきながら、全体として私たちの中でどんな取り組みの到達点があったのか、それから、今後さらに一歩進めた展開をしていく上で、どのような課題がまだ残されているのか、そういったことを最後にまとめていけたら大変ありがたいと思っております。

私はこのセッションのまとめを、次の全体会で５分間にまとめて話すという絶対に不可能な課題をいただいておりますが、それに向けて話をまとめていきたいと思っております。

最初に１点お知らせです。このセッションは録画をしております。全てのセッションを録画しております。プレゼンテーションをされる先生方、皆さんには、その旨ご了承いただいておりまして、後日、情報提供のために公開されるということです。質疑の部分につきましては、記録として録画をされるということですけれども、その部分については情報公開しないと伺っておりますので、ご自由に発言をいただければありがたいです。

それから、今回は学生の皆さんにも参加いただいていると聞いておりますが、ぜひ遠慮なくご発言いただければと思います。

では、今回、プレゼンテーションは各大学９分という妙に細かい制限でお願いしております。時間がもったいないですので、早速報告を始めていきたいと思います。

【東北大学】

東北大学　総長特別補佐
山口　昌弘

ただいま紹介いただきました東北大学の山口と申します。

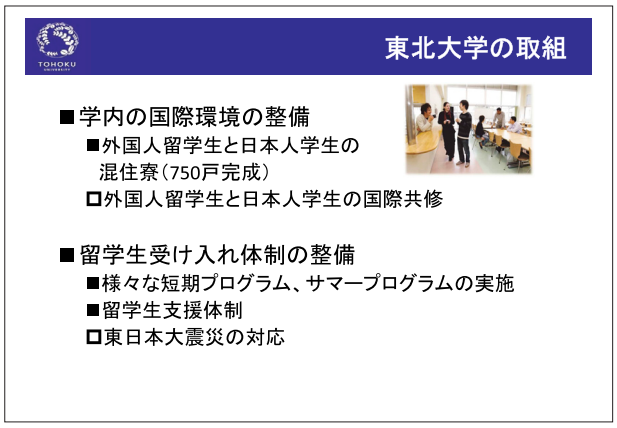
東北大学の事例について、短い時間ではございますが、紹介させていただきたいと思います。

東北大学では、まず大きく二つの取り組みを行っています一つはグローバルキャンパスを実現するということで、国際的なキャンパスづくりのために、日本人学生と留学生がともに学び暮らす環境をつくるということに取り組んでおります。

ここにありますように、混住寮と、それから共修、つまりともに学ぶことを重視しております。寮については、この後、京大の森先生が話されるということですので、私は資料の白い□の部分についてお話ししたいと思います。

それからもう一つ、留学生の受け入れ体制の整備ということで、さまざまなものを設けてございます。留学生支援体制。それと、重要なことは危機管理です。これだけ留学生が増えてくると、それから送り出しもそうなんですけれども、非常に危機管理が重要だと我々は思っております。特に東北大学は、東日本大震災の被災地の真っただ中にある大学でございますので、その際に起こったことを紹介して、今後どういうふうにしていかなければならないか、我々が思うことについてご紹介させていただければと思います。ということで、資料の白い□の部分について、以下、紹介させていただきます。

日本人学生という呼び方は不適切かもしれないですけれども、留学生と日本の学生がともに学ぶ、ただキャンパス内の同じところに隣に座るというだけではなく、インタラクティブな活動を行うということが重要だと考えておりまして、課題探究・解決型の授業ということを開発してまいりました。今年、大体20クラスで行っています。これを初年時の教育の部分の基礎ゼミ、それからもうちょっと発展させたところでの国



C-1-2

C-1-3

C-1-4

際共修ゼミで行っています。一番の目的は、言語・文化背景の違う留学生と協働作業を行うことです。それによってお互いに学んでいくということが可能になっていきます。

例えばこれは15週の中で行っていくんですけれども、最初の５週間ぐらいは全く話がかみ合いません。例えば日本人の学生からすると、留学生は何を考えているんだ、まじめにやらないで、と。それから留学生から見ると、日本人というのはほんとうに細かいことばかり気にして全く全体を見ない、とかですね。でも、15週の間にまとめなければいけないので、あるときからしっかり取りかかりうます。それで最終的な成果を上げていきます。

具体例といたしましては、「インターナショナルキッチン」「ごはん食べよ」「グローバル運動会」といったプロジェクト、あるいは模擬国連とか、いわゆるPBL型の授業の一環として国際共修ゼミ、そういったものに取り組んでおります。それがまず東北大学で進めている取り組みの紹介したい１点でございます。

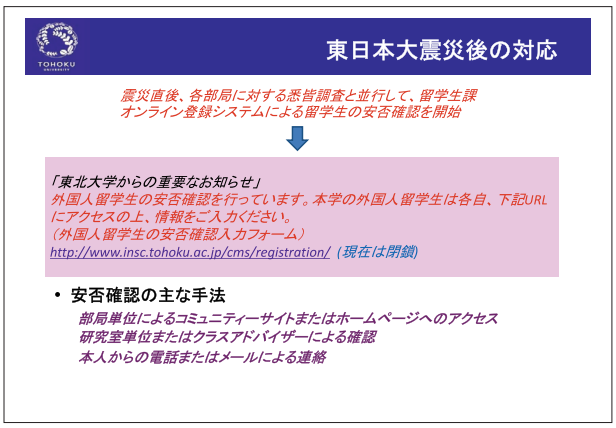
もう一つ、残りの時間で、危機管理に関しまして、東日本大震災の中でどういったことが起こったかをお話したいと思います。

震災が2011年３月11日に起こったわけですけれども、その後、日本人の学生とともに留学生の調査を行いました。これは各部局で行うとともに、オンラインによる留学生の安否確認というものを進めました。

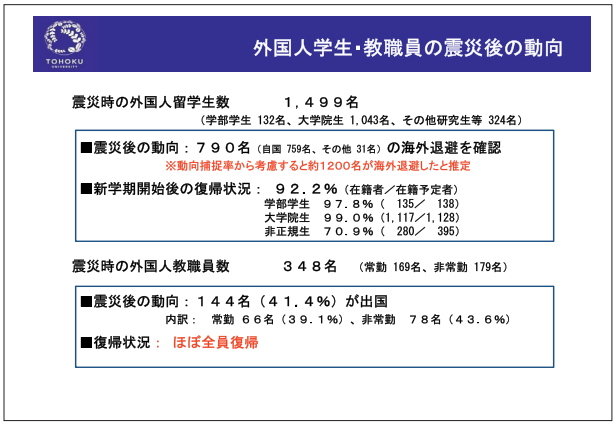
その当時、1,499名いたんですけれども、約790名は海外に待避したということが確認できましたが、おそらく1,200人ほどが海外に待避したと考えられます。全員の連絡がついたのは、震災から約２、３週間過ぎた３月の後半でございます。それまで非常に錯綜したことが起こりました。また、震災後、外国人教員につきましても、40%の人が出国しました。ただ、大体は戻ってまいりました。

ちなみに１カ月おくれで授業を開始したんですけれども、そのときには学部学生、大学院生という正規の学生はかなり戻ってまいりました。ただ、交換留学の学生さんは、やはり中途で終わらせるとかいった人もいて、戻ってきたのは70%でございます。

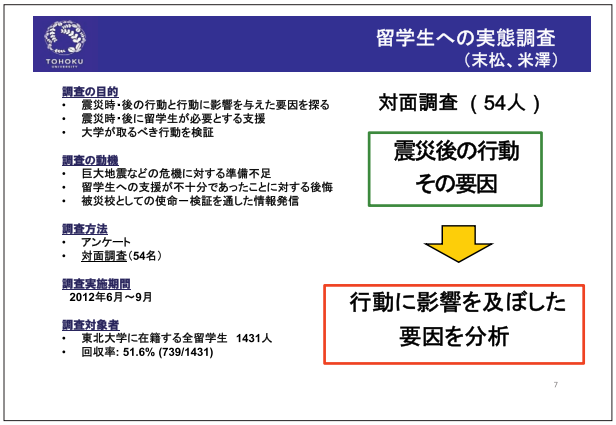
こういったことがあって、留学生の実態調査を行いました。お手元に東北大学の学生調査のまとめというのがございますが、その後半部分に、留学生に対する東日本大震災のまとめがございますので、ごらんいた



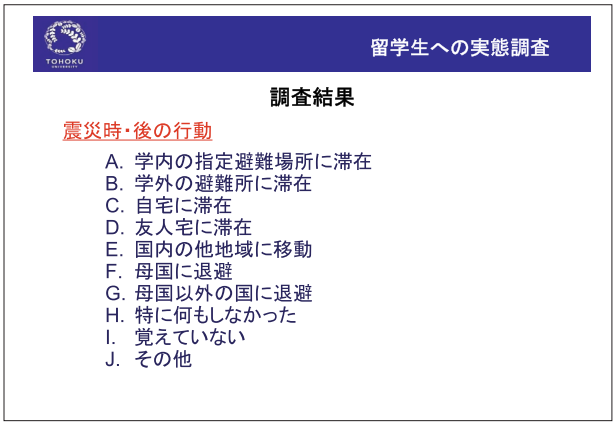
C-1-5



C-1-6



C-1-7



C-1-8

だければと思います。

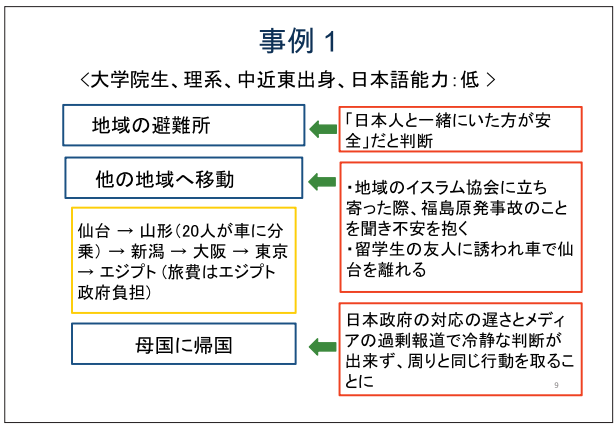
約半分の学生が答えてくれたマッシブな調査と対面調査を行いました。さまざまなおもしろい点があるんですけれども、例えば震災後にどこに行ったかを垣間見ることができます。

ここでは、対面調査を行った幾つかの例をごらんいただければと思うんですけれども、例えば事例１の学生は、中近東の出身で日本語能力が低い。当初は日本人と一緒にいたほうが安全だと判断したんだけれども、地元のイスラム協会に立ち寄って、原発のことを聞いて不安に思って移動して、かなり複雑なルートをたどって出国していました。一般的には、日本語能力が高い学生はそれほどパニックにならないという結果が出ているんですけれども、この学生の場合には、福島のことを聞いて仙台脱出を計画したということです。

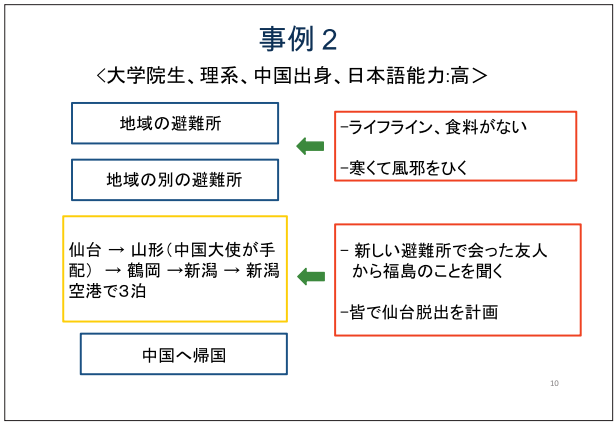
一方で、帰国しなかった事例として挙げているこの最後の学生につきましては、留学のために仙台に着いた次の日に被災してしまったという、かわいそうな例だったんですが、この学生は、日本語能力が低かったにもかかわらず、日本人が非常に冷静に行動しているのには訳があるだろうということで、パニックになって帰国した友人のアパートに自分が住んで、しばらく過ごしたということでした。

今回、幾つか例を紹介させていただいたんですけれども、実はかなりパターンが多岐にわたっております。この実態調査においてパターンを分析し、リスクマネジメントを強化したいと考えております。

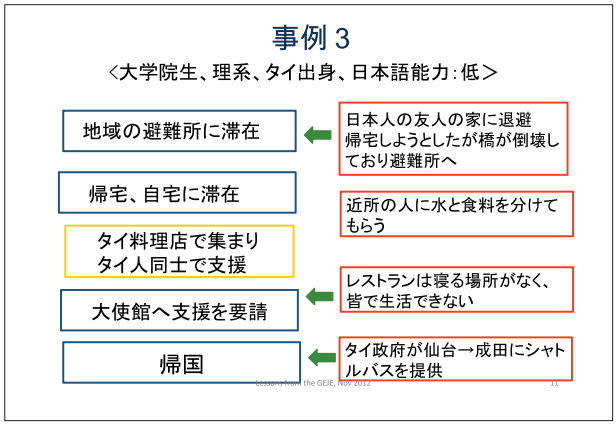
リスクマネジメントのある種の結論としては、例えば、被害状況、大学の開催の日程等を迅速にアップデートしようと試みました。どこまでできたかはあれなんですけれども、やりました。



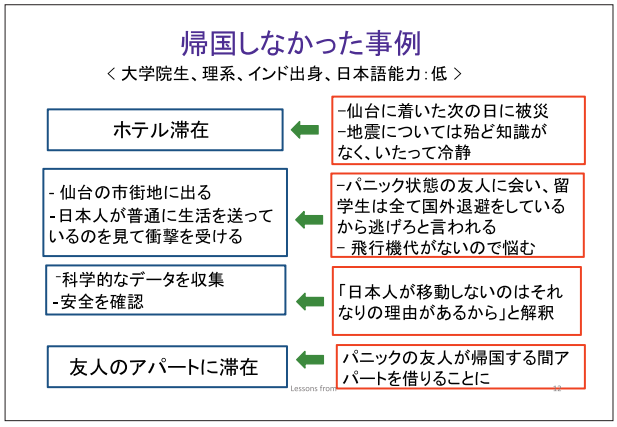
C-1-9



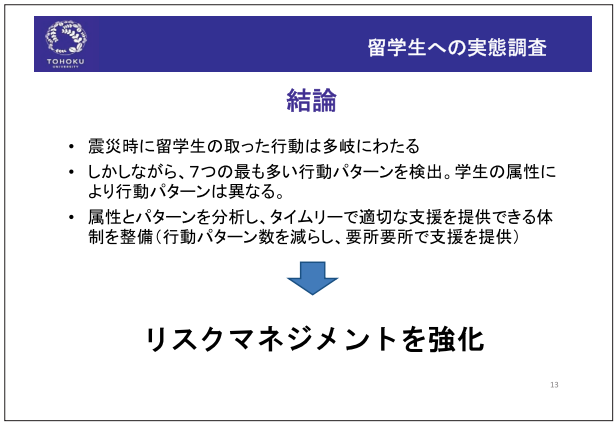
C-1-10



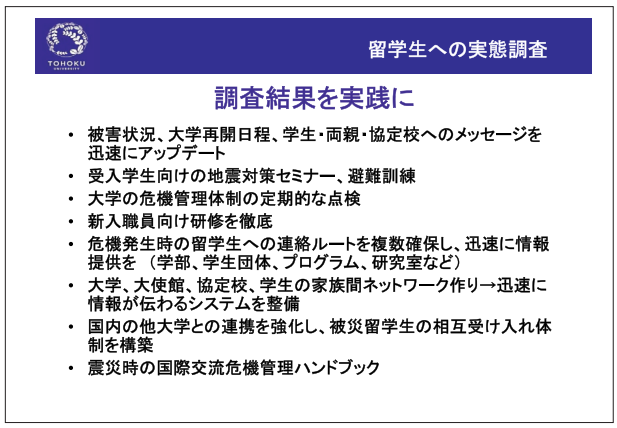
C-1-11



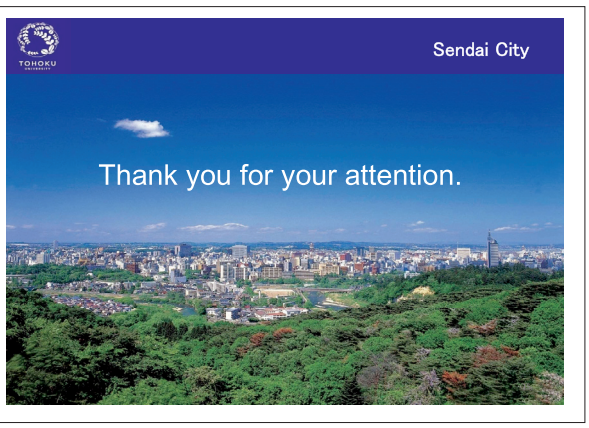
C-1-12



C-1-13



C-1-14



C-1-15

それから、非常に重要なことは、大学の危機管理体制の定期的な点検とか地震対策、避難訓練、これはやはり我々のところではその後、それまで真剣じゃなかったというわけじゃないんですけれども、今までにも増して真剣に取り組んでおります。

それと、非常に感じていることは、国内の他大学との連携というのが非常に重要なのではないかということです。地域的に、ある部分が被害に遭ったとき、ほかからバックアップしていただけるといったような体制がつくれないのかなと感じております。

以上、東北大学からの報告でございます。どうもありがとうございました。（拍手）

【京都大学】

京都大学　国際交流推進機構長
森　純一

ご紹介いただきまして、どうもありがとうございます。京都大学の国際交流推進機構長をやっております森と申します。

国際交流推進機構とは何かというと、京都大学に横串を刺して、それで大学全体の国際化を図るということでございます。実は私自身も、この仕事を５年以上やっておるんですけれども、G30の申請書を書くことから始めて、当初は大変でございました。ただ、昨年４月ぐらいから、殊、教育に関することは非常に楽になりました。ここにございますけれども、「２×by2020」と言っていますが、G30をもとに京都大学をどうやって国際化していくかという国際戦略を昨年まとめました。その中で、例えば2020年には留学生の数を2,000人から4,000人にする。それから、海外への派遣学生数を短期で1,000人、中長期で600人にしますというようなことを決めました。

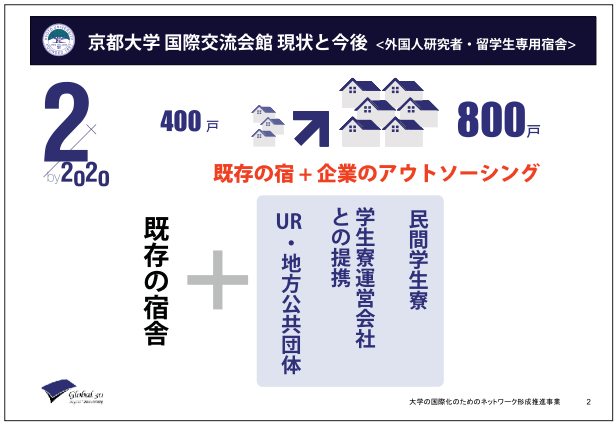
従来は、教育の先生方はどちらかというと、国際というと全部国際の仕事やというような見方だったんですけれども、それがもうがらっと変わってまいりました。例えば、この「２×by2020」で、全学共通科目の約半分を英語で提供しようと、京大に1,000ぐらいあるんですけれども、それをこの５年の間に400科目強を英語で提供しようというようなことを進める機関が大学の中にできました。

ということで、今日は何のお話をしようかなと考えたんですけれども、今、留学生の受け入れ環境あるいは日本人学生の海外派遣が機構の非常に重要な仕事になっておりますので、そちらを中心にお話をしていこうと思います。

それで、この「２×by2020」の中で最も難しい、我々が一番ボトルネックになるだろうと思っているのが宿舎の問題でございます。

実は私、一昨日、サンパウロのほうから帰ってきたんですが、向こうでも宿舎の問題がありました。先方から急に、実はうちは宿舎が足りないんだよという話が出たりして、これは各世界中の大学の大きな悩みかと思います。

特に京都の場合、山に囲まれていまして、今私どもは学生を含めた外国人用の宿舎を400戸だけ持っているんですけれども、少なくともこれを今「２×by2020」では800戸に増やしたいと考えています。ただ、それにつきましては、そう簡単に増えるわけではないので、UR、地方公共団体、それから学生寮運営会社との提携、民間学生寮といったようなもの、こういったものへのいろいろな試みを今やっております。



C-2-2

そうは言いながら、大学独自でも最近新しい宿舎を一つつくりました。これは吉田キャンパスの中にある、新しい吉田国際交流会館というものでございます。従来の大学の寮は非常に安くて、１カ月１万円ぐらいということでやっていたんですけれども、もうこれはサステナブルじゃないと考えました。今日、ここの会場にも来ている田中課長補佐といろいろ検討しま

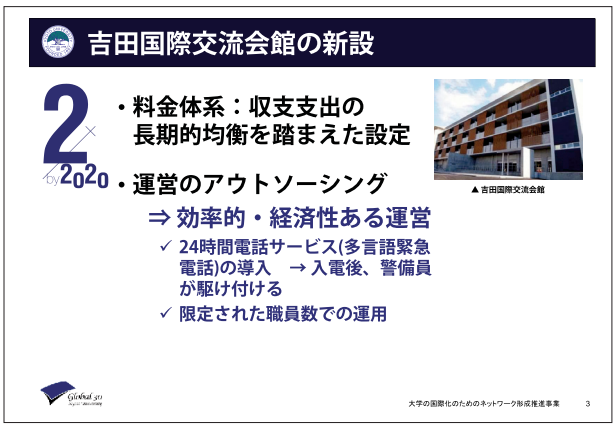
して、これは減価償却あるいは修繕費を考えて、サステナブルにしようと、ただし土地代までは取らないということで考えました。49年償却、補修費込みで、月４万1,000円でどうだろうということで最初始めたんですけれども、さすがに学内からそれじゃ高いという声が挙がって、３万8,000円にしたんですね。ところが、非常に場所もよくて、早速１年目から満室でございます。ですから、やはり大学というのも、国立大学といえども、そういう採算性を考えねばいけないんだろうと思います。

ここの管理も、従来は大学の職員を雇ってやっていましたけれども、民間での、資料に書いてあるように24時間電話サービスというようなことをやって、限定された職員での対応をしているということでございます。

それから、私どもには三つのキャンパスがありまして、二つのキャンパスは留学生寮を持っているんですけれども、桂には工学部のキャンパスにはないんですね。いかんせん、簡単に建てるわけにはいきませんから、UR さんがお持ちの、いわゆる遊休とは言いませんが、空き室がありますので、そちらを改造していただいて、シェアルームあるいは家族の室ということで、これは家具のレンタル全て込みで３万円少々ということで入れるような形を今考えております。家族の場合はもちろんそれより高くなりますけれども、10室ぐらいが今入っていますが、将来的にはこれを100とかにしていきたいと思っております。

それから、やはり地方公共団体との協力が非常に大事です。たまたま私どもの大学の前に、京都府さんが看護師さんの寮を持っておりまして、これを留学生寮に改造していただくということをやりました。50部屋ぐらいを確保いたしまして、３万2,000円ぐらいの料金で入れるようにしました。周りのアパートは6万ぐらいです。ただし、コインシャワーではございますが、アベイラビリティーという意味では非常にありがたいということであります。

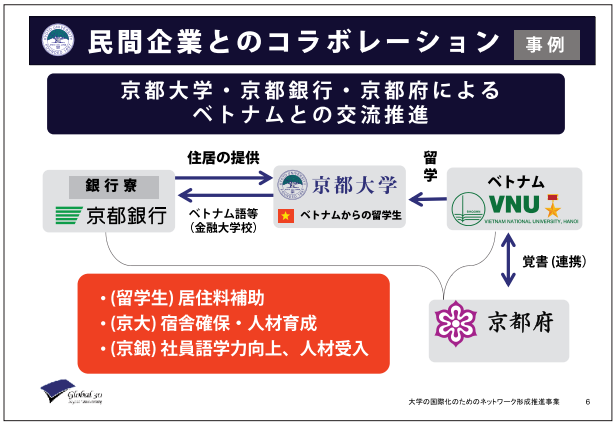
それから、企業との協働も非常に大事なことです。ラッキーなことに、京都府が VNU、いわゆるベトナム国家大学と交流協定を結ばれたということで、府知事が訪問されたとき、京都府からの働きかけもあって、ベトナムの学生をこの京都銀行さんの寮に入れていただくようあっせんをしていただきました。それまでは中国の方と韓国の方は、京都銀行の寮に入れさせてい



C-2-3

C-2-4

C-2-5



C-2-6

ただいていたんですけれども。

このメリットなんですけれども、大学からしますと、留学生宿舎が確保できます。かつ、住まわせるだけではなくて、土日なども一緒に過ごしていただく、あるいは語学教室を開いていただくということをやっていただいています。留学生にとっても、日本人コミュニティーに入れるということで、非常にウイン・ウイン・ウインなものですから、今後ますます拡大をしたいと考えています。

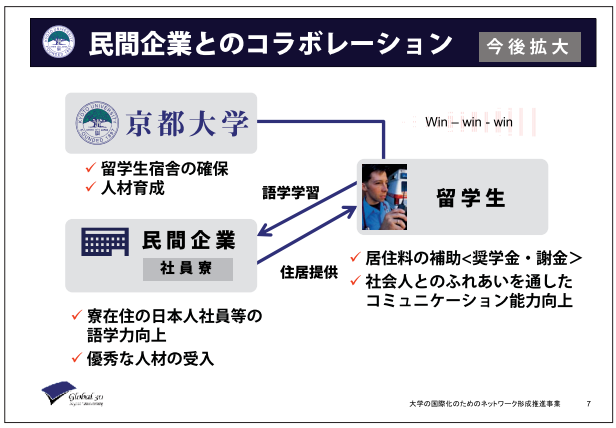
しかし、それでもなお足りません。ということで、これは国立大学としては思い切ったことなんですけれども、学生寮の運営会社に、３月のいわゆる更新時期に一定数を確保していただくということにしました。ただし、大学としてはコミットはしませんと。ある一定の時期を過ぎましたら、もう業者は独自あっせんをするといったようなことで、これは民間ベースよりも多少安いんですけれども。こういったことも始めました。

そして、G30で何が変わったのと。従来はえてして、大学は制度・規制・前例主義といったようなものにとらわれていたり、スピードが欠如していたということがありますけれども、こういったものがかなりなくなってきたのかなということで、この資料は田中さんとも相談してつくっているんですが、できない理由を探す姿勢を改めてきているのではないかと思います。

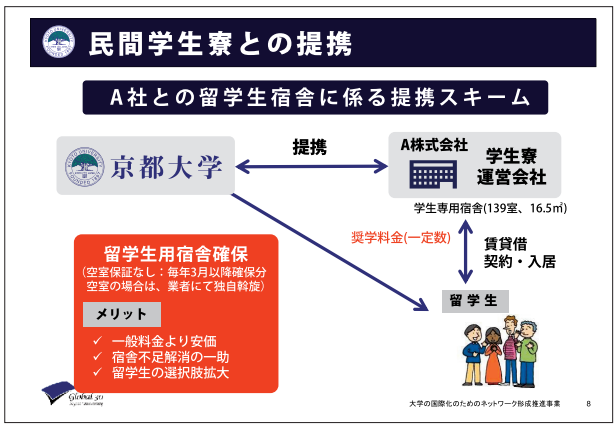
最後に、まとめです。やはり英語コースが幾らできても、インフラが充実していないと、なかなか難しゅうございます。その中で地方公共団体との深い連携、あるいは民間の資金を利用する、それからこれから大事なことですが、サマースクール等に対する新しい対応もぜひやっていこうということであります。

国の予算をいただければ、もちろんありがたいんですが、それも今後難しいでしょう。限られた資源を有効活用して、自立的な大学運営と国際化を進めたいと考えております。

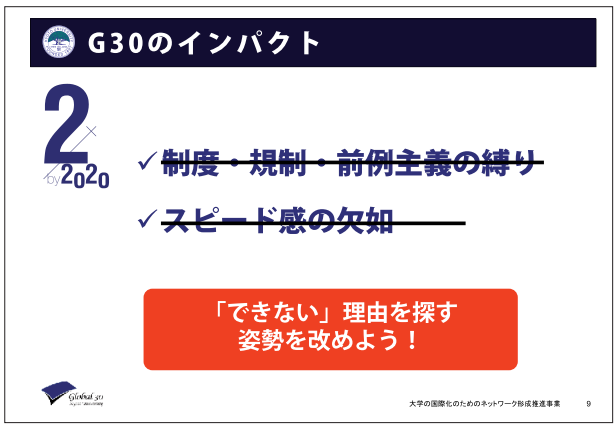
以上が私の発表でございます。ありがとうございました。（拍手）



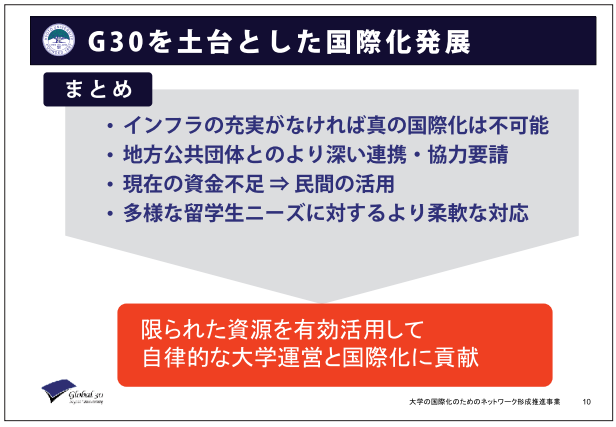
C-2-7



C-2-8



C-2-9



C-2-10

【早稲田大学】

早稲田大学　副総長・国際担当常任理事
内田　勝一

本日いただいたお題は、この三つということで、外国人学生、それから外国人研究生のワンストップサービス、それから ICC という、学生がつくる異文化交流のコミュニティー、これらについてお話をすることになります。

その前提として、早稲田大学がこのグローバル30というものをどう位置づけているかについては、お手元の厚い冊子の173ページからが本学だったと思いますけれども、174ページに、「早稲田から WASEDA へ」と書いてあります。2008年、早稲田大学がこの後どういうふうに展開していくかという中期計画「NEXT125」の中で、そのようなスローガンを掲げたんです。

それで、グローバル30の前、1999年に大学院のアジア太平洋研究科が英語のみで学位が取得できるプログラムをつくりました。そこはもともと日本語でもやっておりましたから、学生は日本語でも英語でも学位を取得できるようになったわけです。

その後、2004年に国際教養学部という学部をつくりましたが、そこは日本語でのプログラムはなく全て英語で行うということで、１学年の定員が600名、外国人が200人でした。

C-3-2

C-3-3

これら二つは考え方が若干違っているわけですね。アジア太平洋研究科の場合、日本語でも英語でも学位を取得できますよという、いわばハイブリッド型であるわけです。これに対して、国際教養の場合は全て英語で提供する、モノランゲージの形です。もう一つ、一般的な日本語だけで行っている学部、大学院もあります。ですから、この三つの教育のやり方があるわけですけれども、その中でこの G30をどう位置づけるか。あるいは、もう G30は終わるわけですから、これが終わった後、今度は G30をどうやって展開するかが本学の基本的な課題であるわけです。

その課題を実現していくためには二つポイントがあります。一つは、ここに挙げたのは例ですけれども、インフラを整備する、つまり環境整備が必要であるということ。それからもう一つは、大学のガバナンス自体を変えるということですね。インフラとガバナンス整備の両方が必要なわけですけれども、ここではインフラ、環境整備という言葉について若干説明をさせていただきたいと思います。

最初はインターナショナル・スカラー・サービス（ISS）についてです。これは、本学に来ている研究者のことです。研究者といいましても、資料の右側の表にあるような受け入れ身分とありますような形で受け入

れている人です。

しかし、ISS についてのポツの四つ目ですが、このインターナショナル・スカラー・サービスを経ずに入ってきている研究者、非常に短い期間で来ている、これは全く大学自体で把握できていないという問題があるのですけれども、現在はそこにあるような形の ISS をつくり、どのようなサービスを提供しているかというと、さまざまな外国人の研究者の人たちに対する非常に広いサービスを提供する、こういうものをつくってきたわけです。

その結果、どうなのかというと、外国人研修者の受け入れ人数は若干増加ということで、そんなに劇的に、ドラマティックに変更はしていませんけれども、変更はしてきています。

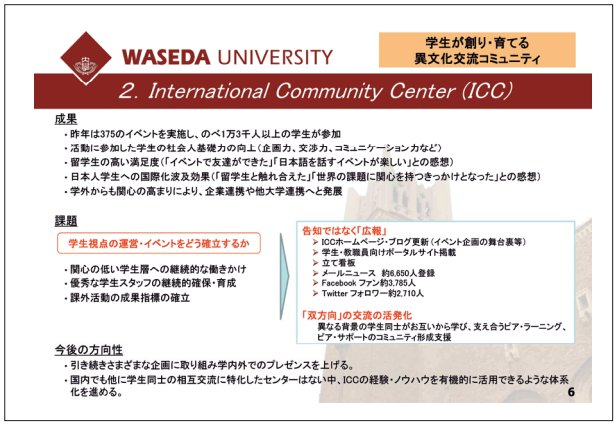
それから、その成果としてはそこにあるような形で、それなりの成果を持っているわけですが、この中で我々としては課題がたくさんあります。その課題とは非常に簡単なことでありまして、その研究者が、さまざまな国から、さまざまなタイプの、さまざまな分野で来る、つまり多様化してくる、そして数も増えてくる。そして多様化して、拡大化してくる研究者のニーズもどんどん変わってくるわけですね。これにどう対応するかということであります。

資料に課題として幾つか挙げておりますけれども、例えば③や⑤の問題というのは、かなり深刻な問題だと思っております

そして、課題をどうやって解決するかという方向性ということで、幾つか挙げているわけですけれども、やはり完全な対応はなかなか難しく、今後さらに改善をしていくことが、現在の喫緊の課題であると思っています。

C-3-4

C-3-5



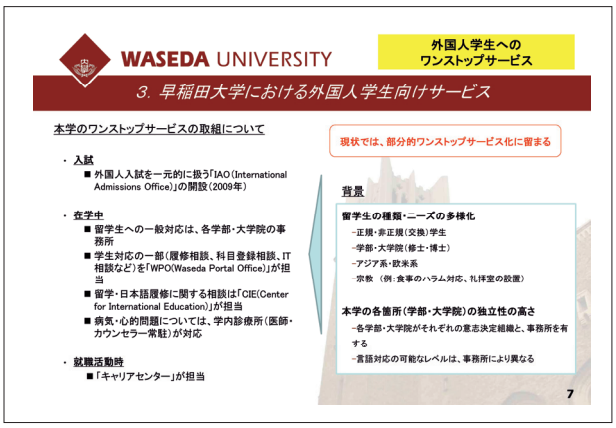
C-3-6

二つ目が、学生による学生サービスということですが、これはどこの大学さんにおかれても、留学生サービスというのはたくさんやられているわけですけれども、本学の場合にはこれを基本的には学生スタッフにやってもらおうと。スタッフとして専任と嘱託の人がいるわけですけれども、それに加えて学生スタッフリーダーが15名います。これは学生から公募しています。10倍ぐらいの応募者があるわけですけれども、そこから学生を選んで、その学生たちが中心になって、さまざまなイベントを提供しています。

特色というのは、学生が中心で、その学生のいろいろなことを職員がサポートする。そのことによって、これにかかわっている日本人学生と外国人学生が変わっていくということだと思います。

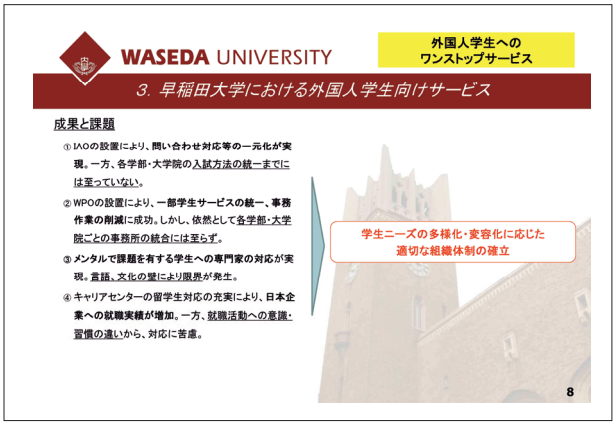
資料の「成果」というところに書いてあるように、一昨年の場合には375のイベントに１万3,000人が参加しているということになってきています。かなりの成果があるわけですけれども、しかし、どうやって学生の目線からの運営とかイベントというものをより活性化していくか、いろいろな課題があるということでございます。

それから、外国人学生へのサービスということで、これは入学から在学、そして就職までということですが、これはどこの大学も同じだと思いますけれども、資料で右側に示すような背景があります。留学生の種類、それからニーズが多様になってきている。正規生とか非正規生、学部・大学院（修士・博士）、アジア系とか欧米系、さらには宗教の問題。同時に、学内の問題として、各箇所の独立性が高いということ。しかも、キャンパスが本部の早稲田だけではなく、幾つかに散らばっているわけです。それぞれのキャンパスの規模、学生の数が違う中、どうやって学生のニーズに合わせるかです。ワンストップサービスというのは標語としてはあり得ると思いますけれども、現在のところは部分的なワンストップサービスしかできていないと思っています。



C-3-7

また、ワンストップサービスでどういう事柄が問題になっているかについてお話ししします。まず、アドミッションオフィスをつくることで、問い合わせの対応などが一元化されたわけですけれども、学部や大学院の入試方法が外国人学生について統一しているかというと、そういうところには至っていません。



C-3-8

それから、学生サービス、あるいは研究者に対するサービスが、それぞれワンストップ化をしているわけですが、しかし、それぞれが学部、大学に所属していて、そこにそれぞれの事務所があり教職員がいるということで、統合はなかなか難しいです。

また、メンタルの問題の場合にも、言語や文化の壁があります。

さらには、留学生の就職の問題については、キャリアセンターで留学生対応というものを進めてきていますけれども、就職活動の意識や習慣が違っている。こういう中で、どうやって対応するかということです。

一言で言えば、学生や研究者のニーズの多様化、拡大化に合わせた制度をどうやってつくるかが現在の課題であるということです。

どうもありがとうございました。（拍手）

【同志社大学】

同志社大学　国際連携推進機構国際センター留学生課長
中原　伸夫

同志社大学留学生課の中原と申します。本日はこのような発表の機会を与えていただきまして、ありがとうございます。

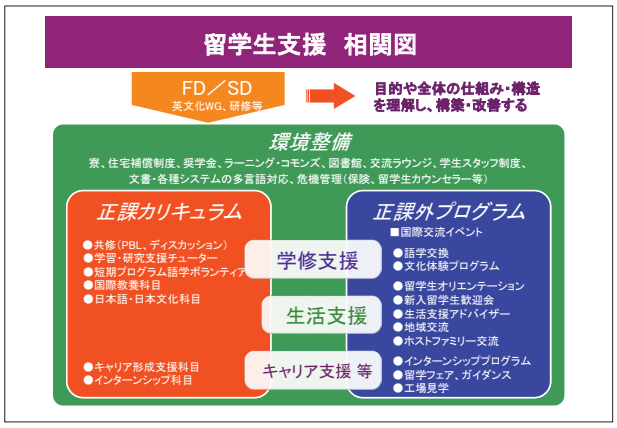
お手元に資料を用意していますので、併せてご覧いただければと思います。それでは、早速始めさせていただきたいと思います。

留学生に対する支援は、学習支援からキャリア支援に至るまで、たくさんあると思うんですけれども、その基本となっているのは環境整備だと思います。環境整備の大きさによって、おのずとそこでできる正課カリキュラム、正課外プログラムなどのいろいろな支援が限られてくると思いますので、非常に大事な要素だと思います。FD・SDを資料の上のほうに挙げていますけれども、これも一つの環境整備だと思っております。

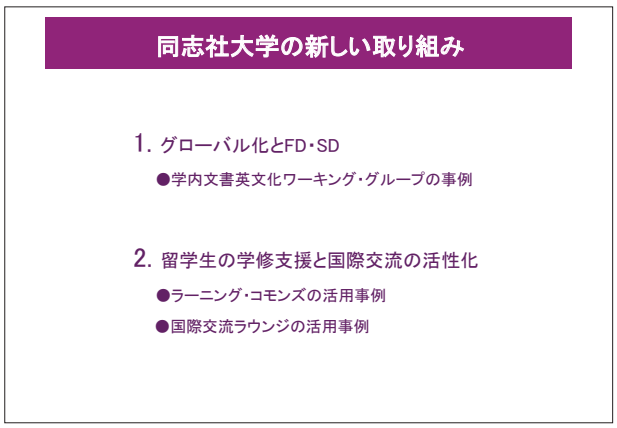
本日発表させていただくのは二つのトピックスです。「グローバル化と FD・SD」、もう一つが「留学生の学修支援と国際交流の活性化」です。

まずは、「大学の４つのグローバル化」ということで、こちらにキャンパス、学生、教員、職員のグローバル化を挙げていますけれども、特に後半の２つについて、FD・SD という観点から少し話をさせていただきたいと思っています。

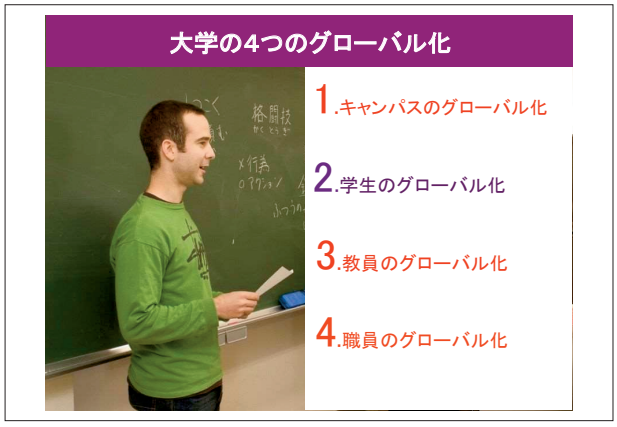
本学の取り組みとしまして、教員に対しては、入社



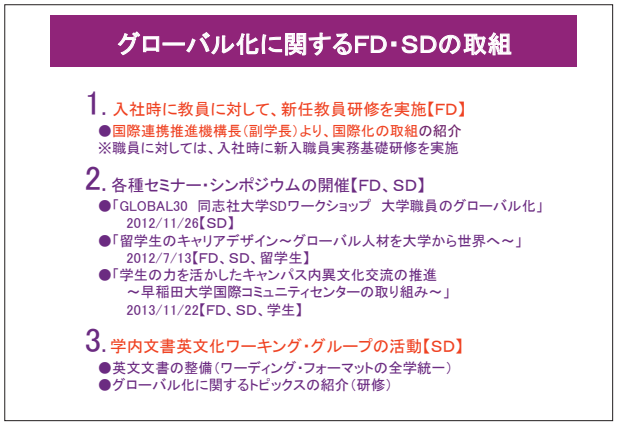
C-4-2



C-4-3



C-4-4



C-4-5

時に新任教員研修をやっています。研修では国際連携推進機構長（副学長）から、国際化の取り組みについて紹介しております。それから、職員向けには、基礎研修や各種セミナー、シンポジウムなどをやっております。

それと、本日ご報告させていただく、「学内文書英文化ワーキンググループの活動」です。これについては、ワーキンググループの内容ではなくて、SD といった観点でご覧いただければと思います。

そもそもこの活動に至った背景についてですが、同志社大学は平成20年に、「同志社らしい国際主義の実現化に向けて」というアクションプランを掲げました。その後に、「留学生30万人計画」が出され、G30への申請・採択を受けて、英語コースを設置するということになりました。このことが大きなインパクトになって、学内でも英文化の文書を整備する必要があるだろうということになりました。しかし、当時は、誤表現であったり誤表記であったり、とにかく同志社大学としてのスタンダード、ルールがない、フォーマットがないことがわかりました。それとともに、各部署での英文化を担当する責任者が明確でないこともわかりました。そういったことをきちんとする必要があろうということになったのですが、この問題については国際部門の対応だけではだめで、全学で対応しなくてはいけないということで、英文化ワーキンググループを設置しました。

この活動は、基本的には専任職員でやっているんですけれども、いろいろな方が参加して結構です、というスタンスです。月１回開催するということを決めました。運用担当部署は、国際連携推進機構でということで、私の所属する留学生課を含む五つの課・事務室の、特に若手の職員に担当させたことが特徴かと思います。

設置の目的は、資料に書いていますとおり、協力関係の構築ですね。特に部署間でいろいろなやり方が違うとか、そういったことを是正する、あるいは共有可能な文書を洗い出すといったことです。そういった英文化の作業とともに、特に関係者への情報提供も積極的に進めました。

次の資料は、活動内容についてですが、今お話ししてきた内容とかぶるんですけれども、ワーディングの統一、共通で使えるフォーマットをデータベースに入れるといった活動をしながら、先ほども申し上げたと

学内文書英文化WG活動に至った背景

▼国際化の加速
●同志社大学アクションプランの策定【 平成20年4月17日】
「同志社らしい国際主義の実質化に向けて」

↓

●『留学生30万人計画』骨子の策定【平成20年7月29日】
●G30への申請・採択【 平成21年度】
→留学生の受入れ・送り出しの大幅に増加
→英語コース（英語の授業だけで学位取得が可能）の設置
※国際化に向けた全学的な協力体制が確立→全学で目標を共有

↓

C-4-6

学内文書英文化WG活動に至った背景

▼学内英文文書における誤表現・誤表記・不統一の問題が顕在化
●統一（公式）見解・フォーマットがない。
→同志社大学としてのスタンダード、ルールの欠如

▼英文対応の担当部課・各部課の英文対応担当（責任）者が不明
●全学的な対応が必要
→まずは、各部課で担当（責任）者を明確化

▼国際部門の対応だけでは、全学のグローバル化は達成できない。

↓

学内文書英文化ワーキンググループを設置（2010年11月）

C-4-7

ワーキンググループ設置の目的（設置時）

1. 学内各部課　学内文書英文化担当者を中心とした協力関係構築（メーリングリスト作成、担当者一覧作成など）
2. 学内文書英文化担当者が抱えている課題の掌握、問題の共有
3. 共同利用可能な文書の洗い出し（データベースの構築）、教職員のページでテンプレートを公開
4. 文書英文化の留意点の紹介
5. 既存文書の英文化計画
6. その他、関係者への情報提供
・在留資格関係業務
・海外からの研究者招聘業務
・外国人留学生入試についての留意点
・ダブルディグリー

C-4-8

ワーキンググループの構成

【参加対象者】
原則、専任職員。部署は問わない。
※業務に応じて嘱託職員、契約職員、派遣スタッフ、アルバイト職員も参加可。
※大学全体の国際化を図るため、可能な限り広く参加を求める。

【開催頻度】
2011年度は月１回程度を目安に開催

【運営担当部署】
国際連携推進機構（下記、5課・事務室）
・国際課
・留学生課
・日本語・日本文化教育センター事務室
・国際化推進室事務室
・国際教育インスティテュート事務室
※総務部庶務課（文書の取扱いに関する所管課）の協力（議事録）

C-4-9

おり、国際化に関するさまざまなトピックスや情報を紹介することにかなり力点を置かせていただきました。具体的には、これをきっかけに、業務内容や制度の見直しも検討していただくことも目標として掲げていたわけです。

最終的には、教職員のホームページに、文書テンプレート、あるいはワーディング一覧といった形でのご報告ができるようになりました。我々の活動については、資料に紹介していますけれども、赤字の部分、例えば国際化のプロトコル、国費留学生制度、派遣留学とか協定について、必ず第１部、第２部を分けて、講義を入れています。第１部のほうは英文化のワーキンググループの活動ですけれども、第２部では30分から60分ぐらいの講義を入れて、若手の職員が中心になって、こういった制度や仕組みについて説明させていただくといったことをやってきました。

具体的な事例を説明している時間もあまりないんですけれども、資料にありますとおりプロトコルとはとか、あるいは国費留学生、特に国費留学生を増やす意義については、普段、なかなか説明できていない部分でありまして、こういうところでじっくりと説明させていただきました。

狙ったのは、ワーキング以外の意識改革の部分ですね。全学において、自分の部署のところでも分散化・高度化してグローバル化をやらないといけないといった意識の啓発を同時にやらせていただいたわけです。こういうことを通じて、各部署からの自立的な提案を期待するという部分にも力を入れました。

結果的にはデータベースも完成しましたし、文書の共有にも成功しました。特に大きかったのは「意識改革」ですね。ただし、これは一気には無理で、継続的な啓発が必要だと思います。以降は資料をご覧いただ

ワーキンググループの活動内容

■文書英文化の取組状況の把握、課題や問題点の把握・整理

■難易度の高い表現や頻出用語の洗い出し、未着手文書の取りまとめ
※緊急性の高い文書の英文化を促進（翻訳支援）

■ネイティブチェックによるワーディング（言い回し、表現）の統一、誤表現の訂正

■学部・研究科間等の文書フォーマットの統一、共用（テンプレート）
※同じ大学でありながら、部署によって違う形式の同じ文書が送付
→すでに作成済みの文書や表現を再利用することで、翻訳の手間やコストを削減

■情報の一層の発信を促進
学内文書英文化の一層の推進、ホームページの多言語化の促進

■国際化に関する様々なトピックスや情報を紹介
→情報の共有化、手続き・業務の標準化
→事務効率の向上、内容の充実
→各事務室での自立的な国際化対応を支援・啓蒙

C-4-10

ワーディングの統一

▼誤表記の排除

▼既存の表現の統一
※新規の表現については、こちらから提示

C-4-11

ワーディングの統一における留意点

▼各国の文化やプロトコル、前後の文脈を踏まえた対応が必要
誤解を招く表現→自然な英訳へ

▼業務や制度の見直しも検討
→学部・研究科間での教育制度の見直し・統一
例）X群Y類　Category Y, Group X
※学部によって、日本語標記でもX類Y群等が混在

▼用語データベースの構築・維持・アップデート
日本語よみ、用語、英語、英語表現、確定・審議中フラグ

C-4-12

英文文書の共有

▼対応すべき文書（共通で利用可能）の洗い出し
→優先度の決定（翻訳の費用負担を支援）

▼作成済みの文書の情報共有
→テンプレート（雛形）としてオーソライズ

▼文書テンプレートとして、教職員のホームページで共有

※その他、国際化に関する各種マニュアルや各国用のリーフレット、素材（写真、ロゴ等）も提供

C-4-13

2010年度　活動スケジュール

■2010年度

2010年12月	第1回	・開催目的の説明 ・各組織の状況、問題点の共有 ・情報共有のためのメーリングリストの作成
2011年1月	第2回	・国際間のプロトコル ・各組織の状況、問題点の共有
2011年2月	第3回	・同志社大学英文用語集について ・国費留学生制度について
2011年3月	第4回	※東日本大震災対応で中止

C-4-14

くということで、具体的な作業内容についての説明ですので飛ばさせていただきます。

今後の課題としましては、この活動で問題意識は持っていただいたんですけれども、これからは、この問題意識からどのように戦略・政策への転換ができるかというところかと思います。

続いて、もう一つのトピックスに早速入らせていただき、学修支援についてご紹介させていただきます。通常の学修支援については、正規学生になれば、当然、日本人学生と同様に正規学生としての学修支援が受けら

2011年度　活動スケジュール

■2011年度

2011年4月	第1回	・同志社大学英文用語集について ・外国人の在留資格について
2011年5月	第2回	・同志社大学英文用語集について ・大学間協定・学部（研究科）間協定について
2011年6月	第3回	・同志社大学英文用語集について／文書の英文化について ・外国人留学生の学生生活および在籍管理の留意点について
2011年7月	第4回	・文書の英文化について ・「派遣留学」の概要とその関連手続きについて
2011年12月	第5回	・文書の英文化について ・留学生別科の現状について ・国際教育インスティテュートについて

C-4-15

2011～2013年度　活動スケジュール

■2011年度

2012年1月	第6回	・同志社大学のグローバル化の取り組み ・留学生統計と留学生の種類
2012年3月	第7回	・文書の英文化について ・「学内文書英文化ワーキンググループの総括」

■2012年度

2012年11月	第1回	・学内文書の多言語化について ・外国人留学生を対象とした入試に利用される語学能力証明書等について

■2013年度

2013年11月	第1回	・留学生のアルバイトについて ・グローバル人材育成推進事業について

C-4-16

情報共有の事例　1

■プロトコルについて
- ●プロトコルとは？
- ●エティケット
- ●席次、敬称
- ●国旗の掲揚位置・掲揚順
- ●レセプションでの食事、テーブルマナー・席次
- ●国際会議での紹介の順序
- ●国による握手のルールの違い
- ●ドレスコード
- ●贈呈品の選び方
- ●国によるボディランゲジーの意味の違い

＜配付資料＞
・プロトコルとは

C-4-17

情報共有の事例　2

■国費外国人留学生制度について
- ●趣旨、人数、プログラムの種類
- ●奨学金・旅費
- ●推薦方式、採用形態
- ●同志社大学の国費外国人留学生の状況
- ●国費留学生を増やす意義
- ●大学の事務について（採用決定まで・採用決定後・在学中）

＜配付資料＞
・国費外国人留学生取扱要項（文部大臣裁定）
・留学生受入れの手引き

C-4-18

WG活動を通じた意識改革の狙い

▼国際連携推進業務への理解
→国際化業務の分散化・高度化の促進＝各事務室のグローバル化

▼グローバル化への意識を醸成
→職員一人ひとりの意識改革＝本学の国際主義の教育理念を体現
→各事務室でグローバル化のための自立的な提案を期待

⇩

グローバル・キャンパス化に向けた全学の取組へ

C-4-19

WG活動の成果

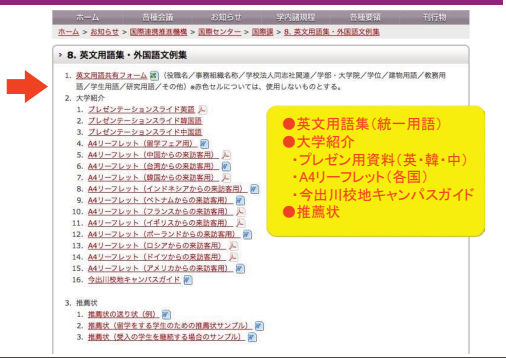
▼英文用語データベースの完成・運営
WEB（同志社大学教職員のページWEB）で提供
※事務共有フォルダでアップデートを継続

▼英文文書の共有
WEB（同志社大学教職員のページWEB）で提供
※英文パンフレットや、素材なども共有

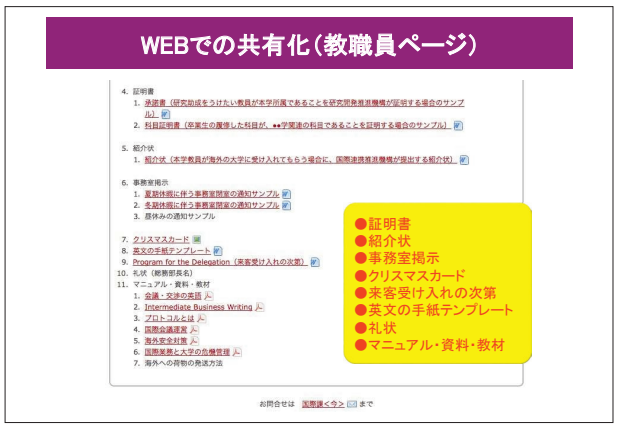
▼意識改革
一気には、無理。→　地道・継続的な啓蒙が必要。
※協働作業を行うことで、より、意識は高まった。

C-4-20

WEBでの共有化（教職員ページ）



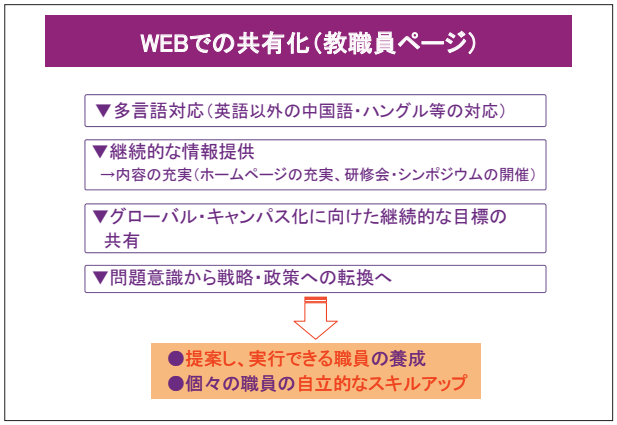
C-4-21



C-4-22

C-4-23

C-4-24



C-4-25

C-4-26

C-4-27

れるわけですから、それ以外の部分、特に課外活動の部分についてご紹介させていただきたいと思います。

資料をご覧いただければと思うんですけれども、我々はラーニング・コモンズというものを設置しました。これは自学自習スペースで、基本的にはここでは授業・講義は行わない、自学自習のための場所になっています。

運営主体は学習支援・教育開発センターがやっていて、このセンターはいわゆる教務部門ですけれども、我々の国際センターは連携組織としてラーニング・コ

C-4-28

モンズを支援するという体制をとっております。

留学コーディネーター、留学アシスタント、カンバセーションパートナーといった人的な支援を行っています。

具体的には入り口を入って右のほうにグローバル・ヴィレッジという場所を設け、そちらにこうした人員を配置しています。奥のほうのプレゼンテーショ・ンコート。それから３階のアカデミック・サポートエリア。アカデミック・サポートエリアでは、ライティングや学習に係る相談が行えるスペースを用意しております。留学生も利用できます。具体的には、ラーニング・コモンズでは、資料のようなことをやっておりまして、例えば、世界各国の新聞が読める、放送が見られる、あるいはチュータリングが受けられるといった場所なども設けています。

プレゼンテーションコートにつきましては、異文化のプレゼンテーション、留学生の方に母国を紹介していただくなどの発表の機会を持っています。また、各種シンポジウム等々をここでもやらせていただいています。

具体的な様子を見ていただこうということで、写真

LCの運営主体と連携組織

1.運営主体
学習支援・教育開発センター

2.連携組織
※多数の部門が多様な角度から「学び」に光を当てる契機
- ●教育支援機構内　情報支援課, 教務課, PBL推進支援センター, 全学共通教養教育センター
- ●国際連携推進機構　国際センター
- ●学生支援機構　学生支援センター
- ●独立組織　図書館, キャリアセンター

3.事業内容の検討
学習支援・教育開発センター内に
学習支援検討部会を設置（全学部および関連部門の代表）

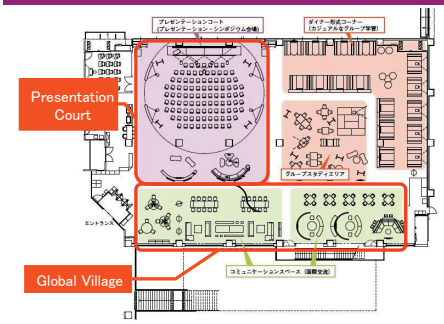
C-4-29

LCにおける学修支援のための人的支援

- ●アカデミック・インストラクター（専属教員2名）
- ●アカデミック・インストラクター（専属職員1名）
- ●学習支援コーディネーター（職員1名）
- ●ラーニング・アシスタント（大学院生14名） 2013.10～
- ●情報探索アシスタント（図書館からレファレンス担当1名）
- ●留学コーディネーター（国際センターから1名）
- ●留学アシスタント（学生5名（外国人留学生2名、日本人留学経験者3名））
- ●カンバセーション・パートナー（学生1～3名、週2回程度）
- ●ICTサポートスタッフ（ITサポートオフィスから数名）
- ●学生スタッフ（学生支援センターから：ピアサポート講座受講生）
- ●プリントステーション・スタッフ（外部委託）

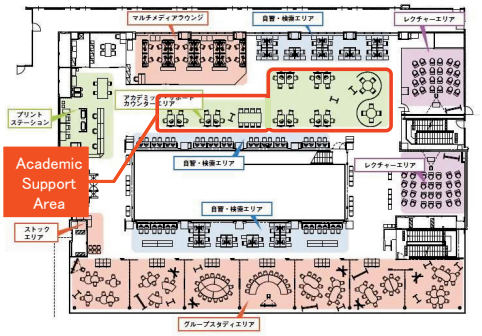
C-4-30

ラーニング・コモンズ（2Fクリエィティブ・コモンズ）



C-4-31

ラーニング・コモンズ（3Fリサーチ・コモンズ）



C-4-32

LCにおける留学生への学修支援

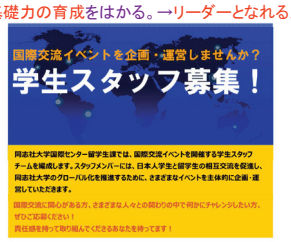
●Global Villageの活用
- ・プレス・ディスプレー（世界各国の新聞をオンラインで閲覧可能）
- ・海外放送トークスペース（CNN等、世界170局を見ながら情報交換）
- ・アカデミック・サポート（チュータリング機能、日本語の添削等も可能）
- ・"Think in English, Discuss in English !"（英語によるディスカッション）
- ＊"Go Global" Desk"留学相談（留学コーディネータ・留学アシスタント）
  →留学アシスタントは、交換留学生より2名雇用

●Presentation Courtの活用
- ・"Doshisha Intercultural Presentation"（異文化プレゼンテーション）
  →外国人留学生による母国紹介（日本人留学生の留学先の発表も含む）
- ・短期受入プログラム成果発表会等、公開可能な発表会
- ＊留学生キャリアシンポジウム（留学生による就職体験等）
- ＊"Global Promenade"（海外留学体験者によるポスターセッション）
- ＊TOEFL等外部試験対策セミナー

C-4-33

国際交流支援学生スタッフ制度の導入

●背景
- ・職員の限界（時間、業務量）←交流の機会をもっと増やしたい
- ・学生の能力や意欲を活かせる場が必要
  →参加する学生だけでなく、学生スタッフもグローバル化し、社会人基礎力の育成をはかる。→リーダーとなれる人物を育成



C-4-34

入りのスライドを用意してきました。入ってすぐ、２階になるんですけれども、こういう入り口がありまして、ラーニング・コモンズと書かれています。そこを入ると正面にプレゼンテーション・コートが見えてくるんですが、その右にはデジタルサイネージがありまして、いろいろなイベント、スライドの写真にあるようなグローバル化のワークショップであったり、留学経験者が質問にお答えしますよといった相談コーナーの宣伝であったり、イベントのお知らせであったり、ということをデジタルサイネージで紹介しています。

また、ラーニング・コモンズの入り口には各国の OS が入った PC を用意しておりまして、キーボードもそれぞれに国に対応したものを用意しております。

右のほう、入り口を入ってすぐに留学相談コーナーを設けております。ここでは専門の留学コーディネーターが海外留学についていろいろアドバイスしてくれます。また、外国人留学生の方にも、留学アシスタントとしてここに座っていただいて、日本人学生からの留学相談に応じるということもやっております。こちらの写真の方も外国人留学生です。

さらに入って右のところに、こういったタッチパネルで操作できるディスプレー、プレスディスプレーと呼ばれるサービスがありまして、海外の各国の新聞がほぼリアルタイムで閲覧できます。タッチパネルで操作できる装置です。

それから、グローバル・ヴィレッジは、基本的には日本語禁止ですけれども、外国人留学生は逆に日本語を話してくださいという場所になっております。こういう場所で、お互いにディスカッションしてもらったり、外国人留学生のカンバセーションパートナーには積極的に日本人学生に英語で声をかけていただいたりということをやっております。

こちらの場所は、世界170局の放送が閲覧できるコーナーで、皆さんでニュースを見ながら、外国人留学生と日本人学生でディスカッションする「トークスペース」という場所になっております。

それから、こちらがプレゼンテーション・コートでして、畳のユニットがありますので、それを寄せ集めて、お茶とかお花とかの日本文化を留学生の方に見ていただいたり、京の食文化、等を勉強していただく場所にも使っております。

それから、ラーニング・コモンズとは別に、グローバル・アーカイブという場所もあります。ここには本学に拠点を置いている海外有力大学が収集した日本語、日本文化に関する文献が置いてありますので、これを外国人留学生はもちろん、日本人学生も見られるという場所を用意しております。

また、学生国際交流スタッフ活動については、我々も早稲田大学を見習いまして、こういう場所を活用して、いろいろな活動しています。資料のほうは、改めて、後ほどご覧いただければと思いますけれども、facebook による情報発信なども最近は積極的にやっています。最後のほうに QR マークがついておりますので、是非、「いいね！」を押していただければと思います。

以上でございます。ありがとうございます。（拍手）

C-4-35

C-4-36

国際交流ラウンジ等における活動

●国際交流ラウンジでの活動

・World Music
留学生の母国の音楽（カントリーミュージック等）について紹介する。

・Brown Bag Talk
お昼ごはんを持参して、気軽に留学生と日本人で交流する。

・News Watch
留学生や日本人で日本語のニュースを見て、ディスカッションする。

・Book Club
留学生と日本人で日本の名作を音読し、語句の解説などの後にディスカッションする。

・お話の国
テーマ（マンガ、ジブリなど）を決めて、気軽に留学生と日本人でディスカッションする。

・World Café
留学生が母国の飲み物やお菓子、それらにまつわる文化や背景、習慣を紹介する。また、実際に一緒に作り、食べながら、ディスカッションする。

C-4-37

国際交流ラウンジ等における活動

●新入生歓迎行事（歓迎週間）

・Meet Japan
学生サークル協力のもと、茶道、琴・笙の雅楽演奏、書道、折り紙、生け花を留学生が体験する。

・Open Lounge
日本人学生が来日直後の外国人留学生を茶菓でおもてなし、サポートする。

・Japanese Cooking Class
プロの調理師を招き、和食（肉じゃが等）の作り方を教わった後、実際に留学生と日本人の混成グループで調理する。

・Wagashi Making Experience
老舗の和菓子に行き、和菓子作りを体験する。

・Educational Trip in Kyoto
京都にある工場や寺院を見学する。製茶工場・伏見稲荷大社等。

・校祖墓参
校祖である新島襄や新島八重、山本覚馬の墓がある若王子山同志社墓地にお墓参りし、その後、哲学の道を散策する。

C-4-38

その他の国際交流活動

●その他の国際交流活動

・International day
日本人学生と外国人留学生の交流会。

・Christmas Gathering
各国のクリスマスを通して、交流し、親睦を深める。

・Culture Day
各国の文化を採り上げ、ディスカッションする。

・World Kitchen
教職員食堂の空き時間に調理師の指導の下、調理を実習。

・餅つき
留学生課と生協の共同イベント。迎春イベントとして実施。

・IFTAR食事会
ラマダン明けの7月に実施、イスラムの食事を生協が提供。日本人も参加可。留学生課と生協の共同イベント。

・Language Hour
日本人学生と外国人留学生で英語と日本語の語学交換を行う。

C-4-39

その他の国際交流活動

●その他の国際交流活動

・One-day Field Trip
国際教育インスティテュート（英語コース）が主催。神戸製鋼等の工場見学及び企業の担当者との英語によるディスカッション。

・Cultural Exchange Event GC-ILA
国際教育インスティテュート（英語コース）とグローバル・コミュニケーション学部の学部間交流。異文化体験についてディスカッション、パーティを実施。

・工場見学
日本語・日本文化教育センターが主催。京セラ、パナソニック、島精機、酒造工場等を見学。

・滋賀・琵琶湖ツーリズム・プロモーション
日本語・日本文化教育センター主催で実施。エコツーリズムを体感。

・日本語ボランティア、会話パートナー
SAP・短期プログラムで日本人学生が授業や課外活動で日本語を支援する。

*ホームスティの募集
短期プログラムでホームスティ先を募集。教職員・学生にも協力を呼び掛け。

C-4-40

国際センターFacebookでの発信

Join us on Facebook

http://fb.com/DoshishaU.IC

C-4-41

Facebook

C-4-42

Facebook

C-4-43

Facebook

C-4-44

Find us on Facebook!!

http://fb.com/DoshishaU.IC

C-4-45

【パネルディスカッション】

○堀江　では、ここから全体討議に移ってまいります。今回、それぞれの大学でいろいろな取り組みがある中で、あえて各大学での特色のあるところに重点を絞ってお話をいただきました。

私が勝手にまとめましたところ、ざっくり四つぐらいに分けられるんじゃないかなと思っております。一つは寮とか宿舎整備の関係ですね。それから共修環境ということで日本人学生と留学生がともに学び合う、混住寮等も入ってくるかと思いますが、そういった環境の整備。それから、留学生、外国人教員含めましてのサポート、ワンストップサービスというもののあり方。あとは危機管理といったようなことがあるかと思います。

多方面にわたりますので、うまく時間を区切って議論をしていきたいと思うんですが、ここからはどこから始めても構いませんので、皆様のほうからのご質問から議論を始めていきたいと思います。どなたでも結構です。パネリストの皆様は何かご質問、大丈夫でしょうか。よろしいですか。では、フロアの皆様から、どうぞどこからでも結構です。お願いいたします。

○フロア１　九州大学に勤務しておりますが、お聞きしていて非常に参考になることばかりです。特に私立大学の皆さんの取り組みは、私ども国立大学から見ると非常に進んでいて、そのスピードが早く、なかなかまねするのも大変だなという感じがするんです。同じような大きな世帯の国立大学として森先生にお尋ねしたいのは、宿舎のことで私どもも悩んでおりますけれども、かなり先進的な、あるいはお金の要る取り組みを決定して、実行しておられるというのは驚きでございました。かなり初歩的な質問になるんですけれども、どのような形でそれが決定されるのか、森先生に一任という形なのか、事務からどのようにして上がってくるのか、そのあたりを教えていただければと思います。恐れ入ります。

○森　ご質問ありがとうございます。先進的というか、やむを得ずやっているというほうが正しいのかもしれないです。今のご質問は、どうやって意思決定されるのかということだと思いますけれども、もちろん私ども国際交流につきましては、国際交流推進機構幹事会という委員会がありまして、そこで、こういった日常的な学生交流にかかわるサービスの話だとかについては、教員組織と事務部門の部長さんが一緒になった組織がありまして、そこで決定していっております。ただ、教員の方々がとてもフォローできるような話ではございませんので、私どものほうに、事務局の中に、ワンストップサービスとなっている国際交流サービスオフィスというのがございまして、そこがいろいろな情報を集めたり、企業の方と接触したり、京都府の方と接触をして、そちらから上がってきたいろいろな情報をもとに、その教員組織を含む幹事会で決定して、次のステップに行くということをやっております。

先ほど、やむを得ずと申しましたけれども、とにかく、ない袖は振れない中で何ができるか、いろいろ試みているということでございます。

○堀江　ありがとうございました。やむを得ずということかと思います。

ほかに、今の意思決定に関連して、どちらかの大学で事例等をご紹介いただけるところはありますか。基調講演の二宮先生の話の中にもありましたけれども、スピード感がやはり大事であるということで、このあたりでご苦労された経験等、何か工夫されたことがありましたら、共有いただければと思うんですが、いかがでしょうか。

同じ国立大学の東北大学のほうでいかかですか。

○山口　確かに意思決定が非常に難しいんですけれども。先ほど二宮先生が、国際化というのが出島になってしまうので、そうならないようにというお話があったんですが、我々は出島ではなく、ゲリラ的にやっていきたいと考えております。今、現場でできるところはなるべく現場での判断でうまくできる形をとるとい

う。もちろん、大学の執行部といいますか、大学全体の意思決定に従う部分はありますが、それ以外で、できるところはやっていくということです。そういうことでやらないと、なかなか大きな大学では難しいのかなと感じております。

○堀江　ありがとうございました。非常に大きなテーマですけれども、この意思決定に関して、まだほかにご質問、コメント等いかがでしょうか。

○森　もう少し大きな話になりますが、ご質問は住宅についてだけだったんですけれども、先ほどご説明しましたが、「２×by2020」というものを定めました。従来は、先ほどお話があったように、国際化というものには出島という面があって、ほとんど国際の中だけで完結する話が多かったんですけれども、先ほど申しました、去年４月、あるいはその少し前ぐらいから学内での雰囲気ががらっと変わってきました。それはどういうことかというと、先ほど申しました教育の国際化について、教育部門の担当理事、その下にいる理事補佐、あるいは全学共通を見ている部門、そういったところが正面から教育の国際化を捉えるようになってくれたということです。それから、研究については昔から国際化が進んでいますし、設備、施設、あるいは産学連携部門など、結局、大学のいろいろなオペレーションが全部国際にかかわるようになってきたんですね。

そのために、国際戦略委員会というのをこの「２×by2020」の中でつくりました。そこには副学長、理事で国際にかかわれそうな４、５人が入って、そこで最高意思決定に近いものをやっております。さらにその中からプラクティカルで、デイ・バイ・デイ的なものは教員組織と部長が出る機構の幹事会で決めているということになります。ですから、従来よりもずっと間口が広がっていて、単純に一理事で決められることはほとんどなくなってきているわけです。そんなふうに変わっています。

○内田　出島の話ですけれども、ほかのところでも話をしたことがあるんですが、大学のグローバル化には、私は基本的に３つの段階があると考えています。第１段階は、出島型のもので、外事課という言葉が昔使われたことがありますけれども、いろいろなものについては、そういったところで一手にやるというものです

それから、第２段階は、研究と教育が国際化をするというものです。やはりグローバル30というのは、その第２段階の象徴的なものだと思っています。

本学の場合、もう第２段階は終わったということで、先ほど申し上げたように、その次の段階、大学全体のガバナンスをどうするかに入ってきました。つまり、日本の大学がグローバル30以降、世界的な競争の環境に置かれていて、そうしたときに海外から見て、日本の大学が同じシステムであるか、また、海外の研究者や学生から見て、日本の大学には魅力があるかは、一方ではグローバル化しているということですけれども、同時に他方ではアイデンティティーとディスティンクティブネスをどうやって持って、その二つを示すかに、今の段階では変わってきていると思っています。早稲田は、これをどうやって実現するかということで、ガバナンスを変えることが一番重要だということになっています。

○堀江　ありがとうございます。中原さんはよろしいですか。では、この件につきまして、どうでしょうか。ほかにコメント、ご質問等がなければ、もう１回オープンにしたいと思いますが、よろしいですか。では、またご自由にご質問、コメント等をお願いいたします。いかがでしょうか。

では、奥の女性の方から。

○フロア２　こんにちは。私は東北大学で勉強している交換留学生です。東北大学に来て、とてもいいと思いました。びっくりしました。会議して、議論して、こんなにいいことになっているんだと、今日は思いました。ありがとうございます。

そして、私は今は学部の３年生で、日本語は自分で勉強して、日本語で授業を受けています。法学部で、日本語がとても難しいです。中国では法律をずっと勉強して、日本語は自分で勉強していました。とても頑張って知的財産法を今回勉強したんですけれども、単位は多分取れないようになっています。

それで、父は中国の大連の大学で教えています。そこにも留学生がいます。日本は進んでいるので、中国では日本に留学するために英語と日本語を頑張って勉強している人が多いですけれども、留学生は中国語が

そう上手じゃない人が多いような感じがします。そして、単位を取るのがとても難しいので、イランから来た大学生は40%で単位を取っています。ほかの学生は60%取らないといけません。中国語がとても難しいから、こうなっています。ほかの大学には、例えば日本で２単位取ったら、帰って３単位に見るという制度があります。でも、東北大学にはそのような制度はありません。日本には、40%でいいとか、違う見方で単位を取るとか、もっと単位を取るとか、そういった制度がない気がします。それがいいことなのか、よくないことなのか、私も考えているんですが、わからないです。そして、これはいいかどうかが一つ目の質問です。

二つ目の質問は、例えばこのように交換留学生を助けるというか、今言ったようなこととか、ほかの方法があるとしたら何があるのでしょうか。それから、今、単位を取るためにしている制度があるのか、やりたいと考えている者があったら、お聞きしたいです。

○堀江　今のご質問ですけれども、中国での学習量、勉強量、それから日本での勉強量、単位の互換性というか、内容の互換性についてのご質問と、もう一つは、留学生が単位を取って学習を進めるために、どんなサポートが今後可能であるかという、２種類のご質問ですね。いかがでしょうか。

○山口　日本語が非常に上手だと思いました。東北大学の中での取り組みを紹介させていただきますと、交換留学の受け入れのために、ここ数年、進めてきたのは、実は英語で受け入れるプログラムの充実でした。

もともと東北大学は理系のプログラムで、３年生ぐらいで受け入れて、各研究室に入ってもらって、インディビジュアルなリサーチトレーニングをやりつつ、英語での講義を受けるということをかなり前からやってきたんですが、これの文系版をやっていくという、そういうところに力をここ数年注いでまいりました。

それで、今感じているのは、日本語でのプログラムといいますか、そこの開発が追いついていないということです。実は、普通のところに入れてしまって、それで終わりというようなところがあって、そのため、交換留学で来られた方々は非常に苦労して勉強されていると思います。先ほどのお話の中で出てきた事例、例えば諸外国の制度というのは、私も存じ上げませんので、ぜひ勉強させていただきたいと思います。今まで英語化で進めてきたんですけれども、日本語でのプログラム、あるいは日本語をいかに勉強してもらうかということが、非常に重要なことなんじゃないかなと今感じております。

完全には答えになっていないかと思うんですけれども、今感じていることをお話しいたしました。

○内田　幾つかの論点があるんですけれども、それを全てカバーするわけではないですが、一つは単位の互換の問題です。これは、全世界的な単位の互換という議論は当然あるわけですけれども、しかし、各大学にとって重要なのは、自分たちのカウンターパートとして適切な大学があって、そこの間で学生の交換をするということです。当然、学生を交換するときには、単位の互換についても協定して、それで来ているということが前提になっています。やはり相手方大学との協定書の中で定めています。場合によっては、３つぐらいの大学で交換したりする場合には、３大学間で合意したエクスチエンジプログラムのなかで決めることになります。この場合は別ですが、基本的には相対で決めていくしかないかと思います。

それから、１年の交換プログラムで来る場合ということですけれども、これは日本語で受け入れる場合と、英語で受け入れる場合と二つあります。早稲田の場合、1963年に国際部をつくって、そこで１年プログラムを受け入れていますけれども、そこは基本的に英語でやってきました。しかし、その場合でも、午前中は集中的な日本語のトレーニングをやってきました。つまり、日本に来て、日本のことを英語で学んだとしても、最終的には、日本語のほうがより情報量が多いわけですし、生活していくためにも必要だということで、日本語も重要だと思います。

また、もともと日本語でやっているプログラムに入ってくる場合も当然あるわけです。ただ、その場合にも、留学生のために特別な講義をするということを、かつてやったことはありますけれども、結局、うまくいきませんでした。やはり、通常の学生が受けているものと同じものを受けて、同じ基準で採点するということにならざるを得なくなったというのが、本学の現在の状況です。

以上です。

○森　状況は似ているんですけれども、京都大学には二つの交換留学制度があって、一つは英語で交換留学をしていただくというもの。もう一つは、日本語が相当できる方、つまり１級に近い日本語力を持っているぐらいの学生さんは、一般交換留学という言い方をしていますが、これで入ってこられます。

この一般交換留学で来られた方は、日本語能力が決して日本人に劣らないというか、アカデミックに十分な能力を持っているので、あまり単位取得には困っておられないんですね。ですから、４割の成績で単位を取らせるというのは、ちょっと考えられないんです。ですから、英語コースで来られて、そして早稲田さんと同じように、日本語の集中講義が７日に２時間や３時間近く受けられますので、半年、１年かけて日本語を上達していただいて、例えば次のマスターコースでの留学を目指されるといったようなことが現実的ではないかと思います。以上でございます。

○堀江　ありがとうございます。今のご質問に関連して、中原さんにお聞きします。先ほどご紹介いただいたラーニング・コモンズの中で、とりわけ留学生に対する学習支援というか、特に日本語のライティングなど、そういったところのサポートをどのようにされているか、ご紹介いただけますか。

○中原　ご質問の前半については、単位の互換性は、かなり厳しいと思います。そもそも、大学の中でそういう科目として位置づけているものを取っていただいて、それが成績証明書として成績評価が記載されるわけですから。早稲田大学なり、同志社大学なり、その大学の科目を習得したということになるかと思いますので、それはまた別の議論かと思います。

後半のご質問のほう、我々の大学でも日本語の習得がなかなか難しいといった学生さんにつきましては、一般教養の科目でもそういった日本語の科目を用意していますし、日本文化を知るような科目もありますが、そういった部分とは別に、ラーニング・コモンズのチュータリング機能をご利用頂く、あるいは我々が展開しているような国際交流への参加ですね。なかなか正課のカリキュラムだけでは日本語がうまく習得できない場合は、やはり課外活動でのフォロー、我々もそこが課題にはなっておりますけれども、寮で外国人留学生と日本人学生がともに住めるような環境を提供するとか、正課以外の部分での国際交流の活性化など、そういったところで日本文化を知っていただく機会を用意していくことで日本語をしっかりと学んでいただくほうがいいのかなと思います。

○堀江　ありがとうございました。先ほど、前のほうで手を挙げていただいていた方がいらっしゃったかと思うんですが、お願いいたします。

○フロア３　テーマは変わりますが、よろしいでしょうか。

広島国際大学に勤務している者です。地方の中小規模の大学としましては、今テーマであります留学生のサポートと同時に、留学生の注目を集めるという、募集力に注力する必要がございます。先ほどのご質問の中にもありましたように、大学が組織に基づく意思決定をしておりますと、なかなか動かないので、当然、私学ですので、現場におる者としては、ゲリラ的にトップのほうへそういった提案をしていかなくてはなりません。そのためのアドバイスということで、１点お伺いしたいんです。

低所得の国・地域で学ぶ優秀な外国人の方を日本へ招き入れる場合、その学生の方のビザの問題について、いろいろノウハウがあるかと思います。海外で優秀な方は、国費留学で国公立さんのほうへ第１希望、第２希望を出され、地方の私立大学は第３希望以下ということで、マッチングも当然後になってまいります。そうしますと、優秀な学生さんをというよりも、現実的には、母国で学ばれる２番目、３番目の学力を持った留学生の方に日本の地方大学に視線を向けていただき、そして入学、迎え入れてあげようということになると思います。その場合、入国管理局での問題ですとか、さまざまなことが出てくるかと思います。多分、壇上にいらっしゃる大学さんはそういったお悩みはないかと思うんですが、何となく、同志社大学の中原様には何かお知恵があるかなという期待を持って質問させていただいたんですけれども、お願いできますでしょうか。

○中原　すみません、今のご質問への直接のご回答になるかわからないんですけれども、そういう国から来ていただく場合、もちろん大学のレベルを下げて受けていただくということは考えておりません。ただ、優

秀な学生で充分な学力があれば、特定国を対象とした奨学金を我々は設置しております。これは、いわゆる最貧国、低所得国という、ODA 受給国リストを利用しまして、該当する国の学生であれば、受験料や入学金、学生納付金４年間全て免除して、プラス、月額８万5,000円の奨学金を４年間支給するという制度を設けておりますので、こういった部分での支援を手厚くしていくことを考えております。

○堀江　ビザ関連の情報はこのセッションのトピックから少し外れますので、もしフロアの方で何かございましたら、引き続き後ほどご議論いただければと思います。

　それではいかがでしょうか、ほかにご質問、コメント等。

○フロア４　宮崎大学に勤務している者です。留学生の環境整備の観点から、内田先生の資料の中にもありましたけれども、特にイスラム圏の留学生の方々、特殊な環境整備が必要だと思うんですね。本学でもいろいろ今問題となっておりまして、ハラルフードの料理のこともあるんですが、特に礼拝場ですね。毎日お参りをするということで、スペースの問題があると思うんですが、各大学の方々、パネリストの先生方、どのような対応をとられているか、お伺いしたいと思います。

○内田　多分、私どもが進んでいるわけではなく、ほかのところを見ながらやってきたところがあるんです。食事については、生協でそういうものを用意してもらうということを始めました。それから礼拝室については、「礼拝室」というふうに記載をすると、さまざまな宗教団体から、自分たちの部屋もという要望が出ますので、礼拝室という名称ではない形でつくっています。つくる際には、お金がないものですから、サウジアラビアの大使館に、施設、設備、内装などは寄附をお願いしました。以上です。

○堀江　ありがとうございます。ほかにはいかがでしょうか。中原さん。

○中原　本学のほうでも非常に中東からの学生が増えてきてございまして、今おっしゃられましたように、生協よりムスリムの方のためにハラル食を提供していただいております。

　それと、メディテーションルームという名前で、本学は、基本的にはキリスト教主義大学でありますが、一神教の研究もやっており、他の宗教も研究の対象になっていまして、祈りの部屋ですね、そういったものを建物の中に用意しており、足洗い場と、専用の部屋を用意しています。

　発表ではご紹介できなかったんですけれども、ラマダン明けのイフタールというパーティーを留学生課と生協との共催で開催しています。ムスリム食を提供して、いろいろな学生さんにも、もちろん参加していただいて結構ですというものですが、こういったパーティーを他の文化を知る機会として活用しております。

○堀江　ありがとうございます。ほかにこの関連で大学の事例等をご紹介いただける方はいらっしゃいませんでしょうか。

○山口　東北大学も大体同じで、ハラルフードは生協のほうで用意しております。かなりそういう学生さんがいらっしゃるので。

　それと、礼拝については、特に礼拝所というような形のものは設けないんですが、学内の施設を使っているということを黙認しているというか、そういう状況で、実質的にできるようにしています。

　これはどういうふうに考えたらいいか、我々もまた悩んでいるところですけれども。

○森　京都大学もほとんど同じ状況です。たまたま鴨川を挟んで反対側に、イスラムの寺院がありますので、そこに行かれる場合もあるんですが、１日５回ですから、それはなかなか難しいので、各キャンパスにそれとおぼしき場所を各学部がつくっているというのが実態ですね。国際交流センターにも小さい部屋が一つありますが、全く同じ理由で明示はしておりません。ですから、インドネシアの学生さんがすっと来て、お祈りして帰っているというのが実情であります。

○堀江　これに関連してですが、名古屋大学での事例では、ムスリム学生の環境整備ということでは、少し違ったアプローチがあります。ムスリムの学生自身がイスラム文化研究会というものを立ち上げて、自分たちの文化を一般の学生にも知ってもらうという活動をしながら、自分たちの環境整備を生協や留学生センターと協力して行っていったという事例がたしかあったと思いますが、正しいでしょうか。何か補足いただけますか。

○フロア５（名古屋大学）　名古屋大学です。あわせて、別のグループの学生たちがアラビア語講座をやったりして、宗教を前面に出したアプローチではなく、文化からのアプローチで、広く学生や教職員が理解を深めようということで活動しております。

○堀江　ありがとうございました。

では、引き続き自由にご質問を受けたいと思います。

後ろの壁に近い方がたしか早かったかと思います。

○フロア６　東京の町田の桜美林大学から参りました。寮の運営に携わっておりますが、今日は非常に刺激的なお話をいろいろいただきまして、ありがとうございます。

寮は、留学生の生活支援の場という側面もあると同時に、今日既にお話にありましたように、異文化交流、国際交流の場としての利用、それから、最近注目されております学生の自主性、主体性を育てる場という機能もあると思います。せっかく留学生の方々にたくさん来てもらっているので、本学でも日本人学生と一緒に住まわせているわけですね。そこで、どのような仕掛けというか、ソフトウエアをつくって、学生の主体性を伸ばすと同時に、国際交流を促進させているのかという点についてお話をお聞きしたいんですね。

ご報告の中にもありましたけれども、例えば京都大学さんの場合、寮をいろいろ利用可能な資源を活用していらっしゃいましたが、空間的にはばらばらになっていました。それを突き抜けて、京都大学の寮としての帰属意識、生活意識をどう培っておられるのでしょうか。大学のセンターでやるイベントもあると思うんですけれども、そういうアクティビティーを通して、一体感をつくっていくのでしょうか。そして、日本人学生をどうそこに参加させていって、留学のステップといいますか、国際感覚を培ってもらい、外国に興味を持ってもらうのか。

そういったソフトウエアの面での、各大学の取り組みをお聞きできればと思います。よろしくお願いします。

○堀江　混住寮の中でのプログラミングということですね。いかにそれを促進していくかという部分ですが、いかがでしょうか。

○フロア６　済みません、お答えの際には、大学側が上から用意してあげるというものと、あとは学生の自主性ですね、そこを分けて教えていただけると助かります。

○森　多分、状況がかなり違いますので。京都大学の従来からある日本人の寮は、学生の自主管理なんですよ。ところが、実際はかなり留学生が入っています。先ほど所得の問題の話が出ましたけれども、昔からの寮は非常に廉価なんですね。ですから、自然に留学生の方で経済的に厳しい方は入っていらっしゃいます。学生が自主管理しているので、我々はその入居者を含めて、結果を聞くだけという、学生さんの自主性そのものでありまして、逆に言うと、大学が管理していないという批判もあるわけです。

その一方で、先ほどからご説明しています国際宿舎、これは寮と呼んでいません。なぜかというと、寮と言うと、学生寮になってしまって、日本人学生の従来からの寮のように管理をしてくれということになると、また難しくなるんですね。国際宿舎として我々が利用できるものが減ります。ですから、国際宿舎は基本的に混住をしていません。これは残念ですけれども、そういう大学は結構まだ国立大学にあると思います。じゃあ、寮でどうやって日本人学生と一緒に住むんですかということになりますが、ゆえに、答えはノーであります。したがって、先ほどラーニング・コモンズなどありましたけれども、そのような学内の設備をつくって、我々も「きずな」と呼んでいるところがありますが、そこで学生たちが交流活動をしています。それは我々は大いに促進しています。ただ、寮というと、非常に国立大学では、特に京都大学の場合は難しいものがございます。

以上でございます。

○内田　これまでは、本学の場合には、留学生のための寮をそれなりにつくってきていますが、早稲田のところから地下鉄だと３つ目の中野に、900人が入る寮をつくりまして、この３月からということで、ほとんどできています。そこは、４つのベッドルームに、１つのコモンルームという、４人で１ユニットを形成し

ます。２つは外国人、２つは日本人という完全な混住型の建物をつくりました。

この場合、一番問題になるのは、やはりコストの問題です。土地代は大学も負担しますけれども、建物の建設に関しては完全に減価償却で、学生さんに払ってもらうということです。そうすると、結構高くなってしまいます。これを月１万円、30数年分のを下げようとすると、30億ぐらいかかるんですね。それで、卒業生あるいは留学生が来ますので海外で、募金といいますか寄附を募る活動をしています。ユニクロの柳井さんのように３億円くれる人もいますけれども、それはごく例外でして、どうやってお金を集めるか、まだ10億は集まっていないと思いますけれども。ともかく、コストは大学から出すわけにはいかないので、それをどうするかということがあります。

それから、今述べた寮は900人規模ですけれども、今から６年ぐらい前だと思いますが、120人ぐらいの規模の寮をつくりました。そこは、今のと同じような形で、さまざまな実験と言うと怒られるんですけれども、試みをしてきました。特に、寮は、単に生活をする場だけではなく、教育する場であるということで、そこにはもちろん大学院生が RA として入りますけれども、いろいろな企業の方、あるいは地域の方との共通の教育プログラムとか、こういうものを毎日夜に行うということで、学生はそれに参加することが必修です。そのようにして寮を生活と教育の場としたいということです。それと同時に、混住をすることに自体によって、多文化の社会で生きるとはどういうことかを身をもって体験させたいということで行い始めました。以上です。

○山口　東北大学の場合、従来の日本人の学生寮は、伝統的に、学生の自治が色濃くあるんですけれども、混住寮に関しましてはかなりそれとは違う形で運営しております。

混住寮をユニバーシティーハウスと呼んでいるんですけれども、１フロアに８つの個室があって、台所などを共有することになっています。そこに、５対３がいいとかいう意見もあるんですが、基本的には１フロア半分半分の日本人と留学生が入るという形をとっています。

これが750戸完成しました。今後も、寮の改修などがある場合は、ユニバーシティーハウス化するということにはなっているんですが、今のところまだ、お金などのめどがたっていないので、今後どうしようかというところです。

どういうふうにソフト面でつくっていくかがやはり問題になるんですが、留学生、それから日本人学生について、アドバイザー、RA を設けて、そこでやるというところまで整備してあるんですけれども、そこがどういうふうにインタラクションしているかということが問題になるということで、つい最近、調査をいたしました。今後、どういうふうに取り組んでいったらいいかということを、いろいろと学生の意見を聞きました。

そういう中で、今後取り組んでいこうとしている方向なんですけれども、ある程度、学生の自主性を重んじながら、教員側から、こういうふうにしなさいということではなく、アドバイスをしていくという形で運営していきたいと考えております。早速、そういうようなイベントを行ったりする計画を立てております。

○堀江　今のことに関連して、何かご意見、ご質問はございませんか。

どうぞ。

○フロア７　私はユニバーに住んでいます。とてもいいと思っているので、みんなとシェアしたいです。私はユニバーに８人で住んでいます。台所は共同なので、一緒にご飯をつくっています。そのときにみそ汁のつくり方を教えてもらったり、いろいろやっていて、とてもいいです。

きのう、ここに来る前も、一緒に住んでいる日本人が、福岡は何がおいしいか教えてくれました。（笑）台所の前に大きいテーブルと椅子があって、みんなはそこに座って話します。テレビを見ているときも、難しい単語があったら、置いてあるノートに書いていたら、次に日本の友達が見て、説明を書いてくれます。いい人だと思います。

ソフトについては、アドバイザーがユニットに住んでいます。アドバイザーは一緒にいろいろなイベントを考えて、留学生が参加できる管理棟でのイベントをつくっています。それにみんな参加します。その寮の

１階には、留学生向けのサークルの会議室があります。そのサークルは留学生向けのパーティーをつくっています。私もその１人です。２月14日はバレンタインというイベントの日なので、恋愛向けのパーティーをつくって、みんな参加しています。（笑）これはとてもいいと思います。

でも、少しアドバイスがあります。私は大学院生と住んでいます。大学院生は忙しいです。だから話す機会が少ないです。学部生が住んでいるユニットは、とても交流が多いです。だから、私は学部生が住んでいるユニットによく遊びに行きます。大学院生は忙しくて、全然交流がないユニットもあります。これは問題です。

○堀江　ありがとうございます。今のことについて、さらにコメントはございますか。

混住寮にかかわって、ほかにいかがでしょうか。お願いします。

○フロア８　大東文化大学に勤務している者です。混住寮に関して、留学生と日本人の間で問題があって、スタッフの中で、できればしたくないというような議論が出ています。習慣が違う、キッチンをシェアするという一からの積み上げが、学生の間でうまくいかないことがあるんです。例えばアメリカなどで２人組のシェアであれば、マッチングを変えるということで、いろいろ対処したりもできると思うんですけれども、寮も少ないし、入った人たちが合うか合わないかで住む環境が大きく変わってしまうというですね。それで、混住寮はどうなのかなという議論が学内であります。

その辺につきまして、留学生だけの寮を持っていらっしゃるところと、混住寮というところがありますので、それぞれのご意見を聞かせていただければと思います。

○堀江　異文化摩擦をコストと捉えるか、ほかのメリットを多く見るか、そこのバランスだと思いますが、いかがでしょうか。

○中原　本学には、国際交流寮が一つあることにはあるんですけれども、あまり大きな規模ではなくて、ほとんどが外国人留学生専用寮です。そもそも、留学生寮を拡大してきたのは、絶対数が全く足らないからでして、とにかく外国人留学生の寮を確保するということで現在、500室近くを確保しております。ただ、今後、国際寮における交流をどうするかということは、ほかの大学さんの事例も参考にさせていただきたいと思うんですけれども、そうは言いましても、留学生は同じ国同士ではありませんので、国によってごみの出し方、整理の仕方、考え方が全然違います。そういったところも含めて、管理人からサジェスチョンをしてもらう。あるいは、外国人留学生の先輩の方にも、少しそういう位置づけをつくりまして、そういった方からご指導いただくということを重ねながらやっていくしかないのかなと思います。

我々も寮をつくるとき、現状は、先ほどの京都大学のような事情があったと思うんですけれども、古くなって使わなくなった予備校や看護学校の寮などを留学生寮に転換するというような方向で拡大するということでやってきています。その際には、必ず１階に食堂や共有スペースを設けさせていただいていまして、そういった場が、先ほどありましたとおり、まさしく交流の場になるのかなとは思うんです。ただ、交流に関しては、事例を積み重ねて、頑張っていくしかないのかなと思います。もちろん、オリエンテーション等々でそういったことはしっかりさせていただくということは、やらせていただいております。

○山口　お答えになるのかわからないのですが、本学の場合、例えば日本人の学生について、アドバイザーには、１年日本で過ごして２年目以上という人になってもらって、その中でのまとめ役的な役割を果たしてもらうということでやっております。

必ずしも、完全にトラブルがないかとか、あるいは、いろいろなアンケートをすると、逆に国際交流に尻込みするといいますか、そうなってしまう人がいないわけではないんですね。そういうことになってしまうということもあり得ることですけれども、全体としてはうまくいっていると思っています。

○森　従来は大学院生に主事という格好で、国際宿舎に入ってもらっています。それ以外に、教員の方で、極めて安い家賃で一緒に住んでいただいているという人がいます。したがって、何か問題があると、そういう方々に対応に当たっていただいています。

一つ京都らしい事例を紹介します。京都は、隣の家屋、民家と接しています。ヨーロッパの学生さんが交

換留学生で来ると、夜までパーティーをやって楽しんじゃうんですね。そうすると、翌日、近隣住民の方々からお叱りを受けるということがあるので、これは入居のときに、ぜひ注意してくださいと言っています。

そんなこともあって、近隣住民の方との関係がすごく大事なので、年に１回ですかね、副学長等の主催でパーティーをやるんですね。そのときに、近隣の小学校の先生や町内会の方を呼んで、留学生と一緒に食事をするというようなことをやっています。これが結構、緩衝材になっているんじゃないかなと思います。

○堀江　ありがとうございます。今の議論の中で、寮の位置づけとして、住むための寮という位置づけと、それから教育寮としての位置づけと、二つの極が見えてきたかなと思います。また、教育寮として考えたときに、物理的な交流の場を設けて、そこで学生が経験から学んでいくという自然な形と、もう一つはそこにもう一歩踏み込んだ教育的な仲介をしていくという事例もあるのかなと少し思いました。

今、手を挙げられた方は、これに関連してでしょうか。お願いします。

○フロア９　秋田にある国際教養大学から参りました。私たちの大学の寮のあり方についてだけ、ご紹介させていただいて、参考にしていただければと思います。

本学には、学内に学生寮がありまして、ここへ１年生は必ず全員住まなければいけないことになっています。それから、そのほかにアパートが学部学生用に３つありまして、また大学院生用に１つあります。全部で500数室あるんですけれども、そこに約800人の学生が住んでおります。学部学生は90%、交換留学生は100%住んでおります。大学院生は50%、学内の宿舎に住んでいます。

この学生たちは、ほとんど混住で住んでいるんですが、一番最初に住むときに、ルームメイトまたはスイートメイトと、ルームメイトコントラクトを結ぶように話しています。大学の規則は規則であるんですけれども、それにプラスして、居住者間でちゃんとルールを決めるということです。朝何時に起きて、何時に寝る、音は何時まで出していいとか、訪問者は何時まで呼んでもいいとか、そういった細かいところまで話させて、その紙を大学に提出させています。その上で問題があった場合には、その紙に基づいて学生課で対応して、話を聞いて、そしてそれを結んでいない場合には、一旦それを受け入れないで、まず当事者同士で話すようにと話しています。その上でどうしてもということであれば、部屋をかえるなどの対応をしております。参考になればと思います。

○堀江　事例のご紹介ありがとうございました。混住寮に関しては、うちの学園内の立命館アジア太平洋大学もおもしろい事例を持っていると思うんですが、ここに APU の方はいらっしゃらないでしょうか。

APU は、大きな寮を持っておりまして、基本的に留学生と日本人の学生が一緒に住みます。そこの特徴としましては、レジデントアシスタント（RA）という学生が、責任を持ってコミュニティーをつくっていく、ルールづくりからコンフリクトの解決から、そういったことをやっていく。さらに RA の上にリーダーのような方がいて、順番に、先輩が後輩を見ていくというシステムが非常にシステマティックにできています。私は個人的に、RA をやっていた４年生の学生とかを見たりすると、非常にしっかりしていて、彼らはロールモデルとしての意識も高いので、またこれが新入生に対してもいい影響を与えているなということを今思い出しました。どうぞ。

○山口　先ほど森先生から近隣住民とのつき合いというのは重要だというお話しがありました。これは平時もそうなんですけれども、危機的な状況でも非常に重要だということを一つつけ加えさせていただきたいと思います。

震災の際、近くの小学校、中学校が避難所になりました。やはり、そういったところに留学生が大挙して行くんだということをふだんから知っておいていただく、そして、そこと、大学とうまく関係を持っておくということが、トラブルを避けるという意味でも非常に重要だと、震災を経験して思います。

○堀江　ありがとうございました。先ほど手を挙げられていた方のご質問を受けたいと思います。

○フロア10　慶應義塾大学に勤務している者です。今日は参考になるお話をいろいろありがとうございました。

私どもの大学でも、やはり寮の問題では大変苦労しております。全体的な数が足りないということもそう

なんですが、森先生がお話の中で少し触れられたとおり、サマープログラムですとか、短期のプログラムで宿舎をどうしようかということが、今、大きな課題になっています。今後、京大さんでも力を入れていかれるということをおっしゃっていたので、どういった形で短期の宿舎を確保されるのかお伺いします。

あるいは、ほかの大学でも、短期のプログラムはいろいろ企画されていると思いますので、そういった場合、どのようにして宿舎を用意されているのでしょうか。欧米ですと、例えば何日までに必ず出ていってくださいという形で全員を追い出して、あいた期間だけやるという形でやると思うんですが、欧米の大学と日本の大学では学事暦が異なる関係で、まだテスト期間中の学生を追い出すみたいな形になりかねないこともありますので、私どももどのようにすべきなのかなというのを今すごく悩んでいます。何かヒントになるようなことをいただければと思います。よろしくお願いします。

○森　ありがとうございます。これまた、決して誇れる話ではないんですが、従来、国際宿舎は、研究者の場合、日割り計算で入居していたんですけれども、留学生は月単位で宿舎料を計算していました。ところが、いろいろな問題がこれで生じてきております。例えば10月20日に来て12月３日に帰る学生は３カ月分納めなければいけないというので、最後の月は払わないで帰っちゃったりですね。こういう問題が、短期の交流学生が増えれば増えるほど起こっています。

それから、学事暦が違うので、なかなかできないんですけれども、私どもはまだ８月、９月が休みですので、８から９にかけてサマースクールをやるということになると、従来は月割り計算なので、８月とかまでべったりいることになります。そうすると、やはり日数計算にすることも必要じゃないかという議論が出ております。今、田中さんと一緒に、どういうことができるか検討しています。かなり事務的な負担が増えるので、ほんとうにできるのかどうか。

それから実はもう一つ、最近、問題が出てきています。ご存じのとおり、15週の問題があって、従来、10月の第１週は留学生のオリエンテーション期間になっていました。ところが、全学共通科目で英語の科目がぼーんと増えますと、第１週にオリエンテーションを普通の学科がやるんですね、交換留学生が来ても。交換留学生は２週目から受けに行くと、もう１週目に受けていないから、受講できませんという可能性が出てきているんですよ。そうすると、従来は10月１日あるいは９月ぎりぎりに入っていた人が、その前の週にオリエンテーションをやらないと、第１週の講義が受けられないということになってきます。これもまた日割り計算の必要が出てきているのかなと思います。

これに対する対応で、田中さん、何かありますか。よかったらいいですか。

○田中課長補佐（京都大学）　すみません、京都大学の国際交流課で留学生、外国人研究者の居住を担当しています田中と申します。本日はいろいろな話を聞かせていただいて、大変参考になっております。

今、森機構長のほうからあった話についてお話しします。まず、今、非常に人員削減が進んでいて、ぎりぎりの事務体制でやっていまして、これは国際部門だけではなく、経理課のほうも進んでいます。そういった中、日割り計算になると、事務量が単純に増えます。事務量が増えても、今のままではなかなかニーズに応えられませんので、考えていますのは、計算そのものをアウトソースし、大学のほうには一括して業者さんのほうからお金が入ってくるというようなスキームです。これが実現すれば、事務のほうの簡素化にもなりますし、留学生のニーズにも応えられると思っているんですけれども、幾つか実務的な問題がありまして、交渉中というか検討中というところです。以上です。

○堀江　ほかにはよろしいですか。

実はもうお時間になってしまったんですが、あと数分だけいただきまして、各プレゼンターの皆様から一言ずつ最後のコメントをいただきたいと思います。今回のシンポジウムの大テーマである「国際化で大学は変わったか」、このあたりについての環境整備に関して、特にご実感されていることをお話しいただければと思います。また、今後の課題や展望についても何かありましたら、簡単に一言ずつお伺いしたいと思います。

では、山口先生から。

○山口　環境整備だけにとどまらず、国際化に伴っての変化で何が一番重要かというと、同じような人じゃ

ない人、異質な人たち、考え方が全く違う人たちが、特に教育関係で入ってきているということだと思っています。入試、授業のスタイル、宿題を出す、出さない、成績のつけ方も違うし、そもそも学生から見ると、各国の高校の教育のレベルが全く違っているという、そういう中でどうやっていくのか。今日の基調講演にもありましたけれども、英語化だけでないんだと思うんですね。そういった部分に関しては、国際化で変わろうとしているということで、まだまだそういうところが消化し切れていない、アウフヘーベンしなければいけないと思うんですけれども、そういったところまでなかなか行き着いていないんじゃないかなと感じております。

○森　私の理想は、国際部がなくなることです。これはどの部門でも国際にかかわられるということで、実はフィンランドのヘルシンキ大学には国際部はないんです。ところが、国際部長さんはいます。国際部長が何をやっているかというと、各部門に国際部門の担当がいるので、その国際部長さんが持っている予算で、それをバーチャルな部門に割り振っていると言っていました。おそらく長い目で見たら、あと10年、15年、20年たったら、そうなるんじゃないかなという感じを持っています。ですから、そのようなことを考えながら、地道な努力を積み重ねていくのかなとは思っております。以上です。

○内田　本学の場合には、1990年代の半ばに、当時の総長がグローバルとローカルとを合わせた「グローカルユニバーシティ」ということを言ったことがあるんですね。その後、先ほど言いましたように、「NEXT125」というところも含めて、大学改革をする際の手段として、国際化というのを本学の場合には使ってきたということです。したがって、先ほど申し上げたように、今やガバナンスを変えるためのグローバル化ということで、大学を変えちゃえということになるわけです。

その際に、私ども国際でよく言っているのは、ウインブルドンを見習おうよということですね。ウインブルドンでは、昨年はイギリスの選手が優勝しちゃったので困るんですけれども、それまでは100年以上、イギリスの選手が優勝していないんですよね。だけど、テニスのトーナメントとしては、あそこが世界最高ということになっているんですね。勝つ人はどこの国の人でもいいわけです。つまり、私どもの大学も、学生も教員も職員も、どこの国の人でも構わないんだと。ただ、そこでの教育と研究が非常に優れていて、世界中から人が集まってきたい、そういう大学にしたい。そういう意味では、ウインブルドンと同じようなものになることが非常に重要だろうと思っています。以上です。

○中原　外国人留学生の受け入れもかなり増えましたし、全体的に留学生が学内、キャンパスにかなりあふれてきましたので、全体的にほんとうに変わったという雰囲気です。先ほどの、祈りの部屋であったり、ハラル食であったり、そういった部分の改革もそうですし、我々も今、外国人留学生の入試も担当しておりまして、入試のところでも一生懸命頑張ってきましてが、このG30事業が終わったからといって、入試を変えるわけでもありません。ただ、今後は、今まで入口の入試のところばかりに着目していて、入学後の外国人留学生の生活の質、それから今後、社会に出ていくキャリア・出口の問題、そういったところになかなか手をつけられていないんじゃないかなと思います。今後は出口のキャリア支援という非常に大きな問題がありますので、そのあたりが課題かなと思います。

加えて、海外へ帰っていかれた、あるいは日本で働いている、卒業された外国人留学生について、いわゆる校友システムみたいなこともきっちりとやって、ネットワークをつくって、先ほど寄附という話もありましたけれども、そういった部分の強化もやって。引き続き、外国人留学生に対して卒業後にも何らかの支援を継続するということを考えていかないといけないと思っております。以上です。

○堀江　ありがとうございました。

５分ほど時間を超過いたしましたけれども、これで課題別セッションCを終了させていただきます。この後、４時45分から全体会合のほうで、またこのトピックについてもさらに議論を進めていく予定にしております。

皆様の積極的なご参加、ありがとうございました。最後にプレゼンターの皆様にもう一度大きな拍手をお願いいたします。（拍手）ありがとうございました。

（D）課題別セッション
学生が見る国際化：Voice of Students

発表者：

Academics	**Adriana Gomez（Sophia University）**
	Eugene J. Song（Keio University）
Facilities	**Nirmin Farid Juber（University of Tsukuba）**
	Christopher Sjoberg（University of Tokyo）
Information	**Sapna Sinha（Nagoya University）**
	Kana Yamase（Meiji University）
Campus Life	**Hsin Shih（Doshisha University）**
	Nguyen Thi Thanh Nga（Kyoto University）

ファシリテーター：

Adiguna Bahari（Kyushu University）

Bahari:

Allow me to introduce myself. My name is Adiguna Bahari and I am a G30 International Student from Kyushu University. Let me tell you that it is a great honor for me to be your facilitator today, and the reason for this honor is because we have here in this hall a truly diverse audience ranging from students, university staff, professors, and other educational institution officers. We have here outstanding people across 25 different countries. Therefore, I truly hope that our diverse background and nationalities will result in a fruitful discussion and can produce a drive of enthusiasm for exchanging our ideas.

First of all, I would like to introduce the person sitting beside me. Professor Koichiro Watanabe, to give a little word of introduction. Professor Watanabe.

Professor Koichiro Watanabe, Kyushu University:

Okay. Good afternoon. My name is Koichiro Watanabe and I am Vice Dean of Faculty of Engineering in Kyushu University. I think I am the only aged person here. I was asked to be here as a co-facilitator, and I will give some advice to them. Actually I expect very active discussion among students, university staff, professors here, and I expect a very close network among students actually through this symposium and yesterday's workshop. Please enjoy this meeting.

Bahari:

Thank you very much Professor Watanabe. Next, I would also like to introduce a very important person with us. He is Ekenechukwu Okafor, our Chairman of SCIKyu, or the Student Committee of Internationalization of Kyushu University. And I would like him to give a little word for the guests here. So, Ekene, if you would please.

Ekenechukwu Okafor, Kyushu University:

Hello. Thank you very much. Yesterday a group of about 61 students from the 13 G30 universities had a workshop in which they discussed and evaluated the internationalization process in the universities. That discussion yesterday was very deep, it was very informative, it was educating, and it was thought provoking. And today we'll be having discussions and presentations from the outcome of those discussions yesterday. So, I humbly encourage all stakeholders here present to actively participate in today's discussion. Thank you very much.

Bahari:

Thank you very much. Okay, please give a round of applause. So ladies and gentlemen, welcome to Session D. The theme of the session is "Internationalization in the eyes of students." What makes this session special is that in this session we aim to bring up opinions and ideas directly from the consumers of education, in other words, the students. Like Ekene has said, yesterday Kyushu University under the Student Committee of Internationalization for Kyushu University, otherwise known as SCIKyu, we held a workshop with the topic of "Review of internationalization in my university on expectation and reality." And SCIKyu invited international and Japanese students from all of the G30 universities to come here to Fukuoka and join the workshop. In fact, these students are here with us sitting in the front row. Ladies and gentlemen, for these students who have flown from all over Honshyu, please give them a round of applause.

During the workshop yesterday, the students were divided into eight groups, and we made sure that each group contained students from different universities and countries. The topic of internalization practices itself was categorized into four themes; the first theme is academics; the second theme is facilities, the third theme is information; and the last theme is campus life. And so every group focused on one theme, with two groups having the same theme. And through this workshop students were able to share their experience and discuss their ideas about internationalization practices in each of their own universities. Although each group consists of students coming from different universities and countries, they were able to unite and present a collective review and present their expectation and realities.

So, you can see here in the slide the list of universities attending the workshop and the universities that are present with us today, and I would like to introduce you to our handsome and beautiful presenters. So, at the end of the table we have the academic group. The first is Eugene Song from Keio University. The second is Adriana Gomez from Sophia University. Not to forget to mention, the students in the academic group, could you please stand up and show yourself? So these are the students discussing the academics. Please give them a round of applause. Okay, thank you very much. And the second under the category of facilities, we have our presenter Christopher Sjoberg from the University of Tokyo. And we have Nirmin Farid Juber from the University of Tsukuba. And can we have students under the category of facilities? Please give them a round of applause. Okay, and the third is the category of information. We have Kana Yamase from Meiji University, and we have Sapna Sinha from Nagoya University. And then can we have the students under the category of information please? Please give them a round of applause. Okay, last but not least, under the category of campus life we have Hsin Shih from Doshisha University, and we have Nguyen Thi Thanh Nga from Kyoto University. And finally could we have the students that were discussing under the category of campus life to please identify themselves? Yes, these are the students that have been discussing campus life. Please give them a round of applause.

Thank you very much. Ladies and gentlemen, next we will have the presentations from representatives of these four categories. First, let's welcome Eugene Song and Adriana Gomez to present their review on academics. Thank you very much.

【日本語訳】

（D）課題別セッション
学生が見る国際化：Voice of Students

発表者：

Academics	**Adriana Gomez (Sophia University)**
	Eugene J. Song (Keio University)
施設	**Nirmin Farid Juber (University of Tsukuba)**
	Christopher Sjoberg (University of Tokyo)
Information	**Sapna Sinha (Nagoya University)**
	Kana Yamase (Meiji University)
Campus Life	**Hsin Shih (Doshisha University)**
	Nguyen Thi Thanh Nga (Kyoto University)

ファシリテーター：

Adiguna Bahari (Kyushu University)

○ **Bahari**　まずは自己紹介させてください。私はAdiguna Bahariと申します。九州大学のG30留学生です。本日は、学生、大学職員、教授、その他教育機関の職員と本当に多様な皆さんが会場にいらしている中、ファシリテーターを務めさせていただき大変光栄に思います。この会場には、25の異なる国から優秀な方達が来ています。さまざまなバックグランドと国籍を持つ人々が集まったことで、実りある議論が行われ、積極的な意見交換ができたら良いと心から思っております。

まず、私の隣に座っている方をご紹介させていただきます。渡邊公一郎教授です。渡邊教授、簡単にはじめの挨拶をお願いできますか。

○**渡邊公一郎教授（九州大学）**　わかりました。こんにちは。渡邊公一郎でございます。九州大学工学研究院の副研究院長を務めております。今日の参加者では私が唯一の年輩者のようですね。共同ファシリテーターとして参加するように依頼されましたので、アドバイスできればと思います。今日は、学生、大学職員、教員の間でとても活発な議論が行われることを期待しております。またこのシンポジウムと昨日のワークショップを通じて、学生の間でとても親密なネットワークが築かれるとよいと思っております。それでは、この会合をお楽しみください。

○ **Bahari**　渡邊教授、ありがとうございました。では次に、本日出席しているとても重要な人物を紹介したいと思います。九州大学国際化学生委員会（Student Committee of Iernationalization of Kyushu University）、略してSCIKyuのEkenechukwu Okafor委員長です。ご来場の皆さんに一言お願いしたいと思います。ではEkeneさん、お願いします。

○ **Okafor**　こんにちは。ご紹介ありがとうございます。昨日、G30事業の拠点校13大学から集まった61人の学生達がワークショップを行い、大学における国際化プロセスについて議論し、評価を試みました。昨日の議論は非常に深く、有益で、情報を与えてくれるもので、とても良い刺激になったと思います。本日は、その昨日の議論の結果を発表いたします。ご出席されている関係者の皆さんには、僭越ながら本日の議論に積極的に参加していただくようお願いします。

○ **Bahari**　ありがとうございました。皆様、盛大な拍手をお願いします。ご来場の皆さん、セッション D へようこそいらっしゃいました。このセッションのテーマは「学生が見る国際化」です。このセッションは、教育の消費者、つまりは学生側から直接意見やアイデアを提示することを目指すという意味で、特別なセッションとなっています。Ekene が述べたように、昨日、九州大学は、九州大学国際化学生委員会、別名 SCIKyu が中心となって、九州大学の国際化を期待と現実という視点から検証するというテーマでワークショップを開催しました。また SCIKyu は、G30事業の拠点校全13大学の留学生や日本人学生に対しここ福岡に来て、ワークショップに参加するよう呼び掛けました。こうして実際にやって来た学生達が、最前列に座っています。皆さん、本州各地から飛んできてくれた学生達に、盛大な拍手をお願いします。

昨日のワークショップでは、学生を８グループに分けました。その際には、各グループに別の大学の学生や別の国からの留学生が必ず含まれるようにしました。国際化の取組みという課題に対して、① Academics（教育）、② Facilities（施設）、③ Information（情報）、④ Campus Life（キャンパスライフ）の４つのテーマを設け、それぞれのテーマに２つずつ、４つの大きなグループに分かれて取り組みました。このワークショップを通じて、学生達は自分たちの経験を共有し、所属大学における国際化の取組みについて、自身のアイデアを話し合うことができました。各グループが別の大学の学生や別の国からの留学生で構成されていたにもかかわらず、団結して総括し、各自の期待と現実について伝えることができました。

ご覧いただいているスライドには、ワークショップの参加大学と本日出席している大学の一覧が写し出されています。ここで、発表してくれる皆さんをご紹介したいと思います。テーブルの向こうの端にいるのが、教育グループです。１人目が慶応義塾大学の Eugene Song さん、そして２人目が上智大学の Adriana Gomez さんです。忘れてはいけないのが、教育グループの学生達です。皆さん、立ち上がってお顔を見せてくださいますか。彼らが教育について議論した学生達です。彼らに拍手をお願いします。はい、どうもありがとうございました。二番手が施設の問題に取り組んだグループです。発表者は東京大学の Christopher Sjoberg さん、そして筑波大学の Nirmin Farid Juber さんです。では、施設グループも立ち上がってお顔を見せてくださいますか。彼らに盛大な拍手をお願いします。三番手が情報グループです。発表者は明治大学の Kana Yamase さんと名古屋大学の Sapna Sinha さんです。情報グループも立ち上がってお顔を見せてくださいますか。彼らに盛大な拍手をお願いします。最後をしめるのが、キャンパスライフグループで、同志社大学の Hsin Shih さんと京都大学の Nguyen Thi Thanh Nga さんが発表してくださいます。ようやくキャンパスライフのグループで議論した学生達の登場です。お顔を見せてくださいますか。彼らがキャンパスライフについて議論した学生達です。彼らに盛大な拍手をお願いします。

ありがとうございました。皆さん、次にこの４グループの代表者による発表に移ります。まずは、教育について総括してくれる Eugene Song さんと Adriana Gomez さんをお迎えしましょう。

【Academics】

Adriana Gomez (Sophia University)
Eugene J. Song (Keio University)

Gomez:

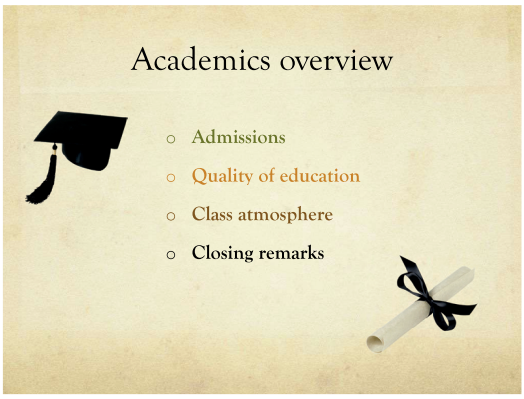
Well, hello. Good afternoon. Ladies and gentlemen, before we begin I'd like to thank the Global 30 Universities Student's Workshop organizers, and all the people who made this possible, for the opportunity that we're having today to share our views and thoughts about this situation with academics at our universities. I'm Adriana Gomez. I'm a second year student in the Global Environmental Studies Master's Program in Sophia University.

Song:

And my name is Eugene Song, and I'm a second year student at Keio University under the GIGA Program.

Gomez:

Our presentation will be about an academic overview of our universities. We identify three main aspects that we will discuss further, and we will finish with some closing remarks. The three sub-topics that we will touch on are admissions, quality of education, class atmosphere. We'll make the closing remarks at the end.



D-1-2

Song:

So I'm just going to briefly talk about admissions, which was one of the main subjects that we identified with. So, first of all, we just wanted to say that I think it's great how these Japanese universities and these international programs allow for students to take a virtual tour of the campus, because everyone knows that it's not so accessible to come on a campus tour if you don't live in Japan. So, I think it's a really good job that the international program did such a good job on the websites to provide students with the necessary information that they need to know and really find about the course as well as the campus. This essentially allows all international students respectively from anywhere to be able to apply and come to Japan. Even though there was not so much face-to-face communication, I was able to very quickly communicate with the Keio University staff when I was interested in applying to the program that I was in.

D-1-3

We did identify one problem though, that I think a majority of the students find, which is that there's a lack of incentive for international students to study Japanese. And how we mean by this is that obviously when a student is applying to these international universities, the programs emphasize that you don't need Japanese language skill requirement, however they say it's something that's highly recommended but not required considering that these classes are taught in English. I know with at least Sophia University, they offer four credits per Japanese class that you take, but this only applies to the undergraduate program. So the international programs in the graduate school actually are not awarded credits for these classes. So on top of the already rigorous program that they're enrolled in, students might have a hard time to take these Japanese classes, considering that they're not even offered credits for it. So one possible solution that we thought of was the faculty should focus closely on finding academic incentives. Basically they should work closely with the students to provide this kind of learning atmosphere, and encourage Japanese learning. It's not only just up to the student. Yes, the student should be highly motivated to learn Japanese because it's necessary to live in Japan, but I think it's also the school's duty to provide the proper atmosphere for this to happen.

Gomez:

Another aspect that we discussed yesterday was the quality of education. It was actually remarkable that the G30 program is not limited to just a very few fields of study, but it actually offers many, many types of programs, which is actually very good to attract international students. It offers a wide pool of choices for international and also domestic students who want to improve their English skills. However, we also identified an imbalance between the international programs and the Japanese programs in terms of these qualities. We probably think that it's due to the time that these programs have been kind of working or have been established. Japanese programs have been established a long time before the international programs. And of course the international programs are improving a little by little and with time. In order to improve the situation, we think that it would be a good idea to allow students to have more flexible curriculum, which means that Japanese students can actually take classes from the English courses and vice versa. International students taking classes from the Japanese or in the Japanese programs. This will actually motivate the students to take classes that actually interested them. So in my particular case there are some programs at Sophia University that are offered in the Japanese course or in the Japanese program that are actually quite incredible and quite interesting. But they are not offered in the English program, so maybe that could be a good opportunity for us not only to improve our Japanese skills, but also to have these opportunities to get in touch with these rich contents and rich curriculum.

Equally important which is not mentioned there but I would like to touch upon a little bit is that maybe we would like to consider the ways to expand frontiers of the Japanese universities and try to make partnerships with other universities globally. I know this is already happening. We know that this is already happening. But it actually kind of exposes Japanese students to other curriculums and other types of international education. Additionally we discussed that it's also important to discuss and consider the recruitment of more international-minded professors and teachers. These would definitely lead to a higher standard of education and more competitiveness for international students as

D-1-4

well as for Japanese students.

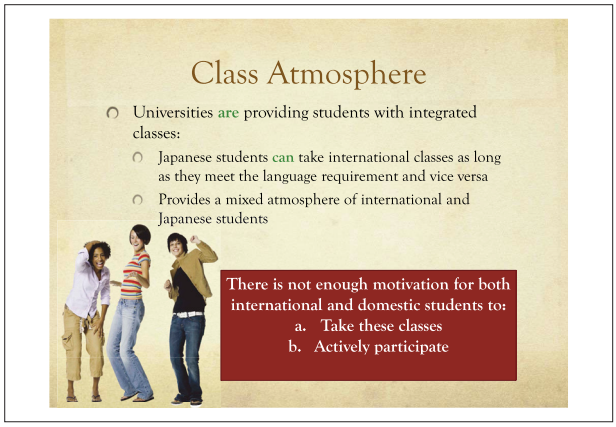
Song:

One of the next things that we talked about was class atmosphere, and this is especially important because like yesterday's workshop, they opened with a speech saying that universities can provide these kind of mixed atmospheres with international students and domestic students mixing together, and you can put them together, but that doesn't necessary mean that they'll take the initiative to actually communicate and socialize. So it's not that these universities are limiting Japanese students to take English classes. They're more than welcome to, and also vice-versa. But it provides this atmosphere, but it's really up to the students to take this direct initiative to actually try and initiate some kind of social interaction, which inevitably leads to internationalization. So we identified one of the problems is that there's not enough motivation for both international and domestic students to A; take these classes and actively participate. Realistically we can't all expect students to have the exact same learning style, and yes you could encourage more group work and more group discussion and try and get these students to work. But it is ultimately up to the students to kind of initiate this process. So how can we phrase this into a question?

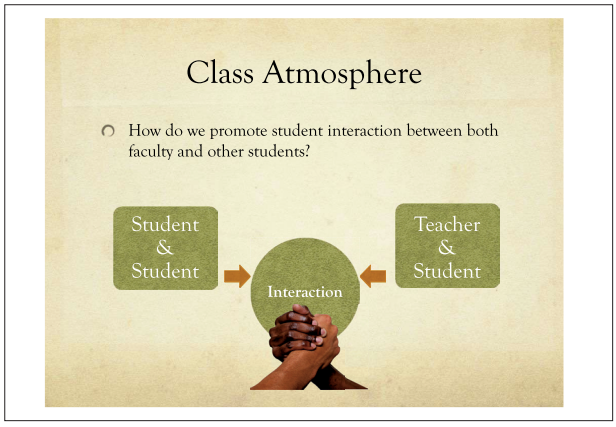
Gomez:

So, as Eugene said, "How do we promote student interaction between both faculty and other students?" Well, perhaps the answer needs to be more developed, but it's for sure a joint effort between students and teachers, and first I'd like to speak a little bit about the student and student interaction. How do we get to promote this interaction within the class? To promote this international and national Japanese interaction, maybe professors have to promote or should consider to promote this interaction through different teaching styles and techniques, promote group discussions, promote group workshops, field trips, and so on. I think it's good to consider these kinds of activities, where there is actually an active participation of students in the classroom.

And the other is teacher and student. Well, it mostly depends on the teacher's attitudes towards the subject or area that they are teaching. If we see passion of a teacher who is teaching, so we actually engage with the classes and the lectures, so I think that actually promotes interaction. Teacher-student and hence student-students. So that's what we consider to be important in terms of how to enrich the interaction in the classes, and that would actually lead to the internalization that we're all looking for.



D-1-5

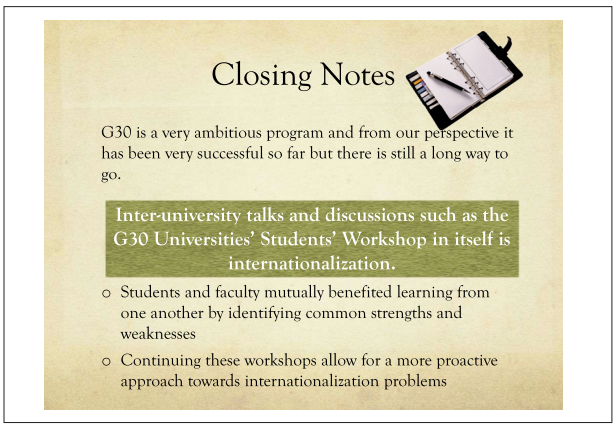


D-1-6

Song:

So, just as some closing notes, I just wanted to briefly touch on the program itself. I think that the G30 program in itself is very ambitious from a student

perspective, and I'm sure most of the students will agree with me, but it's been very successful so far. There is still a long way to go, but at the current rate it's going, I think it's really better than we think it is. However, with yesterday, the workshop that we participated in was in itself internationalization. We were able to discuss with students from other G30 participating universities in a completely new style of learning, and I think that both the student and the faculty were mutually benefited from these talks. We were able to identify each university's strength and weaknesses and learn how to cope with them. These kind of talks in themselves really make the case that yes, Japan is internationalizing. I definitely think that we should continue these workshops because it promoted a sense of student security. Because I know I was talking to a couple of other students that they considered this the first time that they actually met other students in the same G30 program, which is strange considering that this has been going on for almost 5 years, yet these are the only simple interactions that we get to discuss. I think that when we get together, we're actually able to make a more proactive approach towards these internationalization problems. Thank you.



D-1-7

Bahari:

Thank you very much. Please give a round of applause. So from the presentation there were three themes that were touched upon. First of all, in terms of admissions, they pointed out that there's a lack of incentive for international students to study Japanese. From the quality of education, they mentioned that there is somehow an imbalance between international and Japanese programs in terms of academic quality. And finally, from the class atmosphere, it was found out that there is not enough motivation for both international and domestic students to take these classes and to actively participate. So now, I would like to welcome two questions from the audience, if you have any questions. I'm sorry that we only allow two, but do not worry. After this session there is a panel discussion where you can ask more questions. So for the time being, I will receive two questions from the audience. Okay, please? Can somebody bring the mic? Thank you very much.

Floor 1:

I'm an academic working in the Modern Japanese Studies Program at Hokkaido University. My question is about Japanese language classes and the accreditation of them. Are you particularly interested in having just Japanese language for the sake of Japanese language, or did you want classes taught in Japanese which were directed at international students and therefore with all of the accompanying support? Which type of class were you particularly interested in having in your curriculum that was credit bearing? Thank you.

Bahari:

Thank you very much. So we will proceed with the answer first, and then we will take one more question.

Song:

I think those things are very closely connected. Because for international students taking these Japanese language classes, most universities in their hope is that by their third or fourth year, they're actually taking their

classes in Japanese. So, I think as of right now, the credit system works in such a way that it only raises Japanese up to a certain level but I don't think that it's a level that you can be taking university classes in Japanese. So, the accreditation system is more of an incentive to get these students to learn Japanese so that they can get to that point by their third or fourth year. They're actually just taking classes that they're interested in, in Japanese. Because we hope that as international students that should be your goal. But once again like I said, it's a joint effort between the students and the faculty because yes, students already should have a high motivation to learn Japanese regardless of the credit system. But faculty need to provide a proper learning environment to make that happen. Thank you.

Bahari:

Thank you very much. Okay, we will allow one more question. Do we have any questions concerning academics? Yes, please.

Floor 2:

Just a follow-up question to that one. In terms of learning Japanese to a level where you would be able to actually take classes in Japanese, I would expect that would be a very, very intensive program. So I'm wondering how would you balance a full credit load in your major area of study with a full program of intensive Japanese? That seems to be, to us at Doshisha, the sort of challenge that we have with students. Thank you.

Gomez:

Thank you for the question. Well that's actually something that I think most of us are facing now. That type of challenge. I can speak of myself and my classmates that are in the graduate programs; it is actually almost impossible to catch up with the Japanese classes and meet the credits that we are supposed to meet at the end of a course. So, some of us have to extend the time, which means perhaps more money, because not all of us have scholarships, or that also implies that we have to sacrifice the Japanese classes. So, I think I do not have an answer, but I do agree that it's quite challenging for all of us. So, maybe we will reach an answer if we continue to discuss with faculty and students.

Song:

Sorry, just to add. I know that the process may seem difficult, but when you compare it to ... I mean on the converse side when you think of international students who go to America to study at undergraduate schools who are not familiar with English yet, they kind of just have to deal with it. Obviously, that's not the best way to look at it, but I know in Keio University, one of my classmates is interested in biology, but one of the classes that she's interested in taking is only offered in Japanese. However the professor made an accommodation with her that even though her Japanese language ability isn't so strong, her retention skills are okay, and what they allowed her to do is that—she still attends the class and the class is taught in Japanese. But her reports and homework and tests are allowed to be written in English. So, there's kind of a combination of both languages, which eases the process. She also says that also just taking the class in Japanese helps her Japanese skill ability. So, I think one possible way that you can integrate is to integrate the two together rather than the way that most Japanese universities are looking at it right now, which is having two separate programs. One is completely unrelated to Japanese. For example, my program is mostly focused on information technology. On the other hand, you have just Japan language studies which is completely focused for those who came here to study the language. So, just from that previous example, you want to look for ways that you can actually

combine both. Thank you.

Bahari:

Thank you very much Eugene. So with that, the category of academics has expressed its views. Once more, give them a round of applause.

【日本語訳】

【Academics】

Adriana Gomez（上智大学）
Eugene J. Song（慶応大学）

○ **Gomez**　こんにちは。皆さん、まず発表を始める前に、グローバル30大学学生のワークショップの主催者の皆さん、そしてこの開催の実現に尽力していただいた皆さんに、本日、大学の教育の状況についての意見や考えを共有する機会を与えてくださったことを感謝したいと思います。私は、Adriana Gomez です。上智大学大学院の地球環境学研究科の２年です。

○ **Song**　Eugene Song です。慶応義塾大学 GIGA プログラムの２年です。

○ **Gomez**　私たちの発表では、所属大学の教育の概観について示します。そして議論を深めたい三つの要素を特定し、最後に結びの言葉で締めくくります。私たちが取り上げる三つのサブテーマというのは、アドミッション、教育の質、授業の雰囲気で、最後に結びの言葉となります。

○ **Gomez**　では、簡単にアドミッションについてお話したいと思います。アドミッションというのは、私たちが特定したメインテーマの一つでした。まず第一に、日本の大学と国際プログラムが学生にバーチャルツアーを提供しているのは、素晴らしいことだと言いたいです。日本に住んでいなければ、キャンパスツアーに参加するのは容易ではないということは誰もが知っています。それだからこそ、国際プログラムが、ウェブサイト上で、学生がコースやキャンパスについて本当に知っておく必要のある基本情報を提供するという素晴らしい取組をしているのは本当にありがたいことだと思います。このおかげで、留学生は、基本的にどこからでも出願し、日本にやって来ることができます。面と向かってのコミュニケーションはあまりありませんでしたが、現在所属しているプログラムへの出願に興味をもってすぐ、慶応義塾大学のスタッフと連絡を取ることができました。

○ **Song**　ただ、私たちはある問題を取り上げました。この問題は大多数の学生がそう考えていると思います。それは、留学生が日本語を学習するインセンティブがないということです。どういうことかと言うと、当然ではありますが、学生が国際化拠点大学に出願する際、プログラム側は出願者に日本語能力は求められないことを強調します。日本語を学習するよう強く推奨されることはあっても、授業が全て英語で行われることを考えれば、必須ではないのです。上智大学では少なくとも日本語科目で４単位取得することになっていますが、それも学部の授業のみです。大学院の国際プログラムでは、日本語の授業を受けても単位を取得できません。在籍しているプログラムが厳しいことに加えて、単位も取得できないとなれば、学生が日本語の授業を受講するのは大変なことでしょう。この問題を解決できる方法の一つとして私たちが考えたのは、教員が学問的なインセンティブを与えることに焦点を絞るということです。基本的に、教員はこのような学習環境を提供し、日本語の学習を奨励するよう、もっと近いところで学生達に働きかける必要があります。学生に任せているだけではいけません。そうです。日本で暮らすには日本語が必要なので、学生に日本語を学習する高い意欲を持たせる必要があります。また、これを実現させるために、適切な環境を整えるのは学校の義務だとも思います。

○ **Gomez**　昨日議論したもう一つの要素に教育の質というものがありました。一握りの研究分野だけではなく、非常に多くの種類の G30プログラムが提供されているということは実に素晴らしいことで、留学生にとってもとても大きな魅力となっています。留学生に対して、また英語力を磨きたい日本人学生に対しても、多様な選択肢を与えています。しかし、私たちは、国際プログラムと国内向けプログラムの間には、質とい

う点で隔たりがあることを確認しました。おそらくそれは、プログラムに着手された時期や設置された時期に原因があるのではないかと思います。国内向けプログラムは、国際プログラムの随分前に設置されたものです。また国際プログラムが少しずつ時とともに改善されているのは当然のことです。状況を改善するためには、学生がもっと融通の利くカリキュラムを利用できるようにする、つまり、日本人学生が英語で行われる講座も受講できるようにし、逆に留学生が日本語で行われる授業や国内向けプログラムの授業を受講できるようにするのが良いのではないかと考えます。こうすれば、学生は実際に興味のある授業を受講するようになるでしょう。私の場合を例に取ってみれば、上智大学の日本語で行われている講義や日本人向けプログラムの中には、信じられないほど素晴らしく、とても興味深いものがあります。しかし、英語によるプログラムでは、それらは提供されていません。このような場合、私たちにとっては、日本語能力を高めるだけでなく、そのような機会を利用して、内容の充実した質の良いカリキュラムに触れる良い機会となるのではないでしょうか。

昨日は触れられませんでしたが、同じように大切なことなので、私が少し取り上げたいのは、日本の大学という垣根を超えて、世界の他大学と連携する方法を検討してはどうでしょうか。既にこのような試みが行われているのは知っています。それは知っているのですが、そうすることで、日本人学生は他のカリキュラムや他の国際教育を知ることができます。このほか、より国際的な視野を持った教授や教員を採用することについても議論し、検討することが大事だと話し合いました。そうすることで、より高い基準の教育が提供され、留学生や日本人学生の競争力が高まることは間違いないでしょう。

○ **Song**　次に話し合ったテーマの一つは、授業の雰囲気でした。昨日のワークショップでもそうでしたが、冒頭のスピーチでは、大学は留学生と日本人学生が混ざり合ったミックス環境（mixed atmosphere）を提供できるということが述べられました。留学生と日本人学生を同じ環境に入れるということは可能ですが、それは必ずしも彼らが実際に自発的にコミュニケーションを取ったり、交流したりすることを意味するものではありません。国際化拠点大学が日本人学生が英語で行われる授業を受講することを制限しているということではありません。彼らが受講することはむろん歓迎しますし、その逆も同様です。それによって、このようなミックス環境は実現されますが、実際に必然的に国際化につながるような交流をしようとし、それを始める直接的な行動を取るかは、学生本人にかかっています。そこで、私たちは、留学生にも日本人学生にも、こうした授業を受講して、積極的に参加する十分な動機がないことが問題の一つだと確認しました。現実的な問題として、学生全員に全く同じ学習スタイルを期待することはできません。それでも、グループワークやグループディスカッションを増やすことを奨励し、学生達が取り組むように尽力することはできるのではないでしょうか。ただし、結局のところは、このプロセスを開始するかどうかは学生次第になります。この問題を質問にして言い表すのならば、どのように言えばよいのでしょう。

○ **Gomez**　そうですね、Eugene が言っていることは「教員とその他の学生間の交流を促すにはどうしたらよいでしょうか」というところになるでしょうか。おそらくこの答えはさらに考えていく必要があるでしょうが、それが学生と教員の共同作業になることは間違いないですね。そこで、学生間の交流について少しお話したいと思います。授業の中で学生の交流を促すにはどうしたらよいでしょうか。留学生と日本人学生の交流を促すためには、教授達は、異なる教育スタイルや手法を使って交流を促したり、促すように考える必要があるのかもしれません。グループディスカッション、グループワークショップ、研修旅行を推進するなどのことです。このような活動は、実際に学生が授業に積極的に参加することになるので、検討してみても良いと思います。

もう一つが教員と学生です。それはほとんどの場合、教える科目や分野に対する教員の姿勢にかかっています。教えることに対する教員の熱意を目の当たりにすれば、私たちも授業や講義に真剣に取り組もうとし、それによって実際に交流も促進されると思います。教員と学生間、学生と学生間の交流。授業の中での交流の深め方という点で私たちが重要だと考えるのは、この二つです。このようにすれば、私たち全員が探し求めている国際化が現実のものとなるのではないでしょうか。

○ **Song**　結びの言葉として、プログラムそのものについて簡単に述べたいと思います。学生の視点から見ると、G30プログラムはそれ自体がとても意欲的なものだと考えられます。また、ほとんどの学生が賛同してくれるかと思いますが、これまでのところ大成功を収めています。まだ発展の余地はたくさんありますが、現在のペースで進んで行けば、私たちが考えているよりも優れたものになることでしょう。昨日の私たちが参加したワークショップは、それ自体が国際化を体現するものでした。他のG30参加大学の学生と全く新しい学習スタイルで議論することができました。その議論から学生も教員も双方が恩恵を受けることができたと思います。各大学の強みと弱みが分かり、それに対処する方法も知ることができました。このような話し合いはそれ自体がまさに日本の国際化を表しています。学生に安心感をもたらすということからも、このようなワークショップを続けていくべきと思います。というのは、私は他の学生数人と話をしたところ、彼らは、同じG30プログラムの他の学生と実際に会ったのが初めてだと思うと言うのです。このプログラムがすでに５年ほども続いているということを考えれば奇妙なことですが、今回が私たちが議論をする唯一の交流の場なのです。私たちが皆で集まれば、ここで取り上げられている国際化の問題に対してより積極的に取り組むことができるでしょう。ご清聴ありがとうございました。

○ **Bahari**　ありがとうございました。盛大な拍手をお願いします。このプレゼンテーションでは、３つのテーマが取り上げられました。まず、アドミッションという点では、留学生が日本語を学ぶことに対するインセンティブがないということが指摘されました。教育の質という点では、留学生向けプログラムと国内向けプログラムにはどうやら差があるということでした。そして最後に、授業の雰囲気という点では、留学生にも、日本人学生にも、こうした授業を受講して、積極的に参加する十分な動機がないということが明らかにされました。それでは、ご質問がありましたら、聴講者から質問を２つ受け付けたいと思います。申し訳ありませんが質問は２つのみとさせていただきます。でも心配はご無用です。このセッションの後には、パネルディスカッションが行われますので、他に質問がありましたら、そこで質問することができます。とりあえず、聴講者から質問を２つ受け付けたいと思います。はい、ではどうぞ。どなたかマイクを渡していただけますか。ありがとうございます。

○ **Floor 1**　北海道大学の現代日本学プログラムを担当している研究者です。日本語の授業とその単位認定について質問させてください。日本語を学習する目的で日本語の授業を受けることだけに関心があるのですか。それとも留学生向けに日本語で行われる授業とそのために必要なサポートも全てひっくるめて提供してほしいと考えているのですか。あなたが参加しているカリキュラムの単位を取得できる授業のうち、特に日本語による授業を行ってほしいと思ったのはどういったものでしたか。

○ **Bahari**　（ありがとうございます。）では、まず回答していただいて、次にもう一つ質問を受け付けましょう。

○ **Song**　その二つはとても密接に関連していると思います。日本語の授業を取っている留学生の大多数は、大学の３年か４年までには、実際に日本語で授業を受けることができるようになることを望んでいます。私が考えるに、現時点では、単位制度の仕組によって日本語のレベルは一定のレベルまでは上がりますが、それは日本語で大学の授業を受けられるというレベルではないと思います。単位認定制度は、そうした学生に日本語を学んで、３年生か４年生までにそのレベルまで辿り着けるようにするインセンティブという性質のものでしょう。学生は興味がある授業だけを日本語で取ります。留学生としては、日本語で授業を受けられるレベルに達成することを目指したいです。ただし、やはり先ほど申し上げたように、それは学生と教員の共同作業なのです。というのは、やはり留学生は単位が取得できるかを問わず、日本語を学ぶ高いモチベーションを持つべきですから。教員もそれが実現できるように適切な学習環境を提供する必要があります。

○ **Bahari**　（ありがとうございました。）それでは、もう一つ質問をどうぞ。Academics について、何かご質問はありますか。はい、どうぞ。

○ **Floor 2**　さきほどの質問に関連した質問です。日本語で実際に授業を受けられるようなレベルまで日本語を学ぶとなれば、それは非常に集中的なプログラムになりますね。そこで主専攻分野の全単位取得という

負担と集中的な日本語講座のバランスをどう取るのか知りたいのですが。それを実現させることは、同志社大学の我々が、学生について抱えている課題と同じだと思われます。

○ **Gomez**　ご質問ありがとうございます。そのような課題というのは、現実に留学生の大多数が直面していることだと思います。私自身や私と同じ大学院のプログラムの院生について申し上げますと、日本語の授業をついていきつつ、コースの修了時に修了要件単位全てを取得するというのは実際にはほぼ不可能です。したがって、在籍期間を延長しなければならない学生も出てくるでしょう。そうすると全員が奨学金を受けている訳ではないので、もっとお金がかかるということになります。あるいは、日本語の授業を犠牲にせざるを得ないということなのかもしれません。ご質問に対する回答にはならないと思いますが、それが留学生全員にとって非常に大変なことだという点については、その通りだと思います。教員や学生との議論を続けていくことで、回答を出すことができるかもしれません。

○ **Song**　少し補足させてください。このプロセスというのは大変なように思われますが、逆に、大学の学部で勉強するためにまだ英語があまりできない留学生がアメリカに行く場合、留学生は何とか対処しなければならない訳です。この状況と比較してみると、むろん最適な考え方とは言えませんが、慶応義塾大学では、同級生の一人が生物学に興味を持っているのですが、受講したいと思っている授業の一つは日本語でしか提供されていません。彼女の日本語能力はそれほど高くなく、リテンション能力も普通程度であるにもかかわらず、担当教授は、彼女に便宜を図りました。結局、彼女は授業に参加することが認められ、授業は日本語で行われています。ただ、彼女には、レポートや宿題、テストを英語で書くことが認められています。つまり、両言語を組み合わせるような状況になっており、プロセスを容易にしています。彼女が言うには、日本語で授業を受けるだけでも、日本語能力を高める役に立っているとのことです。そこで、多くの日本の大学が現在検討しているように二つの独立したプログラムとするのではなく、二つを合わせたプログラムとして、統合するという方法を取るのもよいのではないかと思います。一つは、全く日本語とは関係のないプログラムです。例えば、私が所属しているプログラムは情報技術が中心となっています。そしてもう一つは、日本語という言語を学びに日本にやって来た者に対象を絞った日本語学だけのプログラムです。先ほど申し上げた例からも、実際に両方を組み合わせる方法を探してもよいのではないかと思います。

○ **Bahari**　Eugene さん、ありがとうございました。これで、教育グループの発表は終わりとさせていただきます。もう一度、彼らに盛大な拍手をお願いします。

【Facilities】

Nirmin Farid Juber (University of Tsukuba)
Christopher Sjoberg (University of Tokyo)

Juber:

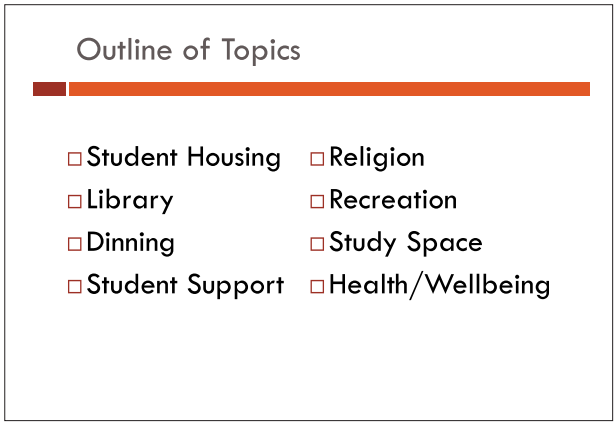
Hi everyone. Today I'd like to talk about the university facilities issue. It is from an international student point of view, and my name is Nirmin Juber. I'm in a first year student in the Public Health Program, University of Tsukuba.

Sjoberg:

I'm Christopher Sjoberg, and I'm a Master's student in architecture at the University of Tokyo.

Juber:

Considering that facilities are the critical and crucial area where we, as international students, can benefit directly, so we would like to point out what are the important things and what areas can be possibly improved. This is our outline. We would like to go further with each aspect before giving some conclusion. So, our outline consists of eight aspects: student housing; library; dining; student support; religion; recreation; study space; and health/well-being. We believe these are the important things.

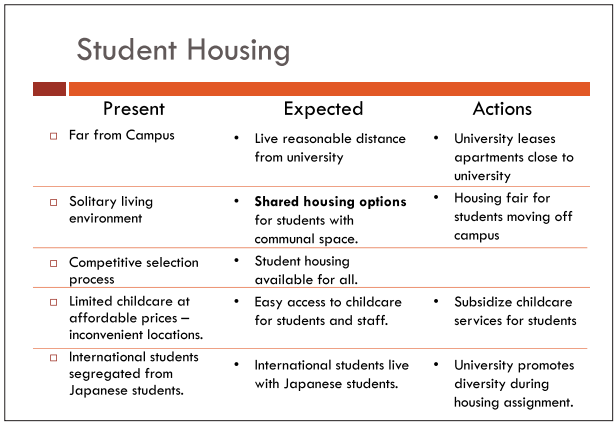


D-2-2

Sjoberg:

So, I would like to start with student housing. These are just a range of issues that as international students we find have an effect on our research potential at universities. The present situation of student housing, particularly in large cities like Tokyo, is that it's very far from campus. I have classmates who commute an hour and a half every day, and I'm sure that this is not an abnormal kind of event. But we propose that the university could come to some agreement with private housing to potentially lease or reserve student housing closer to the universities. The time you spend on a train is time you're spending away from research.

Another issue which kind of is contrasted against a lot of other parts of the world is the solitary living environment that student housing is primarily a single unit. And I think a lot of students want to have housing options with shared communal spaces. So we'd really like to see the university provide some diversity in the



Student Housing

Present	Expected	Actions
Far from Campus	Live reasonable distance from university	University leases apartments close to university
Solitary living environment	**Shared housing options** for students with communal space.	Housing fair for students moving off campus
Competitive selection process	Student housing available for all.	
Limited childcare at affordable prices – inconvenient locations.	Easy access to childcare for students and staff.	Subsidize childcare services for students
International students segregated from Japanese students.	International students live with Japanese students.	University promotes diversity during housing assignment.

D-2-3

type of housing. One way that we might just overcome this on the private side is that the university could propose or host a housing fair where international students and Japanese students, if they are interested, could have a centralized location and an event where they could potentially find roommates, they could meet with real estate agents in English, and streamline the process for finding student housing.

There's a competitive selection process. Unfortunately there's not enough student housing for all students. For international students coming from abroad for the first time to Japan, this is extremely intimidating, so I think any measure to increase the amount of student housing for international students especially in their first year would be extremely helpful. An area that is close to one of my classmates, he is a father, and he spends about two hours a day bringing his young child to childcare facility. We'd like to see that families can be supported and don't have to make extreme sacrifices in order to take care of their kids and fulfill their research agendas. So a potential voucher system or just providing more on-campus child care could be a great assistance to international families.

And finally, many of us have experienced that there's segregation between international students and Japanese students in the official student housing sector. That particular dorm will be only open to international students or potentially only open to Japanese students. And we think that the university could be proactive in their assignment of housing to really diversify the dormitory experience.

On the issue of library and information resources, our group discussion revealed that we feel like in Japan, we really are at the advantage of having access to high quality scientific journals from around the world that there's really a wealth of research resources as well as access to powerful database tools, many of which are in English so it's easy for international students to navigate the information they need to find. Some comments from our group, though, were that on especially the undergraduate level, study materials in English are limited. We'd like to see libraries increase their English collections. They may have books, but particularly support material for the courses they're taking are not available in English. Limited English speaking staff in libraries. One possible solution would be to create a volunteer library staff or support staff, potentially even composed of international students or Japanese students that could offer assistance to students in the language that they needed to communicate in.

Many universities feature quite reduced hours compared to universities worldwide, limiting the kind of intensive studying that you can do in a library setting. We would like to see the library hours extended. And then for some of us there's been kind of an inconsistency in the distribution of resources or available tools between some of the faculty libraries and the main libraries. So, synchronizing these tools allows international students to better navigate the university's resources.

Juber:

Next, I would like to discuss and take a deep look about dining, because this is important. So, having a supportive system would be helpful for us. But now as most of you realize, there's only a limited menu and low diversity, and it would be helpful for us to have a greater variety of menu. Having said this, we hope to have a rotational weekly menu. I think that's one of the solution to answer this kind of problem, and then the next thing is a lack of special dietary and vegetarian option. For me, for example, I have a special diet, and other

Library/Information Resources

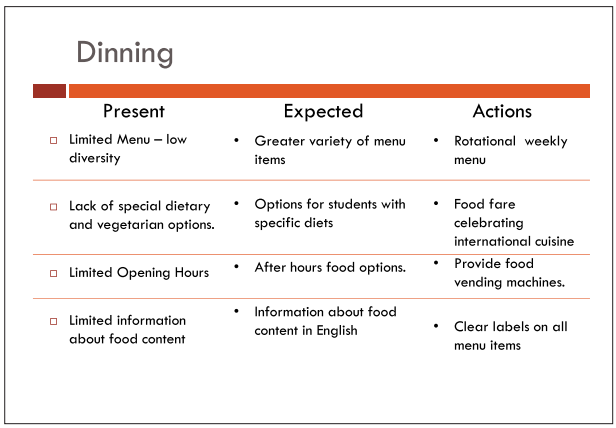
Present	Expected	Actions
Good access to international scientific journals.	Expectations met.	
Powerful database tools		
Limited study materials in English	Adequate study materials in English	Increase English Collections
Limited English-speaking staff.	Ease of use for library services	Volunteer library staff program to assist students
Limited hours of access	Library hours reflect student needs.	Extend library hours
Inconsistency between Faculty Library and Main/Center library	English language tools in all library	Synchronize tools

D-2-4

students may have vegetarian or other special needs or religious needs, and maybe there are only limited options available inside the campus. So, by providing us with more options with a specific diet, and by having a food fair celebrating international cuisine, we hope it will benefit us and I believe this kind of support is really helpful for us. The next thing is limited opening hours. Some students work up until night and maybe beyond working hours, and after that they are searching for food. Because there's limited access and so they are questioning why there's no cafeteria that opens up until night. And then we believe that to have an after-hour food option would be beneficial to us. We have come to the conclusion that with some suggestion of providing food vending machines would be helpful. And then the next thing is about limited information for food contents. As I mentioned before about special dietary, information about food content in English would be helpful.

Sjoberg:

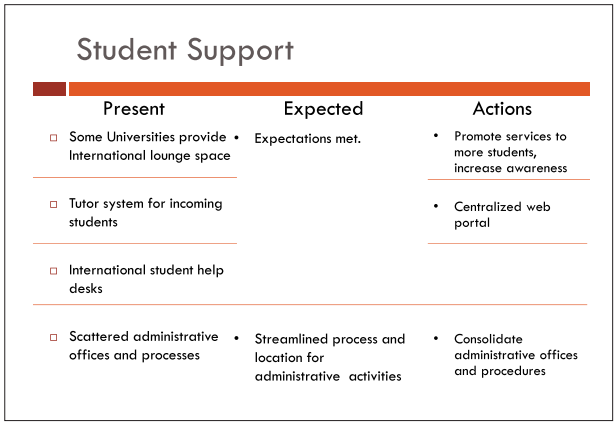
On a positive note, many of our universities offer wonderful student support networks. Just a few of the opportunities are international lounge spaces where students can gather, tutoring systems for incoming students to help them navigate the registration process with their wards or their healthcare system, and international student help desk where they can find one location to get their questions answered. We would just like to see these resources promoted. The only critique might be that there's really a scattered administrative office system, and the process or enrollment as much as we can consolidate this and streamline the process, it really aids international students especially.



Dinning

Present	Expected	Actions
Limited Menu – low diversity	Greater variety of menu items	Rotational weekly menu
Lack of special dietary and vegetarian options.	Options for students with specific diets	Food fare celebrating international cuisine
Limited Opening Hours	After hours food options.	Provide food vending machines.
Limited information about food content	Information about food content in English	Clear labels on all menu items

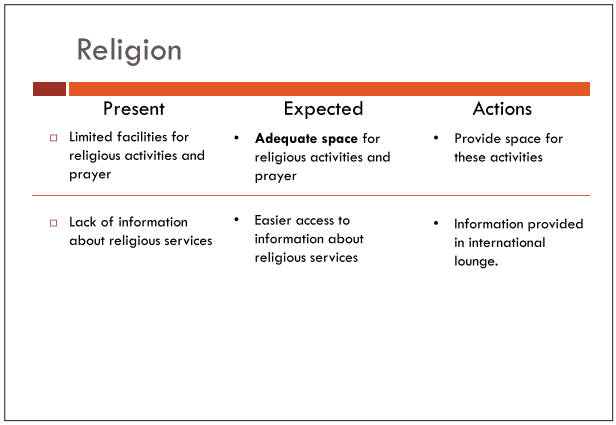
D-2-5



Student Support

Present	Expected	Actions
Some Universities provide International lounge space	Expectations met.	Promote services to more students, increase awareness
Tutor system for incoming students		Centralized web portal
International student help desks		
Scattered administrative offices and processes	Streamlined process and location for administrative activities	Consolidate administrative offices and procedures

D-2-6



Religion

Present	Expected	Actions
Limited facilities for religious activities and prayer	**Adequate space** for religious activities and prayer	Provide space for these activities
Lack of information about religious services	Easier access to information about religious services	Information provided in international lounge.

D-2-7

Juber:

The next thing is about religion. In the present, we see that there are limited facilities for religious activities and prayer. So, the provision of adequate spaces for these activities is very important. And lack of information about religious services. Some students, especially new students who are wondering where is the nearest Church or Mosque or any religious services, so by having easier access to information about religious services by providing this in a central location or in an international lounge would be helpful for us.

And the next thing is about recreation. Some of us have hobbies such as music, for example. As we can see now, there are limited facilities for music practice. So universities should have better support by establishing spaces for music rehearsal or give us more space for creativity and our hobby to be delivered well. And the

next thing is about some sport facilities, which are currently limited to club use only, and then limited access hours to sporting equipment and sport field. We believe by changing access regulations will promote equal access for availability to these facilities.

Sjoberg:

On another positive note, we find across the board that the laboratory and equipment facilities we have access to in Japan are really excellent. They are adequate for our needs for research, so we're happy about that. One issue might be that we'd like to see more collaboration between laboratories within the university. It's kind of a unique system for me and the laboratories seem a bit isolated, and we propose maybe an occasional get-together to share research agendas which could help promote collaboration between laboratories. Thank you.

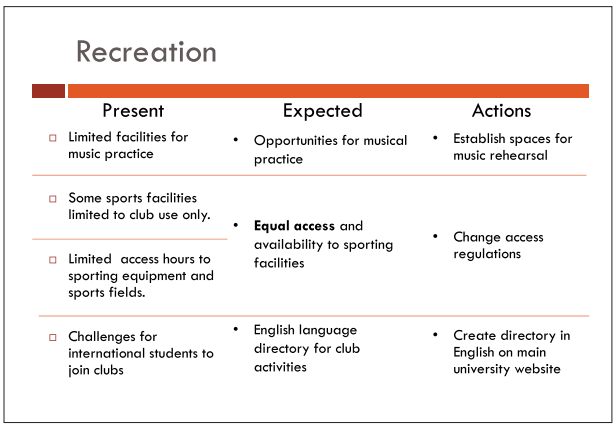
Finally, the medical services and counseling services are also really exceptional. One issue is for students in emergency situations; it's hard to communicate in Japanese. We would really like to see more English staff in the hospital system or potentially medical buddy system to assist foreign students. It should potentially be a Japanese student who could help translate in an emergency situation. Finally, this list isn't meant to sound like a list of complaints. It's really offered as a positive critique. We think that Japanese universities provide excellent benefits and facilities to students. We would like to thank you for your attention and your patience and your interest in better promoting the learning opportunities for foreign students here in Japan. Thank you very much.

Bahari:

Thank you very much. Please give a round of applause. For the presenters, please consider the time restraint, which is ten minutes. So, we will allow for two questions from the audience. Are there any questions regarding facilities? Okay, let's have one question.

Floor 3:

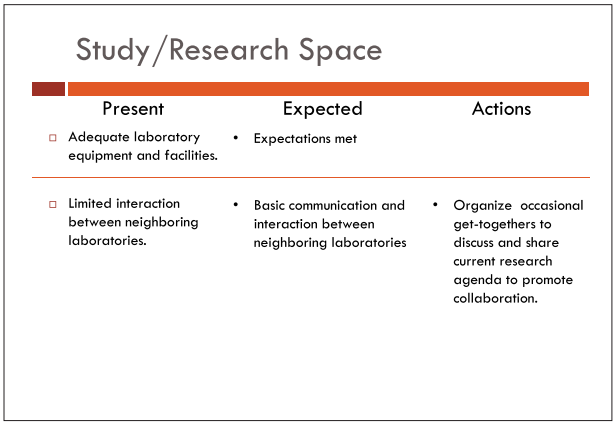
I'm a second year Master's student at Kyushu



Recreation

Present	Expected	Actions
Limited facilities for music practice	Opportunities for musical practice	Establish spaces for music rehearsal
Some sports facilities limited to club use only.	**Equal access** and availability to sporting facilities	Change access regulations
Limited access hours to sporting equipment and sports fields.		
Challenges for international students to join clubs	English language directory for club activities	Create directory in English on main university website

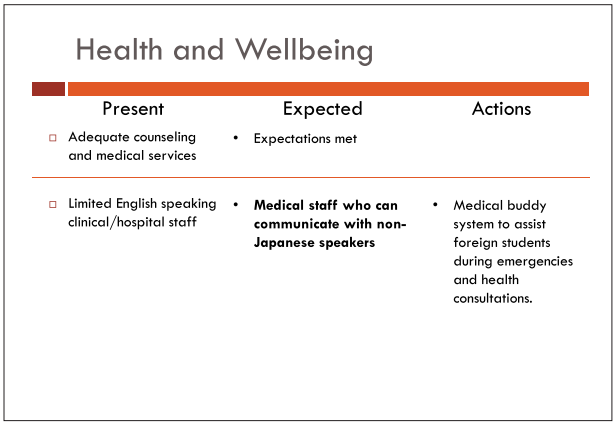
D-2-8



Study/Research Space

Present	Expected	Actions
Adequate laboratory equipment and facilities.	Expectations met	
Limited interaction between neighboring laboratories.	Basic communication and interaction between neighboring laboratories	Organize occasional get-togethers to discuss and share current research agenda to promote collaboration.

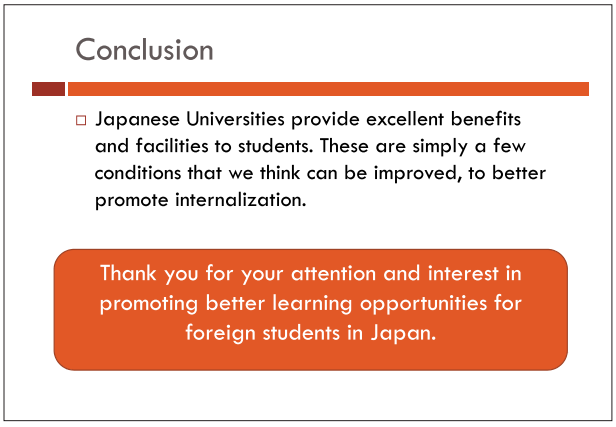
D-2-9



Health and Wellbeing

Present	Expected	Actions
Adequate counseling and medical services	Expectations met	
Limited English speaking clinical/hospital staff	**Medical staff who can communicate with non-Japanese speakers**	Medical buddy system to assist foreign students during emergencies and health consultations.

D-2-10



Conclusion

- Japanese Universities provide excellent benefits and facilities to students. These are simply a few conditions that we think can be improved, to better promote internalization.

Thank you for your attention and interest in promoting better learning opportunities for foreign students in Japan.

D-2-11

University's Department of Health Sciences,. Well, about the point of recreation and the general points which you have talked about, I think that what you have suggested is very beneficial for international students. But what I realized also from the environment in which I'm studying at is that international students have also to understand the internationalization doesn't mean only to keep living in your own culture in Japan, but also to learn how to integrate with the Japanese culture as you are living in Japan. For example, for the recreation and the sports activities, I have seen a limited number of students who are incorporated with Japanese culture or sports inside the Japanese clubs, which are held in Kyushu University. So if we can generalize this internationalization concept to make a better internationally friendly Japanese culture facilities. So for the Judo clubs, for sports clubs, and for other culture clubs to make them friendlier with the international students to get integrated with, I think this would be a good feedback for this point of recreation and other points also.

Sjoberg:

This kind of issue came up. I'll say for myself. My research program is so intensive that I don't have time really to participate. If I want to maintain my health I need to be on a flexible schedule. So the issue of limited access for only clubs, I think, is something that I can change. But we also really understand that we want to have opportunities for international students to participate in Japanese clubs. The club mentality is a tradition in Japan—that shouldn't be obliterated for the benefit of international students. One proposal would be to better promote the clubs, perhaps in a centralized directory where international students could really find what's available, and contact the people who can introduce them to that type of situation. And then beyond that I think another issue that came up was many international students will start in October, where club fairs are often hosted at the beginning of the traditional Japanese academic year in April. So it's a disadvantage to international students coming in mid-cycle, where there's not the kind of introductions being made to that sort of social event. The basic takeaway, I think, is more communication, more kind of advertisement of these opportunities to benefit international students as well as Japanese students.

Bahari:

Okay, thank you very much. Due to time constraints we will continue with our presentations. Please give them a round of applause.

【日本語訳】

【Facilities】

Nirmin Farid Juber（筑波大学）
Christopher Sjoberg（東京大学）

○ **Juber**　皆さん、こんにちは。本日は、大学の施設の問題についてお話させていただきたいと思います。留学生の視点から見た話です。Nirmin Juber と申します。筑波大学人間総合科学研究科フロンティア医科学専攻の１年です。

○ **Sjoberg**　Christopher Sjoberg です。東京大学の修士課程で建築学を専攻しています。

○ **Juber**　施設というのは、留学生として私たちが直接恩恵を受けることのできる決定的に重要な領域だということを考慮し、何が重要なものであって、どの領域を改善できるか提示したいと思います。発表の概要は次のようになります。結論の前に、まず各要素について掘り下げて検討したいと思います。私たちの発表の概要は、学生寮、図書館、食堂、学生支援、宗教、レクリエーション、学習スペース、健康／福祉の８つの要素から構成されています。

○ **Sjoberg**　まずは、学生寮から始めたいと思います。今から述べることは、留学生として、大学での研究に影響を与える可能性があると私たちが考える問題のひとつです。現状の学生寮の問題として、特に東京のような大都市では、キャンパスから遠いということがあります。同級生には、毎日、１時間半かけて通学している人達がいますが、これは決して異常な事態ではありません。大学側は、大学に近い学生寮を借り上げたり、確保するよう民間の賃貸住宅と何らかの取り決めをしておくことを提案します。通学時間が、研究に費やす時間を削っているのです。

世界の他の地域とは対照的な別の問題として、学生寮が主に単身者用住居だという一人暮らしの環境が上げられます。また多くの学生が共用スペースのある住居を選択できたらよいと考えていると思います。そこで、大学側には多様な種類の住居を提供していただきたいです。個人でこの問題に対処できる方法としては、大学側が関心を持っている留学生と日本人学生が集まれる場となるハウジングフェアやルームメートを見付けたり、英語の話せる不動産業者に相談したりできるイベントを提案又は開催して、学生用住居を探すプロセスを合理化するというやり方が考えられます。

また、競争的な選択プロセスも問題です。残念ながら学生寮は学生全員が利用できるほど十分にはありません。初めて来日する留学生にとっては、住居探しは非常に大変なものです。そのため、特に１年目の留学生のための学生寮の数を増やす措置をとることはとても有益なことだと思います。私の同級生の一人の状況ですが、彼は父親で、乳幼児を保育施設に送迎するために１日約２時間を費やしています。家族がサポートを受けられ、子供の面倒を見ると同時に研究目標を達成しなければならないので多大な犠牲を払わなければならないということのないようにしてほしいと思います。無料でサービスを受けられる制度を設けたり、もっとキャンパス内で保育サービスを提供するなどは、留学生の家族にとっては大きな助けとなります。

また最後に、私たちの多くが経験しているのが、大学の学生寮で留学生と日本人学生とが分離されている状況です。特定の寮を利用できるのは留学生だけか、日本人留学生だけのどちらかです。大学側は、寮で多様な経験ができるように住居を割り振るよう積極的に取り組んでほしいと思います。

図書館と情報資源の問題については、グループディスカッションによって、日本にいることが実感できる、つまり、世界各地からの質の高い学術誌を閲覧できるというメリットを享受していて、実に豊富な研究資源と強力なデータベースツールにアクセスできることが明らかにされました。その多くは英語で書かれたもの

なので、留学生も情報を辿って、簡単に求めている情報を見つけることができます。もっとも、学部レベルでは英語による研究資料は限られているという意見もありました。図書館の英語の資料を増やしてほしいです。図書館には書籍があるかもしれませんが、特に留学生が受講している講座の英語による補助教材は置いてありません。図書館には、英語を話せる職員も限られています。解決方法の一つとしては、ボランティアの図書館スタッフやサポートスタッフを設置するという方法を考えることができます。このスタッフは、意思疎通を図る言語による支援を提供できる留学生や日本人学生で構成するのでもよいと思います。

多くの日本の大学図書館の特徴として、世界の他の大学に比べて開館時間が短く、図書館環境で可能な集中的な研究の足かせとなっています。図書館の開館時間を延長してほしいと思います。次に、中には、学部図書室とメインの大学図書館の間に資源や利用可能なツールの配分に不一致があるという意見もありました。こうしたツールをシンクロナイズさせれば、留学生は大学の資源をより効率的に見つけ出すことができるようになります。

○ **Juber**　では次に、食堂という大事な要素について議論し、掘り下げて検討したいと思います。支援体制があるというのは、とても有り難いことです。ただし、多くの人が気づいていることと思いますが、メニューが限られていて、バラエティに乏しいです。私たちとしては、多様性に富んだメニューがあると助かります。とはいうものの、１週間毎に変わるメニューになると良いと思います。この提案は、このような問題を解決する答えの一つだと思います。また次に、特別食やベジタリアン用の食事といった選択肢がありません。私を例にとって見れば、私は特別食をとっています。他の学生はベジタリアンやその他の特別なニーズ、宗教上のニーズを必要としているかもしれません。そしてキャンパス内には限られた選択肢しかないかもしれません。特別食の選択肢を増やしたり、多国籍料理を称えるフードフェアを開催したりすることにより、私たちもその恩恵を受けることができれば良いと思います。またこのような支援は本当に私たちの助けとなることでしょう。次に取り上げるのが、営業時間が限られていることです。学生の中には、夜遅くまで、おそらくは営業時間より遅い時間まで研究する人もいますが、そうするとその後で食べ物を探すことになります。利用できるところは限られているので、夜まで空いている学生食堂がなぜないのか疑問を投げかけるのです。そのため、夜間に食事できる可能性があるととても有益だということになると思います。私たちは、食品用自動販売機の設置を提案することが有益ではないかという結論に至りました。次が料理の食材について限られた情報しか表示されていない点についてです。先ほど特別食について申し上げたとおり、英語で料理の食材について情報が表示されると有り難いです。

○ **Sjoberg**　良いところとしては、この13大学の多くが、素晴らしい学生支援ネットワークを提供していることです。そのほんの一例を挙げれば、学生が集まることのできる国際ラウンジスペース、日本に到着した学生のための入寮手続や医療保険加入手続のチューターシステム、留学生の質問に回答してくれる留学生ヘルプデスクなどがあります。こうしたリソースは今後も推進して欲しいと思います。一つ注文をつけるとすれば、事務管理局や事務手続き、登録手続きが分散しているので、できるだけこれを統合して、手続きを合理化していただければ、特に留学生としては本当に助かります。

○ **Juber**　次は、宗教について取り上げたいと思います。現状では、宗教活動や祈りを行うための施設は限られています。こうした活動では、適当なスペースを提供してもらえることが、とても大事です。また礼拝についての情報もありません。一部の学生、特に新入生は最寄りの教会やモスクはどこにあるのか、礼拝はどこで行われているのか知りたいと思っています。留学生センター（central location）や国際ラウンジでこうした情報を提供して、礼拝に関する情報が入手しやすくなると、留学生としては有り難いです。

次にレクリエーションについてです。学生の中には、例えば音楽が趣味の学生がいます。ご承知のように、楽器を練習できる施設は限られていますので、大学には、音楽のリハーサル用のスペースを設けるというように支援を増やしたり、創作や趣味を十分に行えるようなスペースを提供したりしていただきたい。次に、現在サークル活動のための利用しかできないスポーツ施設、そしてスポーツ用具やグラウンドの利用時間が限られているという点についてです。利用規則を変更することで、こうした施設を平等に利用できるように

なると思います。

○ **Sjoberg**　もう一つ良いところとして、日本で利用できる研究施設や機器設備が全体的に非常に優れたものだということです。私たちの研究ニーズを十分に満たすものであり、この点では大変満足しています。一つ問題があるとすれば、大学内の研究室間でもっと共同研究を行ってほしいと言うことでしょうか。現状のシステムは私にとっては特殊なもので、研究室は若干孤立している感があります。そこで、時折集まって研究課題を共有することを提案します。そうすれば、研究室間の共同研究が促されるのではないでしょうか。

最後に、医療サービスやカウンセリングサービスも本当に素晴らしいです。ただ一つだけ、緊急事態の学生にとっては、日本語で意思疎通を図るのが難しいということが問題となります。病院に英語のわかるスタッフを増やしたり、留学生を支援する医療ボランティア制度を設けたりしていただきたいです。緊急時に手伝って通訳してくれるのは日本人学生であってもよいでしょう。

ここまでに挙げたことは、苦情ではありません。建設的な批判として受け取っていただきたいと思います。私たちは、日本の大学が学生に対して素晴らしい福利厚生や施設を提供していると考えています。日本で留学生の研究機会を一層推進することに注目し、実践し、関心を払ってくださっていることに感謝したいと思います。本当にありがとうございます。

○ **Bahari**　ありがとうございました。盛大な拍手をお願いします。発表者の皆さん、10分間という持ち時間に注意してください。では、聴講者から質問を二つ受け付けたいと思います。施設についてご質問はございますか。では、一つ目の質問をどうぞ。

叫んでいただければ、私が質問を繰り返しますので・・・マイクをお願いできますか。すみませんが、質問者にマイクをお願いできますか。

○ **Floor 3**　九州大学医学系学府保健学専攻修士過程の学生です。お話にあったレクリエーションという点と一般的な話についてですが、ご提案は留学生にとってとても有益なことだと思います。ただ、今自分が学んでいる環境から気づいたこととして、留学生も国際化というものを理解しなくてはならず、それは、日本で自分の文化にこもり続けることを指すのではなく、日本で暮らしているのですから、日本の文化に自分が溶け込むことも学ばなければいけないということです。例えば、レクリエーションやスポーツ活動に関しては、九州大学で行われているような、日本の文化や日本のサークル活動としてのスポーツに参加している留学生はわずかしか見たことがありません。仮にこの国際化という概念を一般化することができるとすれば、留学生が親しみやすい日本文化施設を作るということでしょうか。柔道サークルやスポーツサークル、その他の文化サークルを留学生が溶け込みやすいようにする。レクリエーションという点で、また他の点でも、これは良い考えではないでしょうか。こうした問題について意見を述べてくださったことに感謝したいと思います。

○ **Sjoberg**　このような問題が提起されたので、お答えしたいと思います。私の研究プログラムは非常に集中したプログラムなので、実は参加する時間がありません。健康を維持したければ、融通の利くスケジュールにする必要があります。もっとサークルを利用するようにするという問題だけであれば、それについては変えることができると思いますし、留学生が日本人のサークル活動に参加する機会を与えてほしいのだということも理解できます。サークルという考え方は、日本の伝統であって、留学生のためになくしてしまうべきではありません。そこで、実際に何が提供されているのかだとか、誰に連絡すればよいのかといった情報を留学生が見つけることのできる名簿などを使ったりして、サークルの宣伝をもっと活発にするというのではどうでしょうか。またそれ以外の別の問題としては、多くの留学生が10月に入学するのに対して、サークル紹介は大抵は日本の伝統的な学年度の始まる４月に行われるということだと思います。そのような社会的行事の紹介されない中間期にやってくる留学生にとってはデメリットとなっています。基本的には、留学生と日本人学生のためとなるように、もっとコミュニケーションを取ったり、こうした機会を宣伝することだと思います。

○ **Bahari**　はい、ありがとうございました。施設のグループの皆さん、ありがとうございました。時間が押していますので、次の発表に移りたいと思います。彼らに盛大な拍手をお願いします。

【Information】

Sapna Sinha (Nagoya University)
Kana Yamase (Meiji University)

Bahari:

Okay, next for the category of information, the floor is yours. Please keep in mind that we have ten minutes each with the five minutes of questions and answers. Also for the students over here, if you'd like to give comments or reply to questions, please note them down. After the presentation session, there will be a general discussion where you are able to express your views. Thank you very much.

Yamase:

Okay, so we are halfway done with the presentations and now we are moving onto number three, which is about information. The presentations are:

Sinha:

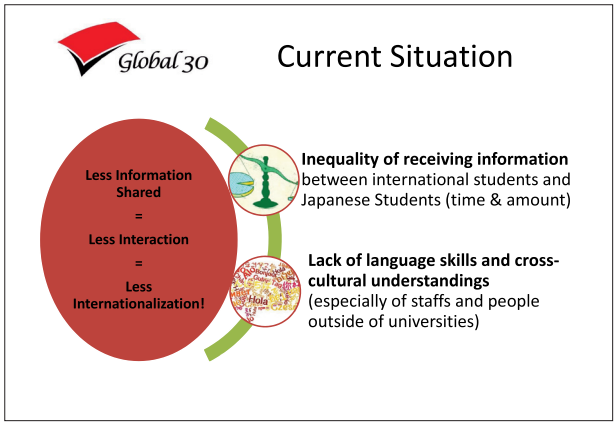
I'm Sapna Sinha from Nagoya University, second year undergraduate in chemical engineering.

Yamase:

And my name is Kana Yamase from the school of global Japanese students in Meiji University. We named our team and partners as double meidai, if you get what it means. Nagoya-dai, Meiji-dai. Okay, through the workshop yesterday we talked about a lot of things related to information and for kind of conclusions we came up with two big ideas about the current situation. One is the inequality of receiving information between international students and Japanese students, either for time or amount. And number two is the lack of language skills and cross-cultural understandings, especially among staff and people outside of universities such as doctors or bus drivers, etc.,

When we were trying to define what internationalization is, Ekene provided us with a really good definition. So, successful internationalization is successful at having lots of interaction between international students and Japanese students and people in Japan. So, we figured out if there's less information about opportunities to exchange or interact with people that will definitely cause the lack of internationalization. Let's go into the details.

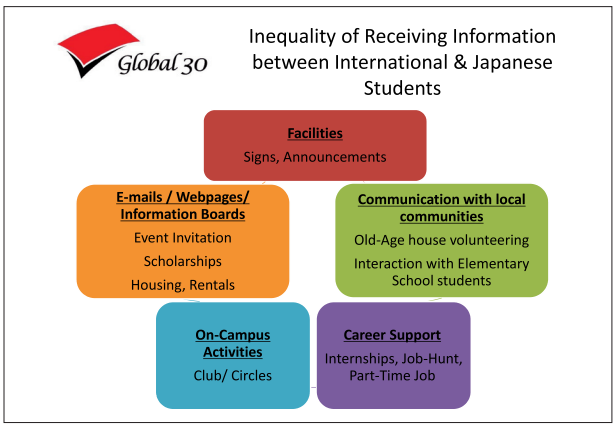
For the first big idea ▪ the inequality of receiving information between international students and Japanese students, we came up with five big categories. The first one is facilities. For example, the signs and announcements are mostly done in Japanese only in most of the universities.



D-3-2

Sinha:

And talking about the e-mail, webpages and information boards, wherever you find them in the university, almost all the information is in Japanese. And even if they are in English, it's probably 10% of all of it.

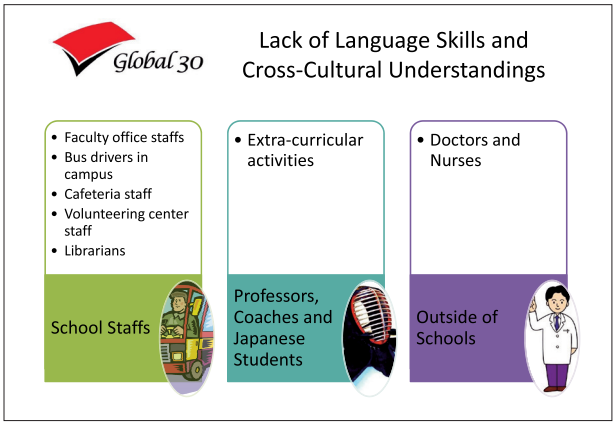


D-3-3

Yamase:

So, if we're trying to get a scholarship, it's hard to read like 50 pages of English instructions of how to get a scholarship while Japanese people read it in like only 5 pages. The next is on-campus activities. It's easy to imagine. Like clubs and circles in Japan is hard to find for international students to join.

And the next one is career support. Through the workshop yesterday—I'm Japanese and I realize that there are lots of international students who are interested in joining internships and getting experience working in Japan. But it is really difficult to figure out where they can go to experience the internship. And as well as job hunting and part-time job and so on.



D-3-4

And lastly, communication with local communities. This is another one that I was surprised that many people are interested in joining and interacting with local communities, for example, going to elementary schools and talking with the Japanese children in English, or going to the old folks' houses and interact with the elderly people in Japan.

The second big idea is a lack of language skills and cross-cultural understandings. We came up with the three big ideas. The first one is school staff. The facilities team said pretty much everything that we wanted to say. But, for example, cafeteria stuff, do you want to share your...?

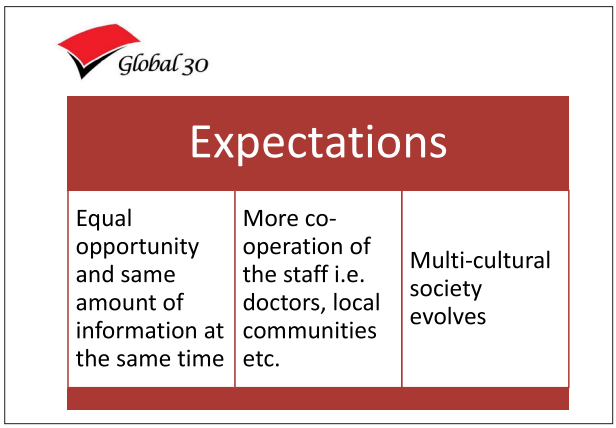
Sinha:

Yeah, regarding the doctor centers, for example, when foreign students have fever or something like that and we go to the doctors and we don't know their schedule, it's written in Japanese when the doctors are coming, which hours they are coming and so forth, we have absolutely no idea what's going on there, and when and how we should go.

Yamase:

And also just to add to the cafeteria thing, it is easy to imagine for Japanese food that it is hard to figure out what ingredients are in there. It's hard to explain. And I just made an example yesterday at the workshop of how you define *kitsune udon* in English. And about the doctors. And the middle one about professors, coaches, and Japanese students. This is the one that is causing a lots of misunderstandings, so if you think about international students, many Japanese people are still thinking about short-term staying students like exchange students. But there are more and more long-term people like four years or two years coming into Japan and studying, thanks to the G30 project. But that's making a lot of Japanese clubs and circles not to make them join

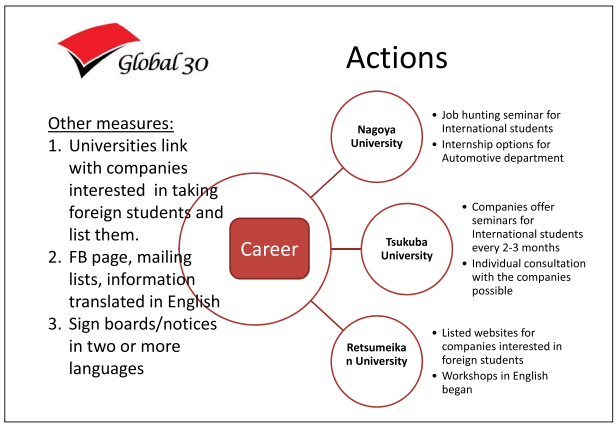
to the clubs and do the activities together, which is making less and less chance to interact with Japanese students.



D-3-5

Sinha:

Now, you know what the current situation is in different universities, and this is actually quite a bit different from what we as foreign students expected it to be. What we expected was to have equal opportunity and same amount of information at the same time or about the same time, and to have more cooperation of staff...



D-3-6

Yamase:

...like doctors as she mentioned and local communities...

Sinha:

And have a multi-cultural society. That doesn't really involve only Japanese and English as the sole languages, but also different languages and cultures so that we can have more understanding and so that we can evolve together.

Now, on behalf of the student body as we discussed yesterday, I would like to propose some actions that should be or could be taken by the universities to improve the situation. One of the most important things is career, and that is what we are all here for. The things that are already going on in different universities—for example in Nagoya University they already started the job hunting seminars, and we also have internship options for the automotive department, although it is still only for that department and not for all of them. And then in Tohoku University the companies come every two to three months, and they also have individual consultancy with each student. But again, it's only limited to Tohoku University and it's not going on anywhere else. And the third one is in the Ritsumeikan University; the university has a list of companies listed in their website and there are workshops in English.

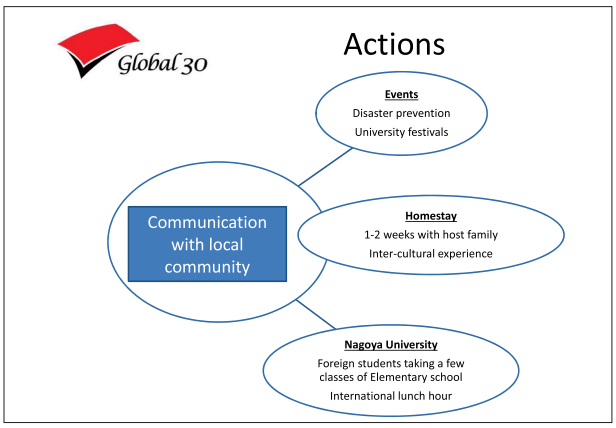
So, these are some of the things that are really good, but we need to kind of propagate it so that the other universities also start doing this, and some of the other measures are that the universities might link with companies that are interested in taking the foreign students, and to list them on the website so that we don't have to Google search all the time and find a thousand companies and look through all of them. The second is probably like FB page. I guess most of you are on Facebook. And a mailing list might be a good option and having signboards or notices in more than two languages or two languages.

Yamase:

Okay, and I'm going to just go quickly on this slide. So for communication and local community, one thing that we thought was interesting is having a homestay. Because this is a great way to interact with people living there and with them and share lots of values.

Sinha:

And one or two weeks of homestay also helps you learn about the culture and the language, of course. And the other things are, of course, the events like the university events or the festivals that might help you to get along more with the local people. And the third for example is in Nagoya University; we have like foreign students taking a few classes at elementary school that I thought was a good idea. But it's still limited.



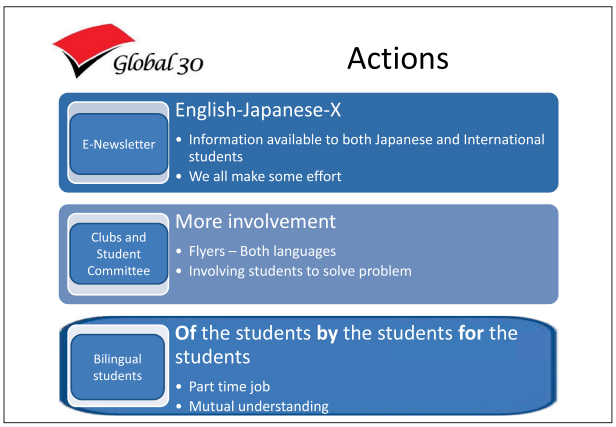
D-3-7

Yamase:

Okay, so there are some actions that we made. Can you go quickly with this?

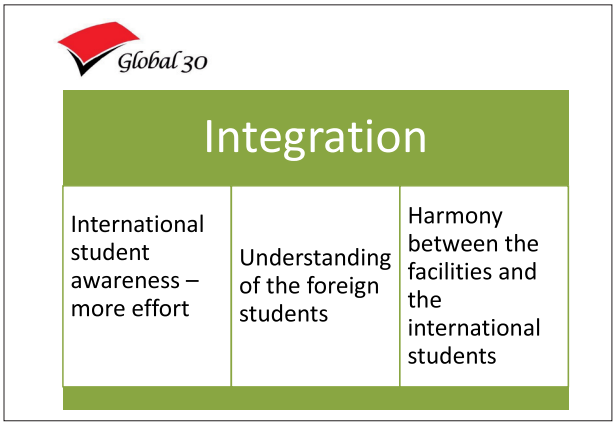
Sinha:

And these are the actions that the students proposed, and they were like making e-newsletters and that we think is not only in English and Japanese because internationalization again doesn't mean translating every single *hiragana* label into English. Internationalization means collaborating and we might have something like half-English and half-Japanese or something like that. And we all make effort on both our fronts so that we can succeed together, and the second is for club/student committee. I guess all of us talked about it already.



D-3-8

One really good one was bilingual students. We copied that actually from a definition of democracy. Of the students, by the students, for the students. So that the students can also get part-time jobs. The things can be translated into English, and both the problems are solved.



D-3-9

Lastly with integration. So the international student awareness and understanding of the foreign students—we think that this is really important because, again, we are in a country and the national language is Japanese. You cannot expect everything to be in English, so we have to understand that we have to make efforts on our side too. And there should be harmony between the universities and the international students that we both collaborate and we make effort and they also help us when we are in a difficult situation.

Yamase:

Alright, so that's all for our presentation. Thank you for listening and thank you for this great opportunity to share our information about information.

Sinha:

Thank you.

Bahari:

Thank you very much Kan and Sapna. Please give them a round of applause.

So from the information category, the main point that has been noticed was that there is inequality of receiving information between international and Japanese students. Therefore, things like facilities and on-campus activities, part-time jobs, community services and visits are not open due to this language barrier for foreign students. So, now we would like to accept two questions. Okay, so first for the person over there? Could you give him a mic? Thank you very much.

Floor 4:

Hey everyone. I'm a MEXT scholarship recipient but I'm actually a Harvard student studying in Japan for a year. The main thing that I found out is that information is indeed a problem, but I feel like culture shock is something that's not being addressed. Something very simple. In the States you're used to having a 24-hour ATM. In Japan, they don't tell you that, so you don't know about it and then you're stuck at the airport. That actually happened to many students before. Something very simple is you don't know how to ride the bus system and so on, and the opposite one is the culture shock. When you see like the students when they are trying to join the club, there's the *senpai* and the *kouhai* system. So, the information is not the problem. That's what I see. It's mostly the culture shock itself. So, even if you give the information in English, but then the student doesn't know what the *senpai* and *kouhai* thing is, they join the club, they don't feel like they're invited to the club, or because they came in at a different time it's not the time that people usually join in the club. It's not accessible. So, I feel like information is indeed a problem, but information alone without putting it along with like the culture shock is priming the students. I feel like that's where a lot of the problem is. So, in terms of like the question I have for you guys, yes, we have all this information for the international students, but what about the Japanese students who are at the school? What information do we give them to make it easier also for these international students when they come in?

Bahari:

Okay, thank you very much.

Yamase:

Well, for that point, I actually share my experience in my university. One of the coaches of Kendo club in my university. He's very fluent in English, and he's very open-minded, so he's been telling through the Kendo practice to the Japanese students to be more open-minded and more welcoming to international students or anyone who is interested in Kendo practice. So, even though Kendo is a very traditional Japanese sport that has the *senpai* and *kouhai* and maybe has a culture of generation issues, they have been successful in joining international students in practicing together. So, I think, of course, information is important, but the people who have those information and being open-minded and helping those international students and making also Japanese students to be more interested in interacting with those people could be one of the good solutions. So, like bilingual students like me can be the bridge between Japanese students and international students.

Bahari:

Thank you very much. So let's have one more question. But please keep the question short and also the answer.

Floor 5:

Hi, I teach at Keio University. It's a good presentation. It's definitely not the case that we're going to be able to sort of automatically translate all the information into Japan into English and make it available to everybody. So, my question to you guys is, from our point of view and the university side, how do we prioritize among the things that you asked. What should we consider to be the most important matters from your point of view?

Sinha:

Well, I guess some of the basic information like what time the doctor would be available there. Because if the student has a high fever and the doctor is not available, she doesn't want to like go far away to a hospital at that time. So, those kind of information, and the second is like information like internships. Those are the things that after five years of this program, we are all in third year or fourth year of our university, and now we are seeking for internships. So, I guess this is probably important for the high rate students, and probably famous professors from overseas who are visiting the university and giving lectures. Those kind of information.

Bahari:

Okay, thank you very much. Please give them a round of applause.

Bahari:

Don't worry, guys. After the last presentation, we're going to have a general discussion and we can talk more about that, between the audience and the students. Or, if the students have questions to the audience as well. Okay. Finally, we have reached, last but not least, under the category of campus life, please welcome Shih and Miss Nga.

【日本語訳】

【Information】

Sapna Sinha（名古屋大学）
Kana Yamase（明治大学）

さて、次は情報グループです。では壇上にどうぞ。各グループの持ち時間は10分間で、質疑応答の時間が５分間だということを忘れないでください。またこちらの学生の皆さん、意見を述べたり、質問に回答しようと思っているのでしたら、書き留めておいてください。プレゼンテーションのセッションが終わった後には、全体討論がありますので、そこで意見を述べることができますので。では、よろしくお願いします。

○山瀬　プレゼンテーションも半ばまできました。３つ目のテーマの情報に移りたいと思います。プレゼンターは・・・

○ Sinha　名古屋大学工学部化学系プログラム２年の Sapna Sinha です。

○山瀬　私は、明治大学国際日本学部の山瀬加奈です。私たちはチームとパートナーを「ダブルめいだい」と名付けました。意味はお分かりですよね。名古屋大学、明治大学のダブルめいだいです。さて、昨日のワークショップでは、情報に関連して沢山のことを話し合いました。そして結論のようなものとして、現状について二つの大きな考えに辿り着きました。一つ目は、留学生と日本人学生が受け取る情報の時期や量に差があるということです。二つ目は、言語能力や異文化理解が不十分であり、これが特に学外の医師やバスの運転手などのスタッフや人々についてそうだということです。

私たちが国際化を定義しようと思っていたところ、Ekene さんが本当に素晴らしい定義を示してくれました。国際化の成功とは、留学生と日本人学生や日本の人々との間でたくさんの交流が行われるということです。そこで、私たちは、人々と交流する機会についての情報が少なければ、当然国際化の欠落が生じるのではないかと考えました。では詳しく説明していきます。

一つ目の、留学生と日本人学生の間で受け取る情報に差があるという点を５つに分けて考えてみました。一つ目が施設です。例えば、ほとんどの大学では、大抵、標識やアナウンスは日本語のみです。

○ Sinha　電子メール、ウェブページ、情報板について言えば、大学で見かけるものはどれも、ほとんどの情報が日本語表示になっています。英語のものがあるとしても、それは全体の10%といったところでしょうか。

○山瀬　奨学金を獲得しようとするとき、奨学金の獲得方法について英語では説明を50ページほど読まなければならず大変ですが、日本人は５ページほど読めばわかるという具合です。次にキャンパス内の活動についてです。簡単に想像できますね。日本のサークルやクラブなどは、参加したい留学生が探すのは大変です。

次が就職支援です。昨日のワークショップを通して、私は日本人ですが、日本でインターンシップに参加したり、就職したりすることに関心を持っている留学生が沢山いることを知りました。もっとも、留学生がインターンシップ体験を得られる場所を探すのは本当に難しいです。それは就職もそうですし、アルバイトなどを見つけるのもそうです。

そして最後が地域コミュニティとのコミュニケーションです。多くの留学生が、地域コミュニティへの参加や交流に興味を持っていることにも驚きました。例えば、小学校に行って日本人の子供達と英語で話をしたり、高齢者施設に行って日本の高齢者と交流したりという活動です。

二つ目の、言語力と異文化理解が不十分だという点ですが、これについては三つの大きな考えに辿り着き

ました。一つ目が大学職員です。私たちが言いたかったことのほぼ全てを施設チームが語ってくれました。例えば、学生食堂のスタッフ。（Sinha さんに対して）発言しますか。

○ **Sinha**　はい。医療施設を例に挙げれば、留学生が熱か何かで、病院に行くとします。私たちは、開院時間がわかりません。医師がいつ来るのか、いついるのかなど、日本語で書かれているので、どうなっているのか、またどのようにして行けばよいのか、全くわかりません。

○**山瀬**　また学生食堂について補足しますと、日本料理の食材として何が入っているのかを突き止めるのは難しいということは容易に想像できます。説明するのが難しいです。例えば、昨日のワークショップで、私はきつねうどんとは何かを英語で説明しようとしました。また医師について、教授、コーチや日本人学生についても説明しようとしました。

　また多くの誤解もあって、留学生という場合、多くの日本人は今でも交換留学生のような短期間滞在する学生だと考えます。実際にはG30プロジェクトのおかげで２年や４年などもっと長い期間学ぶ留学生が増えているのですが、日本人学生のサークルやクラブの多くが、そうした誤解に基づき、長期留学生にサークルに入って一緒に活動しようと誘わず、結果的に日本人学生と交流するチャンスがますます少なくなっています。

○ **Sinha**　これで、他の大学の現状がわかったことと思います。このような状況は私たち留学生が期待していたこととは若干異なります。私たちが期待していたのは、平等な機会があり、同時に又はほぼ同時に同じ情報量を得られ、また職員からももっと協力してもらえるということでした。

○**山瀬**　先ほど言ったような医師や地域コミュニティなどの協力ですね。

○ **Sinha**　そして多文化社会となるということです。そこでは日本語と英語だけが唯一の言語ではありません。様々な言語や文化が存在しており、それによって互いに理解を深め、共に進化していけるのです。

　さて、昨日議論した学生グループを代表して、現状を改善するために、大学が取るべき、また取ることのできるいくつかのアクションを提案したいと思います。最も重要なことの一つとして、就職があります。そのために私たちは皆ここに来ているのですから。既に他の大学で実践されていることとして、例えば、名古屋大学では、就職セミナーの開催を既に始めていますし、自動車業界でインターンシップをするという選択肢も与えられています。ただ、現時点では自動車業界だけなので、全ての業界でそのような機会がある訳ではありません。また東北大学では、企業が２～３ヶ月毎に就職説明会を行っていますし、各学生は個別相談も受けています。もっとも、これも東北大学に限定されますし、他のところに広がっていません。三番目の例は、立命館大学ですが、企業リストがウェブサイトに掲載されていますし、英語でワークショップも開催されています。

　以上は本当に素晴らしいことだと思いますが、他の大学でもこうした取組みが開始されるように広めていく必要があります。また他の取組みとしては、大学が留学生の採用に興味を持っている企業と連携して、ウェブサイトにその企業リストを掲載することが挙げられます。そうすれば、私たちも絶えずグーグルで検索して見つけた数千の企業の全部を調べなくてもよくなります。二つ目は、Facebook ページのようなものです。皆さんのほとんどが、Facebook を利用していると思います。メーリングリストは良い方法だと思いますし、掲示板や通知を２言語又は３言語以上にしてもよいでしょう。

○**山瀬**　では、このスライドについてざっと述べたいと思います。コミュニケーションや地域コミュニティについて、私たちが興味深いと思ったことの一つは、ホームステイです。ホームステイはそこに住む人たちと交流し、彼らを多くの価値観を共有する素晴らしい方法です。

○ **Sinha**　ホームステイを１～２週間すれば、文化やコースで使われる言語の学習にも役立ちます。他には、もちろん大学行事や祭りなどのイベントがありますが、地元の人たちと知り合いになれるかもしれません。また三つ目は、例えば、名古屋大学では、留学生が小学校の授業を受ける機会が設けられています。これは良いアイデアだと思いますが、やはり限定されています。

○**山瀬**　そこで、私たちからいくつか提案させていただきます。（Sinha さんに対して）手早くお願いできま

すか。

○ **Sinha**　学生から提案されたのは、次のことです。メールによるニューズレターを作成するということです。英語や日本語のどちらかだけによるものではなく、というのは、国際化とはひらがなを逐一英語に翻訳することではないからです。国際化とは共同することなので、半分英語、半分日本語のようなものなどにします。そして皆で上手くいくように努力します。二つ目は、サークル／学生委員会についてですが、これについては既に皆で話合ったことと思います。

とても良いアイデアだったのは、バイリンガルの学生というものでした。民主主義の定義に習ったものですが、学生の、学生による、学生のためのもの。学生のアルバイトにもなり、英語への翻訳もできる。一石二鳥です。

○**山瀬**　それでは最後に・・・（Sinha さんに対して）お願いできますか。

○ **Sinha**　わかりました。インテグレーション、統合ということです。留学生がこれを自覚し、理解することは、本当に大切だと思います。なぜなら、私たちは日本にいて、その国語は日本語だからです。すべてが英語になっているということは期待できません。ですから、私たち留学生の側でも努力する必要があると理解しなければなりません。また施設と留学生は協調して、双方が共同し、留学生は努力をし、施設も留学生達が困った状況にあるときには助力する必要があります。

○**山瀬**　これで、私たちのプレゼンテーションを終わります。ご清聴ありがとうございました。また情報について、私たちの考えを共有する素晴らしい機会を与えてくれてありがとうございます。

○ **Sinha**　ありがとうございました。

○ **Bahari**　加奈さん、Sapna さんありがとう。彼らに盛大な拍手をお願いします。

情報グループが気づいた重要な点として、留学生と日本人学生の間で受け取る情報に差があり、そのため、施設やキャンパス内の活動、アルバイト、コミュニティサービスや訪問などが言語の壁のために、留学生に開かれていないということが挙げられました。では、質問を二つ受け付けたいと思います。はい、そこの方、一つ目の質問をどうぞ。マイクを渡していただけますか。

○ **Floor 4**　皆さん、こんにちは。私は文部科学省国費奨学金によって日本に１年間留学しているハーバード大学の学生です。情報については本当に課題だと思いますが、重要な問題として、カルチャーショックが取り上げられていないのではないでしょうか。とてもシンプルな問題として、米国では、ATM は24時間利用できるのが一般的です。日本では、そのことを伝えられていないので、知らないわけです。そうすると、空港で立ち往生することになります。これは、実際これまでに多くの学生が経験したことです。また、バスの乗り方が分からないなどといったことがあります。こうした簡単な問題の逆がカルチャーショックです。留学生がサークルに入ろうとするときには、先輩・後輩というものがあります。ですから情報は問題ではないと思います。ほとんどがカルチャーショックそのものです。仮に英語で情報を提供した場合でも、留学生が先輩と後輩というシステムがどのようなものなのか知らないでサークルに入れば、サークルで歓迎されていないような感じがするし、一般にサークルに入部する時期ではない時に来ればそのような感じがするでしょう。利用しづらいです。だから情報は本当に問題だとは思いますが、カルチャーショックに対処せずに情報だけを提供するのでは、学生の利益とはなりません。私はそれが多くの問題の原因だと思います。私が質問したいのは、留学生はこうした情報を全て与えられていますが、日本人の新入生ではどうなのでしょうか。彼らに入学時にどういった情報を提供すれば、大学生活になじみやすくなるのでしょうか。このような情報は留学生にも役立つのではないでしょうか。

○ **Bahari**　ありがとうございました。

○**山瀬**　その点については、実際に私の大学での経験をお伝えしたいと思います。私の大学の剣道サークルのコーチに、とても英語が流暢な方がいます。またとてもオープンな考え方をする方で、剣道の練習を通じて、日本人学生にもっとオープンな考え方をし、剣道に興味を持っている留学生などをもっと歓迎するように話しています。剣道は非常に伝統的な日本のもので、先輩・後輩関係ですとか、世代の違いのような問題

もありますが、留学生が一緒に練習に参加して上手くいっています。もちろん情報も重要だと思いますが、そうした情報を持つ人たちが、オープンな考え方を持って、留学生を助け、日本人学生ももっと留学生との交流に興味をもってもらうというのは、良い解決の一つではないでしょうか。私のようにバイリンガルな学生が、日本人学生と留学生の間の架け橋となることができると思います。

○ **Bahari**　ありがとうございました。ではもう一つ質問を受け付けます。質問と回答はどちらも短くしてください。ありがとうございます。では、もう一つ質問をどうぞ。

○ **Floor 5**　こんにちは。私は慶応義塾大学の教員です。良いプレゼンテーションでした。確かに、ただ単に情報を全て日本語から英語に翻訳して、誰もが入手できるようにすればよいというだけの問題ではありません。そこで私の質問は、私たち教員や大学の視点からですが、あなた方が求めているようなことの優先順位はどうすればよいのでしょう。何を最も重要な事として考えるべきだと思いますか。

○ **Sinha**　それは、何時に病院が開いているのかなど、基本的な情報でしょうか。仮に学生が高い熱があるとき、遠くの病院に行きたいとは思いません。そのような情報と、二つ目は、インターンシップなどの情報です。こうした情報は、５年このプログラムをやってきて、留学生が皆、大学の３年、４年になって、インターンシップを探している時期にはおそらく重要なことなのではないでしょうか。こうした情報は多くの留学生にとって優先度合いが高いのではないかと思います。また、海外の著名な研究者が大学に来て英語で特別講義を行う時などの情報も大事だと思います。こういった情報ですね。

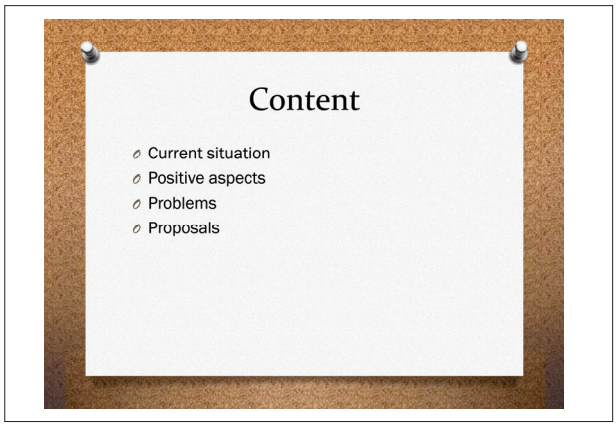
○ **Bahari**　ありがとうございました。彼らに盛大な拍手をお願いします。

【Campus Life】

Hsin Shih (Doshisha University)
Nguyen Thi Thanh Nga (Kyoto University)

Shih:

Good afternoon, ladies and gentlemen. So, my name is Shih, but I usually go by Alex. I was an undergraduate student of Doshisha, of the faculty, the institute for the liberal arts at Doshisha University in Kyoto.



D-4-2

Nga:

My name is Nga, and I'm from Kyoto University. We are both students of Global 30. And now, we are here to talk about—Alex?

Shih:

Today, we're going to talk about campus life. Now, being the final group of the four topics, we will make some repetitions. But the thing is, all of these four topics are very much related. So, we will start with the current situation in the campus life since the introduction of the Global 30 project in 2009. So, starting with the current situation, what can you tell us?

D-4-3

Nga:

Yes. Let's find out what's the current situation now there in a Japanese university. We want to mention only the main points. The first point is that the number of the international students in the Japanese universities is greatly increasing. Nowadays, if you go to a Japanese university, it's very easy for you to find a lot of Asian students or even American, European, or African students, are working inside the university campus. And another thing is that traditionally, a lot of events are at university for Japanese students to take to take part in, and now, besides, they also have a lot of events for the international students. And the third one is that our international students come to Japanese university, they also establish a new organization, and join it in their own way. In each university, a new organization always happens with international students. And, like two sides of the same coin, positive developments tend to be accompanied by negative ones. We will talk about the first aspect first.

Firstly, the universities are getting more international, and there are a lot of evidence about it. You can say that there are a lot of international clubs that have started in Japanese universites, and a lot of events such as lunch meeting like in Kyoto University, Tokyo University; shared kitchen, language exchange. And international

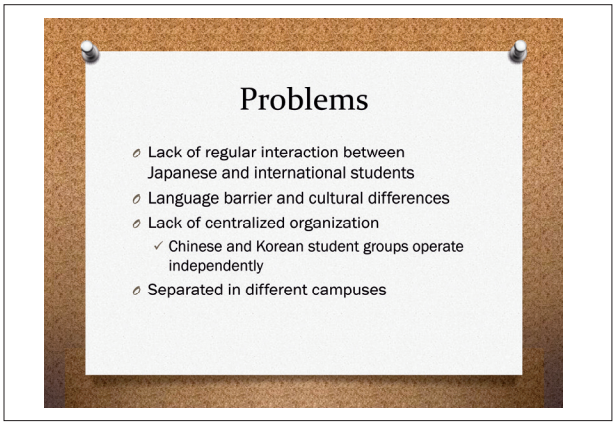
students not only want to communicate with other students in their own university. They also want to open their relationship with students from other universities. So, there's a lot of inter-university student programs like the one between the Doshisha University and Kyoto University. In addition, in a university, they also support the students about helping them to find a job. Learning by the career advising program. And last, we will move to the problems of the situation. So please, Alex.

D-4-4

Shih:

Thank you. And so, I would like to talk about problems that are occurring in many of the universities that are participating in the Global 30 project. One of the problems is, with the increase of international students, there are many chances and opportunities for international exchange. But the thing is, there is a lack of regulated action between Japanese and international students. In the workshop yesterday, we discussed that some of the causes may be the language barrier, as many of the Global 30 students do not possess the necessary Japanese ability to interact with the Japanese students, and many of the Japanese students are not confident with their English ability to communicate with the international students. And there are also cultural differences, as there are different ways to approach campus life between Japanese students and international students.

D-4-5



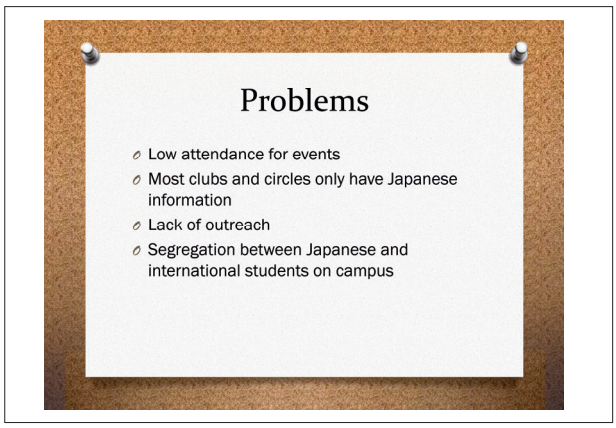
D-4-6

And another problem that we discussed is that there is a lack of centralized organization. For instance, there are many student groups organized by Chinese students and Korean students, but it is very almost exclusive and they operate independently, so that students from other countries aren't able to get involved in those student groups. And another problem I would like to talk about is that the separation of campuses or buildings. In many of the Global 30 programs, the international students are concentrated either in one building or one campus. On occasions, they may share the same building with the Japanese faculty, but the thing is, it is very difficult to interact.

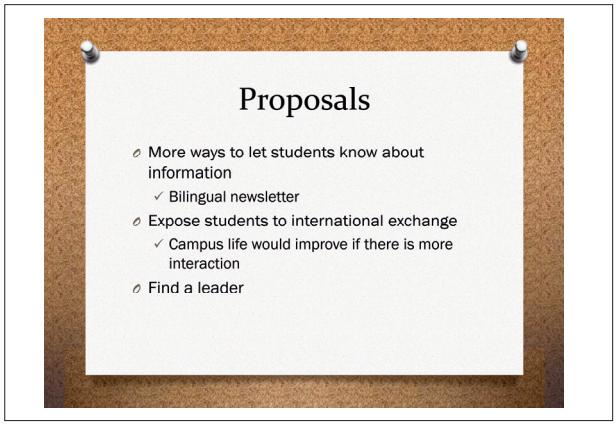
As was mentioned previously, one of the positive aspects in this introduction of the Global 30 project is that the office for international students, they are being more active in organizing international events. But for many of these events, there's a problem of low attendance. So, in the workshop, we discuss what the causes for this problem are. And one of the causes—the conclusion that we came up with is that, many of the events only provide information in Japanese. So, many of the international students, they simply are not aware of the events. And there's also a lack of outreach by the Japanese students. So to reach out, to bring more, to have

the international students to get more involved in campus life and campus activities.

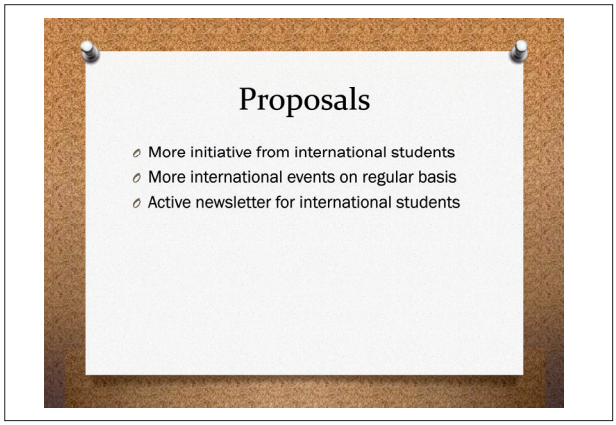
And one other reason for that is, as mentioned earlier, there is a segregation between Japanese and international students on many of the campuses. So, it is very difficult to break the barrier, especially in the Japanese language. In the workshop, then, we discussed proposals that could remedy these issues. One of the things that we came up with is, there should be more ways to let students have information. For instance, we discussed yesterday, in the University of Tsukuba, there is an initiative of bilingual or multilingual newsletter, that are delivered to almost every international student, and we thought that was a wonderful initiative. Also, we should encourage international students to exchange their cultures with Japanese students more regularly. Now, here's the thing. Not everybody wants to have a lot of friends, but the campus life for international students will improve if they know more Japanese students.



D-4-7



D-4-8



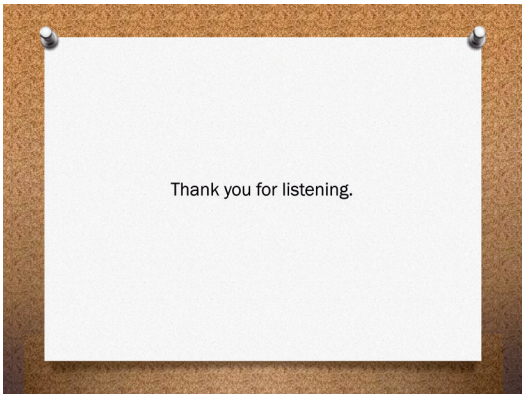
D-4-9

So, it is not all about the Japanese students reaching out. We, as international students, must act in order to make our campus life better. So what should we do? We discussed that we need to make more international organizations, and then try to push for more international events, organized on a more regular basis. Now, they don't have to be large gatherings. It could be just a small lunch gathering, lunch meeting, but more like on a regular basis, so that—for some reserved, shy students, once they know that there is always someone, some gatherings there, on a daily basis or a regular basis, perhaps one of these days they will think about joining. And if they enjoy it, they will come back. And this should be our answer. There should be more, as I mentioned earlier, active newsletters for international students, and just basically more information. Informed international students likely have more chances to enjoy their campus life.

Now the proposals. The proposals that we came with are that there should be more meeting space. For example, in most of the universities right now, we have international lunch. But the thing is, we believe that it's simply not enough. There should be more meeting spaces. And these spaces should be utilized with events and activities. And as I mentioned previously, if we can start international student organizations and find sponsors by either reference or this university. There will be more ways to improve our campus life, and it would be even better. For example, SCIKyu, International Student Organization in Kyushu University, they have direct access to the university president, and they have a lot of support from the university which empowers them to

make a change to the campus life. And we thought it was very wonderful. Thank you very much for listening, and we hope to continue to improve this global experience.

D-4-10



D-4-11

Bahari:

Please give them a round of applause. So, basically, in terms of campus life, the problem is that there's a lack of interaction. And some of the proposals that are mentioned is that there should be kind of a student body, who try to bridge between these Japanese and international students. Now, we'd like to accept two questions from the audience. Are there any questions?

Floor 6:

Thank you and congratulations to all of you for coming up with very good proposals. I'm working at the University of Tokyo, and I came to Japan long ago as, like you all, maybe there are many people in this hall who came long ago. And back then, the Japanese universities were not trying to put in efforts at Englishization. So, I guess you guys are already lucky. But I also think that if you will continue with this kind of solitary existence, you are not going to learn much. And there's no... I don't think you'd need to come to Japan, all the way to Japan. Because having come to this country, you should be able to appreciate the culture, and unless you tend to make an effort at going out and reaching international students—I'm sorry, Japanese students—it's not going to help you being here.

So, as your *sempai*, I think I would like to also tell you that you have to learn how to develop a much more positive approach. And if the Japanese students are shy, they're intimidated because of the language barrier, I think we have to make an effort to go and reach out. And you try to express, or you try to share your culture with them. So, it was nice listening to all of you, I know, because we have also faced it long ago and the students are facing it now. There is a lot of change in the Japanese universities and I guess it's going to improve. But if you come to Japan, you also should be able to put up with the challenge of learning Japanese, because I guess if you go to any non-English country, non-English speaking country, like you go to France, you go to Germany, you go to any of those Scandinavian countries, you need to know the local language to interact with the locals. So, in sort of just interacting between the Japanese—I'm sorry, between the international community and only with your country fellows—you try to go and reach out to the other people around here. You will learn a lot and it will make your life in Japan very, very satisfactory.

Bahari:

Thank you very much. So that's a very, very good point. The point is that there should be a bidirectional balance between international students trying to learn Japanese culture, since we're in Japan. And also that's the main purpose of internationalization for Japanese people as well, to get to know what international students

are like, what they do. So, there should be this stability or balance between this cross-exchange. Thank you very much. So we'll accept one more question. Sorry, please try to keep it short, and if it's an answer, short as well.

Floor 7:

I'm from the University of Tsukuba, and I want to thank you for your constructive thoughts. And I'm very happy to see that you're mostly very happy being here in Japan. And I think all of you had mentioned that you wanted more exchange to follow up on your question. I do agree that students should be—the internationals should be more, should be more active, in developing this exchange. But I also want to know, as part of my responsibilities, what is the single-most thing that is stopping you from—what is inhibiting full exchange with the Japanese community? And if there's anything that universities can do to help you become more active?

Shih:

So, I would like to comment that, actually, it is somewhat related to what I was going to comment earlier, that there are two kinds of students, generally, foreign international students that come to Japan. One type is they really want to—they love the culture, they love the country; but the other type is, I think they come here because of the Global 30 initiative, so that they want to just to explore. But the thing is, some of these students, they may not have come to Japan without this project, and so perhaps they're not very interested in the Japanese culture to start with. So, I guess one of the things a university could do is just to expose them, to be more active in bringing them to cultural exchange and activities. And that, I think gradually, which will encourage them to participate in further exchange.

Bahari:

Okay. Is your question answered? Please give them a round of applause. It's really a great presentation. For the general discussion, please wait after this. So, with that, we have come to an end of our panel presentations. There have been four main categories that are discussed, namely, academics, facilities, information, and campus life. In a university, these four categories, these four factors, are really what affect students, whether they will finally get comfortable and enjoy their life. So, in this era of globalization, and Japan is in this process of globalization, a balance needs to be struck for foreign students learning Japanese, and also for Japanese students to improve their vision in their mind.

【日本語訳】

【Campus Life】

Hsin Shih（同志社大学）
Nguyen Thi Thanh Nga（京都大学）

○ **Bahari**　皆さん、心配ご無用です。最後のプレゼーテンションが終わりましたら、全体討論に入りますので、聴講者と学生の間でもっと議論を深めることができます。学生から聴講者に質問がある場合も同様です。では、最後に、キャンパスライフのグループです。Shih、Nga さんをお迎えしましょう。よろしくお願いします。

○ **Shih**　それでは、こんにちは、皆さん。私は Shih と申しますが、Alex と呼ばれています。私は同志社大学の国際教育インスティチュートの学生です。

○ Nga　私は京都大学の Nga です。私たちは二人ともグローバル30の学生です。今日ここでお話させていただくのは・・・Alex、お願いします。

○ **Shih**　今日はキャンパスライフについてお話させていただきます。４つのテーマの最終グループですので、若干繰り返しがあるかもしれませんが、４つのテーマは全てとても関連があるのです。では、キャンパスライフの現状から始めたいと思います。2009年にグローバル30事業が導入されて以降のことです。

　では、現状から始めましょう。（Nga さんに対して）話してくださいますか。

○ **Nga**　わかりました。日本の大学の現状がどうなっているのかまず考えてみましょう。では、私たちが申し上げたい重要な点からいきます。まずは、日本の大学の留学生数は著しく増加しています。今では、日本の大学に行けば、多くのアジア人学生だけでなく、アメリカ、欧州、アフリカからの留学生がキャンパス内を歩いている風景にすぐに出くわすことができるでしょう。また、従来から、日本人学生が参加できる大学のイベントがたくさんありますが、今では、その他に留学生用のイベントもたくさん開催されています。三つ目は、日本の大学にやって来る留学生も、新たに団体を設立して、独自にそうしたイベントに参加しています。各大学には、必ず留学生の団体があります。またコインの裏表のように、良いこともあれば、悪いこともあるのです。まずは良い面について話したいと思います。

　第一に、大学はますます国際化しているということです。それを証明するものもたくさんあります。日本の全ての大学に多くの国際交流サークルが立ち上げられていることですとか、京都大学、東京大学のようにランチミーティングのようなイベントがたくさんあることですとか、共用キッチンや言語交換といったものがあります。留学生は、大学の学生とだけコミュニケーションを取るということを望んでいるのではありません。学外の学生とも関係を築きたいと思っています。そのため、同志社大学と京都大学の間で行われているように、大学間の学生交流プログラムがたくさんあります。また、ある大学では、留学生の就職支援も行っています。キャリアアドバイスプログラムから学ぶことができます。最後に、現状の問題点に移りたいと思います。では、Alex お願いします。

○ **Shih**　では、グローバル30事業の参加大学の多くで起こっている問題についてお話したいと思います。問題の一つは、留学生の増加とともに、国際交流のチャンスや機会自体は多くなっていますが、日本人学生と留学生の間の日常的な相互交流というものがないということです。昨日のワークショップでは、その原因の一部が言語の壁ではないかという議論をしました。というのは、グローバル30事業の留学生の多くが日本人学生と交流するのに必要な日本語能力を持ち合わせていないし、日本人学生の多くが留学生とコミュニ

ケーションを取れるほどの英語力があるという自信がないからです。また、文化の違いがあるように、日本人学生と留学生のキャンパスライフについてアプローチする際には異なる方法を取る必要があります。

私たちが話し合ったもう一つの問題は、中心となる機関がないということです。例えば、中国人学生や韓国人学生が組織する学生グループは多くありますが、ほぼその国の学生だけのグループで独立して運営されているので、そうした学生グループに他の国の学生が関与することはできません。さらに別の問題として取り上げたいのは、キャンパスや建物が隔離されているということです。グローバル30プログラムの多くで、留学生は一つの建物か一つのキャンパスに集められています。日本人学生の学部と同じ建物を共有する場合も時にはあるかもしれませんが、要は非常に交流しにくいのです。

先ほど申し上げたように、グローバル30プロジェクトの導入のプラス面の一つは、留学生事務局がより積極的に国際イベントを開催しているということです。ただし、こうしたイベントの多くでは、参加率が低いという問題があります。そこでワークショップでは、このような問題が生じる原因は何なのかを話し合いました。私たちが出した結論では、その原因の一つは、そうしたイベントの多くが日本語でのみ情報が提供されているということでした。つまり、多くの留学生は、イベントが開催されることに気がついていないだけなのです。日本人学生による支援活動も行われていません。留学生に接触を図り、参加者を増やし、留学生のキャンパスライフやキャンパス活動への関与を増やす必要があります。

また別の原因は、先ほど申し上げたように、多くのキャンパスで日本人学生と留学生が隔離されているということです。特に日本語という壁を破ることはとても難しいことです。ワークショップでは、こうした問題を改善することのできる提案がないかを話し合いました。そこで考えついたのが、情報について学生に知らせる方法がもっとあるのではないかということです。例えば、昨日話し合ったのは、筑波大学では、二カ国語による取組み、確か多言語のニューズレターだと思いますが、それが留学生ほぼ全員に配信されています。私たちはこれは素晴らしい取組みだと考えました。また、留学生はもっと定期的に日本人学生と自国の文化の交換をするべきです。誰もがたくさんの友人をほしいという訳ではありませんが、留学生がもっと多くの日本人学生と知り合えば、留学生のキャンパスライフは改善されると思います。

日本人学生が接触をするということが全てではありません。私たちは留学生として、キャンパスライフをより良いものとするために自分のために行動しなければなりません。では何をすべきなのでしょうか。私たちは、留学生団体の活動をもっと活発にし、国際イベントをもっと促進し、もっと定期的に開催するように努める必要があるのではないかと話し合いました。イベントは、大きな集まりでなくてもよく、小規模のランチの集まり、ランチミーティングだったりしてもよいので、もっと定期的にする。引っ込み思案で、シャイな学生であっても、常に誰かがいる、毎日又は定期的に何らかの集まりがあると分かれば、そのいずれかの日に参加してみようと考えるかもしれません。それを楽しんだ人は、またやって来ることでしょう。これが私たちの回答です。先ほど申し上げたように、留学生のためのニュースレターを積極的に発信したり、基本的にもっと情報を提供するということです。情報を与えられていれば、留学生はもっとキャンパスライフを楽しめるでしょう。

そこで、もっとミーティングスペースを増やすということを提案したいと思います。例えば、現在ほとんどの大学では、国際交流昼食会（インターナショナルランチ）が行われています。ただ、これだけでは十分ではないと思います。真面目な話、少なくとも１～２つスペースを設ける必要があると思います。もっとミーティングスペースがあった方が良いのではないでしょうか。こうしたスペースを利用してイベントや活動を行います。また先ほど申し上げましたが、照会してスポンサーを見つけたり、大学をスポンサーとしたりして、留学生団体を立ち上げることができれば、留学生のキャンパスライフの改善のやり方も増えるでしょうし、さらに向上するでしょう。例えば、九州大学の留学生団体の SCIKyu ですが、大学の総長と直接コンタクトすることができ、大学から多くの支援を受ける一方、キャンパスライフを変える権限を託されています。これはとても素晴らしいことだと思います。ご清聴ありがとうございました。グローバル体験を改善し続けていけると良いと思います。本当にありがとうございました。

○ **Bahari**　彼らに盛大な拍手をお願いします。基本的に、キャンパスライフという点では、つまり、交流のなさが問題だということでした。そこで提案されたのは、日本人学生と留学生の橋渡しをしようとする学生団体のようなものがあればよいのではないかということです。では、聴講者から質問を二つ受け付けたいと思います。ご質問はありますか。どうぞ。

○ **Floor 6**　皆さんの提案はとても素晴らしいものだと思います。私は東京大学で働いている者です。私も何年も前に皆さんのように日本にやって来ました。この会場にも何年も前に来日した人はたくさんいるかもしれません。その当時は、日本の大学による英語公用語化（Englishization）の取り組みというようなものはありませんでした。そのため、既にこの時点であなた達はラッキーだと思います。ただ、このような孤立化を続けるのであれば、多くを学ぶことはできないのではないかとも思います。また、それだったら、わざわざ日本にやってくる必要もないのではないかと考えます。というのは、日本にやって来るのであれば、その文化を認めることができるべきですし、日本人学生と接触したり、出かける努力をしようとしない限りは、日本にいても意味がないからです。

あなた方の先輩として、もっと有益なアプローチを見つけ出す方法も学ぶ必要があるのではないかと言わせてもらいたいです。日本人学生がシャイだ、彼らが言語の壁があるために及び腰になっているのであれば、留学生の方から近寄って接触する必要があるのではないでしょうか。そして、自分たちを表現しようとする、つまり、自分の文化を彼らと共有しようとするのです。皆さんの発表を聞くことが出来てよかったです。というのは、私たちが何年も前に直面したことを、今の学生も直面しているからです。日本の大学は大きく変わってきていますし、今後も改善していくことと思います。ただ、日本に来るのなら、日本語を学習するという難しい問題にも耐えることができなければなりません。それは、仮にフランスやドイツ、スカンジナビア諸島の国といった非英語圏の国に行ったとすれば、現地の人たちと交流するには現地語を知っている必要があるのですから。ただ、留学生コミュニティや同じ国出身の学生とだけ交流するのではなく、日本の他の人たちに近寄って、接触しようとしてください。そこから多くのことが学べますし、日本での生活にとても満足できると思います。

○ **Bahari**　はい、ありがとうございました。とても良い指摘でした。日本にいるのだから、留学生は日本の文化を学ぼうとするという双方向のバランスを取るべきということです。それは、日本の人々にとっての国際化の主な目的でもあります。留学生とはどういうものなのか、どういうことをするのかを知るということですね。このように異文化交流のバランスを取るべきだということですね。ありがとうございました。では、もう一つ質問を受け付けます。はい、お願いします。すみませんが、質問も回答も手短にお願いします。

○ **Floor 7**　私は筑波大学の者です。建設的な考えをありがとうございました。大多数の留学生の皆さんが日本での生活にとても満足しているようなので、とても嬉しく思います。質問の内容によれば、全員がもっと交流を深めたいということでした。学生は、というより留学生はもっともっと交流を深めるために活発になるべきだということについては、私も同感です。その一方で、私の責任の一つとして、あなたが日本人コミュニティと全面的に交流するのを妨げている最大の原因が何か知りたいと思います。一つあげていただけますか。またもっと積極的に活動するために大学が手助けできることがあれば、それも教えていただけますか。

○ **Bahari**　ご質問は、その一歩を踏み出すことを妨げている主な原因が何なのかということですね。

○ **Shih**　私が回答したいと思います。先ほど申し上げたこととも関連してくるのですが、一般に日本にやって来る留学生には、２種類の学生がいます。一つ目のタイプは、日本の文化が大好きで、日本も大好きという本当に日本について学びたい学生です。一方、もう一つのタイプは、グローバル30事業のために、言うなれば、ただ単に探求したくて日本にやって来る学生です。このタイプの学生の中には、このプロジェクトがなければ日本には来なかった人もいるかもしれません。そうした場合、おそらくはそもそも日本の文化にはあまり関心がありません。大学ができることの一つは、彼らをもっと頻繁に文化交流や文化活動に参加するようにさせることだと思います。そうすれば次第に、彼らのさらなる交流への参加を促すことになるのでは

ないでしょうか。

○ **Bahari**　これで回答になりましたでしょうか。全体討論がありますので、この後までお待ちください。後のセッションで、もっと議論できますので。ありがとうございました。では、彼らに盛大な拍手をお願いします。実に素晴らしいプレゼンテーションでした。これで、パネルプレゼンテーションは終わりとなります。Academics、施設、情報、キャンパスライフと、４つのテーマについて議論されました。大学では、この４つのテーマ、この４つの要素は最終的に学生が快適で楽しく暮らせるかに影響を与えるものです。このグローバル化の時代には、また日本はこのグローバル化のプロセスにありますが、留学生が日本語を学ぶということだけではなく、日本人もその認識を変えるという点でバランスを取ることが求められます。

【General Discussion】

Bahari:

Now, I would like us to enter the session of general discussion, to get the flow of discussion going. I would like to ask the general audience first, if they would have any questions they would like to ask to any of the categories. And in this session, the students are also given the chance to speak and to answer questions, and to express themselves. So let's start this general discussion. Do we have any questions from the audience? Okay. Please give the man a mic.

Floor 8:

It's a question to anybody and everybody. Student organization. When I was a student, we had a student union, and there was a student union bar, and there were elections for student representatives, and then the student representatives coordinated with the faculty. What has developed within the Global 30 universities, in terms of student representation? And what are your thoughts on the best way to represent student voices to the administration, and to the other faculty members?

Bahari:

Okay, thank you very much. Okay, the students, any of the students, would you like to answer?

Okafor:

Thank you very much for that question. On student organizations, actually we recognized that internationalization—students has a very important role to play in starting internationalization. And to play that role, we need to form student groups. In Kyushu University, for instance, we have foreign students organization, which is an organization formed by students by themselves. This organization organizes activities for foreign students, and also Japanese students, because for all of our activities, we invite Japanese students to integrate with us, interact with us.

Then, we have this organizational committee called SCIKyu. Student's Committee for Internationalization of Kyushu University, which was the organizer of the workshop yesterday. This student group—we also have four professors in the committee—but it's made up of 19 students, both Japanese students and also foreign students. So, this committee is saddled with the work of contributing to the internationalization of Kyushu University, through the strengths initiated. We also know that in some other universities, like in Osaka University, they have foreign students' organization, they're called OISA, and they also have a Japanese student organization. And we understand that these two student organizations cooperate in organizing activities for foreign students and also for Japanese students. In Doshisha University, we know of student staff who are students that help the staff in organizing activities for students, for foreign students and Japanese students.

So, students groups actually have been formed in many of the G30 universities. And we're trying to encourage other universities that have not formed such students groups to do so, because they are very, very important.

Bahari:

Thank you very much. With that, we'll come to the second question.

Floor 9:

I'm from Kyushu University, and I have a question for everyone. I think now students are more—I mean Japanese domestic students—are more aware of foreign students than before, and trying to learn global citizen concepts. And what do you like to be aware as? I mean, what do you think of your own identity? For example, when you come to another country, and the things you think as very certain change—I mean, your point of view also change, you open your mind? And then you go back, you find that you are not very familiar with the culture you used to have, and at the same time, not very familiar with the culture you are now in. So, what do you like to be aware as... what do you think of your own identities? Thank you.

Bahari:

Okay. We'll have the question answered for you.

Floor 10:

Thank you very much. I study at Tsukuba University. I have the same sentiment as you do. But the problem is that most students, when they come from other countries to Japan, suffer from two psychological problems. The first one would be superiority complex, and the other one would be inferiority complex. Of course, I'm no psychologist, but these are the two basic problems everybody faces when they come to Japan. I'm not demeaning or I'm not giving disrespect to anyone. Some people come to Japan, thinking that Japanese people and the Japanese culture are inferior. I guess when they actually come, they are amazed that Japanese culture is better than their own thing. Everybody tends to be a little bit ethnocentric but I think we have to be objective, and objectivity is the only answer.

When I came to Japan, I opened my mind like as a child. I don't know anything, and I'm learning everything. If we have that mentality, I think we wouldn't have a problem. But when we come and we think everything in Japan is bad, everything we see we tend to compare. The US is this way. Britain is that way. Why is it this way in Japan? And Ghana is this way, and Nigeria is that way. Why is it this way in Japan? These are the problems we facr as international students. And I also agree with the student who—I'm sorry, I forgot your name – spoke from Tokyo University. What she said is true. We are claiming to be spoon-fed in someone else's country. We want to be spoon-fed in Japan. We want to remain in our rooms and bring our lecture books. We want to be in our rooms and to bring us our exams. We want to be in our rooms and then they do everything for us. Meanwhile, in our own countries, we don't get it that way. We are the ones to work hard. So, I believe that we are actually creating a conflict of interest here.

Group two was presenting about academic issues, and they were arguing that the amount of time we have in Japanese is too small and we can't even take university classes then. And then another group comes and they are telling us that they should translate everything for us or they should translate most things for us. Why don't they argue that they should make students do hiragana so that we can practice our Japanese? Alright. So, I believe that we are creating those problems by ourselves and they are trying to solve the problem, and that is becoming something like, we are in a paradox. So, that's what I can say about it, that we do not know who we are, and we have to start out fresh. When we are coming to someone else's country, we should be ready for everything. Thank you.

Bahari:

Thank you very much. That's a very, very good opinion. The point is that, as a student, there should be this balance because we are in Japan as international students and with this G30 international course where the Japanese are also trying to be internationalized, we should find a balance where we should be aware of our own endeavor, of our own initiative to try to adapt to the Japanese society, and as well, there needs to be more improvement for the university to accommodate the needs of international people. So, this balance is actually a very, very good point.

I would like to mention that questions in Japanese are also welcome, since we have an interpreter. So, for those of you who'd like to ask questions but thought that they're limited by the Japanese language, it's not a problem. So, before we go on to the reactions that you want to give, let's welcome one question from the general audience first, if there is any. Is there any questions or remarks the general audience would like to give? Okay. Sorry, there's one over there. Let's try to keep this communication between the students and the general audience, okay? Thank you very much.

Floor 11:

I'm a first-grade student in Kyoto University's Global 30 program. I think that not many students are enrolled in Global 30 programs in any university. It is like, unavoidable problem, because... I think usually those who would come to this course, because it's given in English in Japan, so they're basically really interested in Japan, but they don't speak good Japanese or they're just really interested in this course. So, there's only limited number of people. Usually, we don't have abundant resources, but we want to keep the quality of these courses. How do you think about this? And how can we solve this problem? Another question is that some people are just interested in this course, but rather than Japan itself—well, actually I am a foreign student, but my interest in Japan is like culture or history, but there are some students who just aim for the course content, rather than Japan. So, is that so essential for them to learn Japanese culture or Japanese language?

Bahari:

Okay. Thank you very much. Basically the question is that with limited resources and with the application of students who find that this is an international program, and how essential is it for them to actually learn the culture and learn Japanese language. Let's try to give the floor to the students. Okay, you can answer the question.

Floor 12:

Hello, I'm a student at Osaka University. And I'm one of the students you're talking about that's interested in Japanese culture and then came here. So, for that part, I would say yes, it's important because, first, this is one of the advantages that I would choose Osaka University because it's in Japan. So, I can learn another culture. And for those students who's not interested in Japanese culture, I think your world is too beautiful for that. Some of them do not even interested in the cultural content. In the school context, they just want to get out of their own university and make a fun time here. You know that's happening, right? So, for those students I still say it is important for them, because we are the guests here. We need to pay respect for this country to accept us. So, at least, for the daily life, you need to know what Japanese people do and how they do them. So that's basically it.

Bahari:

Thank you very much. Okay, so let's have one more comment on that.

Floor 13:

I think it is right to think that there are two types of people who come to Japan and just want to finish the class. And the other type is who come to Japan and also want to learn the culture. We have a lot of international students. But the thing is, how can we make them interact? How can we make them interested in the internationalization? And I think in my case, in my opinion, I think the solution would be the student group, like, not only from the university side, but from the student side. We also need to have some bridge between Japanese and foreign, to organize some events that promote interaction. For example, I belong to the Tohoku University Foreign Student Association, TUFSA. Back then, last forty years, we're aiming for only to help making life for foreigners better. But right now, we change our direction. So, we're not only doing that. We also try to make the internationalization happen, and this is what we are doing, and I think that maybe answers your question a little bit. Thank you very much.

Bahari:

Thank you very much. The comment that we can receive is that it might be—it's not that the students are not interested, but rather the students are not getting enough information and enough opportunities for such events. So, that's why some of our presenters have made the case that information is a very crucial piece of connection to bridge these people and to actually grow the interest. Okay, probably we have time for one more question, and one more answer. Let's try to give the audience priority to ask the question. Okay, please give it to this man in the middle.

Floor 14:

Thank you very much. I'm from—actually, enrolled in distance education right now in a university in the United States. And I was curious, to anyone in the room, have we got any proposals out there right now to make use of the internet more for internationalization? I think there's a—I really admire you guys having the opportunity to do face to face, because I think that's ideal. But since we have this new tool, it's a unique opportunity in history to connect with more people. Have there been any thoughts on utilizing the internet or are there opportunities there? Thank you.

Bahari:

Thank you very much. Would anyone like to answer?

Floor 15:

I just want to address about the internet. Actually in Tsukuba, especially for G30 program, we do have interviews through Skype. For some of us, the first interview was done on Skype. Others came here directly and then took the exam in Tsukuba. But yes, we use those tools a lot. We have some student groups, including G30 groups, like using Facebook, which is more popular. So, we are trying every tool we can to promote our education, especially in Tsukuba. This is experience from my university. Thank you.

Bahari:

Thank you very much. So, we have time for one more question and one more answer. Okay, to keep the

communication flowing, we'll accept one question from the audience and one answer from the students. I see some hands. Please give him the mic to ask the question.

Floor 16:

Actually, my comment—I just wanted to follow up on his question on the internet real quickly. At Keio, we have had a program called the SOI, School On Internet. And SOI-Asia for more than a decade, where we've been using the internet and broadcast satellite also to several dozen universities throughout Asia, from Mongolia, to Indonesia, to Nepal. So, there's a fair amount of outgoing stuff. Incoming stuff, former President of Keio has been the President of the Open Courseware Foundation. But there's still, I would say, Japan was a very early mover in distance education. I would say it's growing and evolving much more rapidly outside of Japan right now than it is inside. So, it could be a very long conversation, but come find me if anybody's interested in talking about it.

Bahari:

Please answer the question and state your opinion. Yes, you please. Please use the mic so interpreters can interpret.

Floor 17:

I am a student at Tsukuba University. Why are we here, huh? Information is power. And everybody knows that. You can see a little bit of charts here, and major universities' reports, and especially in the section A, Japan, during the last ten years, increased their support for international students and their local students studying abroad more than ten times. This is a great amount of money. And we, as international students, appreciate them for that.

But, first of all, I would like to ask you why they're doing that. This is the power, right? This is another way of power, another wave of influence, from one way. Another way of help from another way. Not good, not bad. This is reality. This is the voice of the student, and why am I saying that? We are focusing on the power, right? Technical information, knowledge, chemistry, everything is power. So, Japan has a power in technology, a really, really strong one. Japan is going to other countries and proposing their ideas, they have scientists, and scientists are doing a lot for other countries. And this is the power, right? But I'm asking the question to the person who's in charge for that, to the government, to the professors. What is stronger, to bind something from all the people, or creating something? Creating something is stronger.

And I'm asking you the question, what is creating the information? What is the base of the information? This is ideas. And this is the system of values. So, my question to you is, why in the G30 program, there are no philosophy and ideology programs. I'm writing a second book—it's not published—about philosophy, ideology, geopolitics, and linguistics. I'm German who grew up in Russia, studying in Japan. If you can see the charts, Russia is not really perspective for the influence of Japan. We can see nine programs in Russia, and 30 programs in China, for example. And I don't know, 100 programs in Asia, and I don't know, maybe 20 programs in Europe. Russia is not perspective. Philosophy is not perspective. That's why I need to work for the five part-time jobs to writing my thesis, to pay my education, because I cannot have a scholarship, in spite of I have 90% of aids. I have no need—sorry, I have 10% of need.

Bahari:

So, could you please state your opinion?

Floor 17:

So, philosophy and ideology. Why it is crucial for me, and why it is crucial for you. Because when you're creating the ideas, you need to know, what is this idea that's created by this, created by the mind? So, we need to kind of set the mind for creating ideas. So, it's really easy, because right now, every one of us is human resources. We are making a business person, this business person is going there—this is kind of a machine, right? So, we need to set our mind to create a new technology, to create a new thing, symmetry, etc. And based on this, this is the ideology. If Japan is focusing on power, why is Japan not creating its own ideology and philosophy? So...

Bahari:

I'm sorry, could you please—excuse me, could you—please state your point in one final sentence.

Floor 17:

One final sentence. Create support for philosophy and ideology program, or something like that. Thank you very much.

Bahari:

Okay, thank you very much. That was a very interesting point. And it actually shows that there is interest in programs in Japan. So, there's actually a very, very good opinion to open up more diverse subjects, to be open this new course. I was informed that we still have a little bit more time. So, since I see that there's a lot of people enthusiastic to ask and to answer, so—so please, let's have one more set of questions and answers from the audience and the students. Okay? Do we have any questions? Okay. From this lady over here.

Floor 18:

I teach at the Faculty of Agriculture, Kyushu University. As a faculty member of higher education, I have to admit that many points that you have raised are correct. But actually, when I was out of my country, I kind of found out that the things of Japan which are different from global standard sometimes look nice. Like, I like spring admission. We do a ceremony full of cherry blossoms. And I kind of like the *sempai-kouhai* system in the laboratory. I'm in the life science field. And then when I joined the laboratory, I had a *sempai* who always showed me how to do experiments. When I was working in the states, my boss just gave me one protocol and I have to do it all by myself. So, it would be kind of nice and encouraging for me that if you found out that nice things about Japanese universities that are original, that are not universal, but that's part of our culture and our system. Thank you.

Bahari:

Thank you very much for the comment. So, we'll have one final comment from the students. Okay. Let's have you.

Floor 19:

I almost forget what I wanted to say at the end. I'm from Ritsumeikan University. I just wanted to make a quick comment that nobody talked about really. I think international students are thrown into the same category of "foreigner." But we're so different from each other, and we have like, from a huge diversity, you can see from the tables like, how many people are from different countries, different continent, different background, social,

working place? And I think that we tend to forget that aspect of our life.

And by trying to do internationalization, we're trying to, but everybody as a foreigner, which we're not. And I think that all universities are all facing this issue. As in my university, some of the students are from China or Korea, and they want to stay in Japan. So, they want to try to study Japanese, and then they try to do job hunting. Well, people from America are more interested about learning international relations, and they're not going to do the job hunting. So, the fourth year is not going to be useful for them. So, we have this issue of individualism within the internationalization. And I think we should really take care of who we are and what our prospects and aspirations for each of us are.

And I think that we should stop trying to put everybody as a foreigner, and really trying to find a solution for each of us. And I'm quite sad to see also here that not many foreign students come to talk about this issue. That shows that some of the students are not really trying to take action. So, we also have to talk to them and try to raise awareness about all the changes and the possibilities that it can have. So, that was the point I wanted to make and I'm glad I made it. Thank you.

Bahari:

Thank you very much. Please give a round of applause. I can see that there's still a lot of hands that want to express themselves, but sadly our time is up. And with that, session D is finally over. I can conclude from our questions and answers that we as foreign students, and me speaking personally, if we are not aware of the challenges that we are going to face, we are never going to be here in Japan in the first place.

So, I can say that for all of my friends, speaking personally, we are ready and we are ready to learn everything, and all the challenges that we face when we decided that we would go to Japan. So, there must be this bidirectional understanding between students, for foreign students to be aware to take the initiative, to push yourself to learn about Japan. Because the decision and the risk are in your own hands. At the same time, since Japan itself has had this vision of internationalization, Japanese universities are also trying, and we can see that they are trying very hard to actually make their programs much more comfortable and much more adaptable for foreign students.

So with that, I would like to conclude—I would like to close this session. Thank you very much, and I hope that this discussion that we had can be a stepping stone for us to further expand this kind of symposium, since I guess all of you can say it's very, very effective and helpful. So, thank you very much for being a great audience.

【日本語訳】

【General Discussion】

○ **Bahari**　では、全体討論のセッションに入って、議論を進めたいと思います。まずは一般の聴講者の方、どのグループのことでも結構ですので、ご質問があればどうぞ。このセッションでは、学生にも発言したり、質問に回答したり、自分の考えを発表する機会が与えられます。では、全体討論を始めましょう。聴講者からご質問はありますか。あちらの方にマイクをお願いします。

○ **Floor 8**　学生の皆さんに質問です。学生団体についてですが、私が学生のときは、学生組合がありました。また学生組合のバーがあり、学生代表の選挙があり、学生の代表が教員との調整を行っていました。学生の代表という点では、グローバル30の参加大学ではどのようになっているのでしょうか。また、学生の声を大学事務局や他の教員達に反映させる最善の方法は何だと考えますか。

○ **Bahari**　では、学生のどなたか回答していただけますか。まずは最初に名前と所属大学をお願いします。

○ **Okafor**　九州大学の Ekenechukwu Okafor です。ご質問ありがとうございます。学生組織については、実際、国際化を始めるにあたって、学生がとても重要な役割を担っていると認識しています。その役割を果たすために、学生団体を結成する必要があります。例えば九州大学では、留学生組織がありますが、これは学生が自ら結成した組織です。この組織は留学生向けの活動を主催します。私たちの提供する活動のすべてに、日本人学生が参加して、留学生と交流することを奨励しているので、日本人学生も対象にしています。

　そして SCIKyu と呼ばれる組織的委員会があります。九州大学国際化学生委員会は、昨日のワークショップの主催者でした。この学生団体は、委員会には委員として４人の教授もいますが、日本人学生と留学生の合計19人の学生で構成されています。この委員会は九州大学の国際化に貢献する任務を負っています。他の大学の中には、大阪大学など、OUISA と呼ばれる留学生組織と日本人学生の組織がある大学も存在することは知っています。この二つの学生組織は留学生と日本人学生のための活動を協力して行っているそうです。同志社大学では、学生スタッフがいて、大学職員が学生のための活動、留学生と日本人学生のための活動を計画する手伝いをしているということです。

　現実に学生団体は、G30大学の一部で結成されています。また、私たちは、このような学生団体のない他の大学には、こうした団体を結成することを働きかけるようにしています。学生団体はとても重要な存在です。

○ **Bahari**　どうもありがとうございました。では、二つ目の質問に行きましょう。お願いします。

○ **Floor 9**　九州大学の者です。皆さんにお聞きしたいと思います。今の学生、日本人学生は、これまでよりも留学生を強く意識していて、地球市民（グローバル・シチズン）という概念を学ぼうとしていると思います。どのような人として意識されたいと思いますか。つまり、自分のアイデンティティについてどう考えますか。例えば、他の国に行って、とても確実なものだと考えていたことに変化が起きます。つまり、あなたの考え方にも変化が起こるとします。そのとき心を開きますか。またその後帰国すると、それまでになじんでいた文化がよく知らないようなもののような気がして、それと同時にあなたの今の文化もよく知らないようなものに感じられます。そうした場合に、どのような人として意識されたいと思いますか。あなた自身のアイデンティティは何だと考えますか。

○ **Bahari**　では、その質問に対して回答してもらいましょう。

○ **Floor 10**　筑波大学の留学生です。私もそれには共感できます。ただ、他の国から日本にやってくる場合、留学生の大多数にとって問題なのは、二つの心理的な問題に悩まされるからではないでしょうか。一つは優越感で、もう一つは劣等感です。もちろん私は精神科医ではありませんが、この二つは日本にやって来る誰

もが直面する基本的な問題ではないでしょうか。誰かに厳しくしていると言う訳でも、軽視する訳でもありません。日本にやって来るときに、日本人や日本の文化は劣っているだとか、簡単なものだと考えている人がいます。それで実際に日本に来て、日本の文化が自国の文化よりも優れているのに驚いたりするのです。誰しも少しは自国の文化が中心だと考える傾向がありますが、客観的になる必要があると思います。客観性というのが唯一の答えではないしょうか。

日本にやって来て、私は子供のように心を開きました。何もわかっていなかったので、全てを学びました。そういうメンタリティを持てば、何の問題もないと思います。一方、日本にやって来て、日本の何もかもが悪いと考えるのならば、見るものすべてを比較するようになります。米国はこうだ、英国はこうだ。日本では何でこうなんだ。ガーナではこうだ、ナイジェリアではこうだ、でも日本では何でこうなんだ、という具合です。留学生として私たちが直面している問題は、こういうものです。名前を忘れてしまったのですが、私は東京大学の学生さんの発言に賛成です。彼女が言ったことは正しいです。私たちは日本で甘やかされたいのです。自室にこもって、講義の本をもってきてもらいたい。自室にいながらにして、試験を受けたい。自室にいながらにして、何もかもやってほしいと思っているのです。一方、自国では、そんなふうには行きません。自分たちで力を尽くさなければなりません。実際には、日本では、私たちには利益相反が生じているのだと思います。

第二グループは、Academics の問題について発表しました。日本語の授業の時間数が少なすぎて、大学の授業を受けることもできないという主張がされました。次のグループは、全部又は大多数の情報を留学生のために翻訳すべきだということを述べていました。なぜ学生に平仮名を習うようにさせて、日本語の練習ができるようにすればよいのではないかと提案しないのでしょうか。まとめると、私たちは自分で問題を生じさせているのであって、大学側に問題を解決させようとしていて、何かパラドックスに陥っているようになっています。私たちは自分たちが何者かわかっていないので、仕切り直しをしなければならないということです。他の国にやって来るのなら、何もかも受け入れる準備ができていなければなりません。

○ **Bahari**　どうもありがとうございました。大変良い意見でした。その趣旨は、学生としては、私たちは留学生として日本にいるのであって、国際化に向けて日本人も努力する G30国際コースに在籍しているので、自分で努力するよう意識し、日本の社会に自発的に適合しようとバランスを取る。一方で、大学側も留学生のニーズに対応するようもっと改善する必要があるということでした。このバランスというのは、実際に、とても良い点をついています。

通訳がいますので、日本語で質問していただいても結構です。質問したいけれども、日本語という制約があるのでできないと考えている人も、問題はありません。では反応があるまで、一般聴講者からの質問があれば、そちらの質問をまず一つ受け付けましょう。一般聴講者からご質問やご意見はありますか。では、そちらの方お願いします。ここでは、学生と一般聴講者の間のやり取りに限定することにしましょうか。

○ **Floor 11**　京都大学グローバル30プログラムの１年の学生です。グローバル30プログラムでは、私の知る限り、実際にはいくつかの大学には、それほどたくさんの留学生がいる訳ではないと思います。これは避けることのできない問題です。というのは、このコースに在籍する人達というのは、日本で授業が英語で行われるので在籍しているのであって、基本的には日本に本当に興味があるものの、あまり日本語がうまく話せない人か、このコース自体に関心がある人だと思います。人数が少ないです。一般に十分な資源がないのですがコースの質を維持したいのです。このような状況をどう思われますか。この問題はどのように解決できるでしょうか。二つ目に、日本にというよりも、このコース自体に興味を持っている人達。私は留学生ですが日本の文化や歴史に興味をもっていますが、日本ではなくて、このコースの内容だけを目的にしている学生も中にはいます。彼らにとっては、日本の文化や日本語を学ぶことはそこまで重要なことでしょうか。

○ **Bahari**　ありがとうございました。基本的に、今の質問は、限られた資源の中、これを国際プログラムだと考えている学生が応募している場合に、日本の文化や日本語を学ぶことは彼らにとってどの程度重要なのだろうかということですね。誰か回答をお願いできますか。まずは、学生に答えてもらうようにしましょう。

では回答お願いします。

○ **Floor 12**　こんにちは、私は大阪大学の留学生で、お話にあった日本の文化に興味があって、来日した学生の一人です。それについては、重要なことだと言わせていただきます。なぜなら、私が大阪大学を選択するメリットの一つは、日本にあるからです。別の文化を学ぶことができます。日本文化に興味がない学生については、あなた方の世界は日本文化に関心を持つには素晴らしすぎるのだろうと思います。文化の内容にすら興味がない人もいます。教育との関係では、彼らは自国の大学から逃げ出して、日本で楽しみたいだけなのです。そういうことがあるのはご存知ですね。そういう学生についても、やはり彼らにとっても重要だと言えます。日本では私たちはゲストなのですから。私たちを受け入れてくれる日本に敬意を払う必要があります。そのため少なくとも、日常生活で、日本人がしている事やそのやり方を知っておく必要があります。それが基本です。

○ **Bahari**　ありがとうございました。では、もう一人留学生に意見を述べていただきましょう。

○ **Floor 13**　確かに２種類の人がいます。日本に来て、ただ単位を取得したいだけの人と、日本に来て日本の文化も学びたい人です。ただ、主な解決方法としては、彼女が述べたように、資源についての問題はありません。留学生はたくさんいます。ただ問題は、彼らを交流させるにはどうしたらよいでしょうか。彼らが国際化に関心を持つようにするにはどうしたらよいでしょうか。私の意見を申し上げれば、大学側からだけではなく、学生側から作る学生団体も解決となるのではないかと思います。また日本人学生と留学生の架け橋や交流を促すイベントの計画なども必要となります。例えば、私は東北大学留学生協会（TUFSA）の会員です。この40年間、TUFSA は、外国人留学生がより良い生活ができるようにすることだけを目指していましたが、現在では方向転換をしています。今では、それだけをするのではなく、国際化を実現させようと尽力しています。これで少しは回答にお答えできたことと思います。

○ **Bahari**　ありがとうございました。これに対して出されるコメントとしては、学生に興味がないのではなく、そうしたイベントについて十分な情報や機会を得ていないだけだというものが考えられます。この理由から、プレゼンテーションで情報について発表してもらいました。情報は、こうした人々を橋渡しするつながりの重要な要素を構成し、実際に興味を育てていきます。では、もう一人ずつ質問と回答を受け付けましょうか。聴講者に優先的に質問をしてもらいましょう。その真ん中の男性にマイクをお願いします。

○ **Floor 14**　どうも。私は現在米国の大学の通信教育を受講しています。気になったので会場内の皆さんに質問ですが、国際化のためにもっとインターネットを活用するという提案はありましたでしょうか。皆さんが直接顔をつきあわせて学ぶ機会をもっているのは、本当に感心します。それが理想的な方法だと思います。ただ、今ではこの新しいツールがありますので、歴史の中でももっと多くの人と繋がることのできるまたとないチャンスです。インターネットを活用するという考えやそのような機会はありますか。

○ **Bahari**　どうもありがとうございました。どなたか回答してくださいますか。どうぞ。

○ **Floor 15**　ちょうどインターネットについて取り上げようと思っていました。筑波大学の特に G30プログラムでは、スカイプを通じた面接が行われています。留学生の中には、最初の面接がスカイプで行われた人もいました。直接日本にやって来て、筑波で試験を受けた人もいました。この通り、こうしたツールは多用されています。G30グループもですが、Facebook を利用している学生団体もありますし、ますます一般的になっています。特に筑波大学では、教育を推進できるあらゆるツールを試しています。私の所属する筑波大学の経験をお話させていただきました。

○ **Bahari**　どうもありがとうございました。まだあと質問と回答を一つずつ受け付ける時間があるようです。コミュニケーションが妨げられないように、聴講者から質問を一つと、学生からの回答を一つ受け付けましょう。何人か手を挙げていますが、彼にマイクを渡してください。質問をどうぞ。

○ **Floor 16**　先ほどのインターネットの質問に関連して手短に質問したいと思います。慶応義塾大学の教員です。慶応義塾大学では、SOI（スクール・オン・インターネット）と呼ばれるプログラムがありました。そして SOI アジアは10年以上に渡って続いていますが、インターネットを利用して、モンゴルからインドネシ

アやネパールまで、アジア全域にある数十の大学に衛生放送を行ってきました。スタッフの交替はかなりありますが、慶応義塾大学の前塾長は日本オープンコースウェアコンソーシアムの機構長でした。日本は遠隔教育にとても早くから動き出していたと言えるでしょう。今では、国内よりも国外での方が急成長を遂げ、急速に進化していると言えるでしょう。とても長い話になるとは思いますが、このことについて興味がある人は、私の所へ来てお話しましょう。

○ **Bahari**　では、質問に答えて、意見を述べてください。そちらの方よろしくお願いします。通訳者が通訳できるようにマイクを使用してください。

○ **Floor 16**　本当に手短にだけ・・・ここに座っている間、拝聴していました。このセクションで見たことについて、他のセクションにも伝えたいと思います。最初に、私は筑波大学の留学生です。私たちは何故ここにいるのでしょうか。情報は力なりです。それは誰もが知っていることです。ここには、少しばかりのチャートと、主要大学の報告と、特にセクション A では、日本がこの10年間に留学生と優秀な日本人留学生への支援を10倍以上に増やしたことが見て取れます。これは大金です。留学生として、私たちはそのことに感謝しています。

　では最初に、日本の大学がそのようなことをしている理由は何でしょうか。これは力（パワー）ですよね。これはパワーを示す別の方法で、一方から影響力を行使する別の方法です。一方からの援助の別の方法です。良くも悪くもなく、これが現実です。これが学生の声です。何故このようなことを言うのだと思いますか。私たちは、パワーに焦点を当てていますね。技術情報、知識、化学、すべてがパワーです。日本は、技術という点で本当に、本当に強いパワーを持っています。日本が他国へ行って、日本のアイデアを提案します。また科学者がいて、科学者が他の国のために多くのことを成し遂げます。これはパワーですよね。そこで、その責任者である、政府や教授に質問するのですが、全ての人から何かを集めてまとめあげるのと、何かを創造するのでは、どちらが強いのでしょうか。何かを創造する方が強いです。

　では、情報を創造するとは何でしょうか。情報の基本は何でしょうか。それはアイデアです。そして、価値体系です。そこで私の質問は、G30プログラムには、なぜ哲学や思想（イデオロギー）に関するプログラムがないのでしょうかというものです。私は２冊目の書籍を書いており、それは未発表ですが、哲学、思想、地政学、言語学についてのものです。私はロシアで育ちました。ロシアで育ったドイツ人で、日本で学んでいます。チャートを見ていただけばわかりますが、ロシアは日本の影響力の視野には入っていません。ロシアでは９つのプログラムがあり、一方、中国では30のプログラムがあるのがわかります。アジアでは100のプログラムでしょうか。そしてヨーロッパではおそらく20といったところでしょうか。ロシアは視野に入っていません。哲学は視野に入っていないのです。そのため、私は論文を書くため、授業料を支払うために、５つのアルバイトをして働かなければなりません。資金の90%はあるので、奨学金がもらえませんから。奨学金は不要、失礼、10%を必要としているにもかかわらずで。

○ **Bahari**　意見をお願いします。

○ **Floor 17**　哲学と思想です。私にとって、またあなたにとってもこれが重要であるのは何故でしょうか。それは、アイデアを創造するときに、このアイデアを生み出しているものが何なのか、思考によって生み出されたものなのかを知る必要があるからです。アイデアを生み出すような思考を持っている必要があります。これは非常に簡単なことです。私たちは、今や人的資源なのですから。今では、私たちの誰もが人的資源です。私たちはビジネスマンになり、このビジネスマンがそこに行くのです。これは機械のようではありませんか。そこで、私たちは新技術の創造、新しいことや等価のものなどの創造に全力を傾けなければなりません。その基本となるのが、思想なのです。日本がパワーに焦点を当てているのならば、日本はなぜ他の思想や哲学を生み出さないのでしょうか。

○ **Bahari**　申し訳ないのですが、最後に一文で要点をまとめてくださいますか。

○ **Floor 17**　最後の一文。哲学や思想のプログラムを支援していただきたい。というようなことです。ご清聴ありがとうございました。

○ **Bahari**　はい、ありがとうございました。とても興味深い視点でした。また実際に日本のプログラムに関心があることを示す発言でした。もっとさまざまな科目の講座を開講する、新しい講座を開講するというとても素晴らしい意見です。もう少し時間があるということです。沢山の方が熱心に質疑応答に参加しようとしていますので、あと一組、聴講者と学生からの質問と回答を受けましょう。よろしいでしょうか。ご質問はありますか。では、こちらの女性お願いします。

○ **Floor 18**　こんにちは。九州大学農学部で教鞭をとっている者です。高等教育の教員の一員として、あなたたちが提案した多くの点はその通りだと認めなければなりませんが、国外にいたとき、実は私はグローバルスタンダードとは異なる日本のものを良いと思いました。私は春期入学が好きです。桜が満開の中で入学式をする。また研究室の先輩・後輩のシステムも気に入っています。私の研究分野は生命科学の分野です。私が研究室に入ったとき、実験のやり方をいつも教えてくれた先輩がいました。米国で働いていたときは、上司は私にプロトコルを渡しただけで、何もかも自力でしなければなりませんでした。皆さんが、普遍的なものではなく、日本の大学に日本の文化や制度の一部となっている独自なものを見つけて下さると良いと思いますし、そうするようお勧めします。

○ **Bahari**　コメントありがとうございました。では最後のコメントは学生からもらいましょう。お願いします。

○ **Floor 19**　最後に何を言いたかったのか忘れるところでした。立命館大学から来ました。まったく誰も触れていないことについて、短くコメントしたいと思います。ご存知のように、「外国人」という言葉を使うことで、私たちは全員が同じグループに入れられるよう訓練されていると思います。それは日本人に対して、外国人留学生と言ってもよいですが、外国人がいるからです。ただ、外国人と言っても非常に異なっている訳で、多様性に富んでいるのです。テーブルを見てもらっても、異なる国や異なる大陸出身の人がどれほどいるのか、異なるバックグランド、社会、仕事場の人がどれほどいるのかなどが分かりますね。私たちは人生のそのような側面を忘れていると思います。

国際化を実現しようとすることによって、私たちは、実際にはそうではないのに全員が外国人として国際化に尽力します。そして、どの大学もこの問題に直面しているのだと思います。私の所属する大学のように、学生の中には中国や韓国から来た学生がいますが、彼らは日本に留まりたいと思っています。そのために日本語を学び、就職活動をしようとします。アメリカ出身の学生はそれよりも国際関係学を学ぶことに興味を持っていて、就職活動をするつもりはありません。そのため４年目は彼らにとっては無用のものです。国際化の中には、このように個人主義の問題があります。自分たちが誰であるのか、将来のビジョンは何なのか、望むことは何なのかを、私たち一人一人について配慮する必要があると思います。

また、全員を外国人と一括りにしようとするのを止め、私たち一人一人についての解決方法を見つけ出すようにするべきだと思います。この会場に自分たちの問題について話し合うために来ている外国人があまり多くないことは、非常に残念です。そうした学生とも話して、行いうる変革や可能性について認識を高めさせるよう尽力する必要があります。指摘したかったのはこのことです。発言できて良かったです。

○ **Bahari**　ありがとうございました。盛大な拍手をお願いします。自分の意見を発表したい人はまだまだたくさんいるのですが、残念ながら時間が来てしまいました。これをもちまして、セッションＤは終わりです。これまでの質疑応答をまとめると、留学生として、また私個人のこととして、これから直面することになるチャレンジを承知していなかったのならば、何より日本に来ることはなかったでしょう。

個人的な話ですが、私の友人は皆、あらゆることを学ぶ心づもりがありますし、日本に行こうと決めたときに、あらゆる難題に直面する心づもりもできていると言うことができます。学生間の双方向の理解がなければなりません。留学生はイニシアティブを取ることを意識し、日本について学ぶよう自分を駆り立てなければなりません。なぜなら、決定権とリスクは自分の手の中にあるのです。またこれと並んで、日本自身がこの国際化という視点を持っているので、日本の大学も提供するプログラムが留学生にとってもっと快適で、もっと融通の利くものとなるよう尽力しています。また私たちは、大学がそれを実現するため一生懸命に取り組もうとしているのを知っています。

それでは以上をもちまして、このセッションを閉じさせていただきたいと思います。本当にありがとうございました。私たちの行った議論がこうしたシンポジウムをさらに広げていく足がかりとなることを願っています。非常に効果的で有益な議論ができたと思います。ご清聴いただきありがとうございました。本日は皆さんをお迎えできて大変光栄でした。本当にありがとうございました。

［以上］

5．全体会合

（1）課題別セッション報告、ディスカッション

司会
明治大学副学長　勝　悦子
パネリスト：
二宮　皓（比治山大学短期大学部学長）
ジェレミー・ブレーデン（オーストラリア　モナシュ大学）
大西好宣（大阪大学　インターナショナルカレッジ副カレッジ長・教授）
廣瀬武志（九州大学　教育国際化推進室　特任准教授）
堀江未来（立命館大学　国際部副部長・国際教育推進機構准教授）
Ekenechukwu Okafor, Kyushu University

○勝　ただいまご紹介いただきました明治大学副学長の勝と申します。

本日は、G30総括シンポジウム全体会合パネルディスカッションの司会を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

本日の全体会合のパネルディスカッションは３つに分けて進めさせていただきたいと思います。

まず１番目に、先ほど終わりました課題別セッションＡ～Ｄのそれぞれのファシリテーターから、その内容を５分程度でご報告をいただきたいと思います。

２番目に、その報告につきまして、基調講演者お二人の方々からコメントを５分程度、それぞれ頂戴したいと思います。

その後に、３番目といたしまして、フロアを交えた形で自由討論を行いたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、改めまして、本日のパネリストをご紹介したいと思います。

皆様から向かって右側からですが、比治山大学学長様の二宮皓先生です。（拍手）

次が、モナシュ大学のジェレミー・ブレーデン先生です。（拍手）

大阪大学の大西好宣先生です。（拍手）

九州大学の廣瀬武志先生です。（拍手）

立命館大学、堀江未来先生です。（拍手）

そして、留学生代表として、九州大学のエケネチュク・オカフォーさんです。（拍手）

それでは、早速、課題別セッションの報告に移りたいと思います。

まず、セッションＡの大阪大学大西先生からお願いいたします。

○大西　皆さん、こんにちは。大阪大学の大西と申します。

先ほどの１時間40分にわたる議論を５分でまとめろというのはなかなか酷な話ですけれども、セッションＡでは、「海外展開で得たもの：広報活動・海外拠点」ということについて話をさせていただきました。

まず、まとめに入る前に、海外大学共同利用事務所についてご説明させていただきたいと思います。

海外大学共同利用事務所というのは、このグローバル30で始まった新しい試みです。現在、７カ国・８都市に日本留学の窓口となるこの共同利用事務所を設置して、日本の大学全体の情報提供並びに日本留学説明

会の開催や入学審査など、現地での活動を支援するサービスを提供しているということでございます。詳しくは、皆さんがお持ちのパンフレットの裏表紙をごらんいただけると、各大学とその地域がわかると思いますので、ご参考になさってください。

では、先ほどの議論のまとめです。

まず、筑波大学の北脇所長からは、チュニジアで筑波大学さんが展開されているさまざまな活動の紹介がありました。詳しい内容はプレゼンテーションの資料をごらんいただくのが一番いいと思いますので、内容は割愛させていただきます。

東京大学の吉野所長からは、インドでのいろいろな活動の報告がありました。

次に、九州大学の緒方先生から、九州大学が展開されているいろいろな活動のご報告があって、高校訪問の苦労談などが共有されました。

それから、海外の事業展開で注意すべき点ということで、こういうことに気をつければいいんじゃないかということもご紹介いただきました。これもプレゼンテーションのスライドの最後のほうに載っていると思いますので、ごらんいただければと思います。

最後に、明治大学の安藤さんから、明治大学がタイのアセアンセンターで展開されている、これも広報の活動の説明がございました。

その後、各テーマに関するディスカッションに移りまして、セッション A では、次の５つのことについて話し合いを持ちました。

１番目は、海外事務所自体のマネジメントをどうしているかという話です。

２番目は、海外の教育機関、G30の場合には、主に高校が新しく加わってきたのでこちらになると思いますが、海外の教育機関へのアウトリーチをどうしているか。

３番目は、海外の留学フェアについてです。

４番目は、海外展開あるいは広報のための人材育成をどうしているのかについて。

５番目は、入試に関する諸問題を話し合いました。入試に関してはほかのセッションでも扱われているのですけれども、広報と入試は何分、不可分でございますので、このセッションでも取り扱いをさせていただきました。

そこでいろいろ議論が出たんですけれども、海外事務所のマネジメントとしては、共同事務所という観点から、共同事業としてどういうことをやっているかというような説明がありました。なかなか私たちには見えにくいんですけれども、東大の事務所であっても、京都大学、筑波大学の事務所であっても、採択大学13大学のパンフレットを配ったりということで、いろいろな活動をされているということでした。

最後に、「国際化で大学が変わったか」という質問を各大学に投げましたところ、次のようなご回答でした。

まず、明治大学さんは、待ちから攻めの姿勢に変わったというご発表がありました。いい経験になったと。それから、線から面への展開の足がかりができたのではないかという感想を述べられました。

それから、九州大学さんは、大学が持っている世界観自体が非常に変わったのではないかという感想を述べられました。具体的には、例えば、副学長クラス会合、あるいはその下の事務職員レベルも、この G30で会合を持つようになったわけですけれども、そこでお互いに知り合いができて、ネットワークがつながったというお話がありました。それから、学生も含めて、今は横に広がろうとしていると。今日はセッション D が学生さんのセッションであったかと思いますが、こういう形で、学生さんも横のつながりができつつあるというようなお話がございました。

東京大学さんは、インドからの留学生が目に見えて増えたということで、クラスに活気が出てきたという報告が、ある教員からあったというお話がありました。それから、日本人学生がインドに留学をすることによって非常に成長していくさまをまざまざと見たということがありました。それから、東京大学の職員さんも英語でコミュニケーションしなければいけないということで、変わったのではないかというようなご発表

がありました。

最後に、筑波大学さんはこういうことをおっしゃいました。一つは、一部の人がやっていた今までの国際化というものが、G30を５年やることによって、非常に多くの人が参加して、変わったのではないかと。最後に非常に大きな問題提起があったかと思うんですが、日本人学生がG30のクラスに参加することによって授業のレベルが下がったのではないかという声が出ているということ。授業の開放が進むに連れて、そういった留学生からの声が上がるようになってきたという、ちょっと聞き捨てならないというか、大事な問題提起がございました。

以上です。

○勝　大西先生、大変ありがとうございました。

それでは、次の課題別セッションBの廣瀬先生、よろしくお願いいたします。

○廣瀬　ありがとうございます。

私が司会をさせていただいた課題別セッションBでは、「英語による教育：アドミッション・カリキュラム・教授法」を扱いました。このセッションでは、英語による教育について、５大学からそれぞれユニークな取組の紹介がありました。

その際に扱われたトピックですが、大きく４つのカテゴリーに分けられると思います。すなわち、（１）カリキュラム、（２）アドミッション、（３）教授法の問題、そして（４）主にG30予算で採用された外国人教員の先生方のインテグレーションあるいはガバナンスです。

カリキュラムの問題は、名古屋大学、立命館大学の発表で重点的に取り上げられました。名古屋大学は、教養課程の共通化を図ることができため、結果として、文系、理系でバランスよく英語のみで学位取得可能な国際コースを立ち上げることができたというお話がありました。また、工・理といった理系の部局（学部）さらには法・経といった文系の部局（学部）が共同で基礎科目をオファーすることができたことから、教員の負担も予想以上に少なくてすみ、国際コースの実施にあたり、より協力的な体制を築くことができたというお話がありました。

立命館大学からは、カリキュラムについてかなり細かいお話がありまして、それこそ、日本語にどの程度の単位数を割くべきか、どのような選択科目をどの程度オファーするのか、アサインメントの量をどのようにコントロールするのか、そういったお話がございました。

アドミッションに関しては、特に、慶応義塾大学と上智大学の発表で重点的に扱われておりました。中でも、個人的に興味深かったのが、潜在的なアプリカントからどのような書類を提出させるかという問題です。例えば、国際バカロレア（IB）のいわゆるPredicted Scoreですが、これを認める大学が徐々に増えつつありますが、その扱い方は様々なようです。ケース・バイ・ケースの対応をされている大学もあるとのお話でした。

３番目の教授法に関しては、大阪大学からお話がありました。実際、ご発表の際には、それほど時間を割いてお話しいただけなかったのですが、ディスカッションの際にプレゼンターの山本ベバリー・アン先生から、同僚の方と一緒にお作りになったTeaching Quality Handbookという冊子のご紹介をいただきました。私も拝見させていただきましたが、非常にすばらしい内容で、ウェブ上で公開しているかお聞きしたところ、公開はしていないが、今後、書物として出版を考えているとのお話がありました。

４番目のトピックは、G30予算で採用された外国人教員のインテグレーション及びガバナンスです。こちらに関しては、特に立命館大学の発表で扱われました。G30で採用された外国人教員はその多くが任期付きです。そのため、任期終了が近づくに従い、モチベーションが低下したり、転職活動に時間を割かれる等いろいろな問題が起こります。ただ、これは外国人教員に特有の問題ではなく、日本人を含む任期付きの教職員全てに当てはまる問題であり、早急な対応が必要ではないかというお話がありました。本件については、パネルディスカッションでも扱いましたが、渡辺先生から名古屋大学の取組についてお話がありました。研究室等の配置先に十分配慮したり、教育だけでなく、科研の共同プロジェクトの一員として研究業績を積み

上げやすくしたり、またテニュアトラックの導入といった形で対応されているとのことでした。

最後に、今回のメインテーマである「国際化で大学は変わったか」について、お一人ずつお話を伺いました。

名古屋大学の渡辺先生からは、国際化はまだ発展途上であるとのご意見がありました。現状では、授業を英語で提供し、世界で活躍できるような人材を育てたいと願う、いわば「プロ国際化」の教員と、どちらかといえば批判的な教員に二分化されてきたとのお話がありました。

大阪大学の山本先生からは、こういったシンポジウム自体、赤ちゃんがハイハイの時期を卒業したというサインかもしれない。が、自立に向けての歩みはまだ始まったばかりであるとのお話がありました。５年後、またこのような機会で、どこまで成長したのかみてみたいとのご意見がありました。

慶応義塾大学の萩野先生は、全学的に、そもそも変わらないといけないという認識が共有されることになったこと自体が大きな変化である、個人的には「世界の中の大学だ」という意識が芽生えたとおっしゃっていました。

上智大学のユー先生からは、上智大学の国際教養学部には（その前身を含めると）半世紀以上の歴史があり、そもそも非常に国際性に富んだ大学であるわけですが、単一の学部ではなく、全学的に国際化が浸透し始め、多様であることがある意味、当たり前になったというお話がありました。

最後に、立命館大学のライカイ先生からは、G30の国際コースが立ち上がってから国際化が進んでいる部分もたくさんあるが、国際コースが開設されていない学部では国際化の重要性の認識はまだ低いのではないかとのお話がありました。その一方で、９月入学が開始されてから、様々な方面で既存システムの改革が必要になった。例えば、保健センターは、年に２回健康診断を行うようになっただけでなく、英語で対応する必要が出てきた。それらに加え、特にインフラにおいて目に見える変化があった。例えば、キャンパス内の建造物も、学食で提供されている食事も、今では英語で表記されているというお話でした。

以上です。

〇勝　どうもありがとうございました。

それでは、引き続きましてセッションＣの堀江未来先生にお願いいたします。

〇堀江　課題別セッションＣを担当しました立命館大学の堀江です。

セッションＣでは、「国際化に対応した環境のつくり方」ということで、東北大学、京都大学、早稲田大学、同志社大学の事例を発表いただきました。テーマからもおわかりのとおり、非常に多方面にわたるトピックが出ております。宿舎の整備、留学生・日本人学生の共修環境の整備、留学生・外国人教員のサポート、ワンストップサービス、危機管理、FD・SD 等々、いろいろなことが出てまいりました。フロアからも非常にたくさんのご質問をいただきまして活発な議論を行えたため、ここで全て再現することは非常に難しいので、私の視点から３つに分けてお伝えしたいと思っております。

１点目は、国際化に対応した環境のつくり方ということで、いわゆるインフラ整備になりますけれども、これにはグラデーションがあることが見えてまいりました。

一つの極は、ニーズに対応するということでの環境整備です。例えば、寮などの住むところが必要、ビザのサポートが必要である、そういった留学生特有のニーズに対応するという意味での環境整備です。もう一つの極には、それに教育的な意味を持たせて一般学生への波及効果も考慮したような取り組み、そういった仕掛けづくりのようなもの。そういった事例も増えてきているということがわかりました。

例えば、寮のお話でいきますと、寮が整備されていないと、なかなか留学生を呼べないという現状もございます。一方で、混住寮という、日本人学生と留学生が一緒に住むことで、そこでコンフリクトを乗り越えて学び合うという、そういう仕掛けの事例もたくさん増えてきております。

ただ、物理的に一緒にいれば、それで学びが促進するかというと、必ずしもそういうわけでもありません。事例としましては、例えば、レジデントアシスタントのようなリーダーがいて、そこのコンフリクトをちゃんと仲介できるということ。これは、リーダーシップ教育としても非常に有効かと思います。秋田の事例で

教えていただきましたのは、コントラクトをルームメイトと結んで、それをベースに全てのコンフリクトを解決していくという。いろいろな取り組みが今あるところだと思います。

寮の話で、学び合う環境をつくっていくことで、もう一つ重要なご指摘がありました。学び合いというところに地域を入れていくということでした。地域の住民と寮に住んでいる留学生がしっかりとしたコミュニティー感を持てるような取り組みがなされることが、これは東北大学の山口先生からのご指摘だったんですが、危機が発生したときに非常に有効であると。災害などの際に避難所に留学生が行くことを地域の人が認識しているということが非常に重要であろうというご指摘もありました。

ただ、共修を促進する取り組みが、寮だけではなくて教室内であっても、クラブ、サークル等でもそうかと思うんですが、どこの大学も、今は経験を積んでいる段階であって、「こういった教育的な介入があれば有効である」といったことが必ずしもしっかりシェアされている段階ではないと言えると思います。

２点目です。環境を変えていくというときに、意思決定のスピードが非常に重要になってきます。大学内の意思決定のあり方ですとか、スピードを変えていくというのは、非常に大きなテーマであります。

このトピックで議論があったときに、ご紹介があった手法は、とにかく意思決定を待たずに、ゲリラ的に国際部でやれることをやっていくというものでした。一方では、やはり、国際化を全学の目標として、国際化の目標を全学のあらゆる部署で内在化させていくということが非常に重要ではないかということでした。国際化は国際部がやるということではなく、国際化がガバナンスを変えていく、大学を変えていくための大きなきっかけであるという捉え方が非常に重要ではないかというご指摘もありました。

最後に、国際化によって大学が変わったのかというテーマですけれども、まず一つ言えるのは、物理的に留学生がキャンパス内で増えたということ――外国人教員、職員も含めての話だと思うんですが、異なる文化背景を持った方のボリュームが明らかに増えているということが、大学全体に影響力を持ったことは間違いないだろうということです。その海外のいろいろなスタンダードですとか基準にさらされた中で、これが教育改善や環境整備の中で非常に刺激になって、それによって大学が向上していくという仕組みになったということは否定できないだろうというお話がありました。

今後については非常に現実的な話なんですが、このG30のプログラムで来た学生が卒業していきますので、今後はキャリア支援ですとか卒業生のネットワーキングづくり等についても整備が必要であろうというご指摘がありました。

以上です。

〇勝　どうもありがとうございました。

次のセッションD、これは実は、昨日、九州大学の箱崎キャンパスで「G30 Universities Students Workshop」ということで、70名近くのG30の英語コースの学生さんを集めたディスカッションがなされ、さらに今日、またセッションDで議論がなされたということです。本日は、エケネ・オカフォーさん、ナイジェリアからの留学生さんですけれども、パワーポイントを使って説明していただくことになっておりますので、よろしくお願いいたします。

〇エケネ・オカフォー

Thank you very much for the introduction. Today in Session D, students did a discussion on the “Review of Internationalization in My University: Expectations and Realities.” Yesterday students from all G30 universities got together here in Fukuoka, and had a workshop on the same topic. Today I am here to present the views today brought forth yesterday.

The main topic was broken up into the four subtopics, namely, academics, facilities, information, and campus life. We reviewed the internationalization process under these subtopics. From our discussion, we concluded that a lot of changes, a lot of achievements, have been made already in the internationalization process in the G30 universities. But we found out that there is room for more improvement. Because of the time constraints, I will not dwell on these good parts or the favorable achievements that have been identified.

Instead, I would like to go straight to the recommendations from the students.

First, on academics, the group that discussed academics concluded that for the recommendation that they need to provide incentives for foreign students to learn Japanese, because one of the problems we found out, one of the hindrances to internationalization, is language barrier. Almost all the groups found out this need for us to improve Japanese language abilities, and also the Japanese students, and also the lecturers and teachers to improve their language skills. So for academics, we found this need to provide incentives for foreign students to learn Japanese, this need to balance the academic quality of Japanese programs and English programs. It was said that these two programs have different academic qualities.

The Japanese program has high quality, of higher standard than the English program. To remedy this situation, there were suggestions that it needs to provide more courses for the English program, to give students more choices of courses to do so that they don't end up in courses just to fill up or to make up their points.

Again, there is a need to recruit more internationally minded staff because one of the problems we found out is this problem of interaction in classes. We found there is less interaction in classes. Japanese lecturers or professors don't conduct interactive classes. They are very good for foreign students to learn, and also lecturing interactions. So they found this need for these lecturers, from the lecturer side, this need for them to conduct more interactive classes, and this need for them, for the universities, to encourage mixed group class projects. That is by the professors; mixed group of class projects.

And from the side of students, we found out the students need to improve their language skills. As I said, most of the problems we found out about internationalization have to do with language skill of students. The ability of most foreign students to speak the Japanese language, and also the poor English language skills of Japanese students, is causing a problem within these two groups of students interacting with each other. That is about academics. Although there were a lot of other things we discussed but I just wanted to mention these few points because of time.

When it comes to facilities, it was suggested that communal and mixed housing projects be introduced by universities. Communal housing projects would allow students to live together. It makes living expenses fairer to students, and also mixed housing projects would bring foreign students and Japanese students to live together in the same dormitories and share some common areas or common facilities. This will help improve interaction among students.

And cafeteria menus must be improved with a lot of varieties and also be translated. There's a need to provide adequate space for religious activities. We found that there are no prayer areas in some of the universities, and foreign students believe that this is very important for spiritual life. Then improve space of facilities for interaction, something like common areas or music practice rooms. Then we also talked about equal access and availability to sports and facilities in schools.

Then on the side of information, we identified a need to provide bilingual signposts and announcements on campus for in some schools, most of the announcements and signposts are totally in Japanese. So it makes it difficult for foreign students to get to know what they need to know; all this information hidden by the fact that our Japanese language abilities are not very good.

Then bilingual support staff or students in clinics. This is also a suggestion by students. Then club guide or brochure for foreign students. We found that there is this problem for foreign students not being able to participate in club activities in Japanese in universities due to the fact that they don't have much information about these clubs. They don't know how to join these clubs, and when they join them, they don't really understand what's going on in these clubs. So there is this need for us to have something like a brochure or information in English.

We also talked about more career support for foreign students, something like regular seminars with companies and more information about these companies should be provided by the universities in English for foreign students to know.

Then finally, the group that discussed on-campus life suggested that there is need to establish a unified foreign student association. We know that it is basically the responsibility of the students to establish these associations. But we also want to appeal to the administration of universities to help us establish these associations.

My time is up. I will just mention more events to encourage interaction on campus, and encourage participation of foreign students in the clubs, then international students' clubs may be established. Finally, I just want to conclude by saying that a lot of achievements have been made with respect to internationalization. And the pace of these improvements is really, really encouraging. So in order to improve Japanese universities' global competitiveness and make Japan the number one destination for foreign students, we the students are proposing humbly that the internationalization of universities in Japan be given a continued attention. Thank you very much.（拍手）

【日本語訳】

〇エケネ・オカフォー　ご紹介ありがとうございます。本日、セッションＤ「学生が見る国際化」において、学生による議論が行われました。昨日は、グローバル30（G30）の大学の学生の参加するワークショップが行われ、このテーマについて議論しました。そして、本日は、このテーマに関するプレゼンテーションもありました。

この特定のテーマについて、教育、施設、情報、キャンパスライフという４つの項目に分けて議論を行いました。これらの項目から、国際化を検討しました。議論の末、私たちはこれらの大学及びG30の大学における国際化の中で、これまで多くの変化、そして多くの成果があったという結論に至りました。しかし、更に改善できる点があることも分かりました。時間の関係上、議論で明らかにされた良い点やこれまでに達成できた強みなどについては省かせていただき、学生たちからの提案についてお話ししたいと思います。

まず、教育についてですが、これについて話し合った学生グループからは、日本語を学ぶことに対するインセンティブを留学生に与える必要があるとの意見が出ました。議論した結果、言語の壁が課題となっており、国際化の障壁となっていることが分かったからです。ほとんどのグループで、私たちは日本語の能力を高める必要があり、また、日本人学生や講師、教員も語学力を高める必要があるとの意見が出されました。そのため、教育について言うと、日本語の学習に対するインセンティブを留学生に与える必要があると分かりました。これにより、日本語の講義と英語の講義の学問的な質が均一になるはずです。日本語と英語で講義の学問的な質が異なるということは、よく言われてきました。

日本語の講義は、英語の講義よりも質が高く、水準が高いです。この差をなくすためには、英語の講義をより充実させる必要があり、学生たちの選択肢を増やすことで、ただ単位を稼ぐために講義を選ぶような事態を避けるようにすべきだとの意見が出ました。

また、国際的な視野を持った教員を雇う必要があります。授業における交流に課題があると分かったからです。私たちは、授業中の交流が少ないことに気付きました。日本人の講師や教授は、インタラクティブな授業を行いません。インタラクティブな授業は、留学生が学ぶのに最適であり、また、講義における交流という点から言っても素晴らしいことです。そのため、講師がよりインタラクティブな授業を行うとともに、大学がグループを超えた授業を推進していく必要があります。このようなグループを超えた授業の推進は、大学教授が行っていくべきです。

そして、学生側については、学生がより言語能力を磨く必要があることが分かりました。先ほども申

し上げたように、国際化に関して最も課題となっているのは、学生の言語能力です。留学生の日本語力の低さ、また、日本人学生の英語力の低さが、相互交流における課題となっています。以上が学業に関してです。他にも議論したことは多くありますが、時間の関係から数点だけ述べさせていただきました。

施設については、大学内に日本人学生・留学生の共同居住施設を作ることが提案されました。共同居住施設を提案したのは、学生が共に暮らす必要があるからです。学生の生活費が抑えられますし、留学生と日本人学生が共に同じ寮で暮らしたり、共有スペースや共同施設を使ったりすることは、学生間の交流の改善に役立つと思います。

食堂のメニューも種類を増やしたり、内容を翻訳したりすることで改善ができます。また、宗教的な行為のための十分なスペースも確保すべきです。一部の大学では祈りのためのスペースがないことが分かりましたが、これは精神的生活において非常に重要なことです。次に、施設のスペースを改善し、共有スペースや音楽室にすることが提案されました。また、学内の運動施設やその他の施設の平等な利用ついても話し合いました。

次に、情報については、バイリンガルの標識やアナウンスが必要であるとの意見が出されました。一部の大学ではアナウンスや標識が日本語のみであるからです。このことにより、留学生が知る必要のある情報を知るのが難しくなっています。私たちの日本語能力が低いため、こういった情報を知ることができません。

また、診療室にバイリンガルのサポートスタッフ又は学生を配置することも学生から提案されました。次に、留学生向けのサークルガイド又はパンフレットの作成が提案されました。留学生はサークルに関する情報をあまり持っておらず、日本の大学のサークル活動に参加できないという課題が分かりました。どのようにサークルに参加したら良いか分からず、また、サークルに入ったとしても、サークルで行っていることをあまり理解できません。そのため、留学生に対してパンフレットや情報などを英語で提供する必要があります。

また、留学生に対する就職支援についても話しました。大学側から、企業による定例セミナーや企業に関する情報などを、留学生が理解できるよう英語で提供するべきです。

最後に、キャンパスライフに関して議論したグループからは、留学生による統一の学生自治体を設立する必要があるとの意見が出ました。学生自治体の設立は、基本的に学生の責任の下で行うべきだと理解していますが、大学の運営側にも、このような学生自治体の設立に協力して下さるようお願いしたいと思います。

時間となりました。学内での学生の活動を奨励したり、サークルへの留学生の参加を奨励するイベントをもっと頻繁に行えば、ゆくゆくは学内サークルの設立につながるのではないかと申し上げたいです。最後に、国際化において、これまで多くの成果が得られたということを述べて私の話を終わりたいと思います。この改善の速度は非常に喜ばしいものです。世界における日本の大学の競争力を高め、日本を世界一の留学先とするため、日本の大学における国際化にこれからも注意を向け続けることを、僭越ながら私たち学生から提案させていただきます。ご清聴、ありがとうございました。

○勝　非常にいろいろな、重要な指摘をほんとうにありがとうございました。

４つのセッションでそれぞれ非常に活発な議論がなされたということですが、主要な論点を整理いたしますと、今、スライドに出ているような形になっているかと思います。

それぞれの項目別に記してございますが、最後の部分にありますように、やはり、こういったものはガバナンスのあり方、つまり国際化をどういう形で進めていくのか。これは、全学と部局との関係、あるいは学内組織のあり方などで、今までのセッションの報告の中でも指摘された点でございます。

こういったことも踏まえて、まずは基調講演者のお二方に、それぞれ５分程度で、今、いろいろな課題が提起されたと思うんですけれども、それについてのコメントをいただければと思っております。

最初に、それでは二宮先生からよろしくお願いいたします。

〇二宮　それでは、失礼いたします。

セッションＤのアディグナ・バハリさん、いらっしゃいますか。１年ぐらい前になりますが、私は九州大学を訪問した際、彼にインタビューいたしました。イギリス留学の選択肢もある中で、九州大学を選んだという人でございました。今回彼に再開し、学生セッションの司会として、すごく活発に学生が学生をリードしている彼を見たとき、私はG30は大成功だと、そう思った次第でございます。

今日、その学生のセッションに出ておりまして、G30の狙いはまさにこれだと。この壇上だけではありません、この前にもずらっと、エジプトなどいろいろな国からの学生が並んでくれています。こういった優秀で多様な学生、特に学部学生を持つことが私たちの夢であったし、多分、これを持てた13大学の先生方は、教育という観点で、とても幸せじゃなかったかなと、こういう印象を持ちました。彼等がいるからこそ教室が活発になり、彼等がいるからこそとんでもない質問に答えなくてはいけなくなったりする。彼等がいるからこそ、キャンパスがどうだこうだと。そして、もともと英語のプログラムだと承知で来ていても、ここまで勉強してくると、日本をもっと知りたいというドライブがかかってきて、日本語を教えろと。今までの留学生プログラムは、予備教育で日本語を教えてから専門にといったような形でやってきたんですけれども、とうとう彼らは、内発的に日本語を教えてくれといったような、まさに英語で全てをやってきて、英語に限定してこだわったからこそ、彼らがここまで育ったんじゃないかなと。

これが活力だと思うんですね。単なる多様性ではなく、セルフエスティームの高い、能力のある学生が日本の学生と一緒になってやっていく。レベルが下がるなんて、つまらん文句も言っている学生もいるようですけれども、下がるわけじゃなく、彼らが日本の学生の能力を見抜く力がないだけです。日本の学生は優秀ですので、もっともっとディスカッションをしてもらいたいと思います。そういうことがこのG30だったので、繰り返しますけれども、ほんとうに私たちは大成功です。寮が大学から遠いとか、学生は文句ばっかり言っていますけれども、そんなことはどうでもいいことです。

そして、彼らはアメリカやイギリスに行くチャンスはたくさんあっただろうと思うんですね。にもかかわらず、皆さんの大学を選んだということについて、彼ら自身がもっと自覚を深めるべきではないかなと思います。

２点目は、リクルートです。それぞれの国の高等学校まで先生方が出向かれて、ものすごく優秀な学生を何とか発見しようということで探し出された、その学生がここに並んでいます。今まで、日本の大学のアドミッションは全部相手任せで、大学推薦でマスターの学生を採るぐらいはあったかもわかりませんが、自分の目でこの学生をといったことはなかったと思うんですね。これは、日本に新しいアドミッションというものをもたらしてくれました。我々は自分の目で教えたい学生を採るんだという、自立した大学になることも最後に申し上げて、この英語に特化したプログラムは、ぜひ続けていただきたいと思います。

その一つの方法として、私も研究してみないとよくわかりませんけれども、ジョイント・ディグリーを申請される仕組みを研究してみていただいたらどうでしょうか。定員内化ができるということで、この学生たちを、大学院であれ学部学生であれ、定員の中で採れるという、このプログラムがジョイント・ディグリープログラムです。設置審との関係で、既存の研究科、学部学科の中で定員をきちんと分けて、連携があったりもあるそうですが、それをもう少し研究していただくと、取り出し授業ではない、まさに専門の中で、グローバルカレッジはグローバルカレッジとしてこういう学生を採ることができるということですので、少し研究をしていただいて、ぜひ続けていただけたらと思います。

ありがとうございました。

〇勝　ありがとうございました。

それでは、ブレーデンさん、よろしくお願いいたします。

〇ジェレミー・ブレーデン　私は、フリーに全てのセッションを点々と飛び回っていたので、ほんとうにばらばらと感想だけ述べさせていただきます。いいですね、座っているとマイクがちょうどいい位置にあって

しゃべりやすいです。（笑）

私はセッションD、学生のセッションに参加させていただいたんですが、最初は、あまり大きくは期待していなかったです。不平不満の言い合いっこ、ないものねだりが中心になるだろうと思ったんですが、決してそうではなかったですね。ほんとうに印象的でした。

留学生は、自分たちが日本の大学の国際化の受益者、あるいは消費者だという意識も当然持っていますが、それよりも、大学国際化の主体だ、プロデューサーだという意識を持っているんだなと思いました。私たちが自分たちの手で大学を国際化させているんだという意識をすごく強く感じましたね。

その留学生の意識、やる気を、どういうふうにもっと大学の国際化に関連づけるか、考える必要があると思います。留学生をエンパワーさせて、大学の国際化の仲間だという意識を持たせることがすごく重要だと思いますね。何が欲しいのかと問うのではなくて、私たちの大学国際化のために何をしてくれるのかとも、留学生に問うといいのではないでしょうか。

もう一つ、環境整備がテーマのセッションCに参加させていただきました。改めて、日本の大学は大変だなと思いました。というのは、大学の責任範囲が非常に広いんだなと。山梨大学の同僚が初めて日本に来たときに大変びっくりしたとのは、日本の大学が、留学生のために、宿舎だけじゃなく、全体の生活環境まで気を配ってくれているということだったそうです。経済支援、アルバイト、地域住民とのトラブル、ごみの出し方に至るまで、これが大学の責任なんだなと驚いていました。（笑）オーストラリアの場合、かなり割り切っていますね。大学は教育・研究には責任を持ちますけれども、それ以外は、留学生は自分の行動に責任を持たなくちゃいけないということですね。

日本では、そうやって大学が親がわりにならなくちゃいけないという社会的な期待があって、それは避けられないと思いますが、環境整備を考えたとき、いつまでも、どこまでも支援を充実させて、留学生に過ごしやすくしてあげられるか、そういうことばかり追求していると、苦しくなるだけです。ですから、ある程度、逆の発想も必要なんじゃないかなと思います。どこまで割り切れるかですね。どこまで大学の責任を、はっきりラインを引いていけるかも考える必要があると思いました。

もう一つだけいいですか。教育についてです。これも、オーストラリアの経験から学んだことですが、留学生を受け入れるための教育には、あまり頑張り過ぎないほうがいいということです。オーストラリアの場合は、公的支援、補助金のあり方が変わって、突然、大学が自分たちで稼がなくちゃいけなくなって、目をつけたのが留学生の受け入れでした。要は、収入源としての留学生です。ですから、留学生をターゲットにした新しい教育プログラムをたくさん一生懸命考えたんですね。特に人気のある、留学生が喜んでくれそうな分野ですね。ビジネスとか、ちょっと昔だとIT、コンピューター関係が中心になったんですけれども。それで、肝心な教育の質の問題が後回しになってしまって、質保証の面ではかなりおくれていました。

ですから、G30の一つの危険性だと思いますが、留学生に来てもらえるような教育プログラムばかり考えると危ないと思います。「ぜひ来てください、奨学金もありますよ、日本語ができなくてもいいですよ、楽しい勉強がたくさんできますよ」といったアプローチだと、肝心の教育のクオリティーが忘れられてしまう可能性があります。ですから、ぜひ、教育の国際化を考えるときは、来てもらうための教育ではなく、大学の強みを発揮させるような教育とは何かを考えていただきたいですね。

ほかにもたくさん言いたいことがありますけれども、そこまでですね。

○勝　大変ありがとうございました。

それでは、これから、フロアを巻き込んだ形で、本日のテーマである「国際化で大学は変わったか」というテーマでディスカッションを進めていきたいと思っております。

基調講演で、二宮先生からは、G30の役割と成果ということで非常にクリアにまとめていただきましたし、あるいはブレーデンさんからもさまざまな示唆をいただきまして、スキルの重要性、それから、やはり学内で推進する力が必要だということでした。

まず最初に、G30の採択大学のそれぞれの大学からの代表者の方が今日いらしてくださっています。まさ

にそれらの方々は、国際化については学内でも反対が多かったりと、ある意味力仕事であると思いますので、そういった自らの経験なども踏まえた形で、まずは、そのG30の採択大学の先生方からコメントあるいは質問を受けたいと思います。どなたかいらっしゃいますでしょうか。

では、慶応義塾大学の国領先生、よろしくお願いいたします。

○國領二郎（慶応義塾大学常任理事） ありがとうございます。

グローバル30に参加させていただいて、ほんとうによかったなというのが正直な気持ちで、確かに変わったと思います。何が一番よかったかというと、実際に動いてやってみることでいろいろなリアリティーチェックができるというか、どこが想定したのと同じで、どこが違うか、みたいなところです。

一つの大きな感想として、国際化が、日本の大学だけではなく、世界中の大学とか教育機関にとって、非常に大きなアジェンダになっているということで、日本の大学が、じゃあそういう大きなニーズにちゃんと応えられたんだろうかと。その意味からは、先ほどのオカフォーさんのお話とかで、一体、我々は学生たちが求めているものにちゃんと応えられたのかどうかを再確認しないといけません。なぜかというと、ここでとまっていてはだめで、先へ行くことを考えなければいけないからです。

もう一つ学びとしてあったのが、直接的に世界の高校へ訪問して回って、集めるというのがいかに大変かということでした。これは、つくづく感じたところです。

じゃあ、ここから先、この辺の学びを活用してどう行くか。その意味で、二宮先生に少しお尋ねしたいところがあります。ジョイント・ディグリーというご提案をいただいていて、これは、いきなり直接的に高校生にアクセスする部分もあるわけですけれども、その辺を海外の大学と組んで考えていくというような発想になるかと思います。これまでの我々の学びをどう未来に反映させていけばいいのかということについてもう少しだけお考えいただいた上でコメントをいただけますか。ほかのパネラーの皆さんにも、ここから先、この学びをどうやって生かしていくかということについて、コメントいただけると大変ありがたいと思います。

○勝 ありがとうございます。それでは、まず二宮先生からよろしくお願いいたします。

○二宮 では、簡単に。多分、このまま続けることは、いずれのキャンパスでも大変難しいだろうと思いますね。人員の問題、お金の問題とかがあります。しかし、このG30が狙っている、世界で競える大学といいますかね。日本のリーディング大学ですので、このままリーディング大学で頑張っていただくには、やはり制度的な安定感をつくっていかなければいけません。学長のリーダーシップだけでは、お金とか人とか、全部は面倒を見れませんよね。

ジョイント・ディグリーというのは、ダブル・ディグリーはそういうことはないんですけれども、ジョイント・ディグリーの仕組みとは共同学位ですので、現在の定員の中をどう使うかということになります。そこを英語だけで提供するプログラムにするかとかですね。そこにはもちろんディプロマ・ポリシーがないといけないんですが、どういうアドミッションポリシーで、どこから誰を連れてくるのかなど、今経験されたことがそのまま生かせるような仕組みが、多分、用意できるのではないかと思います。これは、私がやるわけではないので、あまり信用なさらないほうがいいんですけれども、そんな感じはしております。

○勝 ありがとうございます。

それでは、また後ほど一言ずつ、先生方にはお伺いをするとして、ほかにG30の大学の関係者の方からコメントをいただきたいと思います。

名古屋大学の渡辺先生、いかがでしょうか。

○渡辺芳人（名古屋大学理事・副総長） 先ほど廣瀬さんのほうから、G30を進めることで、ますます国際化に頑張る先生と頑張らない先生というか、アゲインストが出たという話がありました。実際には、G30で、うちは学部、大学院合わせてそれまで200ぐらいだった授業が今500になりましたので、かなり先生方のティーチングロードが増えました。

そういう意味では、全体として、特には大学院、理工系は半分以上英語にしようというような議論も始

まっています。その中でよく出てくるのは、そうは言っても英語だけしゃべれたって中身が空っぽならどうするんだと。それから、今の子供たちは、むしろ日本語がちゃんとできないから、日本語をもう少しちゃんとやらないとだめだとかいうような議論があります。

でも、これは逆にいいことだと思います。もしも我々が英語もできない学生を、つまり中身もない学生だということは、日本語だけしゃべれる学生を出したという話ですから、教養教育とかにほんとうに問題がないかもう一回戻って考えるという意味では非常にいい話です。ただし、そういう意味では、大学全体の流れとしては、国際化で優秀な留学生を受け入れるという方向だと思います。

それと、うちの大学が変わったのは、ほかもそうだと思うんですけれども、例えば、国際に関しては国際部あるいは国際担当の理事が何かやっているということだったのが、最近は、学務あるいは教育担当理事、研究担当理事が、国際がロジをやりながら一緒にやるということになってきたことです。国際部だけが国際化を担当するのではない、全学を巻き込んでやるんだと。もちろん国際部が協力はするんだけれども、皆さんのそれぞれ専門のことはということで、非常に全学的には広がってきているという意味で、やはり大学が本質的に変わってきています。

ただし、先ほども指摘がありましたけれども、すぐに100%かと言われると、まだ10点、20点のレベルです。そういう認識を持ってやっているということが、多分、重要だと思うんですね。

○勝　ありがとうございます。

それでは、筑波大学のベントン先生、よろしいでしょうか。

○キャロライン・ベントン（筑波大学副学長）　筑波大学のベントンです。

「国際化で大学は変わったか」についてですが、まだ変革のスタートラインにいる状態だと思います。まず、国際化の必要性の認識は高まった。認識がなければなにも始まらないので、これは重要なことです。さまざまな英語プログラムがつくられた、外国からの学生と教員が増えた。しかし、本当の意味の国際化を進めるためには、留学生や外国人教員・職員は特別扱いされず、大学関係の皆様と普通に交流する状況が必要です。

私は、D セッションの「G30学生から見た国際化」に参加しましたので、そこでの議論を紹介します。ご想像のとおり、若いパワーで質問とコメントが絶えず、かなり活発的な話し合いでした。テーマとしては、アカデミック、ファシリティー、インフォメーション、キャンパスライフの４つがありました。その中での共通に出された課題は、やはり日本人学生と日本人の先生との交流をもっと促進してほしいことでした。留学生から見ましたら、この点がまだまだ不十分ということです。

交流のバリアは、やはり日本語力と交流の機会がまだ少ないことでした。先ほど話題になった「クラブ活動に参加しくい」ことは、クラブ活動の勧誘は殆ど４月にあるため、10月に入学する G30の学生がクラブになかなか入りづらい状況になっているようです。

日本語のバリアについては、G30の学生は日本語力に関わらず入学・勉学できるということは、多くのG30学生は日本語を習得しないで来日し、日本にいる間でも日本語の授業をとらない。そのため、なかなか、日本人学生や先生との交流が進まないようです。

また、このセッションに参加した G30学生は、「学生には２タイプある」と言っていました。一つ目は、日本文化、日本語に興味がある学生。もう一つは、単に自分の分野の勉強に専念したいという学生です。日本語や日本文化にあまり興味がないという学生もいるということですね。もちろん、私としてはせっかく日本に留学しても、日本文化に接しないことはとても残念としか思えない。

やはり、日本社会が必要としているグローバル人材、G30学生の一部が今後日本で就職したい意志があること、また日本人学生が外国人学生と触れ合うことで視野がひろがることを考えると、日本語や日本文化の教育も重要である。

日本語教育を義務づけることは難しいと思うが、日本語、日本文化の教育にもう注力して欲しい。せっかく日本にきていただいているのに、思うような波及効果がでないと思います。

○勝　ありがとうございます。

G30の大学でほかに何かコメントをされる先生はいらっしゃいますか。よろしいですか。

それでは、フロアの方から２人、手が挙がっていますので。そちらの方から、所属とお名前を言ってから質問あるいはコメントをお願いできればと思います。

○フロア１　三重大学に勤務する者です。今日、期待をしていたが、取り上げられなかったトピックについて、お話しさせてください。

グローバル30がどういうものだったのか、実際に参加大学の内実を聞くのは今日が初めてでした。これは私の無知でもあるんですけれども。私が期待していたのは、学部に英語で教えるコース、つまり英語で単位を出して、英語で専門科目も学んで卒業するというコースをつくるに当たって、日本人学生にいかにそれが可能になるようなアカデミック・イングリッシュを１年次にたたき込むかということ、そういうコースをつくり上げるということに、それについての苦労話とか知恵などを聞かせていただけるかなということだったのですが、それはなかったように思うんですね。そのかわり聞かせていただいたのは、そのコースに、いかに留学生を海外から引っ張ってくるかというお話しでした。今まで、学部留学生というのは、協定校からの交換留学生が主で、日本語で行われるコースに入っていたけれども、それを、海外事務所を設け、留学フェアにもせっせと行き、海外の高校の訪問までして留学生を獲得してきたという。これは一種、目からうろこでした。

いずれにしても、私がほんとうは聞きたかったところが聞けなかったのですが、その辺についてはどうお考えなのでしょうか。

○勝　ありがとうございます。

今、指摘されたことは、実は、グローバル30の中間査定でも我々は指摘されております。つまり、外国人だけに英語の学位コースの授業を受けさせるのではなく、日本人も入れたインテグレーションが非常に重要だということ。それから、先ほど学生さんも言っておられましたけれども、やはりインタラクティブな英語での授業を行うということが重要でございます。あと、本日は内田先生もいらしていますけれども、早稲田大学のグローバル人材育成推進事業、これも名前が変わりますが、そちらも動いているということで、そのニーズというか、その部分はやはり、今、日本で大きく認識されていて、それは非常に重要なポイントではないかと思います。

時間があまりなくなってきましたので、先ほど国領先生からのご質問がありました、G30の次ということ、将来展望についてです。我々がやってきたいろいろな事業については、英語での授業あるいは学位コース、留学生の受け入れの促進が非常に大きかったわけですけれども、この次に、日本の大学がどのようにすべきかです。最後に、また学生さんにはコメントをいただきます。

それでは、立命館大学の堀江先生、コメントをよろしくお願いいたします。

○堀江　これまでG30を通じて大学として経験してきたことの蓄積がかなりあると思います。先ほどのセッションCの中での議論を振り返りましても、まさにこのG30でやってきたことは、大学が学んできたプロセス、大学の学びのプロセスだったなと非常に強く感じました。

この学びは、多分、今後さらに続いていくというか、大学がグローバル社会に対応して、さらに、来てくれる日本人学生や留学生も含めて、学生の姿をよく見ながら、どんどん大学が変化していかなければいけないということ、これはずっと続くと思います。これが完成形だという形は世界中どこを見ても存在していないので、ちゃんとしたお答えにはなっていないんですけれども、学びは続くだろうなと思っています。

ただ、一つ、現場で仕事している身からすると、学び方の効率が上がるといいなとは少し思います。現場で、各大学で今どんどん経験を積んできて見えてきたことというのがたくさんあると思うんですが、それについてちゃんと明文化するような研究や調査がしっかり進んで、日本全体で共有される知識として、そういったものが確立していくといいなと感じています。

以上です。

○勝　ありがとうございます。

廣瀬先生はいかがでしょうか。

○廣瀬　ありがとうございます。学びをどのように将来に伝えていくかの前段として、（まさに、このシンポもそうした意義があったのかなと思いますが、）G30採択大学がこの５年間で行ってきたことを、まず大学ごとにまとめ、評価すべきところは評価し、反省すべきは反省する、そういった作業が必要になってくるのではないでしょうか。学内でも国際化の進捗状況については十分に把握されていない。誤解されている場合すらある。皆さんも日々経験されていると思いますが、特に大きな大学では、内部での情報共有が容易ではありません。そうした作業の後に、あるいは同時に、各大学で蓄積された経験やグッドプラクティスを公開していったらいいのではないかと思います。そこから、またいろいろな意見や評価などをいただいて、それらを基に、将来のさらなる国際化、改革に繋げられたらいいと思います。

○勝　それでは、大西先生、よろしくお願いします。

○大西　一般的なお話としては、私は廣瀬先生と全く同意見です。個別具体的に、うちの大阪大のことをお話し申し上げますと、このG30で始まったインターナショナルカレッジ、英語の学部のコースというのは、ある意味、日本の中では時代を先取りしていたといいましょうか。例えば秋入学という。あるいは、アメリカ型のAO入試ですね、新型のAO入試ということ。学科試験を経ずに、推薦状とTOEFLのスコア、エッセイ、高校の成績ぐらいで入ってこられるような学生を引き受けました。これは大阪大としては初めてのケースだったわけです。

今後どうするかという点について、大阪大が具体的に今模索しているのは、これを日本語でもやれないかということです。例えば、中国、タイ、韓国あたりの高校で日本語を学んでいる子は結構いるわけですね。この子たちを直接、AO入試、英語のこの入試と同じような方式で採ってきて、阪大で教育するという。そうはいっても、日本語が不十分な子もいるので、そういう子たちには半年ぐらい準備期間を設けて、その期間は仮入学という形で日本語だけを集中的に学習させ、翌年４月に本入学というんですか、各学部に配属させるとか。そういうことも、このG30の経験から広めていきたいと今考えていて、だんだん具体化しつつあります。

○勝　ありがとうございます。

ブレーデン先生は、先ほど既にそういったお話をされましたが、二宮先生が言われたような、例えばダブル・ディグリー、あるいはジョイント・ディグリーというものは、やはり今まである英語コースをベースにして、日本の大学はもっと積極的にやっていくべきだとお考えなのでしょうか。その辺もご意見をいただければと思います。

○ジェレミー・ブレーデン　そうですね。G30の先にあるものは、やはりG30の続きだと思います。（笑）今までやってきたことを地道にやり続けるという。そして、もっと形にして、もっと広くシェアしていくことだと思いますね。

二宮先生からジョイント・ディグリーのお話があったと思いますけれども、これも、延長線として考えればいいと思います。とても大変なことだとよく思われるんですけれども、決してそうではありません。今までの国際交流の実績の積み上げの結果がジョイント・ディグリーだと言えると思います。当然、定員も変わるわけではないですし、今までやっている教育を話し合いながら少し工夫してつくっていくことができると思いますから、それはぜひやっていただきたいと思います。

○勝　ありがとうございます。

それでは、早稲田大学の内田先生、手が挙がっていますので、よろしくお願いします。

○内田 勝一（早稲田大学副総長・国際担当常任理事）　早稲田大学の内田です。

今日の議論の中に一つ出ていないものがあって、それはコストの問題です。つまり、グローバル30、あるいは外国人留学生を入れてくれば、環境整備、あるいは教育プログラムを充実していくということで、お金がかかるわけですよね。このお金について、５年間は国民の税金を使って、この13の大学で先導的なことを

国民がやらせてくれたわけですよ。だけど、これからはどうするんですかと。つまり、私立大学の観点からいうと、やはり、留学生に対しては、国内の学生よりコストがかかるわけですから、そのコストを徴求しなければなりません。これは、1.5倍なのか、1.3倍ぐらいなのか、大学によって違うだろうと思います。

そう考えると、私立大学がグローバル30以降、大学のグローバル化を進めていくというときには、コストがかかると。そうすると、私どもとしては、外国人学生に対して高い授業料を取るかということを考えなければいけないんです。グローバル30というブランド化したときには、国費留学生をつけるとか、国民の税金を使って安くするというのは、議論の立て方が逆だと思うんですよね。

つまり、国際化で大学が変わったとすれば、それに見合うコストをちゃんと要求すべきではないかと思います。そのために、我々はどういうふうにしていったら高い授業料を取れるようにするかということを考えるべきです。これからも大学の国際化をするためにお金が必要だから、国民の税金を出してくださいということは、多分、正当化できないでしょう。そういう意味では、コストのことを我々はきちんと考える必要があると思います。

〇勝　ありがとうございます。

これについては、エケネ・オカフォーさん、どうでしょうか。もし授業料がものすごく高くなってでも、日本の大学に行きたいですか。（笑）　何か意見があればお願いします。

〇エケネ・オカフォー

Thank you very much for the question. I have been in Japan for four years now, and I am studying mechanical engineering. I am on full scholarship. Even if I have to pay my own tuition and it is a little bit costlier than what it should be, I would still like to study in Japan. Maybe from Kyushu University, I would say the standard or the way foreign students are treated, our facilities for foreign students are really well-improved. So, I think Kyushu University is doing well when it comes to internationalization. So, we can really attract foreign students even though the tuition is a little bit costly.

I would like to make a little bit more comments on this event, workshop, and symposium. For the students, it has been an eye opener. Before now, some of us believe that the internationalization process is the job of the administration, the government, or the schools. But we found out that internationalization is also a responsibility of students. In our discussions, we found that the student has a lot of roles to play in internationalization. And some of us were really surprised to find that in some schools, students are championing the internationalization process. I want to encourage all students here, as we have learned from this workshop and symposium, let us all go back to our different universities and do what we have learned, practice what we have learned, create international student associations, create Japanese student associations, try to increase interaction between these two groups of students by your activities. We shouldn't wait only for the institutions to do this for us because there are things they can't do for us. That is the truth. They can't force us to interact. We have to come out, interact with each other, and make sure that this internationalization process is well-improved.

Finally, I want to really appeal to the government to encourage and support this kind of interaction that we have had these two days. It has really been awesome and we have learned a lot from it. If this can be continued and supported by the government, we would really like it. That is the voice of the students. Thank you very much.（拍手）

【日本語訳】

〇エケネ・オカフォー　ご質問ありがとうございます。私は日本に来て４年になります。専攻は機械工学です。そして、全額支給の奨学金をいただいています。たとえ授業料を自分で支払わなくてはならなくなり、それがあるべき額より少し高いものだったとしても、私は日本の大学で学びたいと思うでしょう。九州大学で言えば、留学生への対処のしかたやその水準、留学生のための施設は非常に改善されま

した。国際化という点では九州大学はうまくいっているのではないかと思います。ですから、授業料が少々高くても、私たちは留学生を惹きつけることができるのです。

もう少し今回のイベント、ワークショップとシンポジウムについて付け加えさせてください。私たち学生にとって、これらは自らの目を開かせるものでした。このイベントの前は、私たちのうち何人かは、国際化は事務や政府、あるいは大学の仕事だと信じていました。しかし今、それは学生の責任でもあるということを知ったのです。私たちは議論を通して、国際化において学生が多くの役割を果たすことができることがわかりました。また何人かは、複数の大学で学生が国際化において主導的な役割を果たしていることを知って非常に驚いていました。私は今日ここにいらっしゃる学生の皆さんに、このワークショップとセッションを通して私たちが学んだように、それぞれの大学に戻って、ここで学んだことを実践すること、留学生の団体や日本人学生の団体を組織し、ふたつの学生グループの間の相互交流を皆さんの行動によって促進させることをぜひやっていただきたいと思います。私たちは、組織が自分たちのために何かをしてくれるのを待つべきではありません。なぜなら、彼らにできないこともあるからです。これは事実です。彼らは私たちに相互交流を強いることはできません。私たちは外に出て、交流して互いに意見を交わし、国際化の促進を確かなものにしなくてはならないのです。

最後に、日本政府にはどうかこの２日間に行われたような相互交流を今後もサポートし、奨励していただきたい、と申し上げたいです。本当に素晴らしい２日間でしたし、私たちは非常にたくさんのことを学びました。もし日本政府から継続的なサポートをいただけるのであれば誠に幸いです。これが、学生からの声です。ありがとうございました。

〇勝　非常に勇気づけられるコメントをいただきました。文科省の方もいらっしゃっていましたので、非常にいい機会になったと思います。（笑）

もう少し質問あるいはコメントをいただきたかったんですが、残念ながらあとお一人とということにさせていただきたいと思います。では、手が挙がっていらっしゃるので、最後のコメントあるいは質問をお願いします。

〇フロア２　ありがとう。九州大学で教えている者です。すみません、僕の質問は、通訳サービスを使ったほうがいいと思います。

I want to pick up on a comment that Mr. Okafor made earlier, reporting on the student discussion when he said that students had expressed their hope that universities would recruit more internationally minded staff. I worked in London University before I came here two years ago, and I myself did my PhD in Hong Kong, so I guess I am fairly internationally minded. But I think it would be slightly unfair on regular Japanese academics to suggest that many are not internationally minded. I think many of them actually are or would like to be, or were once upon a time earlier in their careers before the system got a hold of them. And I think if we are really serious about internationalizing Japanese universities, it is the system as a whole that we need to be thinking about, not erecting a new international students' building here or setting up another G30 sort of dedicated international program there... *Kyojukai* [Meetings of Professors], 11 times a year; *gakufu* [Faculty] *kyojukai*; another 11 *gakubu* [departmental] *kyojukai, kaigi* [meetings] every Wednesday, *daigakuinsei no nyugakushiken* [post-graduate student entrance examinations] in the middle of the summer vacation in which everyone has to participate – I mean come on, wake up, get serious! If we really want to internationalize, you have to stop all of that and reform the system.

When I was running an Erasmus Mundus joint degree program in London, an integral part of that was visiting research scholarships for academics. Universities that are serious about internationalization encourage their staff to be more internationally active. You cannot be internationally active if you have to attend *kyojukai* every month, and if you are required to come back in the middle of summer vacation to sit around a table with

your colleagues and interview all *daigakuinsei* [postgraduate] applicants one by one. So let's talk about the system.（拍手）

【日本語訳】

〇フロア２　オカフォさんがひとつ前のコメントで紹介しておられたことについて私の意見を述べさせて下さい。学生による議論の結果、大学はより国際的な視野をもった教職員を採用してほしいとの要望が出たという点についてです。私は２年前までロンドン大学に勤めておりました。博士号は香港で取りましたので、私自身はそれなりに国際的なマインドを持っているのではないかと思っています。ただ、私としては、日本の大学の多くにそのような教員がいないので、新たにもっと採用してほしいという提案は若干不当ではないかと思うのです。私が思うに、日本の大学の教員の多くは実際には国際的であったり、あるいはそうありたいという希望を持っています。またあるいは彼らのキャリアの初期、まだ大学のシステムに組み込まれてしまう前には国際的だったのです。

もし私たちが真剣に日本の大学の国際化を目指すのであれば、もっと考えるべきなのは全体としてのシステムの問題であり、新しく留学生のための施設を建てたり、また新たなG30のような国際プログラムを作ることではないのではないでしょうか。たとえば教授会です。九州大学では「学府」教授会が年に11回あります。更に、「学部」教授会というものがまた年に11回あるのです。そして毎週水曜日に会議があり、大学院生の入学試験は夏休みの真っ最中に行われ、教員は必ず全員参加しなくてはいけないのです。－皆さん、目を覚ましてください。これは冗談ではないんですよ、真面目な話なんです！本当に国際化したいのなら、こんなことは全てやめてシステムを改革しなくてはならないんです。

私がロンドン大学でエラスムス・ムンドゥスのジョイント・ディグリープログラムを担当していた時の中心的な業務は同大教員の客員研究員奨学金に関わるものでした。大学は国際化を重要視しており、教員が国際的な活動を行うことを奨励していました。もしあなたが毎月教授会に出席しなくてはならず、夏休みの途中で日本に飛んで帰り、大学の同僚と並んでテーブルにつき、大学院生ひとりひとりにインタビューしなくてはならないのだとしたら、国際的な活動をすることなど無理な話です。ですから、もっとシステムの問題について話し合いましょう。

〇勝　大変ありがとうございます。

多分、今のご意見は、ここにいらっしゃる教員の方は皆さん共有されている課題だと思います。（笑）ほんとうに申しわけないんですが、時間となってしまいましたので、ここで終わりにしたいと思います。

このG30の事業は今年度で終わりになります。実は、私も、あるいは内田先生や京都大学の森先生、渡辺先生など、強力な副学長の方々が５年間この事業をやっていらしたわけですけれども、2009年には事業仕分けがありました。2010年には一旦廃止して組み立て直すというようなところまで行きました。G30にはそういう大きな試練があったわけですけれども、それによってまた、その後のG30の事業の意義が強まり、また成果が大きくなって、13大学と日本の大学全体、あるいは日本人学生に裨益をするという形に変わっていったということも、ぜひご理解していただければと思っております。

何か一言ありますでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、これをもちまして、全体の会合のパネルディスカッションを終了したいと思います。ご清聴どうもありがとうございました。パネリストの皆さまにもう一度拍手をお願いいたします。（拍手）

（2）文部科学省プレゼンテーション

文部科学省高等教育局高等教育企画課国際企画室長
有賀　理

ご紹介ありがとうございます。

文部科学省のグローバル30の担当といたしまして、本日、こうやって多くの方々に参加をいただいたことは、この事業への関心の高さということで、非常にうれしく思っております。

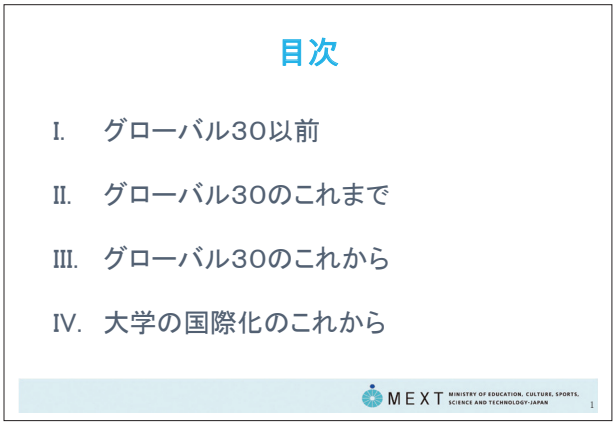
本日は、グローバル30の総括をするシンポジウムということで、「国際化で大学は変わったか」を主題にいたしまして、基調講演、それから課題別のセッション、こちらは先ほどご報告いただきましたけれども、議論をいただいたということでございます。

参加の皆様には、グローバル30の成果や課題、それから今後の大学の国際化に当たっての課題、「国際化で大学は変わったか」というテーマにつきまして、それぞれ受けとめがあったのではないかと思います。

このグローバル30は、大学の教育内容を国際化するために開始された、文科省としても初めての取り組みでございました。その内容の先進性、先端性から、紆余曲折の話はこれまでもございました。皆さん、いろいろな多難がある中でも、大学の先生方、それから私よりも前の文科省の先人たち等関係の方々の努力によりまして、何とか乗り越えてきたと思っております。

私自身も、アメリカの大学と日本の大学にそれぞれ６年間学んだ経験を持っておりまして、日本の高等教育の国際競争力は、ほんとうは、潜在的には非常に高くあるのではないかと思っております。その潜在的な国際競争力を顕在化する手段として、このグローバル30は非常に重要なものであるということで、これまで事業を進めてまいりました。

私からは、今日のこれまでの議論と重なる部分があるかもしれませんけれども、これまでの大学の国際化に関する政策やグローバル30の取り組み内容につきまして簡単にご紹介した上で、今後、大学の国際化政策がどういう方向に行くのかという、発展の方向性についてお話をしたいと思います。



M-2

資料にお示ししていますけれども、大きくは４点ございます。「グローバル30以前」「これまで」「これから」、それに基づいた「大学の国際化のこれから」ということで、まとめたいと思っています。

初めに、「グローバル30以前」について若干ご紹介いたします。

M-3

日本の大学の国際化政策は、昔から留学生の受け入れを中心に進めてきました。およそ30年前になりますが、1983年の留学生10万人計画におきまして、留学生受け入れの促進の意義というものは、発展途上国への支援という位置づけが強いものでありました。こ

の留学生10万人計画という目標は、およそ20年後の2003年ごろに達成しております。

その後、2000年代に入りまして、急激な社会のグローバル化が起こりましたし、それに対応するために、企業がよりグローバルに活躍できる外国人の留学生をもっと必要とするという事態になりました。そういった背景もあって、2008年には、留学生30万人計画というものが、文部科学省に加えて、関係５省庁合同のもとで決定をされております。

この計画は、留学生の受け入れを今度はより国益につながるような戦略的な施策として推進をするというところが大きな特徴でございました。その中心施策として、このグローバル30、いわゆる30大学を選定しようということが盛り込まれたのは皆さんご承知のことだと思います。こういった政策的な背景を持ってグローバル30は開始されました。

資料にありますように、2009年度からグローバル30を開始したわけでございます。その背景といたしましては、グローバル化の進展により、人材とか知識といった部分の国際競争が激化する中で、日本の大学には、まだそこの競争に伍していくに十分な国際的な環境ができていないという大きな認識がございました。

このため、グローバル30は、国際競争力の向上を目指しまして、優秀な外国人留学生、教員の受け入れを促進し、日本の内なる国際化を進めること、それから、大学の国際化拠点として総合的な体制を整備することを目的として開始されております。

この事業の取り組みというのは、再三出てきておりますので繰り返しませんが、主に４点ほどございまし

1983年 「留学生10万人計画」（当時約1万人）
- 発展途上国への「支援」

2000年以降
- グローバル化の進展
- 外国の優秀な人材を求める産業界からの要請

2008年 「留学生30万人計画」（当時約12万人）
- 「国益」につなげる戦略的施策
- 国際化の拠点となる大学を30選定する方針

MEXT MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN 3

M-4

Ⅱ. グローバル30のこれまで

MEXT MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN 4

M-5

2009年 「国際化拠点整備事業（グローバル30 ）」

【背景】
- 世界の大学間競争が激化
  → 一方、日本の大学の国際化は不十分

【趣旨】
- 国際競争力の向上を目指し、
  → 優秀な外国人学生や教員の受入れを促進
  → 大学の国際化拠点として、総合的な体制を整備

MEXT MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN 5

M-6

2009年 「国際化拠点整備事業（グローバル30）」

【主な取組】
- 英語による授業で学位取得が可能なコースの導入
- 国際公募等による外国人教員の配置
- 海外でのリクルート活動（留学フェア、高校訪問等）
- 「海外大学共同利用事務所」の設置

【公募・選定】
- 公募により、22大学から申請
- 採択13大学を決定、事業開始

MEXT MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN 6

M-7

2009年 「行政事業仕分け①」

- 9月の政権交代に伴い、2010年度概算要求組み直し
  → 新規要求をとりやめ
  → 13大学への継続要求のみ
- 11月「行政事業仕分け」
  → 予算要求額の縮減
  → 支援額が2～3割程度減

MEXT MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN 7

M-8

た。４月に公募を開始しましたが、過去の実績に基づく高い要件を課したこともありまして、申請は22件にとどまっております。その申請の中から、有識者による書面審査、ヒアリング審査を経まして、７月に採択13大学が決定をされております。

このグローバル30は、実際に始まってみたものの、立ち上げは必ずしも順調と言えるものではありませんでした。今日のお話にもありましたけれども、事業開始直後には、民主党政権への移行ということを踏まえ、翌年度の概算要求の内容について組み直すということ、それから、いわゆる行政刷新会議のもとでの事業仕分けが行われました。その結果、13大学に加えてしようとしていた新規募集はなくなり、それから、13大学への支援内容についても減額となりました。外国の方々からたまに言われますが、「G30なのに何で13大学なの」というのは、まさにここから始まったわけでございます。（笑）

事業仕分けはこれにとどまらず、先ほど勝先生からお話もありましたけれども、翌年にも事業仕分けの対象となり、一旦事業は廃止をして組み立て直すという、非常に厳しい判断を受けております。

この事業仕分けの実施に際して、採択の13大学の連名でのグローバル30の強化を要望する共同声明書が出されております。くしくも、こういう逆境があったことにより、その過程での採択大学間の連携が強化されたという、非常に前向きな結果があったというところがございます。

それから、この事業仕分けの判定を受けまして、産業界、学術界の有識者による「産学連携によるグローバル人材育成推進会議」が設置されました。この中で、国際化に取り組む大学のネットワーク化、つまり横の広がりを持つということ、それから、産学連携の取り組みをより強化するということで、経団連等、産業団体との連携も深めることを行いまして、事業を組み直すということが決定をされております。これに基づいて、名称も「大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業」と変わりまして、翌年度より再出発をしてございます。

グローバル30の１年目、２年目は非常に激動の時代であったわけですが、再出発をした３年目から、もうすぐに中間評価というタイミングでございました。

ただ、この評価の中では、大学全体としての国際化が戦略的に推進されているというコメントをいただいておりますし、それに加えて個別評価も厳格に行われまして、これに基づいて、各大学でも事業をより一層よいものとするという努力がされております。

こういった紆余曲折のあった中で、事業自体は、大学のご努力により着実に進められてきております。

ここで、具体的な成果について、幾つかご紹介いたします。

まずは、英語で学位が取れるコースの設置数、これはほぼ当初の計画どおりの成果を上げております。

2010年「行政事業仕分け②」

- 11月「行政事業仕分け」
  →「一旦廃止し、組立て直し」
- 「産学連携によるグローバル人材育成推進会議」を設置。以下により事業を組み直すよう提言。
  → 国際化に取り組む大学のネットワーク化
  → 産学連携の取組の強化
- 提言を踏まえ、2011年度より事業組み直し
  「大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業」

MEXT MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN 8

M-9

2011年「中間評価」

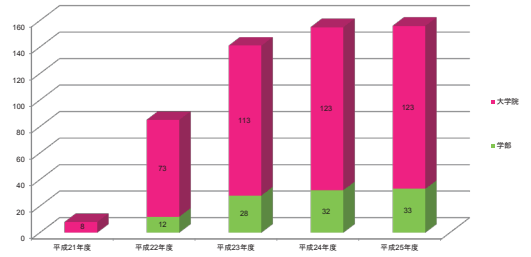
- 5年の補助事業の3年目に実施。書面評価と現地調査を踏まえ、評価結果をとりまとめ
- 全体評価
  →「採択された13大学において大学の目標や中期計画等において大学の国際化を位置づけ、大学全体としての国際化が戦略的に推進されている」
- 個別評価
  →S評価：1大学、A評価：10大学、B評価：2大学

MEXT MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN 9

M-10

これまでの「成果」

- 英語コースの開設数



MEXT MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN 10

M-11

それから、留学生の受け入れ数、こちらも４年間で5,000名を増加するということでございまして、大学全体の学生数に占める割合も大幅に向上しております。この数字は、東日本大震災以降、残念ながら日本全体の留学生数は微減という状況が続いております中で、採択13大学におきましては増加傾向を着実に示しているということで、まさに、この採択13大学が日本の大学の国際化をリードしていることの証左であると思います。

外国人教員数、こちらも４年間で700名を増加したということ、それから、品質についても上昇したという部分が、成果として挙げられると思います。

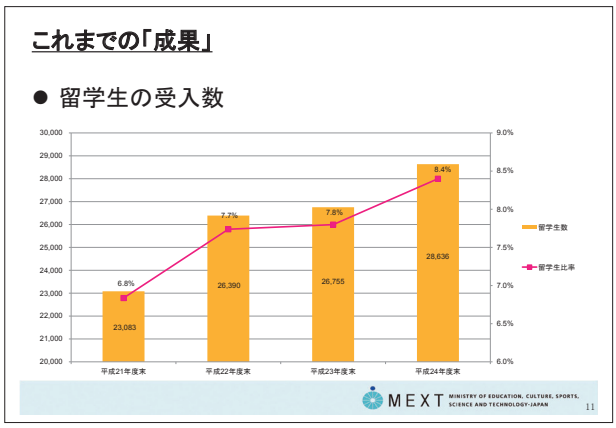
それから、本事業の特徴といたしまして、東京大学に13大学共通の取り組みの取りまとめを行う推進事務局というものを設置したことが挙げられます。この推進事務局におきましては、13大学のグローバル30担当の副学長や事務職員の方々が参加する定期的な会合を開催いたしまして、横のつながりを持っていくという、まさにネットワークができたということがございます。また、共通のウエブサイトの立ち上げであるとか、留学フェア、産学連携フォーラムの開催などを通じまして、お互いに課題の共有等もしていただくことができたのは、大きな成果の一つだと思っております。

資料の図に示してありますように、ウェブサイトの訪問数は大きな伸びを示しておりますし、留学フェア等を通じて、G30のブランドが確立されたのも大きな成果だと思います。

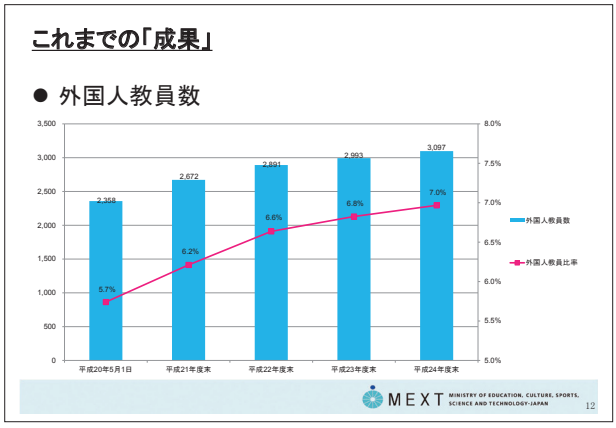
以上のように、グローバル30は、立ち上げ時期にはいろいろな大変な時期があったわけですけれども、定量的にも、こういった形で国際化というものの成果を上げてきたということがございますし、定性的にも、ブランド力であるとか、各大学での目に見えない形の意識改革、また、この13大学以外の大学に対しても、国際化を進めていこうという機運が、産業界からの要請とタイミングが一致したのかもしれませんけれども、盛り上がったというところが成果だったと思います。

こうした大きな成果を上げましたグローバル30の今後について、ちょっとお話をしたいと思います。

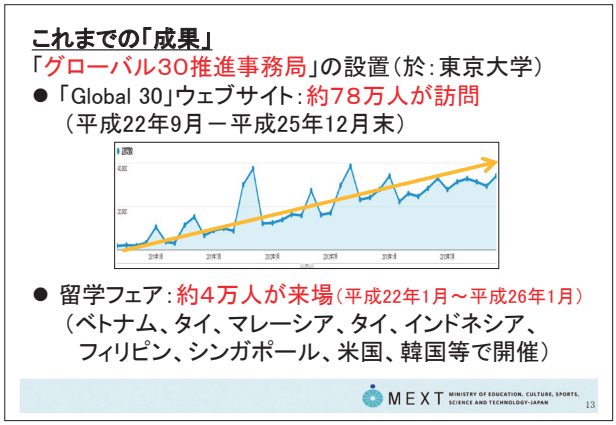
資料のグラフは、各大学が事業の開始の段階の構想において達成目標として掲げていた数値を集計したものです。左側が2012年の留学生数でして、右側が2020年の目標でございます。オリンピック、パラリンピックが東京で開催される2020年末までに、留学



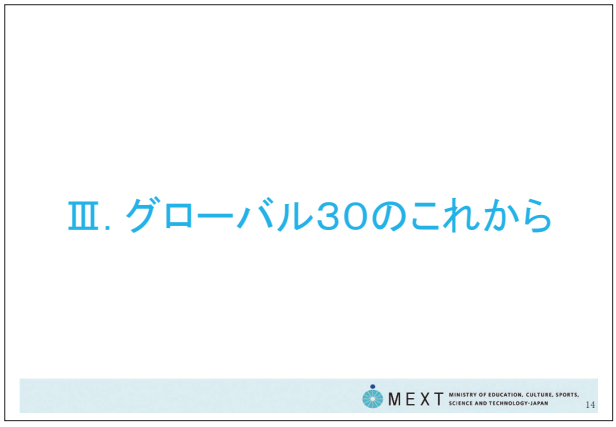
M-12



M-13



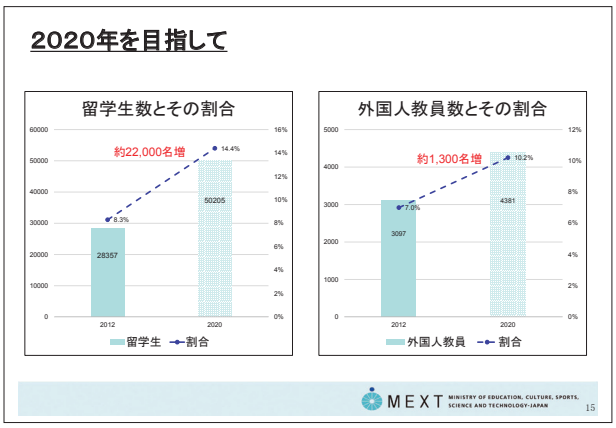
M-14



M-15

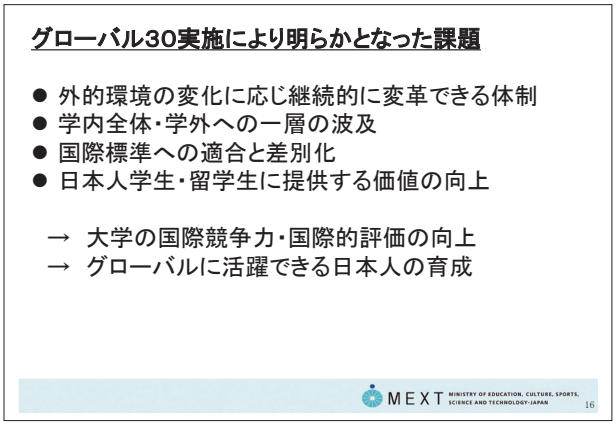
生の受け入れ数はさらに２万2,000名、それから、外国人教員数はさらに1,300名上乗せするというのが当初の計画でございます。これは非常に意欲的な数字でして、実現には一層の努力が必要だということは皆様もおわかりだと思います。

文部科学省といたしましては、これらの目標、取り組みの進捗を引き続きフォローするという役割がございます。来年度には早速、事業の事後評価におきまして、５年間の各大学の取り組みを評価、検証いたしまして、その成果や課題は広く社会に発信をしていくこととしております。



M-16

このように、先ほども幾つも決意表明等もあったと思うのですが、５年間の補助期間が今年度で終了した後も、グローバル30は続いてまいります。急速に進展するグローバル化の中で、採択13大学は、これまでの経験や知識などの積み重ね、こういったことをさらにそれぞれ各大学の国際化に役立てていただくということも重要ですし、引き続き、連携体制もぜひ維持していただいて、日本国内の他大学の国際化をぜひ先導していただきたいと思います。



M-17

それぞれ、各大学のこれからについても、セッション等でいろいろなご説明や決意表明もされたと思います。それから、先ほど内田先生からのご質問にありましたように、コストをいかに適切な形で取っていくか。そういった持続可能な体制をつくっていくことが重要だと思っております。

また、事業の実施によって明らかになった課題というものもございますので、４点ほどご紹介したいと思います。

まずは、外的環境の変化に応じて、継続的に変革ができる体制が必要だろうということです。グローバル化が進展して、少子高齢化が進み、企業も大きく変わっております。周りが変わっているのに対して大学が変わらないということは、ある意味、リスク要因にもなります。常に変わっていくという体制をつくることが重要だと思っております。

２点目は、国際化の動きを学内全体に波及させていただくということです。これは、先ほどもございました。それから、学外にもぜひ波及させていただきたいということです。

３点目は、いろいろな形での国際化標準への適合が、やはり国際的に競争するときには必要となってくるということです。それに加え、日本としての特徴を生かした、多様性の中での差別化を図って、より魅力があるようなプログラムを提供することが必要だと思います。

４点目は、日本人学生がG30のプログラムに入ることについて、先ほどは、なかなか難しい面があるというお話もありましたけれども、やはり国として支援をしてきた事業でありまして、行政事業レビューの場でも、日本人学生への裨益というものも強く言われておりますので、この点もこれから進めていく必要があろうかと思います。

こういった課題を克服することによりまして、大学の国際競争力の向上、それからグローバルに活躍できる日本人の育成につながることを期待しております。

続きまして、こういった課題も念頭に置きながら、これからの大学の国際化についてお話をしたいと思います。

これは、グローバル30以降の国際化に関する補助金の支援の増加を示しています。右肩上がりで増えていまして、来年度は、G30の開始時に比べると実に３倍の127億円という予算が費やされる予定となっています。

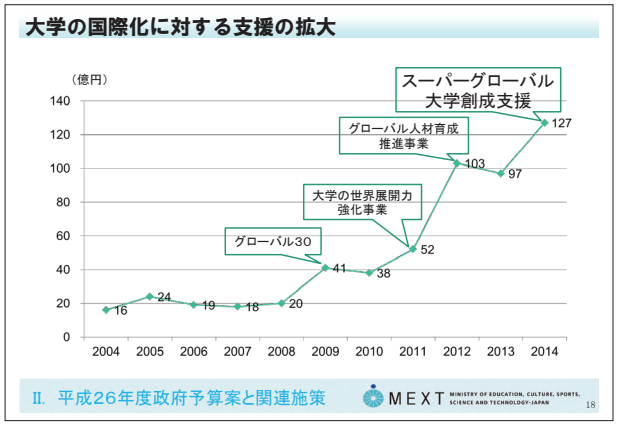
G30の開始を皮切りに、大学の世界展開力強化事業、グローバル人材育成推進事業、それから、スーパーグローバル大学創成支援とプログラムを展開してきております。それぞれ目的は違うところはあるのですけれども、皆さん、ご存じの方が多いと思いますので、この点は時間的な関係もあり飛ばさせていただきます。

「スーパーグローバル大学創成支援」は新規に開始するものでございます。タイミングとしては、G30が終わった後にこちらの事業が開始されるということになります。ここでは、我が国の高等教育の国際競争力の向上を目指しておりまして、海外の卓越した大学との連携、それから、先ほどもありましたガバナンスの改革を国際の観点から進めることが重要だと思っております。大きくは二つ、トップ型、それからグローバル化牽引型ということで、多様な大学を採択するイメージで国際化を進めていきたいと思っております。

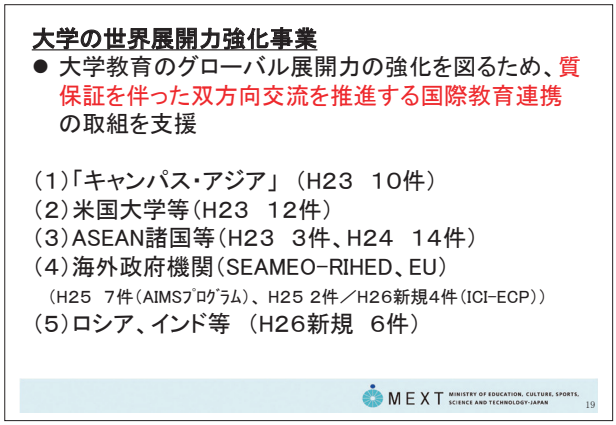
このように、G30の成果をベースといたしまして、来年度以降、さらに大学の国際化、国際競争力の強化のための挑戦的な事業へと発展をしてまいります。

最後に、まとめでございます。先ほどのテーマにありました「国際化で大学は変わったのか」という点につきましては、私は、明らかに変わった点が多かったと思います。これは、多くの方々の話でございました。一方で、もう一点加えたいのは、グローバル化自体も非常に加速しているという状況でございます。周りが変わってきているというところが、まさに今の環境だと思います。

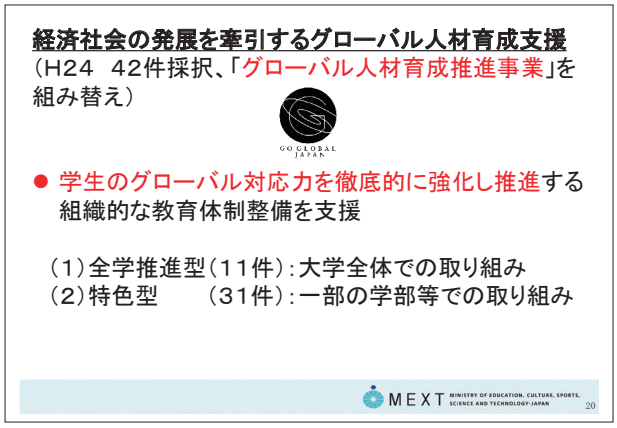
M-18



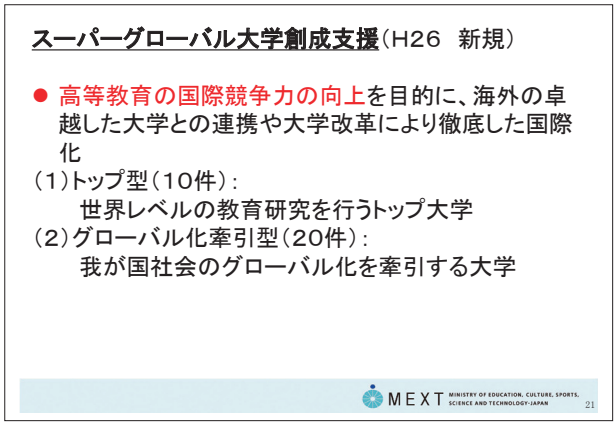
M-19



M-20



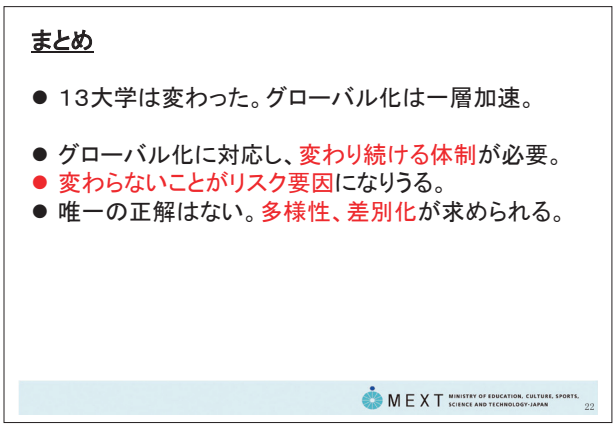
M-21



M-22

そういったことを踏まえると、これから大学がどうしていくかを考えて、３点申し上げたいと思います。

１点目は、変革の歩みをとめることはできないということです。変わり続けることが求められていると私は考えております。これは、周りが変わっていく中で、自分が変わっていかないと、ついていけないという部分がありますし、２点目に書いてありますように、変わらないことがリスク要因になり得ると思います。単に変わらないということは、あたかもリスクをとっていないし、同じことをやっていればいいという観点はありますけれども、ただ、長期的に見ると、周りが変わっているのに自分が変わらないということがリスクになるということがございますので、バランスを見て、必要なリスクについては、合理的にとっていくということを考える必要があろうかと思います。



M-23

それから、大学の国際化には、唯一の手法はないというのが私の考えでございます。先ほど申し上げたとおり、国際標準に合わせることはまず前提条件として必要ですが、その上で、日本の魅力を取り入れた、多様で、そして差別化されたプログラム、体制を構築していく。このことが、日本の高等教育の価値を生むと考えております。ぜひ、13大学には、この取り組みを先導していただきたいと思います。

以上、グローバル30のこれまでを振り返り、それから、今後についてお話をいたしました。これから我が国の大学の国際化を進めていくためには、13大学に加えまして、日本の大学関係者の一層のご尽力、社会全体、地域のご協力が不可欠だと思っております。

私ども文部科学省といたしましては、これからも、グローバル30の13大学をはじめとして、国際化への意欲のある大学や、産業界の方々、関係者とともに、大学の国際競争力の強化、それから、グローバル人材の育成に、精いっぱい尽力していく所存であります。本日、会場にお越しの皆様方をはじめ、関係者の方々のお力添えをいただければ幸いでございます。以上、ご清聴ありがとうございました。（拍手）

以下、質問。

○フロア２　ご講演ありがとうございました。いろいろと勉強になりました。

いつも文科省や政府はいろいろと数字を発表されますが、この数字は何を意味するのかと疑問に思うことがあります。今、資料14を見ると、2020年を目指してということで、何かすごく細かい数字を書かれているので、その数字は何を意味するのかが一つ目の質問です。

もう一つは、政府は13大学だけをすごく応援されているように感じます。日本の国際化ということを考えると、今の13大学だけではなく、もっとほかの大学にもそれを広げる必要があるのではないかと思います。

ご意見をお願いいたします。

○有賀　ありがとうございます。１点目の2020年は、確かにかなり細かく書いておりますが、こちらは、当初の構想の段階で各大学が目指していたものでございます。まだまだ続くということを申し上げたいがために、単純に計算して合わせたものをお示しさせていただいております。

２点目の、ほかの大学にというところは、ご指摘のとおりだと思います。私の言葉が足りなかったかもしれませんけれども、世界展開力強化事業、それから、グローバル人材育成推進事業等を進めてきておりますが、また今後の展開もいろいろ図っていくことを進めております。

それから、資金的な面の援助については、やはり限定的になってしまうところがありますけれども、例えば、制度的には、二宮先生からもお話がありました、ジョイント・ディグリーという制度をつくるとか、海外展開もしやすい形というのをつくるとか、そういった形でも、さまざまな支援をさせていただきます。それと同時に、そういったものを活用したり、まさに国際標準というものを考えながら、日本らしい多様性の中での差別化を図るということをぜひ進めていただきたいと思っております。

6．閉会あいさつ

東京大学副学長
羽田　正

ただいまご紹介いただきました東京大学副学長の羽田でございます。

閉会に当たり、主催13校を代表しまして、一言ご挨拶させていただきます。

本日は、皆様、お忙しい中、それから、天候が必ずしもよくない中、このグローバル30総括シンポジウムにご出席いただきまして、そしてこれだけたくさんの方が最後まで残ってくださいまして、ほんとうにありがとうございました。

本日はまず、基調講演として二宮先生、ブレーデン先生から、これまでのグローバル30の取り組みについて評価をいただき、さらに、私たちが今後目指す方向について貴重な提言をいただきました。

また、その後の４つのセッションでは、それぞれのテーマに関して非常に活発な意見交換、情報交換が行われまして、先ほどのご質問者の話ではありませんけれども、別に13大学だけではなく、それ以外の大学、あるいは産業界の方々にとっても、とても有益な議論だったのではないかと思っております。

それから、最後に全体セッションがございまして、そこでも、各セッションのまとめと有益なコメントがありました。そして、今回のシンポジウムを共催してくださいました文部科学省の有賀室長から、これまでの取り組みについてのまとめと、今後の日本の大学の国際化について、とても時宜にかなったコメント、ご説明をいただけたと考えております。

私も、今回のシンポジウムのテーマが「国際化で大学は変わったか」ということでありますので、何か変わったことはあるかなと考えてみました。考えながらここに来たのですけれども、セッションに出て、とても印象深かったことが三つございました。既にほかの方々がみんなおっしゃっていることで、多分、我々グローバル30にかかわった人たちは同じようなことを考えているんだと思いましたけれども、簡単にご紹介します。

一つ目は、学生であります。四つのセッションのうちの一つが学生セッションでした。私はあちらこちら回りましたので、必ずしも長い間はこの学生セッションに参加できませんでしたが、ほんとうにすばらしかったですね。感激しました。生き生きとしていて、活発で、鋭い意見を述べ、そして、とてもフレンドリーな雰囲気だったと思います。こんな学生たちが、このグローバル30のプログラムがあったために日本に来て、そしてここで学んでいることがわかったのが、私にとってはとても大きな収穫でありました。残念ながら、自分の大学でこれだけたくさんの学生たちが議論しているところをあまり見かけないものですから、とてもよかったです。これについては、二宮先生が先ほどおっしゃっていたとおりだと思います。中でも印象深かったのは、日本人と外国人とを二分する考え方についての異議申し立てでした。あるいは、学生たち自身のアイデンティティーについての議論が最後のほうに出ておりました。これなどは、ほんとうに、私たちが常に考えなければいけないことだなと思いました。

それから、二つ目は、キーワードとしては「連携」と「協力」です。これも、先ほど有賀室長がおっしゃいましたけれども、数々の苦難を乗り越えて、この５年目まで来たわけであります。私の場合は、最後の２年しかこの事業にかかわっておりません。したがって、もう苦難を乗り越えた後であって、皆さんの間でネットワークができていたのだと思いますけれども、最初に副学長会合を主催しましたときに、とても居心

地がいい雰囲気でした。それから、海外の留学説明会も毎年２、３回参りましたけれども、そこでも決して、例えば東京大学と京都大学がいつもけんかをするとか、そういうことは全くありませんでした。（笑）むしろ、ほんとうに一緒になって「日本の大学」という意識で協力して、連携しながら、お互いに、「あちらの大学にこういうのがあるから、あっちへ行ったらいいよ」といった説明の仕方をしていました。これは、私自身、とても印象的なことでした。

実は、このシンポジウム自体も、九州大学から副学長会合のときに提案がありまして、最後にやはりみんなで一緒にやりましょうよと。ただ何となしに終わってしまうよりは、ひとつ締めをきっちりやりましょうよと、そういうご意見が出たために企画したものであります。そういう意味でも、少なくともこの13大学の連携というのは、とても強いものがあるのかなと思っています。これが二つ目です。

それから、三つ目は、これももう何人もの方がおっしゃっていたことですけれども、日本の大学の教育をもう一度見直すといういい機会になったなという気がします。特に、日本語とか、日本についての研究、それから教育なども、今まで私たちは無自覚にやっていましたが、これだけ外国の人がたくさん来て、必ずしも彼らが日本のことを知らなかったり日本語も流暢でなかったりすると、やはり今までと同じではだめだということは、はっきりしています。これをどうするのかは、とても大事なことだと思います。

それから、グローバル30をやってみて、特に学部の英語コースを立ててみて、先ほど三重大学の先生がおっしゃっていましたけれども、日本人に何を教えるのかということをもっと考えないといけないということ。つまり、高等学校から日本の大学の学部に入ってきた学生に、どういうふうに、そして何を教えるのかということについて、もっとまじめに考えないといけないということも強く感じました。

今、東京大学は、総合的な教育改革を進めておりまして、再来年度になるでしょうか、４月からは学期が四つになるという改革を計画していますが、そこでもやはり、グローバル30から受けた多くの刺激が、そちらの方向へ進む原動力になっているのかなと感じています。

残念ながら補助金が切れまして、グローバル30事業自体は終了となりますが、来年以降も、「これで全く終わり」にするつもりはありません。ここででき上がっているネットワークを基盤に、私たちだけで閉じるのではなくて、もっと多くの大学と一緒に日本の大学の国際化あるいはグローバル化という問題について考えていきたい、そして一緒に行動していきたいと強く思っています。

推進事務局を東京大学が引き受けさせていただいておりましたけれども、これも、規模は縮小せざるを得ませんが、そのまま私たちが続けていくつもりでおります。したがって、グローバル30のホームページがすぐなくなる、あるいはＥメールを出してもどこに行くかわからない、そういう事態にはならないと思います。

私たちの大学では、少なくとも、補助金を頂いてつくったコースは全て大学の正規課程となっていますので、これでコースがなくなるわけではありません。今後、もっとたくさんの英語のディグリーコースをつくっていけるように努力していきたいと思います。

これで大体私の申し上げたいことは全て申し上げましたが、最後に一言だけ。今回のシンポジウムは13大学が主催ということになっておりますけれども、全て九州大学にお世話になりました。この場をかりて九州大学に厚く御礼を申し上げたいと思います。（拍手）

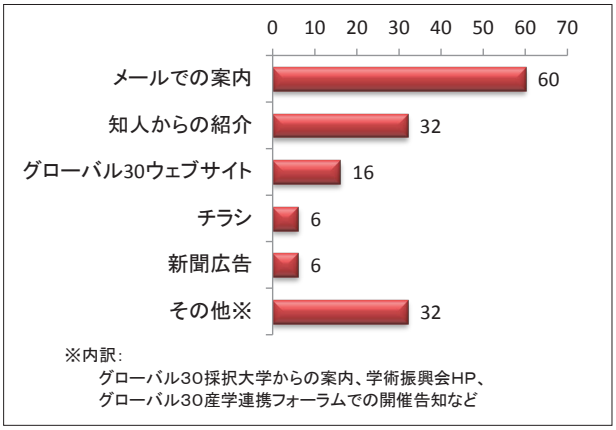
これをもちまして、今回のシンポジウムを閉会とさせていただきます。本日はほんとうにありがとうございました。（拍手）

参考資料

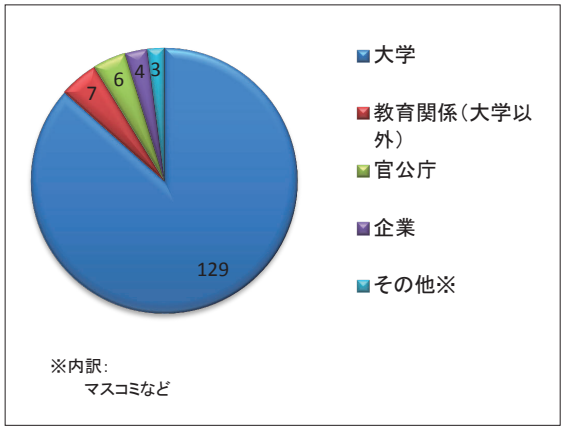
アンケート集計結果

グローバル30総括シンポジウム　来場者アンケート

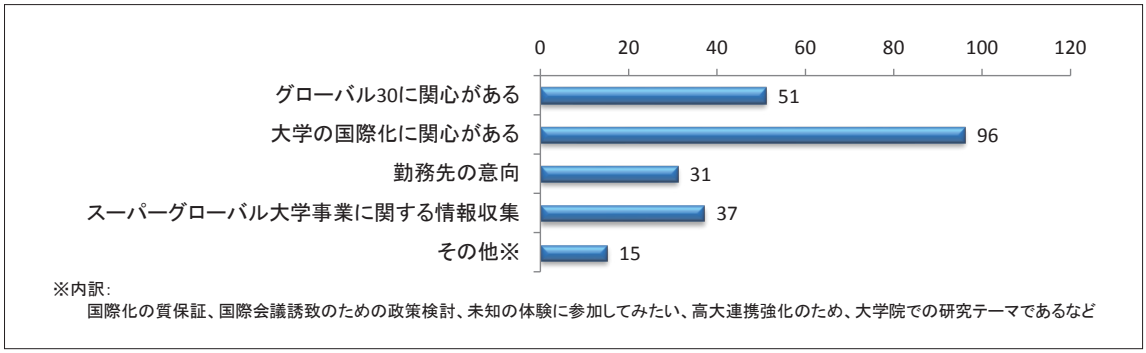
1．本シンポジウムの開催をどこで知りましたか



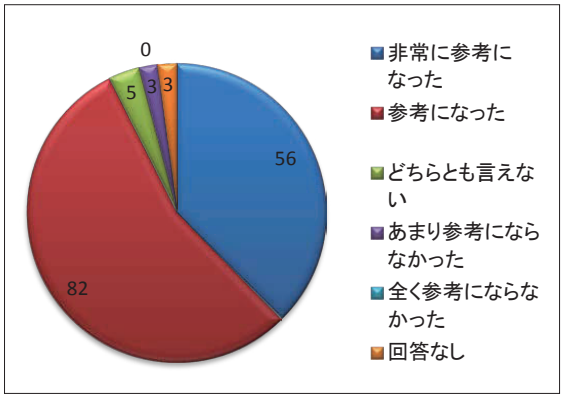
2．所属先についてお教え下さい



3．参加理由（複数回答可）

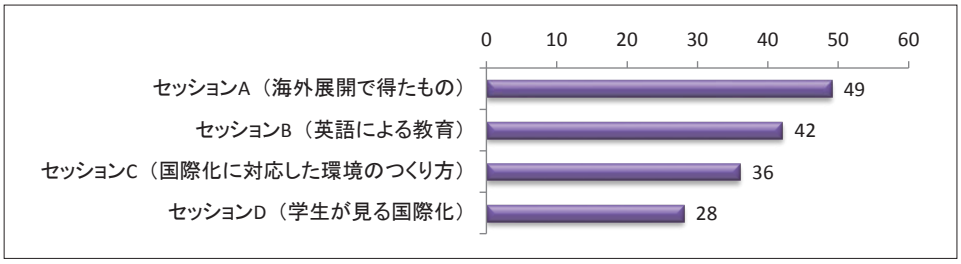


4．本日のシンポジウムは参考になりましたか

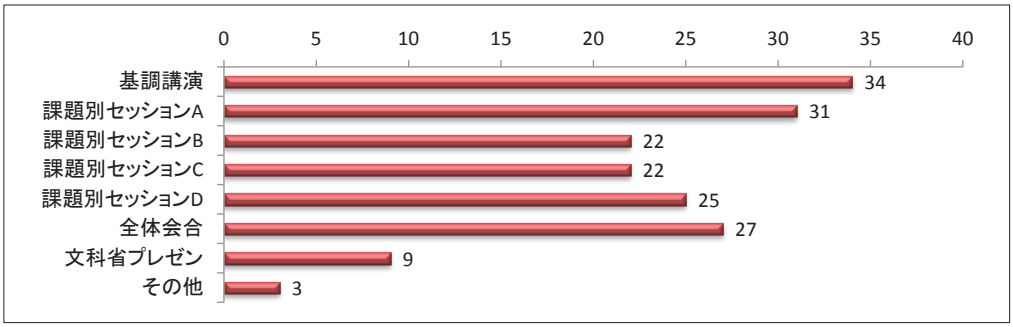


理由（抜粋）：
- 多面的に大学の国際化が語られていた。
- 留学生と日本人学生の共習・協同研究を促進するために、具体的に何をすべきかということを聞けてよかった。
- 一見担当と関わりない話にもヒントや参考となる点が多くあった。
- 時間の制約があり、今一つ深く掘り下げた議論ができなかったと思う。二日くらいかけた方がよかったのでは。
- 留学生の視点は分かったが、留学生を受け入れて、日本人学生がどう変わったか、成長できたかの視点がなかった。
- エリートではなく普通の大学生をグローバル人材に育成するプログラムを実施している大学がない。
- スーパーグローバル大学事業の情報が少なかった。
- １つのセッションしか聞けないのは残念すぎる。

5．どの課題別セッションに参加されましたか

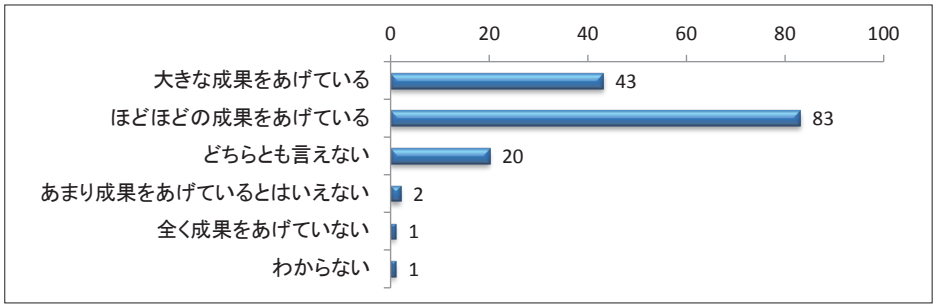


6．本日のシンポジウムのどの内容が一番印象に残りましたか



理由（抜粋）：
（基　調　講　演）ブレーデン先生が日本の大学の課題を非常にシャープに指摘しておられ、本学の部局長会議、執行部でレクチャーしていただきたいと思いました。
（セッションＡ）具体的事例が参考になった。若干浅く広いので、サンプル大学を減らして深くした方がよかった。
（セッションＢ）教員として教授法に関する発表がもっとも興味深かった。同時にカリキュラム作成上の具体的問題と一部解決法を知ることができた。
（セッションＣ）留学生の受入れ宿舎をどのように充実させてゆくかについてのヒントとなる受け答えがあり、参考となった。
（セッションＤ）学生の生の要望を聞くことができた。惜しむらくは日本人学生ももう少し参加してほしかった。
（全　体　会　合）学生の生の要望を聞くことができた。惜しむらくは日本人学生ももう少し参加してほしかった。

7．グローバル３０をどう評価されますか



理由（抜粋）：
・数だけ増やしても、と否定的だったが、流れは変わっていると思った。
・課題がまだ多く残っている。課題への対処や大学のフットワークが遅い。
・一部の大学に限った現象に過ぎないというのであれば、全国的視点としては評価は難しい。
・これから卒業生が出るので、本当の評価はこれから。
・事業への助成金がなければ、できなかったことが少ない。大学の自発性・創造性・変革の意欲があればできたことが多いように思われる。大学の保守的体質がまだ本質において変わっていない以上、この事業の成果の有無・大小を論じることは時期尚早かと思われる。

8．本日のシンポジウムの内容についてその他ご意見・ご感想などございましたらお願いします。

（抜粋）
・こういった全体のシンポジウムは、これからも定期的に続けるべき。学生を巻き込んだ取組はよかった。
・大変参考になった。また数年後にフォローアップのシンポを開いてほしい。
・Ｇ30に採択されていない大学にとっては情報収集ができてありがたい。
・どのシンポジウムでもそうなるのですが、十分につっこんだ話ができないことが心残りです。
・大学の真の国際化は留学生の数を増やすこととは違うと考えます。今後は、日本人学生のグローバル人材や優れた国際学術研究の充実によって世界の大学と真剣勝負をしていただくことを産業界の人間として期待します。
・地方や小規模大学への影響という点からとらえることも大切では？
・今後５年間の各Ｇ30大学の取組や展望、計画等についても情報交換できるとなおよかったと思う。
・すべてのセッションに参加できなかったのが残念だった。
・Ｇ30大学学生組織のネットワークが必要。学生ワークショップを今後も継続してほしい。
・最後のまとめにもあったように、「日本の大学生」に今後何をどのように教えていくのか？という課題が鮮明になったように感じました。
・国際化に関心のある人々がこれだけ集まったこと自体大きな意味がある。大きな project と個々の specific な問題をつなぐ議論がもう少し欲しかった。

グローバル30総括シンポジウム
「国際化で大学は変わったか」報告書
Internationalizing Japanese Universities:
The Global 30 Experience

平成26年 9 月発行
Published in September 2014

編集・発行：九州大学　教育国際化推進室
〒812-8581　福岡市東区箱崎6-10-1
Tel: 092-642-3953 / Fax: 092-642-3949

Edited and Published by: Office for Promoting International Education,
Kyushu University
6-10-1 Hakozaki, Higashi-ku Fukuoka, 812-8581, Japan
Tel: +81-92-642-3953 / Fax: +81-92-642-3949
E-mail: intlrsuishin@jimu.kyushu-u.ac.jp

印刷：城島印刷株式会社
Printed by Kijima Printing, Inc.

Global
30